

新制
文
369

ジュリアン・グリーン研究序説(1)

—『幻を追う人』『モイラ』の読解—

井 上 三 朗

ジュリアン・グリーン研究序説

——『幻を追う人』『モイラ』の読解——

井上 三朗

目次

序論	8
一 ジュリアン・グリーンの位置	9
（1）時代のなかで	9
（2）小説の流れのなかで	13
二 グリーン研究の歩みとこの論文の目標	17
（1）グリーン研究の歩みとこの論文の研究的立場	17
（2）この論文の目標と意義	19
本論	24
第一部 『幻を追う人』	25
序章	26
第一章 欲望の世界	37
一 マリー＝テレーズの信仰と官能のめざめ	37
二 プラス夫人のサディズム的態度と不幸への愛	45

三 マニユエルの欲望の苦悩……………	54
(1) 純粹志向……………	54
(2) 夜の散歩……………	55
(3) 夜の散歩ののちの、欲望の苦しみ……………	61
(4) 森の散歩……………	65
四 『在り得たこと』における欲望の世界……………	70
(1) アントワーヌの放蕩とマニユエルの羨望……………	70
(2) 子爵夫人のサディズム的欲求……………	72
(3) マニユエルの、子爵夫人への執着……………	77
(4) マニユエルと子爵夫人との性行為の場面……………	81
五 まとめ……………	87
第二章 死の魅惑と恐怖……………	93
一 マリー＝テレーズの死の想念……………	93
二 プラス夫人の不幸への愛と死への歩み……………	96
(1) プラス夫人の不幸への愛と死への歩み……………	96
(2) プラス夫人の信仰的立場……………	99
(3) グリーンの作品群における不幸への愛……………	101
三 マニユエルの死の想念と恐怖……………	108
(1) マニユエルの病いの悪化……………	108

(2) マニユエルの死の想念と恐怖	114
(3) マニユエルの信仰的立場	120
四 死の城の住人たち	128
(1) 伯爵	128
(2) ジョルジュ夫人	134
(3) アントワーヌ	140
(4) 子爵夫人	147
(5) 作中人物のマニユエル	158
五 まとめ	163
終章	174
第二部 『モイラ』	180
序章	181
第一章 ジョゼフを取りまく人物たち	186
一 プレロー	188
二 サイモン	194
三 デーヴィッド	200
四 へ取るに足りない人物たち	206
(1) デア夫人	206

	(2) マック・アリスター	207
	(3) キリグルー	209
	(4) デア夫人の下宿に集まる学生たち	211
	(5) ジェマイマ	212
	(6) ファーガスン夫人の下宿の女中	214
五	モイラ	217
六	まとめ	225
第二章	ジョゼフの内なるドラマ	231
一	神への志向	233
	(1) 純粹志向	233
	(2) ジョゼフの宗教の特徴	236
	(3) 伝道熱	239
二	肉なるものへの志向	243
	(1) プレローとの決闘	243
	(2) マック・アリスターへの暴力	245
	(3) モイラのベッドに身を投げる	247
	(4) 肉体の交わりと性行為	250
三	《violence》と信仰との関連	255
	(1) 〈火〉(または〈光〉)のイメージ	255

(2) 二つの violence	260	
(3) 宗教的高揚と肉体的高揚とのあいだの揺れうごき		261
(4) 宗教的高揚と肉体的高揚との混淆		268
(5) 《violence》再々考	272	
a. マック・アリストアーへの暴力		272
b. プレローとの決闘	275	
c. モイラ殺害	278	
(6) 犯罪後のジョゼフ	281	
(7) 救いの問題	287	
(8) 《violence》と信仰との関連		297
四 まとめ		302
第三章 『モイラ』の中の秘められた物語		315
一 サイモンの物語		317
二 モイラの物語		323
三 プレローの物語		329
四 まとめ		342
終章		351
結論		356
主要な参考文献		359

凡例

- 一 グリーンの作品からの引用は、すべてプレイアード版「全集」全八巻（1972・1998）による。『幻を追う人』
『モイラ』以外の作品からの引用は、頁数の前のローマ数字によって、巻数を示す。『幻を追う人』『モイラ』
からの引用は、頁数の前のローマ数字とアラビア数字とによって、第何部第何章かを示す。
- 一 引用文中の強調点（傍点）は、特にことわらないかぎり、引用者によるものとする。原文のイタリック体も、
強調点（傍点）を付すが、その場合は、「強調はグリーン」と指示する。また、引用者による強調とグリーンに
よる強調とを区別するため、原文のイタリック体をへゝで示すこともある。その場合は註でことわる。ただし、
註でことわらない場合、へゝで示された語句は、原文の頭文字が大文字で書かれていることを示す。引用文中
の「ゝ」は、引用者による補足説明を示す。
- 一 註は序論と結論については、その末尾に、本論については、各章の終わりに付ける。
- 一 本論で取りあげる『幻を追う人』『モイラ』は、それぞれ、プレイアード版「全集」第二巻、第三巻に収録され
ている。

序
論

一 ジュリアン・グリーンの位置

(1) 時代のなかで

ジュリアン・グリーンは一九〇〇年九月に生まれ、一九九八年八月に世を去るまで天寿をまっとうしたのであるから、ほぼ二十世紀全体を生きただけである。二つの世界戦争が起こったこの激動の世紀にあつて、グリーンもまた、時代の動きと無縁ではいらなかった。第一次世界大戦では、自ら志願して軍務につき、一九一七年、米軍の移動野戦病院付き運転手としてアルゴンヌ前線に、次いで、アメリカ赤十字の衛生隊員としてイタリア戦線に赴いている。第二次大戦では、パリ・フランスを離れたグリーンは、滞在先の母国アメリカで、一九四二年、軍の召集をうけているし、一九四三年には、戦争情報局の要請で、フランス人向けのラジオ放送の仕事にたずさわっている。一九二六年からつけはじめられた『日記』は、ただ単に一人の生活者の個人的な記録だけではない。グリーンは政治や文化などの面での世の中の動きにけっして無関心ではなかった。『日記』は時々刻々生成、流転していく時代、二十世紀についての貴重な証言でもある。

とはいえ、グリーンは、たとえば、「アンガージュマン」を提唱したジャン・ポール・サルトルとは対極の地点に位置する。二十世紀、特にその前半は、見方によれば、社会参加・政治参加の時代であった。ヨーロッパの統一を夢見、反戦・平和の運動を主導したロマン・ロランからはじまって、ソビエトへの共鳴、次いで幻滅をあらさまに語ったアンドレ・ジイドや、スペイン戦争やレジスタンス運動でファシズムとたたかいたあと、ド・ゴールと行動をともしたマルローらを経て、左翼的立場からの世界の変革を一貫して希求したサルトルに至るまで、フランスの作家たちは、社会に向かって、おのおのの立場から政治的発言を積極的におこなった。作家もまた歴史のなかに生きる以上、それは彼らに課せられた責任であり、時代の要請でもあった。グリーンとともに、二十世紀フランスの

代表的なカトリック作家として知られるフランソワ・モーリアック、ジョルジュ・ベルナノスでさえ、小説においては人間の実存の問題を、歴史を超えた宗教的視点から問いつづけてつても、時の流れのなかで政治・社会にたいする発言を繰り返した。第二次大戦後、ド・ゴール派の論客となったモーリアックが『ブロック・ノート』(一九五八、六八、七〇、七一)、ファシズムに反対するベルナノスが『月下の大墓地』(一九三八)などといった政治的著作をのこしていることを想起すれば、この二人の小説家もまた、彼らなりに、へ参加する作家たちへ (écrivains engagés) であつたことが了解される。

こうした一連の作家たちの政治的行動を視野に入れると、ジュリアン・グリーンの作家的立場が際立ってくる。政治的発言が皆無とはいえないにしても、グリーンはまとまったかたちで、政治的著作をあらわしていない。ナチス・ドイツの台頭に対抗して、ヨーロッパでは反戦平和運動が組織された³⁾一九三二年、グリーンは、親しく交際するジードがソビエトのコミユニズムに共感を寄せるのを目のあたりにして、「私は政治を憎む。(…)現在の世界のなかで、私の場所はいつたい、どこにあるのか?」⁴⁾と『日記』に書きしるしている。グリーンはへ参加する作家へではなかつた。歴史の動きに目を向けながらも、グリーンは外なる現実社会とのあいだに距離を置き、人間の内部世界をひたすら凝視することに、作家生命を賭けた。人間が魂とともに肉体から成ること、死すべき運命にあること、不可解な自我をもつこと、孤独であること——これらの普遍的な事実が招来する様々な問題(矛盾・困難・苦悩)を浮き彫りにするという点に、グリーンの作家的関心は集中する。けれどもこれは大半の作家たちが程度の差こそあれやっていることであり、文学の役割は結局、それに尽きるのだという議論をすることができるかもしれない。ただ、グリーンの場合、人間の内面を見つめる姿勢は徹底化しており、しかも、なんらかの政治的状況とかかわらせるのではなく、時代・歴史を超越したところで、人間として生きることの意味を問おうとしている点に、その特質が見いだされる。グリーンの文学は、総体として、「アングージュマン」(参加)の文学ではなく、デガージュマン(不参加)の文学である。

人間の内面世界を剔抉し、描出するために、グリーンは自己の内部の奥底に降りていく。グリーンの小説は他者・外部世界の観察の結晶というより、自己の内面世界の掘り起こしのたまものである。グリーンは三作目の長編小説『レヴィアタン』(一九二九)を評

して、「私は作中人物のすべてである」(強調はグリーン)と言う。この評言は基本的に彼の作品全体にあてはまる。グリーンはすべての人物と一体化し、その共犯者となって、作品を紡ぎ出そうとする。作者は想像力のなかで、人物たちに身をゆだねる。このとき、作中人物たちは何を糧として生命を保持するのか。作者の血と肉と魂である。

グリーンは『日記』のなかで、「おのおの人間は自分ひとりだけで人類全体なのだ」と書き、『ヴァルーナ』(一九四〇)の語り手ジャンヌに、「私たちの一人ひとは、自分ひとりだけで、人類全体なのだ」(Ⅱ、八二四頁)と語らせている。グリーンは様々な人物たちの造型をとおして、人間の内面世界を剔出し表現するために、他者を観察・調査する必要はなかった。個人が「人類全体」を内包するのであれば、自己の内部の深淵に潜り込むことで、人間の生のすべての可能性が発掘できるはずだから。それは自己の可能性を探索することであり、内的冒険となる。『ヴァルーナ』の語り手ジャンヌが、「小説を書くことは、なんという冒険であろう！」(Ⅱ、八二七頁)と言っているのは、このような脈絡においてである。

グリーンは小説執筆に際して、「私の場合は、プランは想像力を殺すのだ」と述べ、「プランは本を殺す」と明言しているように、綿密なプランを立てない。プランよりも作中人物を重視し、想像力のなかで、作中人物を自由に活動させることを選ぶ。「私は人物たちを創造する。そして小説を作るのは彼らである」とグリーンは指摘している。作中人物たちに従属するとは、内的冒険に身を投げることに等しく、自己の内部に沈潜していくことにつながる。なぜなら作中人物は作者の想像力のなかでしか生存しないのだから。以上のような制作態度・方法から、グリーンの自己凝視の姿勢が浮かび上がってくる。

作家グリーンが自己凝視の姿勢をとりつづけたことの要因として、彼が宗教的な信仰を有しながらも、敬虔なプロテスタントの信者であった母親の厳しい性教育よってつちかわれた純粹志向のために、かえってはげしい肉体的欲望にとらえられ、長期にわたって、肉体と魂、肉欲と信仰との深刻な葛藤を経験しなければならなかったこと、そしてこの葛藤の過程で、幾度も宗教的危機に遭遇することを余儀なくされたことが挙げられる。しかもこのことと関連して、グリーンが同性愛の性向の持ち主であったという事情もある。また、グリーンは誕生時に、プロテスタントの洗礼を受けており、カトリック教会との関係が紆余曲折したことも、彼の内観・自己沈潜の理由として付け加えられるかもしれない。

さらに、観点を交えて、グリーンがアメリカ国籍をもちながらも、パリで生まれ育ち、パリに定住したという事実、つまり、フランスではアメリカ人、しかしアメリカでは、フランス語を母語とすることで、フランス人の立場にあったことの影響も考えられる。加えてグリーンは、南北戦争で敗れた、アメリカ南部の出身であった。周知のように、南北戦争は、奴隷制を廃止するなどして、アメリカの民主主義の発展に寄与したと評価されている。しかし南部の人たちにとっては、この戦争は自分たちの国の独立を賭けた闘いであり、戦争に敗北することで、彼らの多くは祖国が消滅したと認識した。グリーンは自伝『夜明け前の出発』（一九六三）のなかで、母親がパシー通りのアパルトマンの客間に、アメリカ南部の旗を描いた水彩画を飾り、失われた祖国を悲しみとともに追懐していたことを伝えている（V、六六九頁）。母親の南部意識は子どもに受け継がれた。グリーンは一九五一年の『日記』に、南部の敗戦にまつわる母の陰鬱な話を思い出しながら、「私の祖国は国家として存在しなかった。歴史が抹殺してしまった」と書きしるしている。晩年のグリーンが南北戦争を背景とした、歴大な三部作の長編小説を執筆することになるのは、南部意識、消滅した祖国への郷愁の念に突き動かされたことである。要するに、グリーンはこの地上のどこにおいても、旅人、異邦人でしかなく、根をもたない人（デラシネ）の位置にとどまった。祖国を喪失した人間のままざしが外から内へ向かうのは、ごく自然な成り行きである。

このような自己凝視の姿勢は、ある意味において、作家グリーンに限界性を示すものであるといえるかもしれない。外なる現実社会（歴史）の動向を注意深く見守り、社会（歴史）に積極的に参加しようとするのではなく、外部世界を観察しつつも、自己の外部から内部へと沈潜し、内省することは、社会（歴史）からの逃避を意味するからだ。自己凝視は結局、自分のなかに閉じこもることであり、他者との断絶のなかに身を置くことを意味する。見方によれば、グリーンにおける他者の不在を指摘することができるだろう。

しかしながら、グリーンは『日記』のなかで、「人間は、他の人びとから、ほとんどけっして打ちたおすことができない柵によって切り離されている。これが私たち一人ひとりのドラマなのだ」との見解を表明している。グリーンによれば、他者との断絶のなかで生きることが、人間に課せられた条件である。グリーンは、「私は孤独である人のために書きたいと思う」と告白している。人間が孤独存在であるならば、他者の不在のなかで、自己凝視の姿勢を貫徹することが、逆に他者＝読者と連帯することにつながる。自己凝視は、人間の内部世界を暴き出すための方法である。世界の变革を希求する立場から他者に向かって働きかけをおこなわなかったグリーン

非政治的態度を批判することはたやすい。だが歴史に背を向けることは、時代を超越することでもある。前述のように、グリーンは時代・歴史を越えたところで、人間の実存の意味を問おうとしている。この点に、彼の文学全体のアクチュアリテ（現代性）はあるし、これからもありつづけるだろう。したがって、グリーン(15)の或る種の限界性は、必ずしも彼の文学の重要性をそこなうものではない。グリーン(16)の文学はデガージュマンの性格によって、受けとり方しだいでは、かえってその魅力をいやましていると判定できる。

(2) 小説の流れのなかで

ジュリアン・グリーンという作家（の文学）を二十世紀という時代とかかわらせながら考察してきた。ここで、グリーン(14)の文学をフランス小説の流れのなかに位置づけてみたい。というのも、グリーンは『日記』、自伝の作者でもあり、これらの作品もまた、フランス文学の歩みにおいて、けっして看過することのできない重要性を帯びているとしても、グリーンが作家としての地位を確立したのは、小説によってであり、小説家グリーンを文学史のなかでとらえるのが妥当であるように思われるからだ。たとえば、カステックスとシユレルは『フランス文学研究便覧』（アシェット社、一九六七）で、グリーン(15)の小説を、一九一四年から一九四〇年までの、つまり、両次大戦間の文学に分類し、モーリアック、ベルナノス、マルセル・ジュアンドーの作品とともに、「*霊的な生*」(la vie spirituelle)を描き出したものと評価している。ピエール・ブリュネル編の『フランス文学——歴史と選文集——』（ボルダス社、一九七九）でも、グリーン(16)の文学は両大戦間の文学の枠内に入れられ、彼はモーリアック、ベルナノスと同様、「カトリックの小説家」の扱いを受けて説明されている。ここから、「魂の深淵」を表現する、両大戦間のカトリック作家というグリーン像が生じる。実際、グリーンは、文学史関係の大半の書物において、このような仕方(17)で把握されている。

この把握の仕方は、厳密に言うとは正確ではない。第一に、グリーン(18)の作家活動は四分の三世紀にもわたり、当然、第二次世界大戦後も、彼は次々と精力的に新作を世に問うていくからであり、第二に、本論第一部で詳細を明らかにするように、両大戦間の時期は、カトリック教会との関係が希薄であった時代であるからである。グリーンが決定的回心をし、カトリシスムに帰依するのは、一九三九年

四月のことである。したがって、この時期の小説は、カトリック教徒の手によって書かれたものではないのである。とはいえ、『アドリエヌ・ムジュラ』(一九二七)や『レヴィアタン』といった初期の小説は、グリーンが『青春の終わり』(一九八四)で回顧しているように、「恩寵のない世界」を提示しているとして、ジャック・マリタンの肝入りで、カトリック小説の選集である、プロン社の『金の葦』(De Roseau d'or)叢書に入れて刊行された(VI、八六九頁)。たしかに、この二つの小説は、孤独のなかで情熱にとりつかれ、情熱の苦悩の果てに、発狂や犯罪へと突き進んでいく人物を描いており、パスカルの言う「神なき人間の悲惨」を例示しているという点に、カトリックの陣営から好意的に迎ええられる要素があった。グリーンは一九四九年十月二十九日付の『日記』のなかで、これまでに著した作品を振り返りながら、次のように述べている。

実際、私のすべての本のなかには、非宗教的な人間がけっして味わったことのないような、深い不安が横たわっていると思う。私は自分の書物をカトリック小説にしようとは努めない。そんなことをすれば、私はぞつとしてしまうことだろう。だが私のすべての本は、世間に受け入れられているふつうの宗教性からどれだけへだたっているように見えようと、それでもやはり本質において宗教的であると思う。作中人物たちの不安と孤独はほとんどつねに、あらゆるかたちにおいて、この世にあることの恐怖と私が呼んだと思うものに還元される……(17)

グリーンは、過去の自分の作品が、人物たちの「不安と孤独」をつうじて、「この世にあることの恐怖」を「あらゆるかたちにおいて」語っているがゆえに、「宗教的」であるとみなしている。この日記がしたためられた一九四九年の時点では、ほとんどの小説が一九三九年の決定的回心以前のものである。『ヴァルーナ』は回心をはさんで執筆された。回心後の作品としては、わずかに『私があなたなら』(一九四七、新版一九七〇)があるだけである。しかしこの作品の構想は一九二二年にまで遡る。したがって、ここで指摘されている宗教性は、実質的には、回心以前の小説を特徴づける性格である。ジャン・セモリュエはこの一節を引用しつつ、「作中人物

たちは気づいているにせよ、いないにせよ、神が介入しない世界にいることに堪えられないのだ」と評している。グリーンは自己の作品を「カトリック小説」にする意図はないと断言している。グリーンを理解する「カトリック小説」とは、カトリック信仰を称揚する教化小説のことであろう。特定の宗派を宣伝しようとする姿勢は、モーリアックらと同様、グリーンからも、一貫して認められない。だが回心以前の、グリーンの小説が、「深い不安」や「この世にあることの恐怖」を表出することによって、神への信仰に向かう可能性をはらんだ、人間の魂の懊悩を問題にしているという意味において、キリスト教的であることはたしかであろう。それゆえ、グリーン(18)の文学をいわゆるカトリック文学の系譜につらならせることはあながち誤りではないのである。

グリーン(19)の文学をもう少し大局的な見地から把握してみよう。グリーン(19)の小説は、バルザックの小説につうじらである。大革命から二月革命までの「フランス社会の巨大な壁画」としての「人間喜劇」は、言うまでもなく、現実社会の観察に裏付けられており、レアリスム文学への道を開いた。バルザックの小説は濃密な細部描写によって成り立つ。だがバルザックは単なる観察者（レアリスト）ではない。ボードレールがテオフィル・ゴーチエ論のなかで指摘したように、バルザックの「主要な価値は幻視家（visionnaire）、それも情熱的な幻視家であること」(20)であり、彼の作品世界は幻視家がみた幻想（visions）の世界でもある。バルザックにおいては、高山鉄男氏の言葉を借りるならば、「観察を支えたものは幻想であり、幻想なしには実はいかなる観察もあり得なかった」(21)。「人間喜劇」は観察者（レアリスト）と幻視家との協同作業によって産み出された世界なのである。

グリーンがバルザックとつながるのは、このような文脈においてである。グリーン(22)の小説の翻訳者である福永武彦氏は、『ヴァルナ』以前の、「陰鬱な日常生活を克明に描いた」作品が「バルザック的現実」(23)を浮き彫りにしているという主旨のことを述べている。「バルザック的現実」とは、観察者（レアリスト）と幻視家両方の資質をもつ作者がとらえた「現実」(24)のことであろう。グリーンは、「小説家にとって、型どおりの現実と、ヴィジオンの現実とでも呼ぶことのできるだろう現実がある」と言い、「たとえば、『彼女はこの視線を前にしてたじろいだ』と書くだけでは十分ではない。この言葉が言い表わすものを、内部から見なければならぬ」と(25)続けている。「言葉が言い表わすものを、内部から見」とは、言葉に触発されて、想像力のなかで幻（visions）を焼き出す、もしくは、映

し出すということであろう。グリーンを描出する「現実」は、「型どおりの現実」ではなく、「ヴィジオンの現実」である。グリーンは「一八八〇年ごろ、サヴァナでとった、或る見知らぬ家の内部の写真」⁽²⁵⁾を前に置いて『モン・シネール』(一九二六)を、また、「ユトリロの絵の写真」⁽²⁵⁾を利用して『アドリエヌ・ムジュラ』を制作したという。グリーンは外部世界の観察から出発しつつも、幻視家としてとらえた想像世界を開示している。グリーンは、「私は自分の見るものを書く」⁽²⁶⁾と語り、「私のうちには、作中人物を見させ、彼らが行動しつつかあるところを見させる誰か、あるいは何かが宿っているのだ」⁽²⁷⁾と考察している。この「誰か、あるいは何か」とは、幻視家または幻視家的資質のことであろう。バルザックと同様、グリーンはレアリストであると同時に幻視家でもあるのだ。

グリーンがレアリストであり、かつ幻視家であるという点にかんしては、本論第一部でもふれるが、ジャン・セモリュエは、「アドリエヌは単調な生活のみかけの下に、人が気づくことが困難な不安を隠しもっていた。実際、みなは彼女を陰険な人間にしてしまっていた。それで父や姉の目には、たとえ苦勞して探ったとしても、いかなる心の高揚も読み取れないような表情を見せていた」(『アドリエヌ・ムジュラ』、I、三〇〇頁)という人物描写を引用しながら、グリーンとバルザックとを比較している。

人はバルザックのことを想起する。バルザックにおいては、細部が作中人物を説明する。グリーンにおいては、細部は人物をその人物じしんにも、他人にも説明できないものにする。グリーンはボードレールのバルザックである。⁽²⁸⁾

ジャン・セモリュエはグリーンを「ボードレールのバルザック」と規定している。なぜ「ボードレールの」なのか。ボードレールが人間の内部の深淵、不可解で神秘的な部分に測鉛を下ろしているという意味で、グリーンがバルザックのように細部描写をおこなないながらも、この補足的限定がついたのだと思われる。バルザックにおける細部描写は、彼のレアリスムの根幹をなすが、人間の内面中心理は細部描写によって説明可能なものとしてあり、しかもその描写は概して外側からなされている。グリーンにおいて、細部描写は、バルザックにおけるように、作中人物の外部からなされることもあるけれども、基本的には、作中人物の内面の奥底にわけ入り、謎にみちた領域を探索している。バルザックのレアリスムが外的レアリスムであるとするれば、グリーンの場合は、内的レアリスムと形容す

ることが出来る。

こうしてグリーン作品は、バルザックによって完成された伝統小説に属しつつも、作中人物の内面意識の流れを問題にしているという点で、二十世紀フランスもしくは西欧の小説の特質を内包している。プルーストの『失われた時を求めて』、ジェイムズ・ジョイスの『ユリシイズ』を想起すれば明らかのように、二十世紀に入って、西洋の小説は人間の内面意識を浮かび上がらせることを主眼点とする傾向にある。グリーン小説においては、内的独白といったような新しい技法は採用されない。作中人物の意識は、伝統的な自由間接文体を多用することで表現されている。一人称小説であれ、三人称小説であれ、物語の時は単純過去であり、物語はおおむね時間的秩序に従って展開する。技法的には、グリーン小説は伝統的である。とはいえ、外的現実よりも内的現実を重視する二十世紀ヨーロッパの小説の流れのなかに、グリーン小説は当然、位置している。

二 グリーン研究の歩みとこの論文の目標

(一) グリーン研究の歩みとこの論文の研究的立場

現在までのジュリアン・グリーン研究の歩みを概括しておこう。グリーンは小説、劇作を刊行する一方で、『日記』、自伝も公表している。したがって、グリーン文学に接近する方法は二つある。一つは、『日記』、自伝を主たる検討対象とすることによって、グリーン生の歩み、内心の軌跡をたどる方法である。シャルル・メルルの『ジュリアン・グリーン、目に見えないものの証人』(『二十世紀文学とキリスト教』第一巻所収、一九五四)を嚆矢とし、スュザンヌ・トゥーレの『ジュリアン・グリーン自伝作品における神への懊惱』(一九八二)を経て、ルイリアンリ・パリアスの『ジュリアン・グリーン、肉体と魂』(一九九四)に至る研究は、この方法にのっとっている。これらの伝記研究はもちろん、グリーン創作作品の理解のために役立つ。しかし伝記研究では、当然のこと

ながら、作品の精密な読解はなされない。

グリーンの文学に接近するもうひとつの仕方は、小説・劇作から成る創作作品を主要な吟味の対象として、作品の読解をこころみる方法である。アントワーヌ・フォンガロの『ジュリアン・グリーン(32)の小説における実存(32)』（一九五四）からはじまって、ミシェル・ゴルキーヌの『ジュリアン・グリーン(33)』（一九五六）、ジャン・セモリュエの『ジュリアン・グリーン、あるいは悪の強迫観念』（一九六四）、オスヴァルト・ムッフの『ジュリアン・グリーン(34)の作品における無と欲望の弁証法(34)』（一九六七）などを経て、ミシェル・ラクロの『ジュリアン・グリーン(35)の小説作品における神秘の意味(35)』（一九八八）に至る研究は、この方法に従っている。ただ、今挙げた研究書は、作品を個別的に論じていくのではなく、作品全体を一冊の書物とみなし、作品全体に通底するテーマ・問題を抽出し、これを説明していくというやり方を採用している。つまり共時的観点から作品を分析しているので、通時的視点が稀薄であり、個々の作品の特殊性に着目するという姿勢に若干欠けていることは事実である。グリーン(36)の作品を個別的に検討した本格的な研究書としては、ジャック・プチの『ジュリアン・グリーン、《他所(36)からやってきた人(36)》』（一九六九）、アニー・ブリュドーの『ジュリアン・グリーンにおける夢と幻想(37)』（一九九五）などが挙げられる。けれどもグリーン(38)の作品研究の現状では、共時的観点からの作品分析が優勢である。この論文では、グリーンが小説家として出発したのであるから、当然、小説の研究をくわだてるが、一つひとつの作品の固有性を重視したいと思う。作品全体に共通するテーマを扱うよりも、通時的視点を導入し、作品を個別的に論じるほうが、より精緻な読解・分析が期待できるからである。

ところで、文学作品を分析するとき、作品を作者のもののみならず、読者のものとも考えるかによって、批評の在り方が違ってくることは言うまでもない。非常に大ざっぱに言えば、作品を作者との関連でとらえると、ギュスターヴ・ランソンによって確立された伝統的な批評に近づくし、作品を作者から切り離し、自律したものともみなして、純粹に読者の立場からの読解を進めると、一九六〇年代からのヌーヴェル・クリティック(38)に歩み寄ることになる。グリーン研究の場合、前の段落で紹介した、作品中心のものでも、『日記(38)』が存在するために、また、六〇年代から自伝(39)が刊行されたために、作家じしんの生の歩みを念頭に置いた研究が多い。アニー・ブリュドーらの研究のように、もっぱら作品に内在する問題に焦点を合わせたものもあるにはある。しかし構造主義批評の方法を取り入れた

ジャック・アチの研究書でも、作者の意図、伝記的事実が問題にされており、このことが象徴的に示すように、グリーン研究の現状では、作品は読者のものであるとしても、同時に作者のものであるとの認識が支配的である。この論文でも、作品を作品として、あるいは読者の側から読みつつも、作品を執筆する作家を視野に入れた立場に立ちたい。なぜなら作品は作者の手を離れ、読者にゆだねられることで読者のものになるとしても、作者の内的要請または促しがあつてはじめて制作されると思うからである。

(2) この論文の目標と意義

この論文で、何を研究対象とするかという点についてふれておこう。グリーンの小説を個別的に論じたいことは、すでに述べたとおりであるが、私はこの論文のなかで、二つの小説の読解をこころみたい。すなわち『幻を追う人』(一九三四)と『モイラ』(一九五〇)とである。その理由を明らかにしよう。まず『幻を追う人』を選ぶ訳は、第一に、グリーンの文学は、マルセル・シュネデルの『フランス幻想文学史』のなかでも言及されているように、フランス幻想文学の系譜につらなっており、グリーンにおける幻想が何か、という問題を考察したいとき、この小説が有効な手がかりを与えてくれるように思われるからである。第二に、『幻を追う人』を制作していたころ、グリーンはカトリック教会との関係を絶っており、決定的回心以前の彼の文学の特質が、この小説の読解をとおして把握できるからである。第三に、『幻を追う人』は、後述するように、第二期(中期)の作品系列に属しており、この時期の作品の具体的なかたちを知ることができるからである。

次に『モイラ』の分析をこころみる理由を示そう。第一に、のちにも明らかにするように、従来の研究において、グリーンの作品世界を宿命の世界とみなし、宿命という観点からの作品の検討がなされてきたのであるが、その場合、『モイラ』は、何よりもまず取りあげなければならない作品であるように思われるからである。第二に、『モイラ』は実質的に、カトリック教会復帰後のグリーンの文学の特質を端的に示す最初の小説であり、第三に、第三期(後期)の作品群を代表する小説であるからである。グリーンの創作作品の分類については、本論第一部の序章でおこなうので、ここでは説明をばぶくが、『モイラ』が第三期の傑作であることのみを指摘しておきたい。

二つの小説を取りあげる理由を述べた。したがって、この論文では、第一部で『幻を追う人』を、第二部で『モイラ』を論じることになる。第一部では、幻想とは何か、という点を明らかにすることを最終目標にしなが、『幻を追う人』の読解を進めたい。あわせて、作家グリーンにおける書くことの意味を考究し、さらに、決定的回心に至るグリーンの内心の軌跡をうかがいたいと思う。第二部では、『モイラ』を宿命という観点から検討したい。この目的のために、まず、主人公を取りまく人物たちの行動・役割をしらべ、次に、主人公の内心のドラマを分析し、それから、副次的人物たちの物語を読むことによって、宿命性の表現を探索することになるだろう。第二部では、第一部でのように、作品を作者の伝記的事実とかかわらせない。しかし作品を作品として徹底的に読みこむことで、おのずから作家グリーンのかかえる問題が浮かび上がってくるはずである。

この論文で目指すことは、たった二つの小説の読解に限定されるので、この論文はグリーン研究の、ごくささやかな第一歩をしるすにすぎない。けれども論じる作品の数を絞りこむことで、作品のいっそう緻密な分析が可能になるのではないだろうか。そして二つの小説を読むことをとおして、へ幻想への文学とへ宿命への文学としてのグリーンの作品の成り立ちが解明できるし、それに何よりもまず、グリーンの世界の一端がかいま見えるだろう。それゆえ、目標はささやかであるとしても、この論文は、それなりの意義と価値を有していると思われる。

註

(1)たとえば、第二次世界大戦中には、「アメリカと戦争」という表題のもとに、一連の時事的な記事を発表している。プレイアード版「全集」第

二巻の、Appendice IIを参照。

(2)ヒトラーの率いるナチスは、一九三二年の選挙で、国民議会の第一党の勢力にのしあがり、翌三三年、独裁権を得る。

(3)一九三三年八月、ロマン・ロラン、アンリ・バルビュスらの呼びかけにより、オランダのアムステルダムで国際平和大会が開かれた。いわゆる

アムステルダム・ブレイエル運動のはじまりである。海原峻『フランス人民戦線——統一の論理と倫理——』、中公新書、一九六七、六二一、六五頁を参照。

- (4) 『容易な歲月』、『日記』第一卷、一九三二年四月四日、IV、一六四頁。
- (5) 同右、一九二八年十月五日、IV、二六頁。
- (6) 『最後の美しい日々』、『日記』第二卷、一九三七年二月九日、IV、四二四頁。
- (7) 『容易な歲月』、『日記』第一卷、一九二六年四月二十一日、IV、一〇頁。
- (8) 同右、一九三三年三月十三日、IV、二三〇頁。
- (9) 『亡霊』、『日記』第五卷、一九四七年十二月二十九日、IV、九九二頁。
- (10) 父エドワードはヴァージニア州のマナサス近くで、母メアリーは、ジョージア州のサヴァナで生まれた。
- (11) 『内なる鏡』、『日記』第六卷、一九五一年七月三日、IV、一二三〇頁。
- (12) 『暗い扉の前で』、『日記』第三卷、一九四一年六月二十五日、IV、五八九頁。
- (13) 『最後の美しい日々』、『日記』第二卷、一九三九年日付なし、IV、五一六頁。
- (14) P.-G. Castex et P. Surer : *Manuel des études littéraires françaises, XXe siècle*, Hachette, 1967, pp. 103-105.
- (15) Pierre Bruel : *Littérature française, histoire et anthologie, XXe siècle*, Bordas, 1979, pp. 1456-1475.
- (16) 若林真他『二十世紀のフランス文学』、慶應通信、一九八三、二七頁。
- (17) 『亡霊』、『日記』第五卷、IV、一一一四頁。
- (18) Jean Semolué : *Julien Green ou l'obsession du mal*, Editions du Centurion, 1964, p. 174.
- (19) P.-G. Castex et P. Surer : *Manuel des études littéraires françaises, XIXe siècle*, Hachette, 1966, p. 157.
- (20) Baudelaire : 《Théophile Gautier [I]》, *Critique littéraire, Œuvres complètes*, t.II, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1976, p. 120.
- (21) 高山鉄男「社会の総合的壁面としての小説——バルザック」、『フランス文学講座』第二卷『小説Ⅱ』、大修館、一九七八、六九頁。

- (22) 福永武彦「ジュリアン・グリーン『運命—モイラ』あとがき」、『福永武彦全集』第十八巻、新潮社、一九八八、三六六頁。
- (23) 同右、三六七頁。
- (24) 『容易な歲月』、『日記』第一巻、一九三二年十月二十二日、IV、一三〇頁。
- (25) 同右、一九三二年四月十八日、IV、一六八頁。
- (26) 『亡霊』、『日記』第五巻、一九四九年十月十六日、IV、一一〇五頁。
- (27) 同右、一一〇六頁。
- (28) ジャン・ギョンの前掲書、七四頁。
- (29) Charles Melier : 《 Julien Green, témoin de l'invisible 》, *Littérature du XX^e siècle et christianisme*, t.I, *Silence de Dieu*, Casterman, 1954.
- (30) Suzanne Toulet : *Le Tourment de Dieu dans l'œuvre autobiographique de Julien Green*, Editions Naaman, 1982.
- (31) Louis-Henri Paris : *Julien Green, corps et âme*, Fayard, 1994.
- (32) Antoine Fongaro : *L'Existence dans les romans de Julien Green*, Angelo Signorelli, Roma, 1954.
- (33) Michel Gorkine : *Julien Green*, Nouvelles Editions Debresse, 1956.
- (34) Oswald Muff : *La dialectique du néant et du désir dans l'œuvre de Julien Green*, Keller, Zurich, 1967.
- (35) Michèle Raclot : *Le sens du mystère dans l'œuvre romanesque de Julien Green*, Aux Amateurs de livres, 1988.
- (36) Jacques Petit : *Julien Green, « l'homme qui venait d'ailleurs 》*, Desclée de Brouwer, 1969.
- (37) Annie Brudo : *Rêve et fantastique chez Julien Green*, Presses Universitaires de France, 1995.
- (38) グリーンが他界するまでに、合計十六巻の『日記』が公表されている。
- (39) グリーンの自伝としては、『夜明け前の出発』(一九六三)、『開かれた千の道』(一九六四)、『遙かな土地』(一九六六)、『青春』(一九七四)の四巻がある。ただし、一九八四年にスイユ社から、『青春の終わり』を付け加えて、『若き歲月』(*Jeunes années*)という表題のもとに、二巻本にまとめて刊行されたことがあった。ほかに霊的自伝である『人間に必要な愛』(一九七八)が発表されている。

(40) Marcel Schneider : *Histoire de la littérature fantastique en France*, Fayard, 1985, pp. 363-365. 渡辺明正、篠田知和基監訳『フランス幻想文学史』、
国書刊行会、一九八七、五〇一 - 五〇四頁。

本
論

第一部 『幻を追う人』

序章

第一部では、『幻を追う人』(De Visionnaire)を取りあげ、その読解をこころみる。『幻を追う人』を研究対象に選んだ理由と、これを研究する目的については、序論で述べたとおりである。ここでは、『幻を追う人』の構成と概要を説明し、『幻を追う人』をグリーンの中の作品の流れの中に位置づけたあと、問題点を指摘することによって、この小説を分析する目的をあらためて示し、そのうえで、いかなる観点から作品を読解するかを明らかにしたい。なお、この作品の原題にふくまれる「visionnaire」は、もともと、へ幻視家へ幻を見る人への意味であるが、作品の内容を考慮すると、日本における従来の翻訳上の慣例にしたがうのが適当であるように思われる。それゆえ、へ幻を追う人へと訳すことにしたい。

『幻を追う人』の構成と概要を紹介しておこう。この小説は全体として三部から成り、第一部と第三部は「マリー＝テレーズの手記」(Récit de Marie-Thérèse)と名づけられ、中心人物の一人マリー＝テレーズによって語られている。第二部は「マニユエルの手記」(Récit de Manuel)と題され、もっとも重要な人物であるマニユエルによって物語られている。さらに第二部は『在り得たこと』(Ce qui aurait pu être)という表題をもつ、別箇の物語を内含している。『在り得たこと』はマニユエルが作成した想像上の物語であり、小説の残りの部分とはちがった、固有の空間と時間の体系を有していて、小説の中の小説といえる。とはいえ、『在り得たこと』の提示する小宇宙は、のちに見るように、作品全体がかたち作る大宇宙と照応関係にあり、密接なつながりをもっている。

マニユエルが『在り得たこと』を書くに至るまでの経過をたどることにしよう。マニユエルはフランスの地方の小さなまちで本屋の店員としてはたらいっている。マニユエルは相ついで両親を亡くし、おばのプラス夫人のもとにひきとられ、夫人とその娘マリー＝テレーズとともに暮らすことになる。そして従妹マリー＝テレーズに愛の欲望をいだくようになる。ある夜、マニユエルは従妹を散歩に

連れ出し、目的地の屋敷跡に着いたあと、従妹の脚に頬をあてたことで従妹を失神させてしまう。マリー・テレーズはこの夜の散歩の一件をガロ神父に告解する。ガロ神父はその一件をプラス夫人に話すよう、マリー・テレーズに約束させる。日曜日、馬車に乗って一家の所有する農園に皆で出かけたとき、マリー・テレーズは母親に話そうとする。ここまでが第一部の要旨である。

第二部は、皆が小作人の農家に着いてからのことを物語っている。マリー・テレーズから夜の散歩のことを聞かされたプラス夫人はマニエルに真相をただす。マニエルは沈黙をまもることと窮地を脱する。しかしこの日からマニエルの胸の病いが悪化する。マニエルは本屋での勤めをやめ、闘病生活にはいる。ある日の午後、マリー・テレーズの友だちのポーリーヌとエドメ・ド・ガイヤルデが家に遊びにやってくる。マニエルは欲望にかられて、三人を森の散歩にさそう。そして森の中で目隠し鬼ごっこをしたとき、エドメのからだをさわわり、エドメを逃げ帰らせてしまう。その日の夕方、サンクティス神父が森の中でのマニエルのふるまいを非難しに家に戻ってくる。プラス夫人は神父を追い返してしまふ。また、同じ日の夕方、プラス夫人の亡き夫の友人の息子である、羅紗商人のジョルジュ・エスパンシャ氏がマニエルに仕事を世話するため家を訪ねていたのであるが、プラス夫人とマニエルは申し出をことわることで羅紗商人をも敵にまわす。サンクティス神父とジョルジュ・エスパンシャ氏は世間を代表する人物である。かくしてマニエルは世間から身をひそめての闘病生活を強いられるようになる。こうした中でマニエルは、自己の現実からのがれるため、『在り得たこと』を作成するに至る。

第二部第五章のあとに挿入された『在り得たこと』を概観することにしよう。『在り得たこと』はネーグテルと呼ばれる城を舞台としている。この城の主な住人は、ネーグテル伯爵、娘の子爵夫人、伯爵の息子であり子爵夫人の弟であるアントワーヌ、および元召使のジョルジュ夫人である。マニエルが庭師の見習いとしてネーグテルの城にやってきたとき、伯爵は遺伝性の病いのために部屋にとじこもり、ひたすら自らの最期を待っている。伯爵の姿を見ることができるのは、伯爵の看護をするジョルジュ夫人だけである。面会を許されない子爵夫人とアントワーヌは、死の恐怖のなかで父親の他界を待ちながら暮らしている。マニエルはやがて、死と対峙する伯爵の前でラテン語の祈祷書を朗読する仕事を与えられる。と同時に、子爵夫人の confident (打ち明け話の聞き手) に

もなる。そうこうするうちに、伯爵が息をひきとり、子爵夫人が不意にマニユエルの部屋にやってくる。子爵夫人はマニユエルに父親の死を告げるとともに、マニユエルと性の交わりを結び、錯乱のなかで事切れる。『在り得たこと』は、マニユエルが子爵夫人の屍骸をのこして、ネーグデルの城から逃げ去るところで終わっている。

第三部では、『在り得たこと』を書きあげたあとのマニユエルのさいこの日々が語られる。マニユエルは相変わらず蟄居のなかで、プラス夫人の手厚い看護のもとに闘病生活をつづけている。そんなある日、マリー＝テレーズは、マニユエルの夢想の源になった城を見に行こうと提案し、マニユエルを散歩に連れ出す。だがマニユエルは途中で血をはいて死んでしまう。作品の終わりには、マニユエルが死んで数年ののち、マニユエルの手記をみつけて読んだマリー＝テレーズの、次のような感想が置かれている。

この小冊子の最後の頁を閉じながら、わたしはこう自問するのだった、結局のところ、幻を追う人のほうがわたしたちよりもっと鋭いまなざしをこの地上に投げかけているのではないかと。また、目に見えないものの中に浸っている世界においては、欲望と死の威光は、わたしたちの偽りの現実と同じだけの意味を有しているのではないかと（Ⅲ、三九一頁）。

この感想は、作品をしめくくる結論的な言葉とうけとれるので、註解をおこなっておきたい。まず、この文章で、「幻を追う人」(le visionnaire)という語が使われていることが注目される。小説の表題にもなっている幻を追う人とは言うまでもなくマニユエルのことである。ここから、当然のことながら、『在り得たこと』の全体は、幻を追う人であるマニユエルがみた幻であることがわかる。次に、「目に見えないものに浸っている世界」(un monde qui baigne dans l'invisible)という表現が注意をひく。『在り得たこと』が提示する世界は、現実世界において実際に見られた世界ではなく、あくまで想像力によってとらえられた世界であり、要するに、目に見えない世界である。この目に見えない世界は、「わたしたちの偽りの現実」(nos réalités illusives)というように、現実の世界と対比させて考えられている。そして目に見えない世界の迫真性を前にして、「偽りの」(illusives)という形容詞が用いられているところか

ら明らかかなように、目に見える現実世界の真実性が疑われていることに気づく。また、この一節で、「欲望と死の威光」という言い方がなされていることも重要であろう。『在り得たこと』を、ということはずなわち、マニユエルの内心を支配するものは、欲望と死という二つの要素である。蟄居生活を強いられたマニユエルのさいごの日々は、欲望の苦しみと死の恐怖に支配されたものである。それゆえ、欲望と死という二つの角度から作品を読解・分析することが必要不可欠な課題となってくる。

今度は、『幻を追う人』をグリーン⁽²⁾の作品の流れの中に位置づけ、そのうえで問題提起をおこないたい。ジャック・プチの分類によれば、グリーン⁽²⁾の創作作品は三つの時期に分けられる。すなわち一九二〇年代の作品が第一期（初期）、『もうひとつの眠り』（一九三二）から『私があなたなら』（一九四七、新版一九七〇）までの小説が第二期（中期）、一九五〇年あるいは『モイラ』以後の作品が第三期（後期）である。とはいえ、この分類は一九六九年の時点のものである。その後、グリーンは小説を書きつづけ、晩年には、『遙かな国々』（一九八七、改訂版一九九四）、『南部の星』（一九八九、改訂版一九九四）、『ディクシー』（一九九五、改訂版一九九八）を発表した。この三部作は、人間的な愛に積極的に身をゆだねる人間を描いているという点で、これまでの作品群とは性格を異にする。したがって、これらの小説は、第四期（晩年）の作品とみなすのが妥当であろう。

一九三四年に刊行された『幻を追う人』は第二期（中期）に属する作品である。では、『幻を追う人』をふくむ第二期（中期）の作品群はいかなる特徴を有しているのだろうか。第一期（初期）および第三期（後期）の作品群と比較しつつ、考察することにした。まず、ユイターヴァール⁽³⁾の見解を紹介することからはじめよう。ユイターヴァールは、作中人物たちが目に見える世界（le monde visible）の背後にかくれた目に見えない世界（le monde invisible）をどのように感じ、あるいは意識しているかによって、各時期の作品を理解している。ユイターヴァールによれば、初期作品の人物たちは「目に見える世界に満足しておらず」、「《彼方》」、「《遙かな国》」が、言いかえれば、目に見えない世界が「存在することを感じとってはいる」が、「しかしそれについてきわめて漠然とした考えしかいだいていない」⁽³⁾。これにたいして、中期（第二期）の作中人物たちは、「別の世界、目に見えない世界が存在することを確信しており、それを探求し、それを見いだしたと思う。だが彼らは以前に生きていた深淵よりもっと恐ろしい深淵の中に落ちるに至る」⁽⁴⁾のだ。そ

して後期（第三期）の作中人物たちは、「目に見えないものの宗教的性格をはっきりと意識している」⁽⁵⁾のである。ユイターヴァールの見解をまとめると次のようになる。すなわち、目に見えないものとは、本来、人間に救いをもたらすはずの宗教の領域に属するが、後期の作品の人物たちはそのことをはっきりとわかっているのにたいして、初期作品の人物たちは目に見えないものを漠然と感じとっているにすぎず、中期の小説の人物たちは、目に見えないものを宗教とはちがったものの中に追いもとめるので深淵におちいつてしまうということになる。けれども初期（第一期）から中期（第二期）への移行という点に話を限定すれば、初期作品では人物たちが目に見える世界つまり現実世界からの脱出を願いながらも、この世界にどっぷりとつかっているのにたいして、中期の小説の人物たちは現実世界からの逃亡を積極的にこころみ、目に見えないものを追いもとめるようになる、ということになると思う。

また、グリーン（Green）の作品の流れは、作中人物たちが各々に課せられた人間の条件からの解放をどのようなかたちでもとめるか、ということによって把握することができるようになる。人間の条件とは、人間が根源的に孤独であるとか死すべき運命にあるとかいったきびしい事実を指し示す。初期作品では、人物たちは人間の条件からの解放を外部世界において、あるいは、他者とのかわりの中で希求する傾向が強い。後期の作品でも類似した傾向が見られる。もっとも、後期の作品では、初期作品とはちがって、人間の条件は宗教とのかかわりのもとに問題にされている。多くの場合、他者とは、愛の情熱の対象としての人間であると同時に神でもある。したがって、愛と信仰との葛藤がしばしば描かれている。では、中期の小説の人物たちはどうか。中期の作中人物たちは概して人間の条件からの脱却の糸口を、外部世界もしくはは現実世界にもとめていないように見える。彼らは、初期作品の人物であるアドリエヌ・ムジュラや『レヴィアタン』の中心人物たちのように、他者との出会いのうちに自らの救いを追求することはない。外あるいは他者に向かつてではなく、いわば内に向かって、換言すれば、自己の内部に沈潜することによって、人間の条件を超克しようとする傾向にある。このことは少なくとも『幻を追う人』については言える。なぜならマニユエルは夢想の世界、想像上の世界の中に逃亡することによって、さいこの日々を生きるのだから。

ところで、ロベール・ド・サン・ジャンによれば、グリーンの中には二つの作家的資質が存在する。「現実の画家」と「幻想の探求

者」とである。これらはレアリストとしてのグリーン (Le Green realiste) と幻視家グリーン (Le Green visionnaire) と言いかえてもよい。今度は、この二つの作家的資質とのかかわりで各時期の作品をとらえてみよう。この二つの作家的資質は作品の中で渾然一体となって現われ出ており、容易に区別しがたいものであるけれども、初期と後期の作品群ではレアリストとしてのグリーンが幻視家グリーンよりも優位に立っていると一応言えると思う。初期および後期の作品群は、基本的に現実世界の濃密な細部描写から成り立っているからである。これにたいして、中期の作品においては、すでに述べたように、人物たちが外ではなく内に向かいがちなため、言いかえれば、自己の内部に沈潜する傾向にあるため、作品は現実世界に基盤を置きながらも、人物たちの夢もしくは夢想が前面に押し出されている。さらにまた、『ヴァルーナ』や『私があなたなら』では、輪廻あるいは転身（魂の交換）といった非現実的または超自然的性格をもつテーマもあつかわれている。このため、中期の小説のなかでは、幻想的な要素が色濃くあらわれ、現実的なものからの遊離と幻想的なものへの傾斜が目立つ。中期の作品においてはレアリストのグリーンよりも幻視家グリーンの筆が強くはたらいっているとみなしうる。そして『幻を追う人』は、表題が端的に示すように、グリーンが幻視家としての本領を十二分に発揮した作品なのである。

『幻を追う人』が属する中期（第二期）の作品の特徴を、初期（第一期）および後期（第三期）の作品の特徴と比較しながら、大ざっぱに述べてきた。以上のことを踏まえつつ、『幻を追う人』がはらんでいる問題点を指摘したい。第一の問題点は、グリーンの創作態度あるいは制作方法とかわる。この作品において、主人公マニユエルは『在り得たこと』という手記を書いている。『在り得たこと』は、作中人物が作成したひとつの小説である。ここから、『幻を追う人』は、作家グリーンにとって小説を執筆することとは何か、ということを考える手がかりを与えているように思われる。このことは、グリーンじしんも認めている。グリーンは一九三五年十一月五日付の『日記』の中で、二年前に完成したこの作品を振り返りながら、こう言っている。

『幻を追う人』、それは小説家の小説だった。そしてマニユエルの夢想は、私が自分の本を書くためにふるまう方法をかなりうまく説明していた。

ここでの「小説家の小説」とは、少しわかりにくいがおそらく、小説家が小説を書くに至る過程に焦点をあわせた小説ということなのであろう。だからこそ、『幻を追う人』は、グリーンが「自分の本を書くためにふるまう方法」を、つまりどのようにして小説を作成するのかを「説明」しているのだ。『幻を追う人』は、グリーンにおいての書くことの意味ないし意義を解く鍵を秘めた作品である。

第二の問題点は作者グリーンの信仰的態度に関連する。『幻を追う人』を読むとき、この小説の制作年代が、グリーンがカトリック教会からもっとも遠去かっていたころであるという点は銘記しておく必要があるだろう。『幻を追う人』は一九三二年五月二日に着手され、三三年五月十九日から八月一日までの中断をはさんで、三三年九月二十七日に完成された。グリーンは一九二九年ごろカトリック教会と絶縁し、以後、一九三九年のカトリック教会への復帰に至るまで、ありとあらゆる宗教的実践を放棄した。『幻を追う人』は、グリーンが宗教的な救いをもとめていないとみられる時期に作成された。それゆえに、『幻を追う人』はグリーンの作品群の中でも、もっとも暗いものと言われている。たとえば福永武彦氏はこの作品を、グリーンの「不信仰時代」の小説のなかで「最も暗く絶望的なものの一つ」である⁹⁾とみなしている。とはいえ、『幻を追う人』が暗くて絶望的な作品であることは認めるとしても、グリーンがこの小説を執筆した時期が「不信仰時代」であったかどうかは疑問が残る。この時期、信仰が衰えていたことは事実だとしても、グリーンが一九三九年の決定的回心に向かっていたの道を歩んでいたこともまたたしかであろう。作品はこうした執筆当時のグリーンの宗教的姿勢を反映しているのではないだろうか。要するに、作品をとおして、作者グリーンの魂の軌跡をたどることができるように思われる。

第三の問題点は、幻想とは何か、という点である。『幻を追う人』を純粹に作品として読むとき、これがもっとも大きな問題点になることは言うまでもない。前述のように、リアリストのグリーンと幻視家グリーンは簡単に区別しがたいけれども、第二期（中期）の作品では幻視家グリーンの筆が強くはたらかず、幻想なるものへの傾斜が目立っている。したがって、『幻を追う人』の読解をとおして、グリーンの作品における幻想がいかなるものであるのか、を明らかにすることは重要な検討課題となるのではないだろうか。

これまで、幻想という語を明確に規定しないうまま用いてきた。ここで『幻を追う人』がほんとうに幻想的な作品であるのか、従来の幻想文学の系譜につらなるのかどうかを、三人の幻想文学の研究者の定義に照らし合わせながら検証することにした。はじめに、ツ

ヴェタン・トドロフの有名な定義を引きあいに出すことにしよう。トドロフは『幻想文学入門』のなかで、こう書いている。

幻想とは、自然の法則しか知らない人が、一見、超自然的な出来事に直面して感じるためらいのことである。⁽¹⁰⁾

ここで言われている「一見、超自然的な出来事」という言い方における「超自然的」とは、合理的なかたちでは説明がつかないというほどの意味だと思われる。では『幻を追う人』において、「一見、超自然的な出来事」は起こっているであろうか。管見によれば、『在り得たこと』の中で二つの「超自然的」な現象が見られると思う。一つは、ネーグルテル伯爵が医者たちから見放されているにもかかわらず生きながらえているという現象である。なるほど、日常生活において、医者から死を宣告された人が健康をとりもどすといったことは往々にして起こる。しかし伯爵の場合、容態が快方に向かうこともなければ、元氣な姿を家族に現わすこともない。部屋に一人とじこもってひたすら死の訪れを待つだけである。伯爵は生きながらにしてすでに死んでいる。「死者たちの恐ろしい威光」を放つ伯爵は、「存在するということが合理的には説明することができない」人物である（CQ、三四六頁）。伯爵は生きながらえることによつて、それ自体、不合理な、超自然的な存在と化している。『在り得たこと』の世界の幻想性はこのような伯爵の存在によつてもたらされているように思われる。さて、『在り得たこと』におけるもう一つの「超自然的」な現象は、結末部分に認められる。すなわち、子爵夫人は父親の伯爵が息をひきとった日の夜明け前、突然マニユエルの部屋にやってきて、マニユエルと性の交わりを結び、抱擁のなかで死んでいく。子爵夫人の不意の出現と死は、一見、合理的に説明がつきにくく、やはり超自然的な出来事に見える。こうした出来事を前にして、読者が「ためらい」を覚えるかどうかは定かでない。けれども『在り得たこと』はトドロフの言うところの「一見、超自然的な出来事」をふくんでおり、『幻を追う人』が幻想なるものを内包した作品であることはまちがいない。

次にピエール・ジョルジュ・カステックスの見解にそくして考えてみたい。カステックスは『ノディエからモーパッサンまでの、フランスの幻想コント』のなかで、幻想なるものをこう定義している。

それ〔幻想〕は、（…）現実生活の枠内への神秘の突然の闖入によって特徴づけられる。⁽¹¹⁾

カステックスは、「現実生活」の中に「神秘」が侵入してきたことから幻想的なものが生じるとみなしている。ここでの「神秘」(mystère)とは、謎、不可解なことといった言葉に言い換えることもできる。『幻を追う人』はカステックスの定義にあてはまるだろうか。答えを先に述べれば、あてはまっていると思う。作品第一部第一章から第二部第五章にかけて「現実生活」が叙述されたあと、『在り得たこと』でマニユエルの夢の世界が繰りひろげられるのであるが、この世界は謎にみちているからである。『在り得たこと』の世界の神秘性は、先に指摘したごとく、「一見、超自然的な出来事」が起こっているという点に由来している。また、『在り得たこと』の舞台であるネーグルテルの城が、ジャック・プチの言うように、「死の城」⁽¹²⁾であり、死によって支配されているということも、その世界を神秘的にしている。死は不可解で、神秘的なものであるからだ。さらに、伯爵をはじめとして、子爵夫人、アントワヌ、ジョルジュ夫人といった城の住人たち、つまり『在り得たこと』の主要な人物たちがことごとく不可解で謎めいた存在であるという事実もまた、この世界の神秘性に関係している。『幻を追う人』は『在り得たこと』を挿入することによって、カステックスの理解する幻想なるものをはらんだ作品になっている。

さいごに、マルセル・シュネデルの定義を参照することにしよう。シュネデルは『フランス幻想文学史』のなかで、次のように言っている。

それ〔幻想〕は、日常的なものを実際に体験する中での断絶の所産であり、突然の裂け目である。⁽¹³⁾

『幻を追う人』はシュネデルの定義にも合致すると思う。第二部第五章までは日常的なものが基本的には問題にされているけれども、そのあとの『在り得たこと』は日常的現実または日常生活との「断絶」の結果、産み出されたものであり、また、日常的なもの

中での「突然の裂け目」を示しているからである。くわえて、第一部第八章の、マリーIIテレーズとの夜の散歩も、日常的なものとの「断絶」、日常生活における「裂け目」を示す出来事とうけとれる。なぜならこの夜の散歩は、それまでマニユエルとマリーIIテレーズとがすごしてきた日常生活の中できわめて異質なものであり、日常生活の流れを中断しているからだ。同じように、第二部第五章の、マリーIIテレーズおよびその友だちとの森の散歩もまた、日常的なものとの「断絶」を示す事件とみなしうる。こうしてシュネデールの定義にそくして考えるならば、『幻を追う人』において幻想性は、『在り得たこと』だけでなく、第一部第八章、第二部第五章の挿話によっても付与されている。

トドロフ、カステックス、そしてシュネデールの定義に照らし合わせながら、『幻を追う人』が幻想的な作品であるのかどうかを考察してきた。『幻を追う人』はこれら三人の理解する幻想文学の要件を満たしており、従来の幻想文学の系譜に属すると思われる。それゆえ、『幻を追う人』における幻想性を問題することはまちがっていないし、それどころか、きわめて重要な課題になりうる。この第一部において、グリーンにおける幻想とは何かを明らかにすることを最終目標にしながらか、『幻を追う人』の読解をこころみたい。あわせて、グリーンにとっての書くことの意味を解明し、グリーンの魂の軌跡をたどりたいたいと思う。この目的のために、作品を欲望と死という二つの観点から分析したい。すなわち、まずはじめに作中人物たちの欲望をしらべ、それから作中人物たちの死の想念ならびに死の恐怖を検討することにした。

註

(1) 頁数の前のローマ数字とアラビア数字とによって、第何部第何章かを示す。『在り得たこと』(Ce qui aurait pu être)からの引用は、CQと略記して示す。なお、『幻を追う人』は、プレイアード版「全集」第二巻に収録されている。

(2) Jacques Petit: *Julien Green, « l'homme qui venait d'ailleurs »*, Desclée de Brouwer, 1969, pp. 41-42.

- (3) (4) (5) Dr. J. Uijterwaal : *Julien Green, personnalité et création romanesque*, Van Gorcum & Cie, Assen, 1968, p.115.
- (6) Robert de Saint-Jean : *Julien Green par lui-même*, Seuil, 1967, p.77.
- (7) アントニオ・モールはこう言っている：「幻視家グリーンはレアリストのグリーンと切り離すことはできない。グリーンのヴィジオンは現実（あるいは現実と称されるもの）を探測する視線の非常な鋭さに由来するのだ」(Antoine Mor : *Julien Green, témoin de l'invisible*, traduit de l'italien par Hélène Pasquier, Plon, 1970, p.181)。
- (8) 『最後の美しい日々』、『日記』第二巻、一九三五年十一月五日、IV、三九二―三九三頁。
- (9) 福永武彦：『幻を追う人』への「訳者あとがき」、『ジュリアン・グリーン全集』第九巻、人文書院、一九八一、二三七頁。
- (10) Tzvetan Todorov : *Introduction à la littérature fantastique*, Seuil, 1970, p.29.
- (11) Pierre-Georges Castex : *Le Conte fantastique en France de Nodier à Maupassant*, José Corti, 1951, p.8.
- (12) ジャック・プチの前掲書、一四九頁。
- (13) Marcel Schneider : *Histoire de la littérature fantastique en France*, Fayard, 1985, p.8.

第一章 欲望の世界

序章でふれたように、この第一章では、『幻を追う人』を欲望の観点から読解する。そのことのために、マリー＝テレーズ、プラス夫人、マニユエルの欲望の揺れ動きをしらべよう。すなわち、マリー＝テレーズの官能のめざめを信仰とのかかわりで問題にし、プラス夫人のサディズム的態度と不幸への愛を、夫人のなかの抑圧された欲望との関連で把握し、そしてマニユエルの欲望の苦しみを概観したい。このあと、マニユエルが作成した物語『在り得たこと』の検討に入るが、現実生活における彼の肉体的苦悩と関係づけながら、この物語を分析する。すなわち、アントワヌの放蕩、子爵夫人のサディズム的欲求、マニユエルの、子爵夫人への執着、マニユエルと子爵夫人との性行為の場面を取りあげ、そうすることによって、『在り得たこと』の世界が欲望の世界であることを見ていきたい。

一 マリー＝テレーズの信仰と官能のめざめ

『幻を追う人』において、肉体的な欲望をいまくのはマニユエルだけではない。マニユエルの欲望が顕在化する第一部第八章以前には、マリー＝テレーズの欲望の揺れ動きも認められる。そして注意すべきことに、その欲望は信仰に後続するかたちで描かれている。そこでまず、マリー＝テレーズの信仰を問題にすることからはじめたい。

第一部の語り手マリー＝テレーズははじめのうち、マニユエルが家にひきとられてきた、十四歳当時の自己の内的状態を語っている。当時のマリー＝テレーズの内面を支配するものは宗教である。マリー＝テレーズは修道女たちの経営する学校にかよっており、とくにルイーズ修道女の影響をうけて、カトリックの信仰をつちかかっていく。と同時に、修道女たちへのあこがれをつのらせていく。

わたしは学校が大好きだった。静かな声でわたしを叱る修道女たちの天使のようなきびしさが大好きだった。(…)わたしは修道女たちを愛していた。羨んでいた。できることなら自分もまた彼女たちと同じように、サージの服を着て、かるやかな衣ずれの音をたてながら歩きたかったし、彼女たちの顔にみられる人間ばなれした、驚嘆すべき表情を永遠に身につけたいと思った(Ⅰ、4、二二二頁)。

この箇所は、修道女たちへのあこがれが高じて、自分もまた修道女になりたいと願うに至ったマリー・テレーズの心の動きをうまく表現している。また、マリー・テレーズはこう言っている。

ルイーズ修道女が主の祈りや幾節かのアヴェマリアの祈りをとなえるために、午後のおわりにわたしを礼拝堂に連れて行ったとき、わたしはほかのところにいるよりもそこにいるほうが幸福に感じるのだった。静けさ、さわやかさ、蠟燭の小さな炎がゆらめいている薄明かり、丸天井の下を支配している平和、こうした環境の一切のものが、わたしの夢想癖を助長するのだった(Ⅰ、5、二二七・二二八頁)。

この件りでは、ルイーズ修道女といっしょに礼拝堂にいるときの幸福感が語られるとともに、礼拝堂という環境がマリー・テレーズを夢想にいざなったことが述べられている。こうしてマリー・テレーズは必然の、避けがたい結果として、修道生活へのあこがれをいだくに至る。

しかしこのあこがれは、マリー・テレーズの周囲の人びとの導きによって生じたものである。マリー・テレーズは学校時代のことを振り返りつつ、「無垢なる魂にしかけられ、自分の魂のうえで静かに閉じられた天の罨」の存在を指摘し、「自分のまわりでたくらまれている宗教的な陰謀」に言及している(Ⅰ、4、二二四頁)。マリー・テレーズの修道女になりたいという願いは他者の意向に沿ったものであり、自発的、能動的なものではない。くわえて、この願いは生徒たち、修道女たちに良く思われたいという気持ちにも源を

発している。この点にかんして、マリー＝テレーズは修道女になる決心を公けにしたあとの人びとの対応、すなわち、生徒たちの注目の対象になったことや、上級生が告解の順番をゆずってくれたことや、ガロ神父が「幸福の涙」を流させるほどの「感動的な口調」で自分の魂について長々と話してくれたことを思い出しながら、「わたしは誇らしい気持ちでどうにもならなかった」と言っている（Ⅰ・5、二二八頁）。ここからわかるように、他人に評価されたい、他の生徒たちよりも優位に立ちたいという世俗的な感情が、修道女になるといふ決意をささえ、あるいはもたらしている。また、マリー＝テレーズは、「自分が愛されていることを知りたいという現世的な欲求を、人びとは天国への憧憬と取り違えていたのだろうか」（Ⅰ・4、二二四頁）と自問している。この一文では、ただ単に人から愛されたいという願いが修道女になる決心をもたらしただろうか。ミシエール・ラクロはおそらくこの文を踏まえ、次のように論じている。

彼女（マリー＝テレーズ）がこの場所（修道院付属の学校）でしか感じない、愛されることの幸福が、宗教的な天職に召されていると考えるように駆りたてる。だがこのいつわりの召命は、彼女の感情の過剰を昇華したものをあらわすにすぎない。^{（上）}

ミシエール・ラクロは、愛されることの幸福をもとめる人間的な欲求が修道生活へのあこがれを生じさせており、マリー＝テレーズの召命が過剰な地上的感情を昇華させたものにすぎず、それゆえにいつわりのものであるとみなしている。マリー＝テレーズの修道生活へのあこがれは、このように人間的な感情に根ざしており、霊的な欲求もしくは信仰のたかまりの所産ではない。マリー＝テレーズもまた、自分の召命のことを顧みて、こう結論している。

いまとなってわかるのだが、宗教的な感覚はわたしには欠けていた。（…）わたしが召命とみなしていたものは、ルイズ修道女やマリー＝アルフォンシーヌ修道院長の真似をしたという欲求にすぎなかった（Ⅰ・12、二五九頁）。

マリー＝テレーズもまた、自分の召命がいつわりのものであり、世俗的な欲求から修道生活へのあこがれをいだいたにすぎないことを認めている。とはいえ、だからといって、ここで断言されているように、「宗教的な感覚」がマリー＝テレーズに欠如していたとはみなしがたい。召命がにせものであるとしても、少女時代のマリー＝テレーズの内心を支配するものは、やはり信仰であり、この信仰は疑うことができないのではないのだろうか。マリー＝テレーズは別のところで、自分が「完全な生活を熱望していた」(I・10、二五三頁)と述懐している。この「完全な生活」(une vie parfaite)とは、信仰上の要請にもとづくものにほかならない。また、マリー＝テレーズは、「わたしの軽薄さも、自分のうちに、カトリックの大いなる郷愁の幾分かが宿ることを妨げはしなかった。この世の道が連れ戻すことのない失われた祖国を惜しむ気持ちが」(I・4、二二四、二二五頁)と言っている。ここでは、マリー＝テレーズの内心に宿った「カトリックの郷愁」と「失われた祖国」への愛惜の念が問題になっている。「カトリックの郷愁」とは言うまでもなくカトリシズムにひかれる気持ちのことであり、「失われた祖国」とは、この世に見いだしえない神の国を指し示している。とすれば、この言葉を読むかぎりでは、少女時代のマリー＝テレーズが真正銘の信仰をもっていただけに否定できない。さらにまた、マリー＝テレーズは、十四歳のころに使っていた黄楊の数珠の匂いを嗅いで、昔の自分にもどっていた思い出を喚起している。

数年のあいだ、わたしは、そのころのものである黄楊の数珠をひき出しの奥にしまっておいた。黄色い木の珠の匂いはとても強かった。その匂いを嗅ぐだけで、わたしの少女時代の数分間を、身振りや言葉ではなく、一時期の特別な味わいを自分のうちに甦らせるのに充分だった。わたしは一種の眩暈を感じていた。問題なのは、もはや回想ではなく、消え去ったひとつの世界が、その光と息吹きと東の間の夢想とともに再生することだった。神を信じない者になったとはいえ、わたしは信仰と呼ばれるあの不思議な領域にふたたび浸るのだった。その数珠を顔に近づけるだけで、わたしは昔の少女にもどった。そしてその少女にとって、魂の祖国がこの世の平野のむこうにある大きな庭園のように輝いているのだった。今やわたしのころは空っぽになり、黄楊は魔法の匂いを完全にうしなってしまった。そう完全に。わたしがそうであった昔の人間はもはや存在しない。わたしが話しかけ

ても、その昔の人間がわたしの話を聞くことはないだろう（I・9、二四八頁）。

この文章は大ざっぱにいえば、黄揚の数珠の匂いが、宗教から離れてからのマリーIIテレーズを少女時代の信仰の世界に連れもどし、その信仰の世界にひたさせたことを語っている。そして「魂の祖国がこの世の平野のむこうにある大きな庭園のように輝いているのだ」と書かれているが、この記述は、黄揚の数珠の匂いを嗅ぐことでよみがえった神の国へのあこがれ・郷愁を示唆しており、少女時代の信仰が揺るぎない、確固とした世界を形成していたことをうかがわせる。実際、黄揚の数珠の匂いを嗅ぐだけで「消え去ったひとつの世界」が再生する以上、その世界はもはや漠然とした、曖昧なものではありえない。したがって、マリーIIテレーズの召命がほんものではないとしても、少女時代の彼女の信仰の欺瞞性をあげつらうことはできない。マリーIIテレーズのかつての信仰はそれなりに真摯なものであったとみるべきだろう。このことは、過去を回想する語り手マリーIIテレーズの現在の宗教的立場が、「わたしがそうであった昔の人間はもはや存在しない」と言われているように、過去の信仰の残滓すらない、完全に無宗教の状態にあるという事実によっていっそう際立っているように思われる。少女時代のマリーIIテレーズは、批判の余地はあるとはいえ、修道生活へのあこがれをいなくほどに熱烈な信仰をもっていたと考えるべきではないだろうか。マリーIIテレーズの修道生活へのあこがれは、世俗的な感情を浮き彫りにするけれども、同時に、それなりに真摯で熱烈な信仰を証すものとしてあるのである。

さて、マリーIIテレーズの、修道女になりたいという願いは、母親のプラス夫人によって放棄させられることになる。プラス夫人は学校に行つてマリーIIアルフォンシーヌ修道院長と面談し、娘の願いを完全に絶つのだ。夢がやぶれたマリーIIテレーズは、プラス夫人が修道院長に会った日の晩のことを、「それから、わたしに家庭生活を憎ませるに至った、あの果てしない夕べのひとつがはじまるのだった」（I・6、二三五・二三六頁）と振り返っているように、倦怠感しかいだかせない家なるものを憎むに至る。そして「もしわたしが自由なら、（…）もしわたしが自由なら！」（二三六頁）と考えているごとく、自分を閉じこめ、拘束する、牢獄のような家から逃亡したいと切実に望む。この自由II脱出への切望は、マリーIIテレーズを新たな世界へといざなう。第一部第七章で描かれているように、短い眠りからさめたマリーIIテレーズは窓の外に見える夜の光景に酔いしれ、夜の差し出す未知なる世界のなかで解放感を

味わう。

わたしは何か新しいものの前に向かっていった。これまでに目にした世界はその力、その現実性をうしなっていた。その世界のかわりに、今や夜が君臨していた。これまで夜をながめ、夜を愛することは、わたしには断じて許されていなかった。(…)わたしは自由だった。あるいは少なくとも、恐れや心配ごとや今日の昼間にわたしをつなぐものすべてを忘れた。

この瞬間の興奮が、自分でも驚いたような奇妙な動作をわたしに思いつかせた。わたしは寝間着を脱ぎ、自分のからだをながめた。それは宗教の禁じる不純な行為だったが、それ以後二度と覚えたことのないようなよろこびをもたらし、生まれてはじめて、掟を犯す人に固有のあの陶酔を味わった。(…)今まで一度も目にするのなかったこの肉体の白さを見てわたしは感嘆した。そこに手を置いて心地よいさわやかさを肌で感じた。そしてどうしてそれが悪なのか、自問するのだった(二三八頁)。

マリー＝テレーズは夜がもたらした解放感のなかで、自分のからだをながめ、自分のからだに手をふれている。そうすることで「よろこび」(plaisir)ないし「陶酔」(ivresse)を感じている。この「よろこび」ないし「陶酔」はまぎれもなく肉体的なものである。それゆえ、この引用文はマリー＝テレーズにおける官能のめざめを物語っている。このことは、自分の行いが「宗教の禁じる不純な行為」であり、「掟を犯す」ことであり、要するに「悪」であることを、マリー＝テレーズが承知していることから明らかである。修道生活の望みを絶たれたマリー＝テレーズは自由＝脱出への願いを宗教の世界ではなく、官能の世界に身を投じることによって満たそうとするのである。ここで大事なことは、マリー＝テレーズが信仰の世界から抜け出ることと官能の世界にはいつているという点である。言いかえれば、肉体的な高揚が宗教的な高揚にとつてかわっている。つまり、『幻を追う人』において、肉体的な欲望は宗教と無関係に示されているのではなく、宗教とのかかわりのもとに、すなわち、信仰と対峙あるいは対立するかたちで問題にされているのである。

このことに関連して、マニユエルがマリー＝テレーズの前に欲望の人間としてはじめて出現するのが、修道生活への願いがかなわぬ

ものとなった時点であるという事実は注目すべきであろう。プラス夫人が修道院長に会いに行った日の夕食まえ、マニユエルはマリーIIテレーズを夜の散歩に連れ出すため、十一時にひとりで食堂に来るよう誘う。マリーIIテレーズは夕食後、この誘いを、自分の「自由への願いに答える」ものであるかのごとく思いかえしている（I・6、二三七頁）。マニユエルはマリーIIテレーズの自由II脱出への願いに呼応するかのように登場し、欲望を開示する。マニユエルの欲望もまた、マリーIIテレーズの信仰と対峙もしくは対立するかたちで置かれている。

『幻を追う人』における、このような信仰と欲望との対峙・対立は、作品の構成の問題としてだけでなく、作者グリーンの内心の軌跡を示すものとしても重要であろう。ここで作品の自伝性について少しふれておきたい。まず指摘したいことは、マリーIIテレーズにおける修道生活のあこがれが一時期のグリーンのものでもあったという点である。グリーンは一九一六年四月にカトリックに改宗した。以後グリーンは、靈的指導者のクレテ神父の導きもあって、修道士になることを夢見ながら熱烈な信仰のなかで生きた。だが父親の意向や第一次世界大戦勃発のために修道生活の計画は延期された。そして一九一九年の四月、グリーンは地上への愛着が原因で修道士になることを断念する。このうちグリーンは深刻な肉体的苦悩を知る。マリーIIテレーズと同じように、修道生活へのあこがれを捨て去ることで、欲望の世界に入り込んでいく。もともと、グリーンの場合、信仰の世界から欲望の世界に単純に移行するわけではない。一九一六年四月から一九一九年四月までの宗教的高揚の時代においても、肉体的高揚に悩まされることはあったし、修道生活の計画を放棄したあとも、徐々に宗教から遠去かったとはいえ、全面的に信仰をうしなったわけではない。けれども一九一九年を境にして、グリーンにおいて欲望が優位を占めるようになることはたしかであろう。したがって、作品における信仰の世界から欲望の世界への移行は、過去のグリーンの内心の歩みを反映している。

とはいえ、作品における信仰と欲望の対峙・対立は、同時に執筆時点でのグリーンの内面の状態をも暗示しているのではないだろうか。マリーIIテレーズをとおして、修道生活へのあこがれが表現されるのは、作品執筆時点でのグリーンのうちには、はげしい信仰を生きた一時期への愛惜の念と、カトリックの信仰への憧憬があるからにはかならない。マリーIIテレーズは、「カトリックの大いなる郷愁」と「失われた祖国を惜しむ気持ち」について語っていた。これらは、小説作成時のグリーンが共有しうる感情でもあろう。また作

中、信仰の世界のあとに提示される欲望の世界は当然、執筆時点のグリーンの内心を映し出しているであろう。それゆえ、マリー＝ルイーゼの信仰と官能のめざめ、およびそれにつづいて開示されるマニユエルの欲望は、グリーン過去のにおける内心の軌跡だけではない、現在のそれをもきざみこんでいるとみなすことができる。

二 プラス夫人のサディズム的態度と不幸への愛

『幻を追う人』において、欲望の揺れ動きはマリールテレーズやマニユエルだけでなく、プラス夫人の内心からも認められるのではないだろうか。プラス夫人のうちには抑圧された欲望がひそんでいて、これが作品を欲望の世界にするひとつの要因となっているように思われる。そこで次に、プラス夫人の在り方を検討することにした。

プラス夫人は不幸な結婚をした。独身時代、彼女にはエマニユエルという婚約者がいた。だが妹のリーズがこのエマニユエルをうばい、結婚してしまったため、彼女は愛してもいないプラス大佐と結婚した。そんなわけで大佐とのあいだにできた娘マリールテレーズはプラス夫人にとって自らの不幸の証しでしかなく、母親としての愛の対象にはならない。「わたしは母の目には、口惜しまぎれに自分の意志に反して結婚した男の娘に映りつづけるのだった」(I・5、二三二頁)とマリールテレーズは書いている。かくしてプラス夫人はあたかも自己の不幸にたいして復讐するかのようになり、マリールテレーズを苦しめることに存在理由を見いだす。マリールテレーズは自分にたいする母親の態度を、次のように回顧している。

時どき、母はわたしを罰するという口実のもとに、遺恨でわたしを責めたてるのだった。母は、宗教が中和するにはいたらないこの毒の全体から徐々に解放されるのだった。実際、母が呼吸するためには、わたしが少し苦しむ必要があったのだ。そのとき母の魂のなかでいかなる不正な均衡が回復されていたかは知らない。しかし母はわたしの魂にもたらす心の動揺を楽しんでいたし、一言で言えば、それによって生きていた(I・5、二三二頁)。

ここでは、「母が呼吸するためには、わたしが少し苦しむ必要があったのだ」というところが特に注目される。プラス夫人は、愛し

でもない男と結婚したこと、自分が不幸であることの怨みを、マリー・テレーズを苦しめることで晴らそうとする。この一節からは、娘に苦しみを与えることで生きるよろこびを味わい、かろうじて内心の「均衡」をたもととするプラス夫人の在り方が浮かび上がってくる。マリー・テレーズにたいするプラス夫人の態度はサディズム的なものであるといえよう。

マリー・テレーズが修道女になりたく思っていることを知ったときの、プラス夫人の対応もこのような文脈のなかで理解することができる。プラス夫人は不幸意識をもつがゆえに、娘の幸福を望まない。そのため、娘の願いを踏みにじる機会をじつとつかう。マリー・テレーズが運悪く朝寝坊をした日にその機会がやってくる。プラス夫人は朝、「召命に対する嘲り、ほとんど侮辱」とうけとれる「皮肉な薄笑い」(I・5、二二九頁)をうかべながら娘に接し、午後になると娘の学校に行つて、修道生活の計画を流産させてしまう。そして学校から帰った夕方、娘が修道女になるに値しないことを主張するために、娘の過去のあやまちを一つひとつ取りあげて娘を責めたてる。そのときのプラス夫人は、次のように描写されている。

血が母の顔を赤く染め、母に若さをとりもどさせていた。動いている澄んだ目は、ただ単なる怒りだとばかり思っていた興奮の影響をうけて、たえず微妙に色合いを変えていた。時おり、舌先が乾いた唇を濡らし、鼻孔がびくびくと動いた。酔ったような表情が顔をゆがめていた。わたしの目の前にいるのは、怒りが生の泉そのものを蘇らせている一人の女だった(I・5、二三三頁)。

プラス夫人は怒りに身をゆだねている。その怒りはプラス夫人の顔を赤く染め、目の色を変えさせ、鼻孔をびくびくと動かしている。怒りは、「生の泉そのものを蘇らせてい」と書かれているように、プラス夫人の生の活力となって、まさに夫人を生かしている。このことは、プラス夫人が怒りのなかで「若さ」をとりもどしていることから明瞭である。プラス夫人の怒りは、ただ単なる怒りでなく、一つの情熱のごときものと化しており、抑圧された欲望のはけ口となつていのではないだろうか。プラス夫人はマリー・テレーズの修道生活の夢を打ちくたけ、過去の罪状をあげたことでマリー・テレーズを苦しめる。プラス夫人は娘に苦しみを与えることを官能的に楽しんでいるかのようだ。夫人が「酔ったような表情」を顔にうかべているのはそのためであろう。プラス夫人は娘

を苦しめることの官能的なよろこびを覚えながら、自らの不幸を癒やそうとしているように思われる。このように、修道生活を望んだマリー・テレーズにたいする反応をとおして、プラス夫人のサディズム的態度が見てとれる。

次に、プラス夫人のマニユエルにたいする態度に目を向けることにしよう。プラス夫人は夫に先立たれてから六週間後、すでに孤児になっていた甥のマニユエルを、男手が必要だという理由で家にひきとる。だがそれは口実にすぎない。マリー・テレーズはマニユエルが同居するようになったことにふれて、「母はおそらく数年前から彼（マニユエル）を付けねらっていたのだろう」（I・2、二一五頁）と言い、「若い男（マニユエル）が我が家の敷居をまたぐのを見たとき、母の胸は高鳴っていたとわたしは確信する。二十日鼠を付けねらう猫のイメージがここではふさわしいだろう」（I・2、二一〇・二一一頁）と述べている。いったいなぜ、プラス夫人はマニユエルを付けねらい、家にやってきたマニユエルを見て胸を高鳴らせるのであろうか。それはやはり、マニユエルがかつて自分の愛した男エマニユエルの息子であるからであろう。けれども、プラス夫人はマニユエルを愛するために家にひきとるのではない。なるほどマニユエルが闘病生活にはいつてから、プラス夫人はマニユエルのそばに献身的に寄り添う。しかしマニユエルを家にひきとる当初の目的は、愛する男と結婚することができなかつた自らの不幸の報復をすることにあるのではないだろうか。プラス夫人が「猫」に、マニユエルがその「猫」に付けねらわれる「二十日鼠」になぞらえられているところからうかがえるように、マニユエルはプラス夫人にとって、苦しみを与えるための格好の獲物にはかならないのではないだろうか。マニユエルを家にむかえたときのプラス夫人の胸の高鳴りは、愛の情熱ではなく、サディズム的欲求の胎動を示すように思われる。

そんなわけで、プラス夫人はマニユエルを優遇しない。マニユエルに割りあてられた部屋は、床の薄板がはがれ、自転車のような「大きな品物の塊」が置かれた物置同然の部屋である（I・2、二〇九頁）。プラス夫人はマニユエルを傷つけるために、マニユエルの容姿の醜さをことさらに話題にする。第一部第八章でマニユエルは、昼すぎにプラス夫人が勤め先のエルネスト氏の店にやってきて、「ぼくが男前でない」と言い、それから「ここ一年でぼくが醜くなった」と教えたことを、「苦惱」のまなざしを投げながらマリー・テレーズに報告している（二三九・二四〇頁）。また、第一部第三章には、次のような記述が見いだされる。

言葉の上の礼儀正しさのようなものだけが、天性の残忍さを和らげていた。母は逆上しなかった。この上もなく耐えがたいことを言うために控え目な言葉を用いたし、時として、甥にご親切な忠告をするとみせかけて、甥を涙にかきくれさせることさえあった。母はあわれな青年の醜さにかんするありとあらゆる種類の考察をとめどなくおこなった。巧妙な回り道をしてたえず彼をそこに連れもどすのだった。へだけどお前のお父さんは美男だったと思うよと母は言うのだった、へわたしたちが子どもたちに古い衣服をのこしてやるのと同じくらい簡単に、容貌上の美点を伝えることができないのは残念なことだよ。

(…)

へ可哀想に、わたしたちはいつたいどうしてこの世に生まれてきたのだろう？ (二一九・二二〇頁)。

プラス夫人は、マニユエルの醜さを、父親の美しさと対比しつつあげつらうことで、マニユエルを苦しめようとしている。「可哀想に、わたしたちはいつたいどうしてこの世に生まれてきたのだろう？」というさいこの問いかけからは、言葉によって徹底的にマニユエルをいためつけ、虐待しようとするプラス夫人の姿勢が読みとれる。この姿勢は、はじめに指摘されているように「天性の残忍さ」にもとづいており、サディスム的な欲求をうかがわせる。同様に、「時として、甥にご親切な忠告をするとみせかけて、甥を涙にかきくれさせることさえあった」という証言からも、プラス夫人のサディスム的態度が看取される。プラス夫人にとってマニユエルが愛情をそそぐ対象ではなく、サディスム的欲求をみたすための道具であることが、この件を読むことによつて了解される。

さらにプラス夫人は、病いの悪化のためにマニユエルがエルネスト氏の店での勤めをやめざるをえなくなったときに、マニユエルにたいして冷酷な態度をとっている。第二部第四章、プラス夫人はマニユエルから辞職の話が聞かされて、「お前は、わたしが金持ちだとも思っているのかい」(二八六頁)と言う。マニユエルは、「ぼくは働きます、マダム・プラス」(二八六頁)と答える。これにたいするプラス夫人の反応を、マニユエルはこう振り返っている。

——それで坊や、お前は何をするつもりなのだい？ 森に行つて栗をひろつて、市で売るのがかい？ ねえ、自分のからだをよく

見ることだよ。お前のお父さん、ああ、お前のお父さんはすばらしい体格をなさっていたよ、いいかい、それも徹底的にだよ。精銳の兵隊さんのような肩、胸は……(…)

このあと、ぼくのよく知っている描写、伯母が結婚できなかった男の描写がつづいた。贅嘆に恨みが混じっていた。父親へのうらみをはらすために、伯母は息子の顔に、息子が受け継がなかったすべての美点を投げつけるのだった。力や美しさや上機嫌や魅力(二八六・二八七頁)。

プラス夫人はマニユエルの父親の長所を枚挙し、称賛することで、マニユエルの欠陥をあばきたてようとしている。そうすることで、ここでもまた、マニユエルを苦しめようとしている。プラス夫人がマニユエルをさいなもうとしていることは、このあと、「お前の面倒をみてやるよ」(二八七頁)と言っているように、マニユエルを働かせるつもりなどないにもかかわらず、仕事をやめたマニユエルを非難しているところからも明白である。マニユエルの世話をする気なら、彼の父親の美点を述べたてるにはおよばないし、職を辞したことをとがめる必要もない。あたたかくマニユエルに接するか、あるいはだまって新たな事態をうけとめればよいのである。ところがプラス夫人はそうはしないで、マニユエルを責めさいなむ。これはサディズム的態度にほかならない。また、この引用文で、プラス夫人のふるまいが「父親へのうらみをはらすため」であると認識されていることは着目すべきであろう。プラス夫人がマニユエルの父親と結婚できなかったせいで不幸意識をいだいており、自らの不幸の報復をするためにマニユエルをしいたげていることがわかる。マニユエルへのサディズム的態度もまた、かつて愛した男への怨念がこもっているがゆえに、マリー＝テレーズへのサディズム的態度と同じく、抑圧された欲望によってみちびかれていてと解することができる。

ところで、プラス夫人のサディズム的態度からは、不幸を愛する夫人の在り方が浮かびあがってくる。プラス夫人の在り方は一言でいえば、不幸への愛という言葉によって特徴づけられるのではないだろうか⁽²⁾。夫人のサディズム的態度も、結局はこの不幸への愛の中に包含されるように思われる。そういうわけで、不幸への愛という観点からプラス夫人の在り方を検討することにした。

プラス夫人の不幸への愛はまず、「誰も母ほどに寡婦^{やじめ}になるすべを知らなかった」(I・2、二二〇頁)という表現からうかがうこ

とができる。この表現は、夫を亡くしたプラス夫人が黒い服を身にまとい、この上もなく見事に喪に服したという事実を踏まえており、未亡人になるという不幸を嬉々としてうけいれているありさまを覗かせている。それから、幸福、よろこびへの憎しみあるいは敵対も、不幸への愛とのかかわりで把握することができる。マニユエルはプラス夫人について、「よろこびの敵であるこの女性」(Ⅱ・4、二八六頁)と言っているし、マリー・テレーズは、「何であれよろこびというものは、たしかに母には怪しげに見えるのだった」(Ⅰ・1、二〇六頁)と書いている。よろこびを敵視し、もしくは胡散くさく思う態度は、不幸に拘泥するあり方と裏腹な関係にある。また、プラス夫人が娘の修道生活への願いを打ち砕くのは、サディズム的欲求とともに、幸福それじたいへの憎しみ、つまり不幸への愛があるからだと思われる。

マニユエルが闘病生活にはいつてからの、プラス夫人の献身的看病をとおしても、不幸への愛を観察することができる。プラス夫人の看病を瞥見することしよう。マニユエルはエルネスト氏の店をやめる前、すなわち、マリー・テレーズを夜の散歩に連れ出した日の翌日から、熱を出して二週間ほど床についたことがあった。すでにこの時点から、プラス夫人はベッドに身を横たえるマニユエルに寄り添っている。看病のため不眠の夜をあかしたプラス夫人のことを、マリー・テレーズは次のように回想している。

朝になると、母は幾晩も徹夜したために、自分のベッドで休息をとるのだったが、**疲労と不安**のために顔はやつれていた。目のまわりには黒ずんだ輪ができていた。母は食事中にうとうとすることがあった。しかしながら、時おり、いまだかつて一度も認めなかったことがないような、**疲れたと同時に楽しげな表情**が見られた。母は一つの夢の餌食になっているように思われ、その夢の何がしかがまなざしの中に透けてみえた。洞察力があるわけではなかったけれども、**わたしは、母が不安のさなかにあってさえ幸福である**ことを見抜くのがあった。しばしば母は、己れの天職を見いだした魂を思わせた。そのため、母は**若々しい様子**をとりもどしていたが、その様子は髪が灰色になっただけになおさら奇妙だった(Ⅰ・10、二五一頁)。

ここでは、プラス夫人の変貌ぶりが語られている。「**疲労と不安**」のためにやつれた顔をしているにもかかわらず、「**楽しげな表情**」

が浮かんでいること、そして、「わたしは、母が（…）幸福であることを見抜くのだった」と書かれているように、幸せそうにしていることが注目される。これはなにゆえであろうか。それは、看病をつうじて他者の苦しみに触れることができるからである。もっとも、プラス夫人がマニユエルの病いの治癒を願っていることはたしかであろう。しかし夜を徹しての看病という辛くて困難な仕事をささえているのは、不幸への愛ではないだろうか。不幸を愛するからこそ、看病が「天職」となりうるのだし、看病をとおして「夢」を追うこともできるように思われるのである。ここでの「夢」とは、他人の苦しみと不幸に接しながら生きたいという願いにほかならない。また、この文章で、プラス夫人が「若々しい様子」をしていたと指摘されていることも注意をひく。すでに見たように、プラス夫人は怒りの中でも若返っていた。それゆえ、怒りは一つの情熱とみなされた。同じように、看病は、もしくは不幸への愛は、プラス夫人において情熱と化しているのではないだろうか。事実、マリー＝テレーズはプラス夫人の献身的な看病のうちに、「まったく人間的な情熱のめざめ」（I・10、二五二頁）を見てとっている。プラス夫人の献身的な行為はキリスト教的な慈愛とは無縁のものである。それどころか、プラス夫人はマニユエルの苦しみを目のあたりにして、彼の不幸を官能的に楽しんでるのである。したがって、プラス夫人の看病から、あるいは不幸への愛から、抑圧された欲望の存在を読みとるべきであるように思われる。

では、マニユエルじしんはプラス夫人の看病をどのように考えているのであろうか。マニユエルの記述を見てみることにしよう。マニユエルは第二部第二章で、夜の散歩のち病いの床についてプラス夫人の看病をうけたことを思い出しながら、こう書いている。

伯母の家では、病人が王様だった。病気であるという事実によって、伯母の目には普通の人間よりもすぐれた人に見えるようになった。伯母は病人を、ありもしない美点の後光で飾りたてるのだった。もしぼくが小説家なら、この奇妙な献身、この攻撃的な慈愛が、どんな謎めいた支配欲に通じていたかを示すことだろう（二六九頁）。

この一節では、「伯母の家では、病人が王様だった」ことがまず指摘されている。「病人」が「王様」になるのは、言うまでもなく、病人が苦しみや不幸に接する機会をプラス夫人に与えるからである。次に、「伯母は病人を、ありもしない美点の後光で飾りたてるの

だった」という言い方が目につく。不幸への愛が高じて、病人がプラス夫人の内心ではほとんど愛の対象のごとき存在に変貌することが、この言い方からうかがえるのではないだろうか。「後光で飾り立てる」(nimber)という動詞は「後光」を意味する名詞 nimber から派生した語であるけれども、病人を「後光」で輝かしめるのは、プラス夫人の内なる情熱ないし欲望だと考えられる。そしてさいごに語られているように、プラス夫人の献身的看病が「支配欲」(Besoin de domination)の所産であることは看過できない。この「支配欲」は所有欲と言いかえることもできる。愛情生活の中で満たされたことのないプラス夫人にとって、看病は他者を支配し、あるいは所有するためのこころみとしてある。ところで、肉体的な欲望とは、欲望の対象を所有したいという欲求にほかならない。よって、ここでの「支配欲」は、満たされない欲望、抑圧された欲望の屈折したあらわれとみなされる。

マニユエルの病いが悪化していくにつれて、プラス夫人は望みどおりマニユエルを支配するようになる。第三部では、マリー・テレーズによって、死を間際にしたマニユエルのさいごの日々が語られているが、プラス夫人は看病によってマニユエルを独占している。プラス夫人は午後、「自分の横に甥をすわらせ、二人は「白い壁を眺めながら物思いにふける」(三八三頁)。そんな二人の生活ぶりを、マリー・テレーズは、「彼らのあいだでは、沈黙とまなざしからなる親密さが強まりつつあった。この二人の人間の口から一言も発せられることなく、数時間が流れることが往々にしてあった」(三八三頁)と振り返っている。こうした二人の関係はその「親密さ」のためにマリー・テレーズを寄せつけないほどのものであり、ほとんど恋人同士の関係を思わせる。この描写からは、プラス夫人がマニユエルの介抱をするという口実のもとに、病身のマニユエルをすっかり籠絡しているさまがうかがえる。こののち、プラス夫人は娘を寄宿生にして、マニユエルの看護に没頭する。マリー・テレーズがクリスマスMASの休暇でもどつてきたとき、彼女は家の中を支配する「深い沈黙」を感じとり、「異邦人」になったような感慨をいだく(三八四頁)。マリー・テレーズは帰宅したときの母親とマニユエルの反応について、「一瞬のうちに、わたしは二人の顔に、人から邪魔された人間の当惑した驚きを読みとるのだった」(三八四頁)と書きとめている⁽³⁾。二人のこうした反応は、マリー・テレーズの先の感慨とともに、彼らの関係の、ますます深まった親密さを明示している。この時点でのプラス夫人のマニユエルへの献身は、彼にたいする大きな愛情に根ざしているのではないだろうか⁽⁴⁾。プラス

夫人はマニユエルを世話し独占することで、ひそかな愛の欲望を満たしているように思われる。

しかしながら、プラス夫人がマニユエルを愛するようになるとしても、彼女はマニユエルの人格ゆえに愛するのではなく、彼が病気であり、不幸であるがゆえに愛するのではないだろうか。この点にかんして、夫にたいするプラス夫人の感情についての、マニユエルの次の指摘は示唆に富む。

ともかくぼくに言えることは、プラス大佐があれほど健康でなかったならば、伯母はもっと夫を愛したであろうということであり、夫の急死を許してはいなかったということだ。なぜならその急死は夫の看護をし、死の間際までやさしく付き添うという幸福、よく考えてみると理にかなった幸福を伯母からうばってしまったからだ（Ⅱ・2、二六九頁）。

マニユエルは、プラス夫人が夫を愛さなかったのは、夫が健康であったからであり、夫がもっと病弱であれば、もっと愛しただろうと考えている。この考察は、プラス夫人のマニユエルにたいする感情を考える際にも有効である。マニユエルへの愛の根底にあるのは、病い、すなわち不幸への愛である。そしてプラス夫人における不幸への愛とは、他人の苦しみを見たいという欲求であり、この欲求はすでに述べたように、満たされない肉体的欲望、抑圧された欲望と大きく関係している。

プラス夫人のサディズム的態度、それから不幸への愛を^愛検討してきた。その過程で、プラス夫人の内部に、抑圧された欲望が潜在することを指摘した。『幻を追う人』において、欲望の苦しみは主としてマニユエルの内面をとおして表出されているが、プラス夫人の在り方をつうじてもかいま見られる。プラス夫人の在り方は作品を欲望の世界とするのに寄与している。この点に、作品の厚みないし奥行きが認められる。

三 マニユエルの欲望の苦悩

(一) 純粹志向

今度はいよいよマニユエルの欲望の苦しみを検討することにしよう。まずはじめに、マニユエルの苦悩の源になると思われる純粹志向についてふれておきたい。物語がはじまった現在の時点でマニユエルは信仰をもたない。だがマニユエルは、イエス・キリストについて、「幼年時代からぼくは彼を愛していた」(Ⅱ・5、二九〇頁)といい、自分の中に残っている「カトリックの遺産」(CQ、三五二頁)について語っている。ここから、マニユエルが幼年時代にカトリックの信仰をもっていたことがうかがえる。マニユエルは欲望の人間になる前に、宗教的人間であったのである。そして宗教の影は今もなおマニユエルにつきまとっている。マニユエルは牛乳屋から「司祭さん」という渾名をつけられ、郵便配達人からは「お嬢さん」と呼ばれている(Ⅱ・2、二七三頁)。「お嬢さん」という呼び名は男性性の欠如を攻撃したものであるが、同時に、その欠如をもたらず信仰を皮肉っているであろう。マニユエルは現在でも宗教の中に生きていると、人びとから誤解されている。それほどまでに熱烈な信仰を有した時代が過去にはあったのである。

ところで、人が信仰によって生きるとき、その信仰との関連で、純粹で汚れない生活を送りたいという願いが生じる。マニユエルも例外ではない。夜の散歩の一件が、マリー・テレーズの口からプラス夫人に伝えられ、料理女のレオンティーナにも知られていることがわかったとき、マニユエルは次のような感慨をいだいている。

このような事態がぼくに起こったなんて正しくない(…)。自分を教育し、より良くなることしか考えなかったぼくに。純潔のまままでいたいと望み、マリー・テレーズに目を向けるまでは、不純さというものを名前ではしか知らなかったぼくに(Ⅱ・1、二六

五頁)。

ここでは、マニユエルがマリー・テレーズと出会うまでは肉体的欲望にかき乱されることはなかったという点とともに、「純潔のままでいたいと望み」という言い方によって、マニユエルが過去において自己の純粹さを追求する人間であったことが明らかにされている。マニユエルの純粹志向は、宗教から遠去かった時点においても残存することになる。森の散歩の挿話を語った第二部第五章には、「ぼくがもはや信じていない宗教がのこしていったため、ぼくがぼくの欲望を途中で押しとどめるのだった」(三〇六頁)という表現が見いだされる。ここで言われている「ためらい」はマニユエルの純粹志向を暗示している。マニユエルは宗教との関連でつちかわれた純粹志向を今もなおかかえているがゆえに、欲望に全面的に身をゆだねることができない人間である。また、「本能それ自体と同じくらい力強い本能の気まぐれによって、ぼくは自分をもっとも欲するものから逃げてしまう傾向があった」(Ⅱ・五、三〇五頁)という記述もまた、マニユエルにおける純粹志向、あるいはその残滓を察知させる。なぜなら欲望の対象を忌避するという在り方をもたらずものは、マニユエルの中に残っている純粹志向であると考えられるからだ。マニユエルの肉体的苦悩は、こうした純粹志向を視野に入れることによってはじめて理解されるのである。

(2) 夜の散歩

以上のことを前提にしたうえで、マニユエルの肉体的苦悩の過程をたどってみることにしたい。マニユエルはプラス夫人のもとに身を寄せてからまもなくして、マリー・テレーズへの愛の欲望、というより肉体的欲望にとらえられる。というものの、マリー・テレーズは実際の年齢以上に成熟して見え、おまけに、母親が「前の年の、あまりにも短く、あまりにも窮屈になりすぎた服を着ることを彼女に強い」ること、「彼女に煽情的な服の着せ方をし」ているからである(Ⅱ・一、二六二頁)。マニユエルは、プラス夫人が娘を「憤慨と欲望の対象」に、「何かこっけいで、それでいて恐ろしいもの」にしていたと言ひ、マリー・テレーズの「美しさ」が「みだらな性格をもっていた」と述懐している(二六二頁)。このようにマリー・テレーズの肉体的性を意識したマニユエルは、欲望にかられて従妹に接近し、従妹を夜の散歩に連れ出すことになる。

すでに述べたように、マリーIIテレーズの修道生活の夢がやぶれた日の夕食まえ、マニユエルはまず、夜の十一時に食堂で二人だけで会おうと従妹に誘いかける。マリーIIテレーズはこの直前のマニユエルの様子を、次のように振り返っている。

・ 瞼を閉じたその顔は、わたしがこれまで一度も彼において認めたことがないような様相を呈していた。彼が死ぬのではないかと
・ いう思いが束の間ではあるがわたしの脳裡をよぎった（I・6、二三五頁）。

マニユエルは別人のような顔をしている。それは、マニユエルが欲望に支配されているからではある。しかしマニユエルは目を閉じている。これはマリーIIテレーズを見まいとしているからであり、欲望に身をゆだねないようにするためではないだろうか。つまりマニユエルがマリーIIテレーズに誘いかけようとするとき、彼は欲望にあやつられながらも、その欲望とたたかっているのだ。この内心の葛藤、肉体的苦悩が病身のマニユエルを疲弊させ、死に近づけ、「彼が死ぬのではないかという思い」をマリーIIテレーズにいだかせるのだと考えられる。マニユエルの内心で葛藤が繰りひろげられていることは、第一部第六章のおわりから第七章のはじめのところで語られているように、九時半になって家族の者が食堂をはなれて寢室に行こうとしたとき、彼が「来るな」と書いた紙きれをマリーIIテレーズに手渡すことから明らかである（二三七頁）。マニユエルは食堂に一人で来るよう、マリーIIテレーズを誘いながら、この誘いをひっこめる。ジャック・アチはこの行為のうちに、「はじめられ、そして撤回される告白のテーマ」を看取している。しかしまずもって読みとるべきなのは、欲望への屈服と反撥であり、要するに欲望とのたたかいであるように思われる。

マニユエルはこのように誘いを取り消すにもかかわらず、十一時になると食堂におもむく。マニユエルをうごかすのは、もしかしてマリーIIテレーズがやってくるのではないかという期待の気持ちであり、やはり欲望であろう。一方、マリーIIテレーズは食堂で物音がするのを、真上にある自室でききつけ、夕食まえにマニユエルが口にした誘いの言葉を思い出す。それで彼女もまた、食堂においていく。だがマニユエルは蠟燭を手にもち、「さあ、お上がり（…）、照らしてあげるから」（I・8、二三九頁）と言って、やってきたマリーIIテレーズを部屋にもどらせようとする。マニユエルは相変わらず自己の欲望とたたかう。とはいえ、このあとマリーIIテ

レーズがマニユエルにさわることで、彼はますます欲望にさいなまれることになる。この件りを読むことにしよう。

(…)わたしは、手燭台を置かせるために、彼の腕に手をそつと押し当てた。彼は沈んだ様子でわたしのほうに目を向けながら身ぶるいをした。

—さわってはいけない、と彼は小声で言った。

わたしたちは向かいあっていた。(…)ふだんはとても穏やかな目がわたしを見ることを避けていた。彼は小さな笑い声を上げながら、いかにもわざとらしく響いた。

—ぼくがこう言うのは、湿った手をしているからなんだ。さわると気持ちが悪いだろう(Ⅰ・8、二三九頁)。

マニユエルはマリー＝テレーズから手で触れられて、「さわってはいけない」と言っている。その訳は、「湿った手をしている」からで、「さわると気持ちが悪い」からである。しかしこれは表向きの理由にすぎない。実際は、マニユエルは欲望とたたかっており、触れられることによって欲望をかきたてられたからではないだろうか。マニユエルはマリー＝テレーズの接触をうけて、「身ぶるい」をし、「わざとらしく響く笑い声をあげている。これらの反応はマリー＝テレーズの行為がマニユエルの欲望を刺戟し、増長させたことをほめかしているように思われる。マニユエルの「身ぶるい」は自己のうちで肥大した欲望にたいする恐怖を意味するであろう。マニユエルはついにマリー＝テレーズを散歩に誘う。この誘いは言うまでもなくマニユエルが欲望に屈したことを示している。

こうしてマニユエルとマリー＝テレーズは夜の散歩に出かけることになる。二人は目的地の屋敷跡と呼ばれるところに着く。マニユエルは岩の上にハンカチをひろげてマリー＝テレーズを坐らせたあと、だまりこみ、深い瞑想にふける。不安におそわれたマリー＝テレーズはマニユエルのほうに「手をのばす。マニユエルは、食堂で腕をさわられどきと同じように「身ぶるい」をする(Ⅰ・8、二四二頁)。ここでの「身ぶるい」は欲望をあおりたてられることへの恐れを意味する。このようなことがあって、マニユエルは、帰ろうと言うマリー＝テレーズを押しとどめ、彼女に打ち明け話をしようとする。

君に告白したいことがあるんだ（…）。昼間ずつとぼくが考えているのは…君のことなんだ。夜もなんだ。（…）

君はとても綺麗だ、わかるかい。そのせいなんだ。時おり、店の奥の部屋や自分の部屋でひとりしていると、ぼくは君のことを考える。すると君が目に見えるんだ。そう、君が目の前にいるんだ（I・8、二四三頁）。

マニユエルはマリーIIテレーズに愛の告白をこころみている。「昼間ずつとぼくが考えているのは…君のことなんだ。夜もなんだ」という言葉は、マリーIIテレーズがマニユエルの意識を支配する大きな存在であることを証拠だてている。けれどもマニユエルの告白は、愛の感情と同時に肉体的欲望をも浮かび上がらせている。「すると君が目に見えるんだ。そう、君が目の前にいるんだ」という言い方からは、マニユエルにマリーIIテレーズの幻を見させるほどの欲望の強さを看取することができる。さて、マニユエルはこう口をついでいる。

人びとは、ぼくが君といっしょにここにいることを知ったら、ぼくが悪いことを望んでいるのではないかと疑うことだろう。でもぼくは悪いことなんか望んでいない。そうだろうか？ どうして返事をしないんだい？ 悪いことが何であるのか、君は知っているかい？ もしぼくがこんなふうに、君の膝の上に手を置いたら、それは悪いことなんだろうか？（I・8、二四三頁）

マニユエルは「ぼくは悪いことなんか望んでいない」と言いながらも、マリーIIテレーズの「膝の上に手を置い」ている。この言動はマニユエルの内部の、矛盾した二つの動きを覗かせる。マリーIIテレーズの肉体を欲する気持ちと、この気持ちを制御しようとする心の動きとである。結局、マニユエルは内心の葛藤の果てに、マリーIIテレーズのからだにふれることで、欲望に負ける。これにたいするマリーIIテレーズの反応を見ておくことにしよう。

むき出しのからだへのこの接触は、わたしにはやけどのように思われた。わたしは瘻癩的な動きをした。だが手は膝からはなれなかつた。この瞬間の恐怖を何ものもわたしの記憶から消し去ることはないだろう。わたしは、従兄がわたしを殺すために人里離れたこの場所に連れてきたのだと思った。まだあまりにも無垢だったので、と恐ろしくない意図を想定することができなかつたのだ（I・8、二四三頁）。

マリーIIテレーズは、マニユエルからからだにさわられて「やけど」のような感覚を覚えている。マリーIIテレーズがこのような感覚をいだくのは、彼女の中にもまた、純粹志向がやどっているからではないだろうか。この純粹志向と表裏をなす肉体的なものへの恐れが作用しているからではないだろうか。というのも、純粹志向は肉なるものを不純なものとして排斥するがゆえに、肉なるものへの恐怖を生じさせるし、その恐怖が高じて、肉なるものへの敏感さをもたらすからだ。この敏感さが肉体的接触を「やけど」のように知覚させていると考えられるのである。また、この引用文でマリーIIテレーズが、「従兄がわたしを殺すために人里はなれたこの場所に連れてきたのだ」と思っている点が目につく。マリーIIテレーズにこのように思わせるのは、彼女の「無垢」さあるいは無知さであり、肉体的なものへの恐怖でもあろうが、マニユエルの欲望に殺意がかぎわけられることで、欲望が死と結びついていることが観察される。欲望と死との結びつきは、マニユエルが夕食前に、欲望にかられて、マリーIIテレーズを夜の十一時に食堂にくるように誘う場面でも、「彼が死ぬのではないかという思い」がマリーIIテレーズの脳裡をよぎることで見られた。この欲望と死との結びつきについては、のちにあらためて問題にすることにしたい。

マリーIIテレーズの膝の上に手をやってからのマニユエルのふるまいを見ることにしよう。マニユエルはマリーIIテレーズの脚に頬を押しあてる。そして「君の肌はなんて柔らかいんだろう！」と「幸せそうな口調」でつぶやき、幾度も従妹の名を口に（I・8、二四四頁）。マニユエルはますます欲望のとりことなる。しかしマリーIIテレーズが寒いから帰ろうと言うと、マニユエルは夢見心地からひき出され、態度を豹変させる。マリーIIテレーズが、「わたしは、（…）自分の足もとにうずくまっている男がマニユエルではなく、毎日見かけているマニユエルではなく、抗しがたい欲望とたたかっている人間なのだということを理解した」（二四四頁）と書

いているように、マニユエルはふたたび自己の欲望とたたかう。マニユエルはこのように欲望に支配されながらも、その欲望に完全なかたちで身をゆだねることができない人間である。このことが、自我の分裂をもたらすほどの深刻な肉体的苦悩の中にマニユエルをおとしされる。このあと、マニユエルは錯乱状態のなかでマリーIIテレーズの両脚を抱きしめ、いっそうはげしく頬を彼女のからだにすり寄せる。その結果、マリーIIテレーズは恐怖のあまり気をうしなってしまう。

マリーIIテレーズが失神したあと、マニユエルは正気にかえる。欲望の呪縛から解き放たれる。というより、彼のうちに良心がめざめる。マニユエルは、マリーIIテレーズが死んだのではないかと思つて、涙を流しながら大声で従妹の名を呼びつづける。マリーIIテレーズが意識をとりもどしたとき、マニユエルは彼女にこう言っている。

誓つて言うけれども、ぼくは悪いことをしようとはしなかった。君がうしろにたおれたとき、ぼくはもう君にさわりもしなかった。来るべきじゃなかったんだ、そうだろう。だから君に言つたんだ……君にさせないようにしたんだ……（……）

この次、（……）たとえ来るようにぼくが頼んだとしても、ぼくの言うことをきいてはいけないよ。意志に反して頼んだんだから……（I・8、二四五頁）。

マニユエルは欲望にかられた自らのおこないを深く悔いるとともに、マリーIIテレーズに、今後は自分の誘いにのらないよう忠告している。これらの言葉は、自責の念にとらえられたマニユエルの良心が言わしめたものとうけとることができる。マリーIIテレーズの気絶中、マニユエルが欲望に屈服することを決定的にはばんだのも、この良心だと考えられる。

夜の散歩の挿話を概観してきた。ここで分析の結果をまとめておこう。何よりもまず、この挿話は、マニユエルのうちに秘められてきた、マリーIIテレーズへの愛の欲望、というより肉体的欲望を露呈させている。しかしながら、マニユエルは前述のように、欲望に全面的に身をゆだねる人間ではない。マニユエルの中には、欲望をいなく自己と、欲望を制禦しようとする自己とがあつて、ここから内心の葛藤が生じる。夜の散歩の挿話は、マニユエルにおける欲望だけではなく、欲望とのたたかいをも浮き彫りにしている。この点

に関連して、作者グリーンは『日記』のなかで、この挿話を次のように解釈している。

マニユエルは夜、若い従妹を、強姦しようという密かな意図をいだいて野原に連れていく。と同時に、彼は自分の意図を実現し、たくないという願いをもいだいている。強姦は彼の夢である。だが現実には別に別のものを差し出す。実のところ、彼が望んでいるのは、誘惑に身をさらすことなのだ。それで機会が与えられるにもかかわらず、彼はマリー・テレーズを強姦しないのである。⁽¹⁰⁾

作者グリーンはマニユエルのうちに、「強姦しようという密かな意図」と「自分の意図を実現したくないという願い」とを認めて、彼の二重性を示唆している。この二重性は、欲望をいだく自己と、欲望とたたかう自己との共存というかたちで了解することができる。グリーンは、「実のところ、彼が望んでいるのは、誘惑に身をさらすことなのだ」と述べている。けれどもこの解釈には疑問がある。マニユエルがマリー・テレーズを散歩に誘うのは、不本意ながら欲望にしたがったからであり、マニユエルの中の欲望の人間が欲望とたたかう人間に勝ったからである。また、マニユエルがマリー・テレーズを「強姦」しないのは、彼が「誘惑に身をさらすこと」だけを望んでいるからではなくて、彼のなかで、欲望とたたかう人間が欲望の人間よりも優位に立ったからにはかならない。マニユエルは「強姦」することを望み、かつ望まないものであって、この二重性が一連のふるまいをもたらしていると理解される。それゆえ、夜の散歩の挿話をとおして、自己分裂にいたるほどの肉体的苦悩を読みとるべきであるように思われる。

(3) 夜の散歩ののちの、欲望の苦しみ

夜の散歩ののち、森の散歩に至るまでのマニユエルの肉体的苦悩を一瞥することにした。マニユエルは、マリー・テレーズが夜の散歩の一件をプラス夫人に打ち明けた日、欲望にとらえられる。すなわち娘から話を聞いたプラス夫人はマニユエルに真相をたずねる。マニユエルはマリー・テレーズと屋敷跡に行ったことを偽善的な態度で否認する。プラス夫人は、マリー・テレーズが嘘をついたと思

い込み、怒りの発作におそわれて娘をはげしく責めたてる。その間、マニユエルは良心の呵責を感じ、罪意識をいだきながらも、沈黙をまもりとおす。やがてプラス夫人はマニユエルにあやまらすため、マリー・テレーズを彼のほうに押しやる。そのときのことを、マニユエルは次のように顧みている。

マリー・テレーズが前進してくるのをみたとき、よろこびが、しかし恐怖にみちたよろこびが、ぼくの胸を高鳴らせた。ぼくはマントの下で両手を組み、こみ上げてくる興奮をおさえつけようとして目をふせた。ぼくの奇妙な、心地よい責め苦を長びかせるようにゆつくりとためらいがちに、彼女の脚は（というのもぼくには脚しか見えなかったからであるが）、おそろしいほどのむき出しの状態でぼくのほうに歩みよってきた。ぼくには、彼女の脚がぼくの坐っているところにたどりつくために、何里も横切っているように思われた。そのくせ、ぼくらを分けへだてているのはせいぜい三歩の距離だった。たとえどうあっても、ぼくは目をそらすことができなかっただろう。この長いひとときの静寂のなかで、マリー・テレーズの靴のきしむ音がきこえた。悪しき欲望を遠ざけるために、お祈りをするなどということは問題にならなかった。悪はあまりにも強い誘惑の力で、ぼくの前に現われていた（Ⅱ・Ⅰ、二六八頁）。

マニユエルはマリー・テレーズのむき出しの脚に魅せられ、眩惑され、もしくは呪縛されている。マリー・テレーズが自分のほうに歩みよるまでは、彼女に濡れ衣を着せたことで有罪感をいだき、良心の呵責にさいなまされていたのに、彼女の脚を目にすることによって、マニユエルは欲望に完全に支配される。とはいえ、ここでは、マニユエルが欲望の奴隷と化しながらも、そういう自分を批判的にながめる姿勢をも合わせもっているという点が注意をひく。換言すれば、マニユエルは自分の欲望を罪悪視している。このことは、マニユエルがマリー・テレーズへの欲望を「悪しき欲望」と規定し、従妹のむき出しの脚をとおして「悪」の存在を識別していることからわかる。マニユエルにとって、マリー・テレーズの脚の「むき出しの状態」はまさしく「おそろしいほどの」ものなのである。か

くして、従妹の脚を見ることでマニユエルがいく感情は一律背反的なものになる。「恐怖にみちたよろこび」(une joie épouvantée)とか「心地よい責め苦」(délieux supplice)とかいった言い方が示すように、マニユエルが感じるよろこびには苦しみがともなっている。夜の散歩の際と同様に、マニユエルは欲望をいだきつつも、その欲望に全面的に同意しないがゆえに、見ることはよろこびの体験となると同時に、苦しみの体験にもなる。

マニユエルはこのあと、病いの床につく。それでマリールテレーズのこととは忘れる。しかしマニユエルの病気は五、六日経つと小康状態をとりもどす。彼の勤める本屋の主であるエルネスト氏の催促もあつて、彼はほんのしばらくのあいだではあるけれども、働きに出る。こうしてマニユエルの生活はもと通りになり、夕方になるとマリールテレーズとも顔を合わせる。するとマニユエルはふたたびマリールテレーズへの思いに心をうばわれるようになる。マニユエルはこのころのことを思い出しながら、こう語っている。

もう彼女(マリールテレーズ)のことは考えるまいとしたばかりの決心はいつたのだらう。いつもの席に座り、本を手にもったまま、ぼくは、彼女が所在なげに、時間をも自分自身をも、また母親が「馬鹿大きな体」と呼んだものをももてあまして、ぼくの前を行ったり来たりするのを眺めていた。奇妙なことに、この呼び名はぼくの心をかき乱すのだった。プラス夫人がいら立っている折、その呼び名を娘にたいして用いると、ぼくは顔を赤らめるのだった。夫人がそれを使わないことをいつも望んでいながら、聞けば心が浮き立ち、それでいて漠然と憤慨するのだった。実際、この言葉を耳にすると、マリールテレーズが服を脱がされ、問題となつている体が突然見えてくるような気がした。その晩、壁に接してならべられた皮椅子の上に順ぐりに腰かけることによって、彼女が退屈さをまぎらしていたことをぼくは思い出す。そしてぼくは本当に心ならずも少女のこの謎めいた遊びを観察するのだった(…)。ぼくの目の前に来たとき、(…)少女は、ぼくが眺めていることに気づき、気詰まりな様子で脚を揺すぶりはじめた。そのときぼくは、二度と眺めまいと心に誓ったあの脚を見ながら、一種機械的なほほえみを浮かべるのだった。その瞬間にぼくが耐えしのんだ気持ちは言いあらわすことができない。ぼくはもう駄目だと思った(II・22、二七七頁)。

マニユエルはふたたびマリー・テレーズの脚に惹きつけられ、あるいは魅惑されている。ここから、マニユエルがまたしてもマリー・テレーズへの欲望にとらえられていることがたしかめられる。けれども、この文章においては、先の引用文とくらべて、苦しみのほうがよろこびにまさっているように思われる。「その瞬間にぼくが耐えしのんだ気持ちは言いあらわすことができない」という言い方が示唆するように、見ることははや苦しむことでしかない。「もう彼女のごとは考えるまいとしたぼくの決心」とか、「二度と眺めまいと心に誓ったあの脚」とか書かれているように、マニユエルの中では、欲望を否定し、欲望をおさえようとする心の動きが支配的なのであろう。欲望とたたかう決意が固いからこそ、欲望をいだくするには、その分苦しみがともなうことになるのである。また、この一節において、プラス夫人が「馬鹿大きな体」という言葉を発するのを耳にして、マニユエルがマリー・テレーズの、服を脱がされたからだを目にうかべていることが注目される。この事実はもちろん、マニユエルの、マリー・テレーズにたいする欲望の強さを証明している。だが同時に、へ幻を見る人（visionnaire）としての彼の資質をもかいま見せているのではないだろうか。「問題となっている体が突然見えてくる」と述べられているように、マニユエルはプラス夫人の言葉に触発されて、マリー・テレーズの大きなからだを、観念として認識するのではなく、想像力の中でひとつの幻（vision）として見るのである。マニユエルの想像力は欲望と相俟って、偶然をきっかけにことがらを具体的な、生々しい幻として定着させるほどに旺盛なのだということであろう。もっとも、欲望とたたかうマニユエルにとって、幻を見ることは至福の体験ではなく、苦渋にみちた体験であるにちがいない。いずれにせよ、この事実からは、マニユエルの visionnaire 的な資質が浮かび上がってくるし、さらには、『在り得たこと』の作成、言いかえれば、想像世界への脱出のための方途もまた、うかがうことができる。

マニユエルはエルネスト氏の店の勤めをやめて、闘病生活にはいる。そして一ヶ月ほどは平穩のうちにすごす。マニユエルはマリー・テレーズのうちに「少し頭の悪い少女」（Ⅱ・5、二八九頁）しか認めない。従妹はマニユエルにとって、「ミサで見かける恐ろしいげな顔をした老婆たちのような、凝り固まった信心家」（二八九頁）にすぎなくなる。マニユエルはマリー・テレーズに欲望を覚える

ことなく、さめた態度で彼女に接する。ところが、ある日のこと、プラス夫人がマニユエルに、マリー・テレーズが修道女になろうとしたことを皮肉まじりに教える。マニユエルは修道女を「社会的階級」の「最も低い位置」（二八九頁）に属する者として軽蔑しているのであるが、マリー・テレーズはそういう考えを彼の視線のうちに読みとって泣き出してしまふ。この件りは次のように語られている。

彼女（マリー・テレーズ）は不意に泣きじゃくりはじめた。涙、弱さの永遠の証拠である涙、ほくはその時、自分が流したすべての涙を恥じた。そして急に人間が変わったかのように、あそこ、屋敷跡で機会が与えられていたのに、人が悪と呼ぶところのものを犯さなかつたことを後悔するのだつた（Ⅱ・5、二八九頁）。

マニユエルは、マリー・テレーズが泣くのを見て、「人が悪と呼ぶところのものを犯さなかつたことを後悔するのだつた」と書かれているように、マリー・テレーズを強姦しなかつたことを悔やんでいる。マニユエルの心をうごかすものは、プラス夫人からも看取されたようなサディズム的な欲求であろう。マリー・テレーズの悲しみないし苦しみによってマニユエルは欲望をそそられ、彼女を犯すこととさらに彼女を苦しめ、肉体的な快楽を味わいたいと願っている。マニユエルの後悔はこのようにその時点での彼の欲望を跡づけている。とはいえ、マリー・テレーズを犯すことはあくまでも「悪」であり、もし実行されれば、この上もなくはげしい苦惱が生じるであろうことは当然のこととして予想される。

夜の散歩ののちの、マニユエルの欲望の揺れ動き、あるいは欲望の苦しみの過程をたどってきた。けれどもマニユエルの欲望がもつとも鮮明にあらわれるのは、第二部第五章の森の散歩の挿話においてである。そこで次にこの挿話を検討することにした。

（4）森の散歩

マニユエルは闘病生活をつづける中で、健康を回復し、外出できるようにさえなる。そんなある日の午後、プラス夫人が留守の折、

マリー＝テレーズの友だちのポーリーヌとエドメ・ド・ガイヤルデが家にやってくる。マニユエルは三人の少女たちの他愛ないおしゃべりを聞くうちに、「ありとあらゆる種類の悪しき欲望」（Ⅱ・5、二九三頁）にとらえられ、ラ・コンブの森へ遊びに行こうと三人を誘う。そして森に着いて、散歩したあと、目隠し鬼ごっこをしようとする。この提案は欲望にうながされてのものである。というのも、マニユエルが鬼となって目隠しをされたとき、彼は、「今やチャンスがやってきた」（Ⅱ・5、二九五頁）と思い、「或る決定的な行為に導かれている」（二九五頁）ように感じているからだ。「チャンス」とは欲望に身をゆだねるチャンスのことであり、「或る決定的な行為」とは欲望が顕現する行為にほかならない。

こうしてマニユエルは欲望にかられて、少女たちを追いかける。マニユエルが欲望をいなく相手は、もちろんマリー＝テレーズである。しかしマニユエルはポーリーヌを「綺麗」（二九三頁）だと思い、この少女にも心をひかれている。目隠しをされても足もとが見えるマニユエルは、まずポーリーヌに目をつけ、ポーリーヌをつかまえようとする。

しばらくのあいだ、盲人のように、つまずくふりをしながらさまよったあと、ぼくは急に右手のほうに突き進み、ほとんどポーリーヌの体を両腕で抱きしめそうになった。どうして彼女を逃してやったのだろうか？ ぼくはほとんど彼女の体にふれそうになっていたのだ（Ⅱ・5、二九六頁）。

マニユエルはポーリーヌをつかまえられるにもかかわらず、逃している。ポーリーヌはマニユエルにとって欲望の対象である。マニユエルは欲望に揺りうごかされながらも、欲望に身をゆだねることをためらう。彼は逃すことで欲望の対象を忌避する。

マニユエルは次にエドメを追いかける。エドメは「修道女のめがね」をかけた「ひどく醜い」（二九三頁）少女で、マニユエルはなんの魅力も感じていない。そこでマニユエルはためらうことなくエドメをつかまえる。マニユエルはエドメを「抱きしめ」、「欲望をそそらない、その不恰な、乾からびた小さな体を手でさわ」（二九六頁）。マニユエルがエドメのからだに接触するのは、エドメにたいする欲望がないからであり、したがって、欲望とのたたかいは生じないからである。おそらくマニユエルはマリー＝テレーズや

ポーリーヌに向かってやりたいことをエドメにやっているのであろう。だがマニユエルの行為は欲望の所産ではなく、純然たるたわむれの部類に属する。とはいえ、エドメはそうはうけとらない。エドメは「もが」き、「恐怖におそわれて泣きじゃくり出」す（二九六頁）。エドメはマニユエルのふるまいから、大人の男の欲望を嗅ぎわけるので。そこで一人で家に逃げ帰り、自分のうけた仕打ちを公言する。

マニユエルはエドメから離れたあと、いよいよマリー＝テレーズに接近することになる。

風がざわざわさせはじめた大きな木のうしろに、ぼくはマリー＝テレーズをみつめた。彼女は、ぼくが通りすぎるだろうと思つてじつとしていた。ぼくは脚を見て彼女だとわかつた。最初の考えは逃げ去ることだった。だが何かより強いものがぼくをひきとめた。ぼくは、欲望の苦しみが何でありうるのかをほとんど忘れていた。腹がしめつけられた。ぼくは一歩前に踏み出そうとしたが、できなかつた。そのとき、闇のようなものが自分の上におりてくるような気がした。しかし依然として、ぼくを支配している意識を呪うに足りるだけの正気さは残っていた。ぼくはこの少女のことが恐かつたし、自分じしんを嫌悪していた。まるでこれまでに学んだ良き教えのすべてが、食べ物や吐き出すように、ぼくの心から口にこみ上げてくるかのようにだった。ぼくは目隠しをはぎとり、へ逃げろ！と叫んだ（Ⅱ・5、二九六頁）。

この一節は、大ざっぱに言って、マニユエルがマリー＝テレーズへの欲望にかられつつも、欲望を制禦し、マリー＝テレーズを逃したことを語っている。少し細かい分析をこころみることにしたい。まず、「ぼくは脚を見て彼女だとわかつた」という文に着目しよう。短いスカートからはみ出た脚は、マリー＝テレーズの肉體性を象徴し、マニユエルの欲望をそそるものである。マニユエルはこれまでもマリー＝テレーズの脚に魅せられ、あるいは眩惑されることがあった。マリー＝テレーズの脚をみて「逃げ去る」ことを考えるのは、欲望にとらえられることにたいして本能的な恐怖を覚えたからである。しかしマニユエルはすでにマリー＝テレーズの脚に魅惑されてしまっている。「何かより強いものがぼくをひきとめた」という言い方は、マニユエルの内心を欲望が支配していることを示唆し

ている。「ぼくは、欲望の苦しみが何でありうるのかをほとんど忘れていた」という次の文は、マリー・テレーズの脚をみた時点でマニエルが「欲望の苦しみ」をいただいたことを物語っている。マリー・テレーズから逃げ去ろうと思いついたながらも逃げ去れなかったこと、欲望の対象を忌避しようとしたができなかったこと、欲望を抑えようとしたが、欲望に牛耳られたことの苦しみである。マニエルはこのあと、「腹がしめつけられた」と言っている。この表現は、マニエルのうちでの欲望のたかまりを暗示しているだろう。そこでマニエルは「一歩前に踏み出そう」とする。だがそれが「できな」いのは、欲望に身をまかせることの逡巡があるからであろう。「闇のようなものが自分の上においてくるような気がした」という印象は、欲望の高揚と、その欲望への反撥とのせめぎ合いのなかで、マニエルが自己を見うしないような、言いかえれば、狂気におちいりような状況に置かれていたことをほのめかしているように思われる。とはいえ、マニエルは、「依然として、ぼくを支配している意識を呪うに足りるだけの正気さは残っていた」と述べているように、まだ頭脳の明晰さを保持している。この述懐は、マニエルが二つの明確な意識のあいだを揺れうごいていたことを示している。一つは、「ぼくを支配している意識」であり、欲望を実現し、悪を犯すことを願う意識、要するに、悪の意識である。もうひとつの意識は、この悪の意識を「呪うに足りるだけの正気さ」なのであるが、欲望もしくは悪とたたかうのに充分、明晰な意識であり、一言でいえば、善の意識である。結局、善の意識が勝ちを制し、マニエルは「逃げろ！」と叫ぶ。マニエルはマリー・テレーズへの欲望に圧倒されながらも、欲望を制禦するに至る。けれども、だからといって、欲望が消滅するわけではない。抑圧された欲望は、いっそうマニエルを苦しめることになる。引用文のつづきを読むことにしよう。

彼女（マリー・テレーズ）は恐怖のあまり思わず飛び上がり、駆け出した。ぼくはあとを追って走った。なぜだかわからないが、数分前からぼくは気違いのようにふるまっていた。もし望めば、三步大股で進んだだけで、彼女をつかまえられたであろう。しかししばらくして、ぼくは彼女を追いかけるのをやめ、新たな遊びが始まったと思っている。ポリーヌのほうを追いかけた。それから急に後戻りをして、森の外に出る小道を進んだ。怒りの涙がぼくの頬を流れていた。またもや、ぼくはやる勇気がなかったのだ。ぼくを無に帰するために、このような敗北があといくつ必要だというのか？（Ⅱ・5、二九六・二九七頁）

ここでもまた、欲望の高揚と、欲望とのたたかいとのあいだの揺れ動きが認められる。マニユエルは「逃げろ！」と叫んだあと、マリールレーズを追いかける。この行為は、マニユエルがふたたび欲望にかりたてられたことを示している。だがマニユエルには、欲望を制禦しようという気持ちもあるわけで、この気持ちをはたらくことによって、「ぼくは気違いのようにふるまっていた」と書かれているように、「気違い」のような行動をとることになる。この行動は、たかまりつつある欲望を無理やり抑えようとすることから生じているように思われる。結局、マニユエルは追跡の対象をマリールレーズからポーリーヌにかえ、さらにポーリーヌを追いかけることもやめることで、悪すなわち欲望の行為をなすことの危機をまぬかれる。しかし欲望は満たされないことでなおもマニユエルを苦しめる。マニユエルは「怒りの涙」を流している。この涙は、欲望の対象を忌避したこと、欲望を成就しなかったこと、怒りと悲しみの念をあらわしている。「またもや、ぼくはやる勇気がなかったのだ」という文以下の思いは、欲望を実現しなかったことへの後悔の感情を浮き彫りにするとともに、なおもマニユエルのうちに残っている強い欲望を覗かせている。マニユエルの想像世界への脱出は、森の中の彼のふるまいが、サンクティス神父およびジョルジュ・エスパンシャ氏に代表される世間の人びとの響聲、憤慨または非難を買ったことを直接のきっかけにしている。だが同時に、現実の世界において、彼が欲望をいだきつつも、欲望をかなえることができなかつたことも関係しているように思われる。現実生活における、欲望をめぐっての挫折感が想像生活への逃亡をうながしていると考えられるのである。

夜の散歩から森の散歩までの、現実生活におけるマニユエルの肉体的苦悩を概観してきた。ここで確認できることは、マニユエルが欲望を覚えながらも、欲望に全面的に身をゆだねることのできない人間だという点である。マニユエルが欲望にとらえられたとき、欲望に身をまかせることへのためらい、欲望を制禦しようとする動き、あるいは欲望とのたたかいが内心で生じ、欲望の成就をばほみ、彼を苦しめるのだ。そしてはじめに指摘したように、こうした在り方の源には純粹志向が覆いがたいかたちで存在するのである。

四 『在り得たこと』における欲望の世界

では次に、マニユエルの作成した物語『在り得たこと』を、現実生活における彼の欲望の苦悩とのかかわりで検討することにしたい。欲望の観点から、この物語を分析したのである。

マニユエルは現実世界からの脱出をもとめて、ということはずなわち、欲望の苦しみからの解放を願って、『在り得たこと』を執筆する。しかしマニユエルは想像上の世界においても、欲望を、あるいは欲望の苦悩をかかえている。マニユエルが住むことになるネーグルテールの城は、肉体的な欲望が見られない世界ではないし、そうかといって、欲望がたやすくかなえられるところでもない。ネーグルテールの城は、『在り得たこと』の世界は、マニユエルが生きてきた世界と異質な世界ではない。逆に現実世界の延長上にあり、マニユエルが置かれた現実を色濃く反映している。

(1) アントワーヌの放蕩とマニユエルの羨望

このことは、欲望を成就するアントワーヌの存在と、このアントワーヌにたいする、マニユエルのあこがれとからうかがうことができる。ネーグルテールの城の主である伯爵の息子アントワーヌは、父親が病いの床についてから、自由に旅することを父親から許され、放蕩な生活を送ったことがあった。マニユエルはアントワーヌのそうした生活を、こう語っている。

アントワーヌは外国語を学ぶという口実にもとにフランスを離れ、(…)ぼくらの地方的偏見が通用しない隣国で、おきまりの放蕩をするのだった。この放蕩がいかに卑しく、汚らわしく、危険にみえようと、ぼくがその放蕩をどれほどにうらやんでいるかを言う必要があるだろうか？(CQ、三四一頁)

マニユエルはアントワーヌの放蕩をうらやんでいる。アントワーヌはマニユエルが創造した人物であるので、マニユエルの分身であり、マニユエルはアントワーヌの放蕩の記述をつうじて自分の夢を追求し、現実には満たされない欲望のはけ口をもとめているのだという見方をすることができかもしれない。しかし放蕩にふけり、欲望を容易に実現するアントワーヌのことを、マニユエルが羨望をこめて語っているところから、想像世界においてもまた、彼が欲望の苦しみを秘めていること、依然として欲望から解き放たれていないことを同時に読みとるべきであるように思われる。また、アントワーヌは旅行中だけでなく、ネーグルテールの城にもどってからも、放蕩に身をゆだねている。マニユエルは、元召使のジョルジュ夫人から聞いた話を、こう伝えている。

ジョルジュ夫人は、彼〔アントワーヌ〕がまことに放蕩をしに出かけているのだと主張し、**ぼくが天国のように思えがいていた**。或る種の家**に彼の姿がみうけられると言いはるのだった。**(…)しかしながら、その人物を中傷するために、夫人が何を言おうと、**ぼくの心をひきつける何かを彼から奪い去ることはできなかつた。**そしてその何かは、**ぼくが心の中で若き主人の側につくように**しむけるのだった(CQ、三四三頁)。

マニユエルはアントワーヌのうちに「ぼくの心をひきつける何か」を、つまり魅力を感じ、アントワーヌの側についている。アントワーヌへの共感をいだかせるもの、それは彼の放蕩の生活である。「ぼくが天国のように思えがいていた或る種の家」とはもちろん淫売宿のことだ。マニユエルは、そうした所にアントワーヌがためらいもなくかよっていることをうらやんでいるのであろう。ここでもまた、放蕩にふけるアントワーヌへの羨望が観察される。この羨望から、マニユエルの充足されない欲望が浮かび上がってくる。

アントワーヌの放蕩とマニユエルの羨望を見てきた。ここから、『在り得たこと』の世界が欲望の世界であることがうかがえると思

(2) 子爵夫人のサディズム的欲求

『在り得たこと』の世界が欲望の世界であることは、アントワーヌの存在だけではなく、彼の姉の子爵夫人の存在とも関係しているのではないだろうか。子爵夫人はアントワーヌのように欲望を自覚的に生きる人間ではないけれども、抑圧された欲望を内部に潜在させている人物であるように思われる。子爵夫人は、現実世界のプラス夫人と同じく愛のない結婚生活を送っている。マニユエルは、「子爵夫人は、生まれが自分より劣っていると判断している夫をほとんど愛していなかった」(CQ、三三五頁)と指摘し、子爵夫人が結婚するに至った事情を次のように説明している。

どうしてぼくの女主人がこれほど卑しい婚約者をうけ入れたかは、神のみが知る。彼女はおそらく、この男が他の男と同じように自分の務めを果たすと考えたのであろう。というのも、彼女に匹敵しないものはなんの値打ちもなかったし、卑しいものと、さらに一層卑しいものとのあいだになんの違いも認められなかったからだ。それに彼女は娘のままに望まなかった。そして、自分の地方の中でとびぬけて一番の家柄に生まれたからには、身分違いの結婚をすることしかできないことを、よく知っていた。それゆえ、最初に申しこんだ者、あるいはそれに近い者が受け入れられたのである(CQ、一三五頁)。

この一節から、子爵夫人がほとんど行きあたりばつたり結婚したことがわかる。「彼女は娘のままに望まなかった」と言われているように、子爵夫人にとって、結婚は娘から一人前の女になるための通過儀礼のようなものでしかなく、自分より値打ちのある男はいないのだから、結婚相手は誰でもよかったのである。もっとも、マニユエルはこのあと、子爵夫人の一族には遺伝的な病いがあるが、夫人は自分の血のなかに流れるこの欠陥を健康で逞しい男との結婚によってなおしたのだとも述べている(三三五、三三六頁)。しかし、これも今の夫と結婚した積極的な理由にはならない。なぜなら健康で逞しい男はほかにもたくさんいるわけだし、別の男でもかまわないからだ。『在り得たこと』において子爵はほとんど登場しない。子爵夫人は夫と交わりをもつことなく生きていく。子爵夫人の結婚生活ははじめから破綻しており、夫人が満たされない欲望を内に秘めていることはたやすく想像される。

子爵夫人の抑圧された欲望は、マニユエルとの関係をとおして看取することができる。マニユエルはネーグデルテールの城に、プラス夫人の家の料理女レオンティーンの紹介で召使と同等の身分でやってき、はじめのうち、レオンティーンの兄のエクートルの、庭師としての仕事を手伝う。やがてマニユエルの存在は子爵夫人の目にとまり、夫人はマニユエルに、病いの床にある父親の伯爵のために、ラテン語の祈禱書を朗読するという職務を依頼する。そしてマニユエルを自分の confident (打ち明け話の聞き手) にするに至る。このように子爵夫人はマニユエルを優遇し、召使の身分から救い上げる。しかしながら、子爵夫人はマニユエルにやさしい態度で接しているわけではない。「彼女(子爵夫人)はぼくを軽蔑していた。いや、軽蔑さえしていなかった。彼女の目には、ぼくは、朝から晩まで彼女に仕えている召使たちと同様にもの数ではなかった」(CQ、三二一頁)とマニユエルが語っているところからわかるように、子爵夫人はマニユエルに横柄な姿勢でのぞみ、マニユエルに屈辱感をいだかせている。子爵夫人は、祈禱書を朗読する役目をマニユエルに頼んだとき、別のことも要求することによってマニユエルを刺戟している。

——あなたに知らせておくのを忘れておりましたが、お客様のある日には、食卓で給仕をしていただきたいのです。

頬を平手打ちされたかのように、ぼくの顔に血がのぼった。ぼくは芝生に水をやることや、老人に本を読みかせることには同意していた。しかし皿を運ぶなどということは、自分の誇りに課している限界を越えているように思えた(CQ、三二七頁)。

子爵夫人はマニユエルの知性にふさわしい務めを与えると同時に、食卓で給仕をするという屈辱的な仕事も言いつけている。「頬を平手打ちされたかのように、ぼくの顔に血がのぼった」というマニユエルの反応は、彼が子爵夫人の言葉を侮辱の言葉のようにつけており、怒りの感情をにえたぎらせていることを示している。ところで子爵夫人は、「お客様のあつた日には、食卓で給仕をしていただきたいのです」という命令を本気で口にしたのであろうか。このあと、マニユエルは、伯爵の世話をするジョルジュ夫人と二人だけで食事をしようになる。さらには、客室が与えられ、そこで一人で食事をすることさえ許される。マニユエルは召使たちとは完全にちがっ

たあつかいをうける。このようなマニユエルのその後の待遇を考えると、子爵夫人はマニユエルを実際に食卓で働かせるつもりで言ったのではないように思われる。ではなぜこのような要求を口にするのか。それはマニユエルの誇りを傷つけ、屈辱感を味わわせることによって、彼を苦しめるためにほかならない。

マニユエルにたいする子爵夫人の傲岸な態度、マニユエルの自尊心を傷つけるような夫人の言葉を一瞥した。マニユエルを前にしてのこうした言動からは、プラス夫人においても見られたようなサディズム的な欲求が浮かび上がってくるのではないだろうか。プラス夫人と同様、子爵夫人は生きることのよろこび、愛のよろこびを知らない。子爵夫人は他者に屈辱感をいだかせ、苦しみを与えることで、自らの不幸にたいする報復をこころみているように思われる。他者の苦しみの原因となるという点に、満たされぬ欲望のはけ口をもとめていると理解されるのである。

子爵夫人のサディズム的欲求は、弟アントワーヌがマニユエルに暴力をふるったときの夫人の対応からも看取することができるように思われる。マニユエルは或る晩、栗の木が生えている小径を小走りに行っている際、じっと立っている二人の人物にぶつかると、マニユエルがあやまろうとすると、二人の人物の中のひとりであるアントワーヌがマニユエルにげんこつをくらわせ、マニユエルを地面に倒す。そして暗闇のなかでマニユエルの顔の上に荒々しく指を走らせながら、「お前が誰であろうと、俺の名を口にしたらたたきのめしてやるぞ」と威嚇する（CQ、三一三頁）。このようにアントワーヌはマニユエルに暴力をふるうのであるが、マニユエルはその場に居合わせたもう一人の人物について、次のように書いている。

アントワーヌといっしょにいた人については、その人物はほとんどすぐに姿を消したので、男であるのか、女であるのかすらわからなかった。しかしぼくはあとになって、それが子爵夫人であることを知った（三一三頁）。

この場面において、子爵夫人はアントワーヌの行動をはばもうとしていない。暴力をくわえたアントワーヌをとがめさえしていない。子爵夫人は、マニユエルが倒れた場所からすぐさま立ち去るものの、アントワーヌのふるまいを是認しているか、黙認しているように

うけとれる。見方によれば、アントワーヌは子爵夫人の代行をしているようにも思える。少なくともマニユエルは、アントワーヌの暴力行為のうちに、子爵夫人の意向の反映を読みとることになる。放蕩にふけり、荒々しい人間に変貌したアントワーヌにたいする子爵夫人の気持ちを問題にしながら、マニユエルはこう述べている。

彼〔アントワーヌ〕は以前よりもはるかに子爵夫人の気に入ることになった。夫人は彼に接近し、彼女なりの方法で彼をかわいがった。というのも、彼女はあらゆる男性的美德の上位に荒々しさを置いていたからだ。(…)ぼくはのちに、夫人が彼に、ぼくをなぐるようにも励ましていたことを示したいと思う(CQ、三四三・三四四頁)。

マニユエルは、アントワーヌの暴力が子爵夫人のそそのかしによるものであると考えている。またこの一節では、子爵夫人がアントワーヌを、その「荒々しさ」(brutalité)ゆえに気に入り、かわいがっていたことが語られている。ここから、子爵夫人の「荒々しさ」への愛が読みとれる。「荒々しさ」への愛とは、サディズム的欲求につうじるものであろう。アントワーヌは子爵夫人にとって、みずからのサディズム的欲求をみたしてくれるべき存在なのではないだろうか。

アントワーヌはさらにもう一度、マニユエルに暴力をふるっている。マニユエルは、子爵夫人が禁じたにもかかわらず、ネーグルテールの城をかこむ森の中に散歩に出かける。その折、馬に乗ったアントワーヌに遭遇し、頬を鞭打たれるのである。このときのアントワーヌの挙動については、のちに仔細に分析するけれども、マニユエルは傷を負い、顔にハンカチを巻きつけなければならなくなる。このような恥辱をうけたマニユエルはネーグルテールを去る決心をし、子爵夫人に手紙をしたためる。マニユエルは自分の行いを、こう語っている。

弟にたいして復讐するために書きはじめながら、ぼくは突然、姉を非難するのだった。まるで彼女がぼくをなぐったかのように。

そして或る意味でぼくは正しいのだった（CQ、三五九頁）。

マニユエルはアントワーヌから暴行をうけたことの責任を子爵夫人になすりつけている。「まるで彼女がぼくをなぐったかのよう」に子爵夫人を「非難す」るマニユエルの姿勢は、先の引用文の、「夫人が彼に、ぼくをなぐるようにも励ましていた」という認識にもとづいている。とはいえ、作中、子爵夫人がほんとうにアントワーヌをそのかし、マニユエルに危害をくわえるよう仕向けていたかどうかは、定かではない。しかし子爵夫人は傷ついたマニユエルの前にあらわれて、次のように言っている。

誰があなたをなぐったかはたずねません。弟が、森の中であなたと話をしたと知らせてくれました。弟は激しやすく、こらえ性のない人です。ですからわたしは、彼が通る道に居あわさないように警告しておいたのです（CQ、三六一・三六二頁）。

子爵夫人はマニユエルにアントワーヌの行為をわびてはいない。逆に、森の中を散歩したことの非をマニユエルに認めさせようとしている。ということはすなわち、子爵夫人はアントワーヌの暴力的ふるまいを黙認しているか、それとも、それに同意していることになる。子爵夫人がアントワーヌに積極的なはたらきかけをしているのではないとしても、暴力を禁じないのであるから、マニユエルの側に立てば、子爵夫人はアントワーヌの共犯者とみなしうるのである。このような態度のうちにサディズム的な欲求を見ることができるよう思われる。他者に苦しみを与えたいという欲求がアントワーヌの暴力を許すという姿勢をもたらしていると解しうる。こうした在り方が、子爵夫人の抑圧された欲望と関係していることは贅言を要しない。

マニユエルを前にしての子爵夫人の言動、マニユエルに暴力をふるうアントワーヌへの夫人の対応を検討した。この検討をとおして、子爵夫人のサディズム的欲求を見た。子爵夫人もまた、アントワーヌと同じように、欲望の人間であり、『在り得たこと』の世界を欲望の世界とするのに一役買っている。もともと、子爵夫人の場合、欲望は抑圧されており、屈折したかたちであらわれている。しかしそれでも、子爵夫人が欲望の人間であることはかわりがない。そして子爵夫人の欲望は、物語の終わり近く、父親の伯爵が死んだ日に

マニユエルと性の交わりを結ぶという事実によって、決定的に明らかになるのである。

(3) マニユエルの、子爵夫人への執着

『在り得たこと』の世界が欲望の世界であることは、この物語の主人公になるマニユエルが子爵夫人に魅せられ、執着するという点にも起因しているのではないだろうか。マニユエルの、子爵夫人にたいする感情は、まず夫人への怒りとかたちをとって読者に知らされる。すでに述べたように、子爵夫人はマニユエルに傲岸な態度をとる。これにたいして、マニユエルはしばしば怒りを覚えていく。子爵夫人にはじめて会い、夫人の横柄さに接したときの心の動きは、次のように描かれている。

そのとき、機会が与えられていたら、ぼくのようなおとなしい青年にも可能なかぎりのあらゆる残酷さをもって、この女〔子爵夫人〕に復讐しただろうと思う。(…)一日中、ぼくは怒りを反芻するのだった。ぼくは自分が何を思いえがき、何を願っていたのか、よくわからない。おそらく革命を、女主人の顔をなぐりに行くことを可能にするような、とてつもない出来事を望んでいたのだろう(CQ、三一―三二頁)。

マニユエルは子爵夫人の尊大な態度にたいして怒りの感情をいだき、暴力への欲求にとらえられている。この怒りの感情と暴力への欲求とが、召使のように子爵夫人に仕えなければならないという自己の屈辱的な状況への認識に根ざしていることはたしかであろう。まさにそれゆえにマニユエルは「革命」(une révolution)を待望するのである。けれども、マニユエルの感情が召使の地位に甘んじなければならぬことへの反応であると割り切るだけでは、彼の感情を完全に理解したことにはならない。というのも、この引用文の直前には、子爵夫人への微妙な気持ちを語った一節も見いだされるからである。すなわち、子爵夫人はマニユエルにはじめて言葉をかけたとき、彼に庭の薔薇の花を切りとらせる。その折、マニユエルは夫人から下手な仕事ぶりを非難されて、次のように反応している。

ぼくの最初の衝動は、十八世紀の小説の中にあるように、夫人の足もとに身を投げる事だった。だがぼくはそのほかげた衝動を抑え、恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にして、うなだれるだけにとどめた(三一〇・三一頁)。

マニユエルは怒りの感情にとらえられる前に、子爵夫人の「足もとに身を投げ」たい衝動にかられている。マニユエルは子爵夫人に仕え、服従することを必ずしもいとってはいない。ここから、マニユエルの怒りの感情と暴力への欲求は、子爵夫人に軽蔑されていること、もしくは、自分の存在を認められていないことから生じていると受けとれ、執着の裏返しであらわれと解することもできるのではないだろうか。このことは、子爵夫人から伯爵のために祈祷文を朗読するよう依頼されるとともに、客のある日は食卓で給仕するよう要求された際の、マニユエルの感情を言いあらわした、次の一文を読むことによつていっそう鮮明になる。

彼女(子爵夫人)がぼくの内心に怒りの感情を喚び起こしたにもかかわらず、ぼくは彼女の態度にそなわった威厳に感嘆しないではいらなかった(三一七頁)。

ここでも、マニユエルは子爵夫人に怒りを覚えている。この怒りは、皿を運ぶという屈辱的な仕事を言いつけられたことに原因している。だがマニユエルは同時に子爵夫人の「威厳」(dignité)に感嘆している。この感嘆の念は、子爵夫人にたいするひそかなあこがれを意味するであろう。とすれば、マニユエルの怒りは、子爵夫人が自己を評価せず、魂をもった同等の人間としてあつかわれないことへの反応だとみなすことができ、結局、彼の内心で芽生えた、子爵夫人への執着の感情を浮き彫りにしていると考えられる。

マニユエルじしん、子爵夫人にたいする執着の感情を自覚することになる。ネーグルテール伯爵のまえてラテン語の祈祷文を朗読するという任務を果たしたのち、マニユエルは子爵夫人の訪問をうける。その折、子爵夫人は父親の伯爵のことでマニユエルと会話をか

わす。マニユエルにたいする夫人の態度は相変わらず尊大なものである。マニユエルはこのときの心の動きを書きとめている。

へどうしてこの女はぼくの頬を平手打ちしないのだろうか？とぼくは自問するのだった。へ話の中にちっばけな侮辱をまき散らすより、その方がよほど卒直なやり口なのに。それでもぼくは、自分が彼女に愛着をいだいているのを感じた（CQ、三三二頁）。

さいこの、「それでもぼくは、自分が彼女に愛着をいだいているのを感じた」という一文から、マニユエルが子爵夫人への執着の感情を自覚していることがわかる。マニユエルは、子爵夫人の女帝然とした居丈高な態度にもかかわらず、というよりそれゆえに、執着の感情をつのらせる。ここから、マニユエルにおけるマゾシスムへの傾向を指摘することができるかもしれない。だがマニユエルにおいては、マゾシスムはサディスムとわかちがくからみあっているのであろう。先に見た怒りの感情と暴力への欲求は、子爵夫人から冷やかかなあしらいをうけたことへの報復の欲求であり、肉体的欲望の屈折した発現としてのサディスムの欲求なのだと思われる。

子爵夫人にたいする、マニユエルの執着と欲望は、アントワヌから二度目の暴行をうけたあと、決定的なかたちで示される。この挿話は、マニユエルが長らく子爵夫人と会わなくなってからのこととして語られている。前述のように、マニユエルはアントワヌから頬を鞭打たれ、辱められたことで、ネーグルテールの城を去る決心をし、子爵夫人に手紙を書く。このとき、マニユエルの内心を支配するのは、子爵夫人への思いである。

実のところ、ぼくは彼女（子爵夫人）に復讐することしか望んでいなかった。彼女の薄笑いや、声音や、毎日屈辱的な思いをさせていた彼女の軽蔑や、彼女の連続的な不在や、ぼくがこの世にいること、ぼくが誰であるか、そしてなぜぼくがここにいるかを絶えず忘れてしまう彼女のやり方に復讐することだった（CQ、三五九頁）。

マニユエルは城からの出発によって、子爵夫人に復讐することを望んでいる。子爵夫人の横柄で軽蔑するような態度への怨み、夫人

が自分の存在を無視し、あるいは忘れ去ることへの怨みを晴らしたく思っている。このような怨みは、子爵夫人にたいする執着の感情と表裏をなすものであり、結局のところ、彼の復讐欲は、夫人への満たされぬ欲望のあらわれにほかならない。それゆえ、城を去るというマニユエルの決意が、子爵夫人の意向しだいで造作なく揺らぐことは容易に推察される。ジョルジュ夫人をつうじてマニユエルの決意を知った子爵夫人が、久しぶりでマニユエルの前にあらわれた際の、彼の内心の感情を語った文章を読むことにしよう。

心ならずもぼくは夫人の荒々しくて傲然とした物腰、まことに彼女に似つかわしい命令的な態度に感心するのだった。だからぼくはこうして彼女に会うことを恐れていたのだ。なにしろ彼女は、自分がどれほど威嚇的な力をぼくにおよぼしているかを重々承知していた。まさしく彼女が口をひらく前に、ぼくは彼女に負けていた（CQ、三六一頁）。

マニユエルは子爵夫人の「荒々しくて傲然とした物腰」あるいは「命令的な態度」に魅せられている。子爵夫人の横柄で軽蔑的な態度に反撥しながらも、それに惹きつけられる。それゆえ、マニユエルは子爵夫人のそばを離れることができない。「ぼくは彼女に負けていた」と書いているように、マニユエルは城を去るといふ決意をいとも簡単に放棄してしまう。子爵夫人はこのあと、マニユエルに客室を与え、給料を三倍にすることを約束する。マニユエルを城にひきとめるものは、こうした待遇の改善でもある。だが、根本的には、子爵夫人への彼の執着であり、マゾシズム的な欲望であろう。マニユエルのマゾシズム的な欲望は、子爵夫人が待遇の改善にかかわる言葉を口にしたあと、彼が感謝のあまり、「女主人の足もとに身を投げ」たり、「手に接吻し」たりする衝動にかられているところからも明瞭である（三六三頁）。

マニユエルの子爵夫人にたいする執着あるいは欲望を見てきた。マニユエルは夢想の世界においても欲望の人間である。子爵夫人への彼の執着が、『在り得たこと』の世界を欲望の世界にする大きな要因になっているのである。

(4) マニユエルと子爵夫人との性行為の場面

『在り得たこと』の世界を欲望の世界にする最大の要素は、物語の終わり近くに置かれた、マニユエルと子爵夫人との性行為の場面である。今度はこの場面を分析することにした。

子爵夫人は父親の伯爵が息をひきとった日の夜明け前、マニユエルの部屋を訪れ、マニユエルのベッドの中にもぐりこむ。子爵夫人がやってくるのは欲望のせいであろう。子爵夫人は抑圧された欲望を内にかかえて生きてきた。この欲望が父親の死をきっかけに堰を切り、あふれ、子爵夫人をうごかしたと考えられる。だが子爵夫人のふるまいには、語り手のマニユエルの意向も影響をおよぼしているように思われる。マニユエルとは『在り得たこと』の主人公であるばかりではなく、この物語の作者でもあるがゆえに、語り手マニユエルの欲望が子爵夫人の出現をうながしたともうけとれる。この点を踏まえて、問題の場面を読むことにしよう。

——おいで、と彼女(子爵夫人)は言った。

これに続く記憶は深い嫌悪と混じり合っている。ぼくは獣のようにこの女の上に飛びかかったが、しかし欲望と同じだけの怨恨がともなっていた。というのも、彼女の横柄な態度を何ひとつ忘れていなかったし、彼女からうけた命令の中には、更に無礼さしか見いださなかったからだ。ぼくがついになそうとしているこの不思議な愛の行為は憎しみの行為の代わりをし、それと溶け合っているようにぼくには思われた(CQ、三七七頁)。

マニユエルは欲望にかられて子爵夫人に飛びかかっている。けれども、この欲望には「怨恨」(rancœur)や「憎しみ」(haine)が混じり合っている。このことは、マニユエルの、子爵夫人への執着が純粋な愛情ではないことを示している。彼の執着は、反撥と表裏をなす気持ちであり、愛と憎しみが一体となった感情なのであろう。これまでマニユエルは、子爵夫人の傲岸な態度に屈辱感を味わわされつつも、それに魅せられて生きてきた。ここでマニユエルを支配しているのは、これまで耐えしのんできた屈辱の思いにたいする報

復欲であり、マゾシスムへの傾斜の反動としてのサディズム的欲求なのだと思われる。また、さいこの一文に語られているように、「愛の行為」が「憎しみの行為」と化するという事実は、子爵夫人にたいするマニユエルの感情にそくして理解できるばかりではなく、マニユエルの純粹志向とのかかわりでもとらえることもできるのではないだろうか。純粹志向は欲望の対象を忌避する姿勢をもたらずのみならず、欲望の対象への憎しみをも必然的に生じさせる。それゆえ、純粹志向を有するとき、愛の行為は憎しみともなったサディズム的なものにならざるをえない。さらにまた、この事実は、『在り得たこと』を書きおえ、死を間際にしたマニユエルがマリー＝テレーズに打ち明ける、「ぼくが愛していたのは君なんだ」（Ⅲ、三八九頁）という言葉との関連で把握することもできる。すなわち、マニユエルは現実世界においてはマリー＝テレーズを愛していた。しかしながら、マニユエルは現実からのがれ、夢想の世界に生きることを余儀なくされた。そこでマニユエルは子爵夫人を創造Ⅱ想像し、マリー＝テレーズにかわって夫人を愛と欲望の対象にする。だがマニユエルがほんとうに交わりをもちたかったのは、マリー＝テレーズであるので、子爵夫人との性行為は「憎しみの行為」になるのだとも解釈することができる。

このようにマニユエルは「怨恨」と「憎しみ」ともなった欲望をいだいて、あるいはサディズム的な欲求をいだいて、子爵夫人と性の交わりを結ぶことになる。とはいえ、二人の性行為において主導権をにぎるのはマニユエルではない。続く記述を引用することにしよう。

しかしながら、女主人の蒼白くて冷たいからだ、ゆっくりとぼくの上で閉じられた。そのからだは、香りの甘さで昆虫を惹きつけておいて、閉じこめてしまうとと言われる、あの恐ろしい花々に似ていた。（…）快楽のさなかに、ぼくは、自分もがき、しっかりと抱擁したまま手足のゆるむことがない一人の死んだ女をあたためているような印象をうけた。この凍りつくような抱擁はよろこびのさなかでさえ、ぼくに恐怖を味わさせた。官能の陶醉と呼ばれるものも、自分が餌食であつて、支配者ではないと悟ることを妨げはしなかった。胸から洩れるよろこびと苦悶の叫びを、ぼくは重たい髪の毛のなかで押し殺すのだった（三七七・三七

マニユエルが「官能の陶醉」のなかで「自分が餌食であつて、支配者ではない」ということを理解しているところからわかるように、二人の性行為において主導権をにぎっているのは子爵夫人である。また、マニユエルのからだだが「昆虫」に、子爵夫人のからだだが、その「昆虫」を閉じこめてしまう「恐ろしい花々」になぞらえられていること、そして、マニユエルが「重たい髪の毛」のなかで「叫び」を「押し殺」していることが注目される。マニユエルは子爵夫人のからだに完全に閉じこめられ、支配されている。さらに、この一節で、マニユエルが子爵夫人の冷たい肉体を抱擁することによって、というより、冷たい肉体に抱擁されることによって、「一人の死んだ女をあたためているような印象をうけ」ている点は重要であろう。この印象は間違つてはいない。実際、子爵夫人はマニユエルとの肉体の交わりの中で、死のほうに向かつていくからである。

このあと、マニユエルは子爵夫人の執拗な抱擁から自らを解き放つためにもがく。だが子爵夫人は「全力をあげ」てマニユエルを「ひきとめ」、マニユエルをますます強く抱きしめる。この時点でマニユエルの内心を支配するのは、子爵夫人にたいする《Hoffen》（恐怖・嫌悪）である（三七八頁）。さらに引用をつづけよう。

一息つくために、ぼくはもがくのをやめ、じつと動かずにいた。彼女は目をひきつらせて待ったが、彼女は泳ぎ手にしがみつき、そのすべての重みでもって海の奥底に引きずりこもうとする溺れる女に似ていた。長い時が経った。突然、恐ろしい錯乱がこの女を揺りうごかした。ぼくは乏しい経験のために、彼女は気が狂ったのだと思つた。事実、彼女の歯が首の付け根の肌を食いちぎるのを感じて、ぼくは恐怖の叫び声をあげた。手の片方だけでも自由にすることができたら、彼女を絞め殺していただろう。（…）

不意に彼女は腕をひらき、彼女のゆるんだからだは、虚無の中に落ちていくように、ぼくのからだから離れた。（…）

彼女は死んでいた（三七八・三七九頁）。

この引用文で、子爵夫人はまず「泳ぎ手にしがみつ」く「溺れる女」にたとえられ、そして「恐ろしい錯乱」を経て、「虚無の中に落ちてい」こうとしている。ここから子爵夫人が死に向かいつつあることが了解される。子爵夫人を揺りうつかす「恐ろしい錯乱」は、快楽の絶頂を示すというより、断末魔の苦悶に近いものとみなすことができよう。また、この場面で、子爵夫人とマニユエルがともに殺意をいだいていることが注意をひく。「溺れる女」に擬せられた子爵夫人は、「泳ぎ手」としてのマニユエルを「海の奥底に引きずりこもうとし」ているし、それに「錯乱」のなかで「首の付け根」の部分をかむことによって、マニユエルを殺そうとしている。一方、マニユエルもまた、「手の片方だけでも自由にすることができたら、彼女を絞め殺していたら」と語っているように、子爵夫人を殺すことを考えている。こうして二人の愛の行為は「憎しみの行為」を越えて、半ば殺しあう行為と化している。この点にかんして、「エロティスムの帰結は殺人である」というグリーン⁽¹²⁾の見解を視野に入れておくことは必要であろう。「エロティスム」(erotisme)なる語は「欲望」(desire)という語によって言いかえることができる。グリーンにおいては、欲望は殺意をもたらしものと認識されているのである。

では、どうして子爵夫人とマニユエルは互いに殺意をいだきあうのか。どうして欲望の帰結が殺人となるのであろうか。まず考えられることは、欲望とはその対象を所有したいという欲求である以上、必然的に殺意を生じさせるといふ点である。対象の全的な所有は対象の死によってはじめて可能になると思われるからだ。実際、対象が生存しているかぎり、対象は欲望をいだく主体からは自由であり、主体に従属したことになる。しかし欲望の対象に死を与えるとき、その対象は欲望をいだく主体によって支配されたことになり、主体は対象を完全に所有したともみなせるのだ。とはいえ、こうした説明は子爵夫人の行為を解釈するときには有効であるけれども、マニユエルのふるまいを考察する場合には妥当性をもたない。というのも、マニユエルは必死になって子爵夫人の抱擁からのがれようとしているからだ。そこで次の解釈を提出することにしよう。少なくともマニユエルの殺意には、純粹志向が関係しているように思われる。言うまでもなく、純粹志向は欲望の対象を忌避する。この忌避が極限にまで押しすすめられると、欲望の対象の消滅への願いが必然的に生じる。純粹志向は、第二部でも述べるように、欲望とのたたかひの過程で、欲望の対象を殺害したいという欲求を招来

する。純粹志向を内にかかえるとき、欲望はその対象を殺したいという欲望をも包含することになる。マニユエルの殺意は、子爵夫人だけでなくマリー＝テレーズにたいしても見られた。第一部第八章、マニユエルは欲望にかられてマリー＝テレーズを夜の散歩に連れ出し、屋敷跡に着いてからマリー＝テレーズのからだにふれる。このとき、マリー＝テレーズはマニユエルの行いのうちに殺意を嗅ぎわけていた。この殺意も、子爵夫人への殺意と同様、純粹志向とのかかわりでとらえることができる。

マニユエルと性の交わりを結んだあと、子爵夫人が死ぬという事実も、このような文脈の中で把握することができるのではないだろうか。つまり子爵夫人を死に至らしめているのは、『在り得たこと』を作成しているマニユエルであり、結局、作者＝語り手としてのマニユエルが子爵夫人を殺しているという見方をすることができるのである。このことに関連して、ミシエール・ラクロは子爵夫人の死をめぐる、「子爵夫人が死ぬのは、マニユエルが彼女を殺したいという狂おしい欲望をいんでいるためである。主人公がこの女を実際に殺害しないと、夢の中で彼女を殺しているからである」と述べている。ミシエール・ラクロもまた、子爵夫人の死の原因を、物語の作者であるマニユエルの意向＝願望にもとめている。そして作者＝語り手としてのマニユエルが子爵夫人の死を望むのが、純粹志向を有しているためであることは、言を俟たない。

マニユエルと子爵夫人の性行為の場面を分析してきた。そして分析の途中で浮かび上がった欲望と死との結びつきを、純粹志向とのかかわりで考察した。ところで、『幻を追う人』において、欲望と死との結びつきはもう一箇所で見られた。第一部第六章、マニユエルが夕食前に、欲望に揺りうごかされてマリー＝テレーズに、夜の十一時に二人だけで食堂で会おうと誘いかけるところである。マリー＝テレーズはこの折、「彼が死ぬのではないかという思い」をいれていた。それはなぜだろうか。ここでは、欲望の対象ではなく、欲望をいなく主体が死と結びつけられている。したがって、欲望とはその対象を殺したいという欲望でもあるといった説明はあてはまらない。そこでまず考えられるのは、マニユエルが病いにおかされているにもかかわらず、欲望とのたたかいに苦しんでいるのだから、肉体の苦悩が彼を衰弱させ、死に接近させているという解釈である。この解釈はテキスト内部の問題として考えるとき、正当なものである。けれども、欲望をいなくマニユエルが死に近づくもう一つの理由として、『幻を追う人』の作者グリーンンの純粹志向の影響が挙げられるのではないだろうか。なぜなら純粹志向とは、欲望の対象を殺したいという欲求をもたらすばかりでなく、欲望への憎しみ

が高じて、欲望をいだく主体を処罰し、その主体に死をもたらしように導くこともありうるからだ。『幻を追う人』がマニユエルの死によって終わるのは、病気の悪化という理由のみならず、純粹志向を有する作者グリーンの意向によるものと解することもできる。同じように『在り得たこと』の結末の子爵夫人の死も、夫人がマニユエルの欲望の対象であるからだけでなく、夫人が欲望をいだくという事実それ自体と関係しているであろう。つまり物語の作者であるマニユエルは、純粹志向をもつがゆえに、欲望の対象としての子爵夫人を死に至らせているばかりではなく、子爵夫人が欲望に身をゆだねたことで、処罰の意味をこめて夫人に死を与えているとも解釈することができるのである。

五 まとめ

以上、マリー＝テレーズの信仰の吟味から出発して、マリー＝テレーズの官能のめざめ、プラス夫人のサディスム的態度と不幸への愛、そしてマニエルの肉体的苦悩を検討し、それから、『在り得たこと』を欲望という観点から分析した。さて、『幻を追う人』は主人公マニエルが作成した物語『在り得たこと』を含んでいるがゆえに、はじめに問題点として指摘したように、グリーンにとっての創造行為の意味ないし意義を解く鍵を提供している。そこでこの点について考察してみたい。

まずマニエルにとっての書くことの意味を論じることしよう。重要なことは、マニエルが現実世界で味わった肉体的苦悩を、夢想の世界においてもひきずっているという点である。すでに見たように、『在り得たこと』の世界は欲望の世界であるし、子爵夫人に執着するマニエルは相変わらず欲望の人間である。放蕩にふけるアントワーヌや、サディスム的欲求を有する子爵夫人もまた、欲望の人間である。アントワーヌは放蕩の生活によって、マニエルが夢見る理想の人間を具現している。子爵夫人は欲望をいだくという点では、アントワーヌと同様、マニエルの分身であるかもしれないが、マニエルに欲望をいだかせるといふ点では、マリー＝テレーズに対応する人物であろう。⁽¹⁴⁾これらの点から、『在り得たこと』は、現実生活に^おけるマニエルの欲望、または欲望の苦悩を基盤として作成されているといえる。マニエルは内心に宿る欲望あるいは欲望の苦しみを物語の中に表出することによって、そこからの解放を目指しているのだと思われる。欲望もしくは欲望の苦しみは、物語の中に移し入れられることがなければ、現実生活においてマニエルの危機におちいらせ、破滅にみちびくほどのものであったのであろう。第二部第五章の終わり近くにみいだされる、次の注釈的文章は、このような脈絡のなかで理解しなければならぬ。

彼〔マニエル〕が創造した想像上の世界は、ついに日々の生活とまじりあい、言わば彼の精神的な存在の一部をなすようにな

った。それは、長い苦しみの一日の終わりに彼が向かっていく避難場なのである(三〇七頁)。

ここでは、想像世界、『在り得たこと』の世界がマニユエルにとって「避難場」(refuge)であることが言われている。しかしながら、この「避難場」はマニユエルの「苦しみ」と無関係にあるわけではない。「苦しみ」つまり肉体的苦悩を発現させなければ、マニユエルの想像世界はけっして「避難場」とはなりえない。したがって、マニユエルにおいて、書くことは欲望との関連でカタルシスあるいは exorcisme の価値を有するとみなされる。

同じことは、作家グリーンについても言えよう。グリーンは『日記』を読めば、彼もまた、『幻を追う人』を執筆していたころ、欲望に苦しんでいたことがわかる。たとえば、グリーンは一九三三年一月二十四日付の『日記』のなかで、「私は肉体的な愛なしには生きていくことができない⁽¹⁶⁾」と書いていて、同年三月十八日には、「フランシス・トンブソンの詩を読んだが、その詩は私のうちに、快樂の生活以外のものへの願いを目ざめさせた⁽¹⁷⁾」という記述が見いだされる。この記述は、一九三三年当時のグリーンが「快樂の生活」を送っていたか、あるいはそれはそれにあこがれて生きていたことがわかる。また、『幻を追う人』刊行から四ヶ月後ではあるが、一九三四年七月には、グリーンは、「昼も夜も、私は自分のうちに巨大な飢えをかかえている。(…)私は、自分の全存在が肉体的な幸福を待ちこがれているを感じる⁽¹⁸⁾」と言っている。このようにグリーンもまた、肉体的欲望に責めさいなまされていたのである。グリーンにとっても書くという営みは欲望と密接に関係しているのである。『幻を追う人』において、欲望はマニユエルだけではなく、マリー・テレーズ、プラス夫人においても見られた。作中人物たちはグリーンの内心の欲望を糧としていないだろうか。グリーンは一九三三年一月二十四日付の『日記』のなかで、「しばしば私は心をとても重たくし、頭を欲望で疲れさせて起きることがある。今、私の生活の中で一種の平衡をなしている仕事が必要ならば、私はまさしく欲望に取りつかれた人でしかないだろう⁽¹⁹⁾」と述べている。つまり、「仕事」が実生活において、欲望との関連で「一種の平衡」をもたらしていると指摘している。グリーンは作品の中に肉体的苦悩を表出することによって、内心の均衡を保ちえているのだ。グリーンにとってもまた、書くことは、欲望とのかかわりでカタルシ

スなしいし exorcisme の価値をもっているのである。

では次に、『幻を追う人』における幻想性を問題にすることにしたい。ここまでの読解を踏まえて、グリーン作品における幻想とは何か、という点について考察しておきたい。はじめに指摘したように、シュネデルの定義にそくするならば、幻想とは日常的なものとの「断絶」、日常生活における「裂け目」を示すがゆえに、『幻を追う人』において幻想性は、『在り得たこと』の全体、それに第一部第八章の夜の散歩、第二部第五章の森の散歩の挿話によってもたらされている。これらの部分においては、マニユエルまたはマニユエルが創造した人物たちの欲望が発現している。ここから、グリーンにおける幻想とは欲望の表出によって生じるものだといえよう。だが、グリーンにおける幻想はこれだけにとどまらない。トドロフによれば、幻想とは「一見、超自然的な出来事」を前にして感じられる「ためらい」のことであり、「一見、超自然的な出来事」のひとつに、『在り得たこと』の中の子爵夫人の不意の出現と死が挙げられた。子爵夫人の不意の出現は夫人の、あるいは語り手マニユエルの欲望と関係しているけれども、子爵夫人の死は語り手マニユエルの純粹志向に由来している。マニユエルにおける欲望の対象の徹底的な忌避、欲望への憎悪が子爵夫人の死を招いていると解される。それゆえ、幻想とは、欲望とのたたかいから産出されるものとみることができる。マニユエルと子爵夫人との性行為が「憎しみの行為」、半ば殺しあう行為と化するのも、マニユエルの純粹志向、もしくは、欲望とのたたかいに起因している。さらに夜の散歩や森の散歩の場面も、それを抜きにしては考えられない。欲望をいだきながらも欲望とたたかわなければならぬ苦しみ、この苦しみが顕在化したものが、幻想にほかならない。グリーン作品における幻想とは、純粹志向とかわる肉体的苦悩の一つのかたちであると結論することができる。

- (1) Michèle Raclot : *Le sens du mystère dans l'œuvre romanesque de Julien Green, Aux Amateurs de livres*, 1988, t.I, p.446.
- (2) ジャック・プチは、「不幸への好み」(le goût du malheur)という言い方によって、プラス夫人の在り方を把握している (Jacques Petit : *Julien Green* 《*l'homme qui venait d'ailleurs*》, Desclée de Brouwer, 1969, p.144)。
- (3) マリー・テレーズは、「帰宅したとき、二人が互いに向かいあって坐っていた」(三八四頁)ことも伝えている。二人の関係の親密さはこうした坐り方からも読みとれる。
- (4) マリー・テレーズはすでに第一部第十章において、母親の看病を観察しつつ、次のように書いていた：「母が甥にたいしていただいている聖なる愛情は、より地上的な何かに奇妙にも似ていた」(二五二頁)。マリー・テレーズはかなり早い時点から、母親の献身的な看病ぶりをおして、マニユエルにたいする地上的な愛の感情を読みとっている。
- (5) 不幸への愛は、マリー・テレーズにおいても認められる。マリー・テレーズは、いっしょに住むようになったところのマニユエルにたいする感情について、こう述べている：「ふつう、わたしは従兄にたいして、無関心にかなり似かよった、漠然とした友情をいただいていた。しかし彼が気分が悪かったり、あるいは心配そうにしているのを感じるや否や、彼は不意に私の興味をそそのめるのだった。彼の心配事は、わたしのうちに善良で情愛のこもった本能を喚び起こし、その本能はわたしを幸せにするのだった」(一・三、二二七頁)。この文章では、マニユエルの苦しみ、マリー・テレーズの関心をひき、マニユエルに親切にしてやるといふ本能を喚びますことでマリー・テレーズを幸福にしたことが語られている。また、マリー・テレーズは、プラス夫人から顔の醜さを指摘されて悲嘆にくれるマニユエルを前にして、次のように反応している：「彼の悲しみは、わたしがその後幾度も感じたためによくおぼえている奇妙な感情を、内心に喚び起こした。できることならマニユエルにもっと醜く、もっと悲しんでいてもらいたいとわたしは願うのだった」(一・八、二四〇頁)。このような反応からは、他人の苦しみを見たいというサディ

スミ的な欲求が浮かび上がってくる。さらにマリー＝テレーズは、「わたしは、ひよわで傷ついた一切のものへの愛情を母から受け継いだのであろうか」(I・10、二五二頁)と自問している。ここでの、「ひよわで傷ついた一切のものへの愛情」は、不幸への愛という言葉によって言いかえられるであろう。

(6) また、『在り得たこと』の中で、ジョルジュ夫人は、ネーグルテールの城にやってきたマニユエルに、「どこへ行っても、あなたが信心深い青年だという噂がたっています。(…)あなたが最後には神学校に入るだろうと断言する人たちがさえているのですよ」(三二七頁)と言っている。『在り得たこと』はマニユエルが作成した物語であり、この言葉は想像上の人物が言ったものにはすぎないけれども、語り手マニユエルがそのように言わせている以上、過去において、マニユエルが熱烈な信仰を生きた時代があったことが想定される。

(7) マリー＝テレーズは次のように言っている。「マニユエルがわたしたちの家に住みついたとき、わたしは十四歳になっていた。しかしわたしの年齢は、(精神的にも肉体的にも)わたしと釣り合っていなかった。実際、わたしを見た人は、わたしを十六と思ったことだろう」(I・4、二二二頁)。マリー＝テレーズは、十四歳当時の自分が十六歳に見えたと証言している。当時のマリー＝テレーズは外見的には、少女というよりは若い娘に近かったと想像される。

(8) Jacques Petit: 《Notes》 pour *Le Visionnaire*, in *Julien Green, Œuvres complètes, Bibliothèque de la Pléiade*, Gallimard, t.II, p.1405.

(9) マニユエルは食堂にいる理由を、「ぼくは眠れないんだ」(I・8、二三九頁)とマリー＝テレーズに説明することになるが、彼が眠れないのは、欲望にかりたてられていたためであろう。

(10) 『容易な歲月』、『日記』第一巻、一九三二年六月二十三日、IV、一八一頁。

(11) また、『在り得たこと』の中には、「この女性(子爵夫人)から評価されることをもとめていたのに、彼女の気を悪くしたことをぼくは後悔するのだった」(三五二頁)という一文も見いだされる。マニユエルは子爵夫人から評価されることを望んでいる。この望みは、夫人への執着の感情をうかがわせる。

(12) 『内なる鏡』、『日記』第六巻、一九五四年五月九日、IV、一三三六頁。また、グリーンは、「エロティスムの当然の帰結が殺人であることは、私にはたしかかなことのように思われる。犯罪はある種の肉欲の過剰の延長にすぎない」(『見えないものに向かって』、『日記』第八巻、一九

五八年十月二十七日、V、一五二頁」と述べ、「エロティスムの最高の結末はただ単なる殺人である」（同右、一九六六年十月十八日、V、四〇九頁）とも言っている。

(13) ミシエール・ラクロの前掲書、第一巻、二五七頁。

(14) 従来の研究では、子爵夫人はプラス夫人に対応する人物であるとする見方が優勢である。アントワヌ・フォンガロは、子爵夫人が「マニユエルの想像力によってデフォルメされた、伯母プラス夫人の複製」（Antoine Fongaro : *L'Existence dans les romans de Julien Green*, Angelo Signorelli, Roma, 1954, p. 135）であるとみなしているし、ジャン・クロード・ジヨワは子爵夫人のことを「別名プラス夫人」（Jean-Claude Joye : *Julien Green et le monde de la fatalité*, Arnaud Druck, Bern, 1964, p. 103）と言っている。さらにニコラス・コスティスは、「この横柄な女性〔子爵夫人〕はマニユエルの想像力の中の彼女の存在の起源を、プラス夫人に負っている」（Nicholas Kostis : *The Exorcism of Sex and Death in Julien Green's novels*, Mouton, 1973, p. 73）と述べている。たしかにプラス夫人と子爵夫人とは、マニユエルにたいしてサディズム的態度をとるという点で類似性を有している。また、子爵夫人は、ジャック・プチも言うように、マリー・テレーズとくらべて「より年上であり、より美しく、より知的」（Jacques Petit : *Julien Green, « l'homme qui venait d'ailleurs »*, Desclée de Brouwer, 1969, p. 151）であるがゆえに、マリー・テレーズとは違ったタイプの女性である。しかし子爵夫人は、マニユエルの欲望の対象・結晶であるという点において、マリー・テレーズに照応する人物であるともみなすべきだと思われる。

(15) 第二部第五章の終わり近くには、マニユエルの手記の中に、マニユエルが夢想の世界に逃亡する事情を第三者の語り手が語った、十行のイタリアック体の文章が挿入されている。引用文はその文章の一部である。

(16) 『容易な歳月』、『日記』第一巻、IV、二一八頁。

(17) 同右、IV、二三一頁。

(18) 同右、一九三四年七月三十日、IV、三二六頁。

(19) 同右、IV、二一八頁。

第二章 死の魅惑と恐怖

ここまで、『幻を追う人』を欲望の世界とみなし、マニユエルをはじめとする作中人物たちの欲望とのかかわりのもとに作品を読解してきた。しかしながら、『幻を追う人』は、欲望とともに死を中心主題としており、それゆえ、死の想念とか、死の恐怖もしくは死の魅惑といった観点から作品を検討することが是非とも必要な課題となる。死の主題が全面的に開花するのは、マニユエルの作成した物語『在り得たこと』においてである。だが残りの部分においても、死の主題は萌芽的あるいは伏線的に見られる。そこで『在り得たこと』を死の主題との関連で分析する前に、それ以外の部分を問題にすることからはじめたい。すなわち、現実生活において、マリー・II テレーズ、プラス夫人、マニユエルが人間の条件である死とどのようにかかわっているかをしらべておきたいのである。

一 マリー・II テレーズの死の想念

マリー・II テレーズの死への意識に関連して、語り手マリー・II テレーズが事件を語る時点と語られる事件が位置する時点とのあいだに時間的なへだたりがあるという点は重要だろう。作品において、もろもろの事件は時間的な順序に従って語られている。しかしマニユエルが語る第二部およびそこに挿入された『在り得たこと』がマニユエルの死の直前に書かれたと考えられるのに、マリー・II テレーズが語り手となる第一部と第三部は、いわばすべてが終わったあと、すなわちマニユエルやプラス夫人が世を去ったあとに語られている。第一部・第三部においては、語るへ私と語られるへ私とのあいだに乖離が見られる。この乖離は、語るへ私、つまり現在のマリー・II テレーズが信仰を喪失した人間であるのにたいして、語られるへ私、過去のマリー・II テレーズが修道生活を夢見るほど熱烈な

信仰を有していたという事実によって浮き彫りにされている。語り手マリー＝テレーズにとって、問題はここから生じる。語り手マリー＝テレーズは第一部で生前のマニユエルの苦悩を語るとともに、過去の自分の信仰を回顧する。だが現在、彼女は信仰をもたないがゆえに、過去の自分をとりもどすことができないし、過去を正確に再現することもできない。そして流れ去った時間が過去の自分を葬り去ってしまったという認識が、マリー＝テレーズに死の想念をもたらす。マリー＝テレーズは第一部第九章において、信仰に燃えていた少女時代を思い出しながら、次のように書いている。

わたしがそうであった昔の人間はもはや存在しない。わたしが話しかけても、その昔の人間がわたしの話を聞くことはないだろう。すでにわたしは、この人間のことを、わたしが知りあった誰か、しかしもはやわたしじしんではない誰かのこのように考えている。

こうした言わば局・部・的・な・死・がわたしの心を凍らせる。人生とは、あ・り・と・あ・ら・ゆ・る・記・憶・の・全・体・的・な・消・滅・にいたるまでの滅・亡・の連続のようにわたしにはみえる。時折わたしは、自分がどうしてカトリック信者の数に入ることができたのだろうかと自問することがある。というのも、今のわたしのうちには、もつとも生ぬるい、もつとも穏健なキリスト教徒たらしめるだけのものさえも、もはや残ってはいないからだ。そしてこれらの頁を書いているのは、一人の信仰なき老女にすぎない(二四八頁)。

ここでは、信仰との関連で、記憶を喪失することが「局・部・的・な・死」であり、「滅・亡」(anéantissements)であることが言われている。そして死とは、「ありとあらゆる記憶の全体的な消滅」(la destruction générale de toute mémoire)であることが指摘されている。この考え方はマニユエルも共有するものである。マニユエルは『在り得たこと』のなかで、「精神から消えてゆくおのおのの時間は、虚・無・の・一・つ・の・証・し・の・よ・う・な・も・の・で・あ・り、死とは究極的には、ありとあらゆる記憶の絶対的かつ決定的な喪失にすぎない」(三二六頁)と語っている。ここで言う「虚無」(néant)とは死の類義語であろう。マリー＝テレーズにとってと同じく、マニユエルにとってもまた、記憶

の喪失Ⅱ忘却は死を意味し、逆に死とは記憶の完全な消滅にほかならない。こうした認識は作者グリーンのものである。グリーンは『日記』のなかで、「すでに自分の記憶から完全に消えた自分の人生の全部のことを考えるとき、私はあたかも私という人間の部分的な死が問題であるかのように身ぶるいする」と書き、「死ぬとは、(…)⁽¹⁾永遠に思い出の世界から去ることなのだ。そして死とは何よりもまず私たちの記憶の絶対的かつ決定的な喪失であるように思われる」と述べている⁽²⁾。このようにグリーンにおいては、記憶の喪失Ⅱ忘却と死とは結びつけて認識されている。

ところで、マリーⅡテレーズにおいて、死への意識が、過去の信仰を現在の自己の内心に見いだしえないという苦しい確認から芽生えているという点は注意をひく。マリーⅡテレーズの場合、記憶の喪失だけではなく、信仰の喪失、いわば失樂園の体験が死の想念をもたらしている。とすれば、『幻を追う人』において、死(の世界)は信仰(の世界)と対立するかたちで開示されていることになる。事実、この小説では、第一部第五章までは、マリーⅡテレーズの修道生活へのあこがれ、およびこの生活のくわだてと挫折が主として物語られている。作品は構成的にみて信仰の世界をまずは提示している。マリーⅡテレーズが官能にめざめ、それに呼応するかたちで、マニエールが欲望に支配されて登場するのは第一部第六章であり、死の主題が作品の前面を占めるのは、『在り得たこと』においてである。したがって、『幻を追う人』において、へ欲望Ⅴとともにへ死Ⅴは、へ信仰Ⅴと対立・対峙するかたちで置かれているといえよう。作品のこの構造は作者グリーンの内的世界をいくらかかきま見せているかもしれない。この小説を執筆していたころ、グリーンはカトリック教会と絶縁していた。一九二九年以後、ありとあらゆる宗教的実践を放棄していた。教会とのへだたりは必ずしも不信仰を意味しない。しかしそれでも信仰の衰えをうかがわせるものであろう。死の想念は、この信仰の衰えと密接に関係している。グリーンは当時、信仰にあこがれていたとしても、信仰によって生きていたとはけっしてみなせないがゆえに、死の問題に直面し、死ぬことを運命づけられた人間の現実と真正面から向きあうことを余儀なくされたと考えられる。へ信仰Ⅴと対立するかたちでへ死Ⅴが置かれているという作品の構造と同様に、マリーⅡテレーズの死の想念は、執筆当時のこうした経緯^{いんぎょう}を反映している。

二 プラス夫人の不幸への愛と死への歩み

(一) プラス夫人の不幸への愛と死への歩み

プラス夫人の在り方は、欲望だけでなく死の主題とのかかわりのもとでも理解することができるよう思われる。プラス夫人の在り方は一言でいえば、不幸への愛という言葉によって特徴づけられた。不幸な結婚をしたプラス夫人はマリー・II テレーズやマニユエルにたいしてサディスム的態度をとることで、自らの不幸への報復をこころみていた。夫人のサディスム的態度は抑圧された欲望の所産である。しかしそれはまた他者を自らの不幸の道連れにするためのいとなみでもあろう。ここからうかがえるように、プラス夫人は生きるよろこび・幸福をまったく享受していない。プラス夫人は生きながらにしてすでに死んでおり、そしてまた、幸福な生ではなく、自らの不幸を完結する死に向かってひたすら歩みをつづけているのではないだろうか。

プラス夫人の生活を死に方向づけるきっかけとなるのは、肉親の死である。夫人は妹のリーズ、かつて愛したエマニユエル、そして夫のプラス大佐というように、肉親の相次ぐ死に立ち会う。この体験はプラス夫人に、自らの死をも意識させ、遠からず訪れるであろう死にたいして心の準備をすることをうながすのではないだろうか。この点にかんして、マリー・II テレーズは、母親の妹リーズの喪に服したときのことを振り返って、こう語っている。

母が自分の妹の喪に服したとき、私は十二歳になるかならずだったが、わたしは、母が二度と脱ぐことはない服装をまとったのだという予感をいだいた。またたく間に母は変わった。母がへ別人になったと言いたいのではない。それどころか母はまさにへ自分自身へになったのだ(Ⅰ・3、二一六頁)。

この一節では、プラス夫人が喪服を着ることによって、「自分自身」になったこと 言いかえれば 自己のアイデンティティを見いだしたことが語られている。プラス夫人にとって、死は自分の脳裡を支配する大きな、というより、唯一の現実なのである。「二度と脱ぐことはない」とマリー・テレーズが言う、プラス夫人の喪服は、夫人が死と対峙したこと、今後、自らの死にそなえて生きていくであろうことを示唆しているように思われる。プラス夫人における関心事は、もはやいかに生きるかではなく、いかにして死ぬかという点に存するのである。

マニユエルにたいする、プラス夫人の献身的な看病も、このような脈絡のなかで把握することができる。プラス夫人の看病のうちに、不幸への愛とともに、他人の苦しみを見たいという願い、抑圧された欲望の動きが認められた。けれども、肉体的な欲求だけでなく死の徴候を見たいという欲求もまた、プラス夫人をうごかしているのではないだろうか。もちろん、プラス夫人はマニユエルの病いからの恢復を望んでいないわけではない。しかし、「伯母の家では、病人が王様だった」（Ⅱ・2、二六九頁）とマニユエルが言うように、プラス夫人が健康ではなく、病氣そのものを偏愛していることもまた事実なのだ。この偏愛は、プラス夫人が死に魅せられていることとも関係しているのではないだろうか。プラス夫人は、マニユエルの病いの悪化を目のあたりにすることで、死の神秘にせまり、まさしく自分自身の死が問題であるかのような感覚をいだいているのだと思われる。このことは、マニユエルが手記を書きおえたあと、すなわちマニユエルの病いが悪化してから、プラス夫人の服装が変化するという点からうかがうことができる。

しばらく前から、母（マリー・テレーズの母）は服装に気を配り、まるで訪問客をむかえるかのような服を着ていた。胸には黒玉をちりばめ、腹や脇腹をしめつける縞子のドレスをまとして、くつろいでいるように装っていた（Ⅲ、三八三頁）。

プラス夫人は客をもてなすかのような晴れ着をまとして、マニユエルを世話している。この身なりは、不幸への愛が高じて、プラス夫人がマニユエルにたいして密かな愛の欲求をいだくにいたったことに起因しているだろう。だが同時に、夫人のいで立ちの変化は、マニユエルの最期が近づきつつあることともかかわっている。プラス夫人はマニユエルの死を己れの死と重ね合わせて考えているよう

に思われる。夫人の晴れ着はマニユエルの死とともに、自らの死の訪れにそなえた衣裳であるとも解することができる。

プラス夫人は娘のマリー・テレーズを寄宿生にして、マニユエルの看病に専念する。クリスマス前の休暇でマリー・テレーズが三ヶ月ぶりで帰宅する。このときの母親のすがたを、マリー・テレーズは報告している。

いっ・そう丸くな・った背・中が、齡・の・疲・れ・を・際・立・た・せ・て・い・た。母は一段と小さくなり、恐ろしさも減り、身がまえる様子も少なくなっているように見えた。そしてわたしは生まれてはじめて、恐怖の念をいだくことなしに母を眺めるのだった（Ⅲ、三八四・三八

五頁）。

プラス夫人は、三ヶ月の不在ののちにもどってきた娘を前にして、かつての威厳を喪失している。いったいどうしてマリー・テレーズは、「生まれてはじめて、恐怖の念をいだくことなしに母を眺める」ことができたのであろうか。一つには、マリー・テレーズが家を離れ、外の空気を吸うことで、大きく成長し、プラス夫人をより冷静に、醒めた目で観察することができるようになったからである。しかしもうひとつの理由として、プラス夫人がマニユエルの死への接近に比例して、衰弱・老化していったという点が考えられるのではないだろうか。「いっ・そう丸くな・った背・中が、齡・の・疲・れ・を・際・立・た・せ・て・い・た」という初めの一文は、プラス夫人の衰弱と老いを如実に示している。この衰弱と老いは、ただ単に看病の疲れによるものであるだけでなく、プラス夫人が死の間際にあるマニユエルと一体化しているためでもある。プラス夫人にとって、マニユエルの死が己れの死を意味することはここからもわかる。

このことは、マニユエルの夭折ののちの、プラス夫人の変貌ぶりからもたしかめることができる。マリー・テレーズは、マニユエルが世を去ってから数年が経過したあとの母親のすがたを伝えている。

甥の死は、母をひどく打ちのめした。マニユエルがもしわたしたちのところへ戻ることができたとしたら、自分を愛してくれた唯一の女性をおそらく見わけられなかったであろう。病いと悲しみとに打ちひしがれて、母の顔は痩せおとろえて黄色になり、人

びとにたいして、もう老女のおどどとした視線しか上げることにはなかった(Ⅲ、三九〇・三九一頁)。

プラス夫人の変貌は、マニユエルが「見わけられなかったであろう」ほどに、夫人が甥の死に打ちのめされている点から明らかである。また「母の顔は痩せおとろえて黄色になり」という描写は、プラス夫人が生氣をうしない、すっかり老いさらばえてしまったことをひき立たせている。このような夫人の変貌は、たしかに愛の対象に先立たれたことに原因している。しかし、プラス夫人が年老いるのは、マニユエルが死ぬことによって夫人もまたある意味で死んだからでもある。プラス夫人が「老女のおどどとした視線」しか人びとにそそげないという事実は、夫人の中に存在した誇り高い女性がマニユエルの他界によって死んだということを示唆している。晩年のマニユエルは、プラス夫人にとって、愛の対象としての他者というより、死と対峙する自己の分身のごとき存在としてあつたのではないだろうか。極論すれば、マニユエルはプラス夫人の身代わりとなって、死とたたかい、息をひきとったのである。分身の死は自らの死でもある。自らの死を体験したからこそ、プラス夫人はマニユエルの死去のち、完璧なまでに変貌したのだと受けとれる。

(2) プラス夫人の信仰的立場

プラス夫人の不幸への愛、とくにマニユエルにたいする献身的な看病を瞥見した。プラス夫人の人生とは、死に向かつての漸進的な歩みにほかならない。プラス夫人は死に魅惑され、死となれ合って生き、そしてマニユエルの他界によって、ついに死と同化し、生きる屍と化したといえよう。ではいったいなぜ、プラス夫人はこのような生の軌跡をたどるのか。このことを考えるために、プラス夫人の信仰的立場を検討したい。

プラス夫人は毎日曜日の礼拝を欠かさないし、教会の慈善事業ともかかわっている。そんな母親のことを、マリー・II テレーズは、「彼女は信心深かった」(Ⅰ・2、二二三頁)と言っているし、修道生活の断念を余儀なくされたとき、「でもお母さんは貧しい人たちに施し物をなさる。でもお祈りもなさる。(…)懺悔をなさるし、聖体拝受もなさる」(Ⅰ・5、一三三二・一三三三頁)と考えている。また、プラス夫人は、マニユエルが夜の散歩のあと病いにふせったとき、徹夜の看病をする。そのときの彼女の行動を、マリー・II テ

レーズはこう振り返っている。

(…)夜になると、母は椅子に腰かけてじっとしていた。そして手には数珠をもっていた。お祈りをしない時は、いつものセーターを手に取って、貧しい子どものために編むのだった(Ⅰ・10、二五二頁)。

このようにプラス夫人は祈りと慈善的な行為に時をついやしている。さらに第一部第六章には、プラス夫人が夕食の折、甥のマニユエルに食前の祈りをとなえさせているところがある(二三五頁)。こうした一連の記述を読むと、プラス夫人は宗教的な実践をおこなわない模範的な信者であるように見える。事実、マリー・アルフォンシーヌ修道院長は、プラス夫人の魂を「かくも信心深い魂」(Ⅰ・5、二二七頁)といったように形容している。プラス夫人は町の人びとから敬虔な信仰の持ち主だと目されている。

とはいえ、プラス夫人は真正銘の信仰によって生きているのであろうか。不幸への愛は信仰と両立するものなのであろうか。信仰とは心の平安とか幸福をもたらすものであるはずなのに、プラス夫人は自分が幸福であるなどといった意識はいささかもいだいていない。それどころか、サディスム的態度をとることによって、他者を自らの不幸の道連れにしようとさえする。プラス夫人の信仰的立場を考えるうえで、彼女が娘マリー・アルフォンシーヌ修道院長が言っているように、「娘の神聖な決意に大賛成する」(Ⅰ・5、二二七頁)はずだし、娘の願いを祝福するはずである。ところが、プラス夫人は娘の願いを少しもよろこばない。「わたしに母に、宗教に身をささげたいと言った日、彼女はわたしのまなざしの中に読みとった幸福の約束に不安になったのだ」(Ⅰ・5、二二三頁)とマリー・アルフォンシーヌは説明している。プラス夫人は不幸意識をいだくがゆえに、娘の幸福の可能性を目的に不安をいだき、それを粉砕してしまうのだ。ここから、プラス夫人の信仰は、外見的にいかにも模範的に見えようとも、実際は形式的なものではなく、欺瞞にみちたものであると断定することができる。プラス夫人の内面では、真の信仰は完全に欠落しているのである。

プラス夫人の、死に向かつての漸進的な歩みとしての生の軌跡は、こうした、真の信仰の欠如とのかかわりで了解することができる。というのも、キリスト教は死後の復活、永遠の生を説く思想であるからだ。それゆえ、ほんもののカトリック信仰を有する者は、死を恐れる必要はないし、やすらかに息をひきとることもできる。しかし信仰がいつわりのものであるとき、もしくは信仰をもたないとき、人は死の現実を意識し、死と対峙せざるを得ない。人間に課せられた条件である死の問題に直面することを強いられるのだ。これがまさしくプラス夫人の場合だと思われる。プラス夫人が死に魅せられ、死に向かつて歩みつづけるのは、永遠の生を信じないがゆえに、死ぬことを運命づけられているという人間の条件が、重たい、深刻な事実として夫人の意識のうえにのしかかっているからであろう。プラス夫人の生の軌跡をとおして、死の恐怖とはいえないまでも、人間の条件の自覚に由来する存在の不安、換言すれば、死への不安をかいま見ることができないのではないだろうか。あるいは逆に言って、こうした不安を内心にかかえるからこそ、プラス夫人は死に向かつての歩みをつづけるのではないだろうか。

(3) グリーンの作品群における不幸への愛

ところで、不幸を愛する人物は、グリーンの作品群のなかでプラス夫人ひとりではない。グリーンの作品においては、不幸を愛する人物は典型的な人間としてしばしば描かれている。『幻を追う人』から話がされるけれども、プラス夫人の在り方をいっそうよく理解するために、少しこのことを説明しておきたい。たとえば『もうひとつの眠り』の中の語り手ドゥニの母親は、不幸への愛をいだけ人物の一人に数えられる。語り手ドゥニは母親のことに言いおよんで、「不幸にたいする彼女の愛情」(I、八二三頁)を指摘し、「いかなる陽気さも、彼女には胡散くさく思えるのだった」(I、八二五頁)と述べている。これらの言葉から、ドゥニの母親が不幸への愛を生きていることがわかる。

『レヴィアタン』のグロジョルジュ夫人は、不幸を愛する代表的な人物であろう。グロジョルジュ夫人は、かんばしい学習成果をあげられない息子アンドレの頬を荒々しくたたき、顔に「若さの蘇り」をもたらす「食欲さと快楽の表情」を腫に浮かべながら、一心不乱に息子を折檻する(I、六一六頁)。夫人の行為は教育的配慮からのものというより、不幸への愛の一環としてのサディズム的な欲

求の産物であろう。グロジョルジュ夫人の不幸への愛あるいはサディスム的態度は、主人公ゲレによって顔を傷つけられたアンジェールにたいするふるまいからも見てとれる。新たな仕事をさがすために訪ねてきたアンジェールがショールで顔をかくしているのを見て、グロジョルジュ夫人は無理やりショールをとらせ、アンジェールの傷ついた顔を街灯のあかりに照らしてながめる。さらに、「奥さんは、この傷跡が消えるとお思いですか」と問うアンジェールにたいして、夫人は「いいえ」と答え、「何も期待してはいけないのよ。けっして期待したりしてはいけないのよ」と言いはなつて、アンジェールを絶望させる（I、七四九頁）。こうした言動からは、他人の苦しみや不幸を楽しむグロジョルジュ夫人の在り方が浮かび上がってくる。作品の終わり近くで、老人を殺害したために警察から追われ、助けを求めにきたゲレを、グロジョルジュ夫人は鍵をかけて部屋に閉じ込める。この行為も、不幸への愛ないしサディスム的欲求のあらわれとみなすことができる。

『アドリエヌ・ムジュラ』におけるアントワーヌ・ムジュラ氏も、不幸を愛する人物のひとりである。この小説は、モルクール医師にたいする、女主人公アドリエヌの不可能な愛を軸として進展する。アドリエヌは散歩中、路上で偶然見かけたモルクール医師に愛の情熱をいだき、孤独と倦怠からの脱出の糸口をこの愛にもとめる。アドリエヌはモルクール医師の存在をたしかめ、感じるために、夜になるとひそかに外出し、医師の住む白壁の館のあたりをうろつく。だが彼女の父親のムジュラ氏は、習慣に固執し、日常生活にすこしでも変化がきたされると我慢できない性格の持ち主であり、支配欲にかられた暴君でもある。それでアドリエヌの挙動を不審に思ったムジュラ氏は彼女にはげしく詰問し、誰かを愛していることを白状させる。しかし愛する男の名前を聞き出せないため、ついには夜の外出を禁じてしまう。ムジュラ氏の横暴さは、アドリエヌの姉ジェルメーヌにたいしても発揮されることになる。ジェルメーヌは胸の病いにおかされておき、ベッドから離れられなくなる。けれども、習慣にこだわるムジュラ氏は、ジェルメーヌの病いの悪化を認めようとはせず、ジェルメーヌを無理やりベッドからひきずり出し、食堂においてこきせて、一緒に食事をする。ムジュラ氏の暴君性はジェルメーヌの出奔ののちいやます。アドリエヌは、ジェルメーヌの部屋の窓から、愛する医師の住む白い館を思う存分ながめられるという理由から、姉の家出に手を貸した。ムジュラ氏は、アドリエヌがジェルメーヌと共謀したことを察知し、はげしい怒りの発作のなかで、アドリエヌの頬をなぐりつける。アドリエヌの「恐怖」と「無力な憎しみのまなざし」に刺戟され、

「興奮」して、アドリエヌを責めさいなみ、虐待する（I、三九〇頁）。このようなムジュラ氏の一連のふるまいからは、他人の苦しみと不幸にふれ、それを楽しみたいというサディズム的欲求が読みとれる。このサディズム的欲求は不幸への愛と等価なものである。

『モンシシネール』のなかのフレッチャー夫人の在り方も、不幸への愛とのかかわりで理解することができる。フレッチャー夫人は徹底した儉約、吝嗇によって、家族、すなわち娘のエミリーと母親のエリオット夫人とを支配しようとする。フレッチャー夫人は真冬になっても暖炉で燃やす薪を可能なかぎり節約し、娘や母につらい思いをさせる。フレッチャー夫人の吝嗇は、破産することから一家をまもることを口実としている。しかしそれはあくまで口実であって、フレッチャー夫人は「まさしく情念の坂をころげ落ちるように、好みから節約していた」（I、九三頁）と語られているように、彼女の吝嗇は情熱のごときものと化している。この吝嗇は、『アドリエヌ・ムジュラ』におけるムジュラ氏の習慣への執着と同じく、支配欲と一体になっており、肉親に苦しみを与えたいという欲求に裏打ちされているように思われる。サディズム的欲求あるいは不幸への愛とわがちがたく混じり合っていると解することができる。

以上、不幸を愛する人物として、『もうひとつの眠り』の中の語り手ドゥニの母親、『レヴィアタン』のグロジュールジュ夫人、『アドリエヌ・ムジュラ』におけるムジュラ氏、『モンシシネール』のフレッチャー夫人を挙げた。『幻を追う人』のプラス夫人はグリーン作品の中で孤立した存在ではなく、こうした一連の人物たちのグループに属している。

さて今度は、不幸を愛するこれら一連の人物たちの内心を支配するものが何であるのかについて考察したい。彼らの不幸への愛もしくはサディズム的欲求はもちろん抑圧された欲望のあらわれであろう。しかし彼らをうごかすのは、肉体的欲望だけであろうか。この点にかんして、ジャック・プッチャは、『モンシシネール』の三人の人物たち、すなわちフレッチャー夫人、エミリー、エリオット夫人を論じた文章の中で、こう述べている。

これら三人の女たちのありとあらゆる関係、ありとあらゆる感情は、不安に立脚しているようにみえる。吝嗇でさえ、そこからのがれるためのむなしいこころみにすぎない。⁽⁵⁾

ジャック・プチは、『モンシシネール』の人物たちの内心を「不安」(angoisse)が支配していることを指摘したうえで、フレッチャー夫人の吝嗇を、この「不安」からの逃亡のころみと解釈している。ここで言われている「不安」とは、この世に存在することの不安であり、死ぬことを運命づけられた人間の条件への漠然とした意識に由来するものであろう。

また、アンドレ・ブランシエは『アドリエヌ・ムジュラ』におけるムジュラ氏の習慣への固執を問題にし、次のように言っている。

娘たちの一人が神聖なる時間割を変更させたり、あつかましくも病気になるったりした途端、ムジュラ氏の内心に、どうしてあんな病的な怒りが生じるのか。それは、秩序というものが彼によって聖なるものの水準に事実上高められてはいるものの、このいつわりの絶対にはんのわずかの裂け目が生じて、その絶対があるがままのもの、すなわち相対的なものにみえてしまうからだ。神秘は、これを拒む者の生に様々な入口をおって忍び込みうるが、その入口をふさごうとするあの執拗さはここから生じる。ムジュラ氏のかくも《幸福な》生活にも、(…)漠然と認識されている不安が隠れていて、その不安は絶え間なく抑えつけても、そのたびに蘇ってくるのである。

アンドレ・ブランシエもまた、「不安」(angoisse)というキーワードを用いて、ムジュラ氏のふるまいを説明している。引用文の途中で言われている、「神秘」(mystère)の「入口をふさごうとするあの執拗さ」とは、ムジュラ氏の習慣へのこだわりを指し示す。そしてムジュラ氏が娘たちを日常生活の習慣に服従させようとするのは、習慣によって確立された秩序が絶対的なものではなく、相対的なものであることを否認したいからであり、「神秘」の侵入をふせぎたいからである、とブランシエは考えるのである。「神秘」とは、人生の不可解さのことであり、この世で生き、そして死ぬという人間の条件を直視したときに認識されるものであり、存在の不安をもたらしものであろう。ブランシエの言う「不安」もまた、存在の不安を意味し、「死の影のもとに」^(?)「生きなければならぬこととかかわっている。ムジュラ氏のサディスム的態度あるいは不幸への愛は、フレッチャー夫人の場合と同様に、この不安からのがれるための、

もしくはこの不安を忘却するための手段としてある。

『レヴィアタン』のグロジョルジュ夫人もまた、不安をいだいている。作中、次のような記述が見られる。

世間の不注意な人びとの目には、どれだけ冷静でいかめしく見えようとも、彼女(グロジョルジュ夫人)は不安そのものであり、うわべはとてもしちんとした生活のかけに、反抗的な心を隠し持っていた。(…)

(…)
へほかの人はどのようにして生きているのだろうか?と彼女はしばしば自らに問うのだった。へ週から週へ、一年の終わりにまで行きつくために、あの人たちはどのようにしているのだろうか? (I、七一〇頁)

ここでは、「彼女は不安そのものであり」と語られているように、グロジョルジュ夫人の「不安」(inquietude)が問題になっている。夫人の「不安」は、「ほかの人はどのようにして生きているのだろうか?」という自問からもうかがうことができる。この「不安」は、夫人の孤独や倦怠の感情とも関係しているけれども、まずもって、フレッチャー夫人、ムジュラ氏から認められたような、存在の不安であろう。「一年の終わりにまで行きつくために」という言い方の中の「一年」(l'année)という語は「人生」(la vie)という語によって読みかえることができるように思われる。そして「不安」と対立するかたちで、「反抗的な心」(un cœur rebelle)がグロジョルジュ夫人の内心を支配していることは注目すべきであろう。先に見たグロジョルジュ夫人のサディスム的態度は、この「反抗的な心」の具体的なあらわれにほかならない。したがって、グロジョルジュ夫人の不幸への愛もまた、自らをとらえる存在の不安への反逆のころみとしてあり、存在の不安からの逃亡の願いと表裏をなしている。

フレッチャー夫人、ムジュラ氏、そしてグロジョルジュ夫人の内心における存在の不安を指摘し、彼らのサディズム的欲求ないし不幸への愛が、この不安からの脱出の願いに根ざしていることを論証してきた。アントワヌ・フォンガロは、グリーンンの作中人物たちのサディスムを論じ、「実際、ジュリアン・グリーンンの小説の中で、サディスムは、意識的にであれ無意識的にであれ、人物たちの魂

をさいなんでいる存在の不安の外的な投影、行為による顕現のように見える」と述べている。フォンガロがみなしているように、グリーン作品におけるサディズムは、人物たちの内心を支配する存在の不安のあらわれである。それゆえ、グリーン作品において、不幸への愛は存在の不安の対立項としてであると解釈することができる。

もつとも、存在の不安は、不幸を愛する人物だけがいだく感情ではない。グリーン作中人物の大半が共有する感情でもあろう。序論でも引用したが、グリーンは一九四九年の『日記』のなかで、自分の創作作品にかんする批評をおこなっている。

実際、私のすべての本の中には、非宗教的な人間ならけっして感じたことのないような深い不安が横たわっていると思う。私は自分の本をカトリック小説にしようとは努めない。そんなことをすれば私はぞっとしてしまうことだろう。だが私のすべての本は、世間に受け入れられているふつうの宗教性から、どれだけへだたっているように見えようと、それでもやはり本質において宗教的であると思う。作中人物たちの不安と孤独はほとんどつねに、あらゆるかたちにおいて、この世にあることの恐怖と私が呼んだと思うものに還元される……。

グリーンは、自己のすべての作品に横たわっている「深い不安」(une inquietude profonde)を指摘している。この「不安」は「非宗教的な人間」がいだかないような感情であり、それゆえ、「不安」を表出しているという点で、自分の作品は「宗教的」だと、グリーンはみなしている。それからグリーンは、作中人物たちをとらえる「不安」や「孤独」が「この世にあることの恐怖」(l'effroi d'être au monde)に還元されると述べている。ここで言われている「この世にあることの恐怖」が、ひとりで生き、ひとりで死ぬという人間の条件の自覚にもとづく感情であることは言を俟たない。グリーン作品とは、存在の不安や「この世にあることの恐怖」をありとあらゆるかたちのもとに描出したものであり、不幸への愛は、恋愛とか夢想とか犯罪とか発狂とか自殺などといった、作品の他の要素と同様に、存在の不安とか恐怖を浮かびあがらせる形態のひとつにすぎないのである。

とはいへ、不幸への愛は、存在の不安や恐怖を鮮明に際立たせるものであろう。この点に関連して、一九三九年におけるグリーンのカトリック教会への決定的復帰以前に構想された、初期（第一期）・中期（第二期）の小説のなかに、不幸を愛する人物たちが数多く見いだされるという事実を指摘しておきたい。一九五〇年に刊行された『モイラ』以後の、後期（第三期）の作品群においては、不幸を愛する人物、サディズム的態度を見せる人物はほとんど登場しない。かろうじて『他者』（一九七一）のマドモアゼル・オットという人物が、初期・中期の作品における、不幸を愛する一連の人物たちの延長上に位置づけられる程度なのである。この事実の中に、グリーンの信仰的立場の影響を看取することは可能であろう。実際、カトリックの揺るぎない信仰をもつとき、すでに述べたように、それは来世、死後の復活を信じることでもあるのだから、存在の不安をいなくする必要はないし、死への不安、死の恐怖は弱まる。後期の作品群において、存在の不安が表現されていないわけではない。⁽¹⁰⁾しかし不幸を愛する人物がほとんどいないのはこのせいであろう。これにたいして、初期・中期の小説を構想していた時期、すなわち一九二〇年代から三〇年代にかけて、グリーンはカトリック教会から離れていた。この時期、グリーンは決定的な信仰をもたないがゆえに、死ぬという人間の条件を強く意識し、存在の不安・恐怖に絶えずかられていたのだと思われる。だからこそ、初期・中期の作品において、不幸を愛する人物たちが数多く描かれているのであろう。不幸を愛する人物たちは、存在の不安・恐怖に支配され、死に魅せられた作者グリーンの内面をあざやかに形象化している。『幻を追う人』のプラス夫人の在り方も、このような文脈のなかでとらえられる。プラス夫人は、作品執筆当時のグリーンの存在の不安を反映している。グリーンは『幻を追う人』を制作中、『日記』のなかで、「マニユエルの人生のさいごの日々は、一種の死の修業とならねばならないだろう」と書いて⁽¹¹⁾いる。プラス夫人の人生もまた、「マニユエルのさいごの日々」と同じように、「一種の死の修業」とみなされる。

三 マニユエルの死の想念と恐怖

(1) マニユエルの病いの悪化

次に、マニユエルが『在り得たこと』を作成するに至るまでの、彼の死の想念についてしらべることにしてしよう。マニユエルの死の想念は彼の胸の病いの悪化とともに生じることになる。そこでまず、マニユエルの病いの進行状況をまとめておくことにしたい。マニユエルは、マリーIIテレーズを夜の散歩に連れ出した翌日から病いにたおれ、二週間、高熱のために床につく。この病いは、マニユエルが病弱にもかかわらず、肉体の誘惑に身をさらしたことに起因している。すでに見たように、夜の散歩の際、マニユエルは純粹志向をもつがゆえに、マリーIIテレーズへの欲望に支配されつつも、この欲望とたたかわなければならなかった。欲望とたたかうこと、それは苦しみの体験であり、当然のことながら、精神的な疲弊だけでなく肉体的な衰弱をもまねく。マリーIIテレーズは、「彼(マニユエル)といっしょに屋敷跡に行くのではなく、わたしが自分の部屋にとどまっていたら、彼は病気になっただろうか。わたしは無知であつたけれども、自分がこの男を、ほとんど彼の力の限度以上に試みてしまったことを漠然と理解していた」(I・10、二五三頁)と語っている。夜の散歩はマニユエルにとって、自分の体力の限界を越えた試練の機会であつたのである。

マニユエルの病いは、マリーIIテレーズがガ口神父との約束どおり、夜の散歩のことをプラス夫人に打ち明けた日に悪化する。この日、マリーIIテレーズが母親と二人きりで話しているあいだ、料理女のレオンティーヌはマニユエルに、過日の夜、マリーIIテレーズといっしょに外出するところを目撃したと伝え、次のように言っている。

(…)あの時、あなたはすでに熱がおありになつたのですよ。さもなければ、真夜中にお嬢さまと外出なされたりはされなかつ

たでしょう。でもお嬢さまはあなたのあとについて行くべきじゃなかった。これは理にかなったことではありません。マニユエルさま、あなたのほうは熱がおありになったのだから、話が別でございますよ。もし奥様にたずねられたら、そうお答えになればよろしい。何も思い出せないということもあり得るでしょう（Ⅱ・1、二六四頁）。

レオンティーンヌはマニユエルに、プラス夫人から夜の散歩のことを訊かれたときの対応を教唆することによって、マニユエルを窮地から救おうとしている。とはいえ、ここで重要なことは、レオンティーンヌがマニユエルをたずねようとしているという点じたいではない。そうではなく、夜の散歩の事実が、プラス夫人から問いただされる前に、すでに秘密ではなくなっているということ、マニユエルが否応なく知らされるといふ点が大事なのである。レオンティーンヌの存在、あるいはレオンティーンヌによる秘密の暴露は、マニユエルの内心に宿る良心の呵責と照応し、罪悪感をつのらせる役割をはたしているように思われる。

マニユエルの有罪性の意識はこのあと、プラス夫人からたずねられたとき、徹頭徹尾しらばくれることによつていやますことになる。マニユエルは、「本当なのかい？」（Ⅱ・1、二六六頁）と問うプラス夫人にたいして、まず理解できないふりをし、それから、体の調子がよくないことを示すために、「偽善的な、しかしよく計算された仕草」（二六六頁）で、ハンカチを口のところへもっていったりする。そして真夜中に屋敷跡へマリーIIテレーズと行ったかどうか訊かれると、マニユエルは驚いたふりをして首を横に振り、否認する。プラス夫人は、マリーIIテレーズが嘘をついたと思ひこんで、はげしい怒りに身をゆだねる。娘のからだを揺さぶりながら、娘の偽善的な宗教を非難し、毒づく言葉を吐きつづける。この間、マニユエルは終始、沈黙をまもる。

へ一言でも口をきけば、ぼくはもう駄目だ。一言でも口をきけば、白状してしまう。祈りのように繰り返していたこの言葉は、ぼくを支えてくれた。ぼくは、じつとしままでいられる力と、口を開かないでいるための力とをその言葉から汲みとるのだった

（Ⅱ・1、二六八頁）。

ぼくはもう駄目だ。一言でも口をきけば、白状してしまう」に対応する原文、《Si je dis un mot, je me perds, si je dis un mot, j'avoue.》には少し注意を払うべきである。まず、主節・結果節が *je me perdrai, j'avouerai* といった単純未来形ではなく、*je me perds, j'avoue* といったように現在形で語られていることが目をひく。主節の内容は未来のことであり、単純未来形で表現することも可能であるのに、現在形が使われている。それはなぜか。へもう駄目だへ白状するへという事行が、絶対確実なこととして認識されているからだと思われる。単純未来形は推量の意味をもち、その分だけ確実性が弱まるのである。そして事行の確実性を保証する現在形の使用から、マニユエルが危機的な状況に置かれていることを十二分に承知していることがうかがえる。また、《Si je disais un mot, je me perdrais, si je disais un mot, j'avouerais.》というように条件節が直説法半過去、主節・結果節が条件法現在で言われていることも、一考を要する。未来の仮定を直説法半過去で言う場合は、仮定された事行、ここではへ一言でも口をきくへという行為の実現可能性が低いときである。そういうことはおそらくないけれども、もしそういうことがあればといった意味あいをもたせて、仮定の文をたてるときに、直説法半過去を用いる。これにたいして、条件節に直説法現在を使う場合、仮定の事行の実現可能性は半過去の場合よりも高い。とすれば、*Si je dis un mot, …* というような直説法現在の使用は、マニユエルが「一言でも口をきく」という行為を実現可能なこととして認識していることをほのめかしている。さらに言えば、マニユエルが真相告白の衝動にかられていることを示唆しているのではないだろうか。マニユエルは一方では沈黙をまもることで危機をのがれようところみながらも、他方では、良心の呵責にかられて真実を語りたいう欲求にとらえられていると推測される。したがって、プラス夫人に嘘をつき、夫人がマリー＝テレーズに怒りをぶちまけているところを目のあたりにしながらも、沈黙をまもるといった欺瞞的な態度は、ますますマニユエルに有罪性の意識をつのらせる結果となる。事実、マニユエルは、マリー＝テレーズと夜の散歩に出かけたことをプラス夫人に否認する直前の心の動きを、次のように願みている。

ぼくは、(…)自分が犯しつつあるあやまちが、おそらくぼくの将来全体を拘束するものであることを理解した(Ⅱ・1、二六

マニユエルはプラス夫人を前にしての欺瞞的なふるまいを、自分の残りの人生を左右しかねない「あやまち」(Fall)と認識している。ここから、マニユエルの鮮烈な有罪性の意識を読みとることができる。このような有罪性の意識ないし良心の呵責は、言うまでもなく、精神的な苦悩を意味し、精神的な苦悩は当然、マニユエルのひ弱なからだにも影響をおよぼし、肉体的な衰弱をもたらす。マニユエルは、プラス夫人が娘のからだを荒々しく揺さぶりながら、怒りの言葉をぶちまける場面を振り返って、「この場面のはげしさがぼくを病気にしつづつあった。そのとき、ぼくは伯母の心をなだめるために、まさに話そうと、何でもよいから口にしようとしていたと思う」(Ⅱ・1、二六七頁)と書いている。この文章から、マニユエルが真相告白の欲求にかりたてられているという点とともに、「この場面のはげしさがぼくを病気にしつづつあった」とあるように、良心の呵責あるいは有罪性の意識が病いの悪化を招来していることが確認される。このあと、プラス夫人はマリー＝テレーズにたいして、マニユエルにあやまるように命じる。マニユエルが自分のほうに歩みよってくるマリー＝テレーズの脚に魅せられ、有罪感をいだきながらも、「悪しき欲望」にとらえられることはすでに述べた。この欲望もまた、マニユエルに苦しみを与えるがゆえに、彼の肉体的衰弱を助長する。第二部第一章のおわりの部分、マリー＝テレーズがマニユエルに謝罪するところを読むことにしよう。

——わたしのせいじゃないのよ、マニユエル。告解のとき、告白しなければならなかったの。すべてのことをママに言う義務を負わせられたの。

——もっと大きな声で！ とプラス夫人が言った。

——ごめんなさい、マニユエル。

ぼくは立ち上がろうとして身動きした。もしそうすることができたならば、ぼくは大声で叫んだだろう。そのときぼくの腕をと

って、ぼくがベッドの上に身を横たえるのを手伝ってくれたのは、伯母だっと思ふ。(二六八・二六九頁)。

マニユエルは、マリー・テレーズがあやまったあと、ベッドに身を横たえている。プラス夫人に欺瞞的な態度をとったことと、マリー・テレーズに欲望をいだいたことで、マニユエルは疲労し、消耗するのである。マニユエルは人に助けられてベッドに横たわる。しかも「伯母だっと思ふ」という言い方からわかるように、助けてくれた人が誰であるのかを定かに記憶していない。これらの事實は、マニユエルの疲労・消耗の度合いが極限状態にまで達していること、彼が肉体的に完全に衰弱していることを明示している。

こののち、マニユエルは病いの床につき、夜の散歩の一件はうやむやになる⁽¹³⁾。五日か六日後、マニユエルの体力は恢復する。勤め先の本屋の主であるエルネスト氏の催促もあって、マニユエルは勤めに出る。けれども、第二部第三章で述べられているように、時折店にやってくる、エルネスト氏の妹のアドモアゼル・ベルトから医者⁽¹⁴⁾に診察してもらうようすすめられる。マニユエルは、アドモアゼル・ベルトが紹介したブラール医師のところへ行く。医師は六ヶ月間の一切の労働を禁じる。そこでマニユエルはエルネスト氏の店での勤めをやめ、闘病生活にはいる。数週間が平穩のうちに過ぎ、病状は快方に向かう。そして外出できるほどまでに体力をとりもどした⁽¹⁵⁾ころ、マニユエルはマリー・テレーズと、家に遊びにきた彼女の友だちのポーリーヌとエドメ・ド・ガイアルデを連れて、ラ・コンブの森に散歩に出かける。

森の散歩が、欲望の体験であると同時に欲望とのたたかひの体験でもあるがゆえに、マニユエルの健康状態をそこねることは言を俟たない。問題は、このあとの人びとの反応である。森で目隠し鬼ごっこをしている折、マニユエルからからだをさわられたエドメは逃げ帰り、通りで出会ったサンクティス神父に自分のうけた仕打ちを打ち明ける。サンクティス神父は早速、プラス夫人の家を訪れ、森の中でのマニユエルのふるまいを非難する。プラス夫人は神父の話を信じようとはしない。サンクティス神父は、「あなたの甥御さんの品行については色々な噂が流れていることはあなたも御存知でしょう」(II・5、二九九頁)と言う。おそらく神父は夜の散歩のことをほのめかしているであろう。しかしプラス夫人はとりあわない。サンクティス神父は、「あの子(エドメ)が話すでしょう、奥さん」(二九九頁)と言ひ残して、プラス夫人の家をあとにする。

サンクティス神父がやってきた同じ日、プラス夫人の亡き夫の旧友である羅紗商人のジョルジュ・エспанシヤ氏も、マニユエルに仕事を世話するために、夫人の家を訪ねていた。サンクティス神父と夫人とのやりとりを聞いていたエспанシヤ氏は、プラス夫人とマニユエルに向かつて、こう言っている。

私の考えでは、(…)彼(マニユエル)にとつていちばんよいのは、少し町から遠ざかることではないか。或る種のことから忘却の覆いをかけるには、数ヶ月留守にするだけで充分です。ねえ君、まったく思いがけない偶然によって、私には君に提供できる仕事がある、私のところだね(Ⅱ・5、三〇三頁)。

エспанシヤ氏はマニユエルに、スキヤンダルのもみ消しのためにも、自分のところで働くようすすめている。けれども、マニユエルはこの誘いをことわる。プラス夫人もまた、マニユエルに同調し、「出て行ってください」(三〇四頁)と命令する。エспанシヤ氏は怒りのなかで、「正直な人間を侮辱するとどうなるかっていうことを、あなた方は知られることになるでしょうよ」(三〇四頁)と威嚇して立ち去る。

このように、マニユエルとプラス夫人は、サンクティス神父だけではなく、ジョルジュ・エспанシヤ氏をも敵にまわすことになる。エспанシヤ氏はマニユエルにとって、「世間の象徴」(Ⅱ・5、三〇一頁)であり、この二人の人物と敵対することは、世間の人びとと敵対することに等しい。これは、夜の散歩の一件と同様、ラ・コンブの森でのふるまいが人びとの鑿鑿を買い、憤慨の対象となることを意味する。前述のように、夜の散歩の一件がマリー・テレーズの口からプラス夫人に伝えられたとき、有罪感と相俟って、マニユエルは病いにたおれた。世間の人びとの敵視の自覚は、マニユエルに蟄居生活を余儀なくさせるとともに、有罪性の意識を増長させ、心理的にも肉体的にも彼を追いつめ、衰弱させることになるのではないだろうか。サンクティス神父およびエспанシヤ氏とのやりとりの場面のあと、作品はまもなく『在り得たこと』に移行する。それゆえ、マニユエルの病いの悪化の具体的な記述はない。けれども現実生活において追いつめられたマニユエルが衰弱し、もはや生の方ではなく、ひたすら死への方向にしか歩むことができなくなる

(2) マニユエルの死の想念と恐怖

マニユエルの病いの悪化の過程を簡単にたどってきた。今度は、この過程で生じるはずの死への意識、さらには、死の恐怖を一瞥することにしよう。マニユエルの死の想念は、第一部第十章、夜の散歩に出かけた翌日、すなわち、病いの床につく直前に芽生えているように思われる。体の具合が悪いため、いつもより早くエルネスト氏の店から帰ったマニユエルは夕方、マリー・テレーズと次のような会話をかわしている。

——どこにいるの？ と彼はだしぬけに訊いた。

——誰のこと、マニユエル？

——善良な乳母のことさ。

わたしは、彼が冗談を言っているのだと思おうとした。そして笑い出した。しかし彼はいら立ちながら同じ問いを繰り返した。もしドアのそばにいたら、わたしは逃げ出していただろう。だが彼はわたしの道をふさいでいた。わたしは、彼が謔言を言っているのだと理解し、恐れのお気持ちを抑えようと努力した。

——芝生を散歩しているわよ、とわたしは口ごもりながら言った。

錯乱した目で彼は、へ芝生には見えないよとつぶやいた(I・10、二四九頁)。

マニユエルはへ乳母のこと話題にしている。いったい、彼の言う「善良な乳母」(la bonne nourrice)とは誰のことなのであろうか。まず思いうかぶのは、プラス夫人である。プラス夫人はマニユエルの面倒をみているという点で、見方によれば、マニユエルの乳母の

役割をはたしているとうけとれるからだ。しかしながら、マニユエルが「謔言を言っている」⁽¹⁶⁾ような印象をマリー・テレーズがいただいているところからわかるように、また、「錯乱した目で」という表現が示すように、マニユエルが錯乱状態にあることを考慮すると、へ乳母がプラス夫人を指すという解釈は無理があるように思われる。ジャック・プチはこのへ乳母のイマージュにふれて、「このイマージュは死のイマージュだ」と言い、『在り得たこと』に登場するヨルジュ夫人は、このへ乳母の延長上にある人物だとみなしている。のちに論じることく、ヨルジュ夫人は死を体現した人物であるので、へ乳母の延長上にヨルジュ夫人が位置するのであれば、このへ乳母もまた、死のイマージュを有することになる。また、ジャック・プチは、ここでのへ乳母のイマージュを、『レヴィアタン』の中の次の一節に出てくるへ母親のイマージュと重ねあわせて考えている。

重要なものは時間だった。しかも時間は人間の掌中にはないのだ。何日か、あるいは何年かすれば、彼の運命は決まってしまうだろう。彼の事件は裁かれ、結末は明らかなものになるだろう。彼は、時間のたつのも知らないで遊んでいる子ども⁽¹⁷⁾のようであり、母親から寝かせる瞬間を準備され、自分の周りに、眠りにつかせるための暗闇を作る瞬間を準備される子ども⁽¹⁸⁾のようであった（I、七六六頁）。

この一節を解釈するまえに、少し脈絡を説明しておこう。ここで言われている「彼」とは主人公ゲレのことである。ゲレは、洗濯屋で働くアンジェルにはげしい愛の情熱をいだく。そのアンジェルが、食堂をいとむロンド夫人の客たちを相手に、売春婦まがいのことをしていると聞き知って、ゲレは嫉妬と怒りの感情におそわれ、アンジェルの顔を木の枝で鞭打ち、血で顔が見えなくなるほどまでに傷つけてしまう。さらに、通りですれちがった老人を、自分の犯罪が露見するのをおそれて、老人の持っていたステッキを用いてなぐり殺してしまう。こうしてゲレは逃亡生活を余儀なくされる。この引用文は、ゲレが国外に逃亡しようともくろんでいるときの心の動きを描いたものである。さいごの文で、ゲレが「子ども」(en enfant)にたとえられ、その「子ども」を寝かせ、周囲を暗くし

て眠らせる「母親」(a mother)が問題にされている。では、この「母親」は何を象徴するのであろうか。まず考えられるのは、「何日か、あるいは何年かすれば、彼の運命は決まってしまうだろう。彼の事件は裁かれ、結末は明らかなものになるだろう」という文章が前に置かれていることから、つまり逃亡できるか、逮捕されるか、ゲレが自問していることから、「母親」が、ゲレの意志ではどうにもならない運命、ゲレを支配する運命じたいを表徴するのではないか、という点である。あるいは「母親」とは、ゲレの人生をつかさどる神のごとき存在であるとみなすこともできる。けれども初めに、「重要なものは時間だった。しかも時間は人間の掌中にはないのだ」という文があることから、別の見方をすることも可能である。ゲレは流れ去る時間に思いをはせている。この時間意識とのかかわりで、さいごの文をとらえるならば、「母親」は、有限の時間しかもたない人生の終わりに待ちうけるもの、すなわち死を表象するとうけられる。ジャック・プチはおそらくこのように解したうえで、先の引用文の中の「母親」とここでの「母親」とを重ねあわせて考えるのであろう。とはいえ、この「母親」は前述のように、別の解釈も成り立たせるので、マニユエルの口にする「母親」が死のイマージュを有することの決定的な証拠を提出していない。もし他の作品から援用するのであれば、『幻を追う人』が刊行されてから二年九ヵ月後に書きはじめられた小説『悪人』(一九五五、完全版一九七三)の冒頭の、次の件りを引きあいに出さなければならぬだろう。

結局、さいごには必ずやってくるのだ。日が暮れて目の前が暗くなり、おもちゃがもう楽しくなくなったころ、遊び飽きた子どもたちを家に連れ帰る女が。食欲な愛情をいだいて私たちに気を配る女、黒いヴェールで顔を覆った年老いた乳母が(Ⅲ、二〇二頁)。

まずこの文章で、「年老いた乳母」(la vieille nourrice)というかたちで「乳母」が出てきていることを確認しておきたい。次に、文脈を説明しておこう。『悪人』は二人の中心人物ジャンとエドウィージュの孤立化と孤独の深化の過程を主として語っているのであるが、この一文はジャンの孤立化と孤独の深化とかわわっている。ジャンは「悪人」すなわち同性愛者であり、同性愛の性向を有することで、

痛切な孤独意識にさいなまれていた。そこでジャンは告白の文章をしたためることで孤独感から逃れようとする。作品は、眠られぬ夜を明かしたジャンが自室の机にむかい、自己表白の欲求をいだいてペンをとるところを描くことから始まる。ジャンは過ぎ去った日々に思いをはせながら、文を綴ろうとする。しかし、長い夢想のはてにようやく書きはじめられた頁は、今までと同様にひき裂かれる。ジャンは告白の衝動にかられてペンをとりつつも、黙っていたほうがよいと考えて、告白のくわだてを放棄する。そして告白のこころみに挫折し、沈黙の中に閉じこもったジャンの心の動きを示すものとして、この引用文が作品のプロローグの終わりに見いだされるのである。さて、ここで言われている「へ乳母」とは何なのか。この「へ乳母」はその顔を覆う「黒いヴェール」が喚起する不吉なイメージによって、明らかに死と結びついている。夕陽が沈み、暗闇が支配しはじめたころ、「へ乳母」に連れられて家路につく「子どもたち」は、束の間のささやかな幸福を味わったあと、この世を去るみじめな人間たちを表象しているように思われる。とすれば、「へ乳母」が人生の終わりに人を葬り去る「へ死」を象徴していることはまぎれもない。こうして、この記述は、死に魅せられ、死のほうに傾いていくジャンの孤独な内的風景をかいま見せているといえよう。

『幻を追う人』のなかでマニユエルが口にする「へ乳母」と同じイメージを有し、死を表徴していると考えることができる。マニユエルの言う「へ乳母」は「善良な」と形容されているものの、人生の終わりに自分を迎えてくるもの、あるいは、自分の人生を終わらせるもの、すなわち「へ死」であることには変わりがないと思われる。とすれば、マニユエルは夜の散歩の翌日、はじめて病いの床につく直前に自らの死を意識したことになる。死の想念はマニユエルにおいて、病いの悪化とともに生じている。マニユエルの死の想念は、彼がマドモアゼル・ベルトの勧めにしたがって、ブラール医師のところに診察をうけに行ったときにも見られる。マニユエルはこのときのことを、こう回想している。

診察室に入ったとき、ぼくは医師のした質問が理解できないほどに、おどおどとしていた。医師は頭の禿げた大柄の老人で、少し背が曲がり、時代遅れのフロックコートを着ていた。彼は人のよい微笑をうかべ、昔治療をしたことのあるぼくの父親の話をした。ぼくは、死者がその言葉とともに部屋に入ってきて、ぼくたちと一緒にになり、背中を曲げ、気づかわしげに、エルネスト氏に

贈るための子鬼のテリーヌを小脇にかかえているのを見るような奇妙な印象をいだいた(Ⅱ・3、二八一頁)。

マニユエルは、「死者」が診療室の中に「入ってきた」たような印象をうけている。この印象はもちろん、ブラール医師がマニユエルの亡き父親の話をしたことから生じている。だが同時に、マニユエルが自らの死を意識しているからこそいだかれるのだと思われる。また、「ぼくは(…)おどおどとしていた」(Je me sentis intimidé)と語っているように、マニユエルは怖じ気づいている。intimiderという動詞は、もともとへ内気な〜とかへ臆病な〜を意味する形容詞 timide から派生した語であり、語源を考慮すると、マニユエルの恐れは、対人恐怖、性格の内気さに関係しているとみることができる。しかし、intimiderの第一の語義は、Petit Robertによれば、《Rem-plir (qqn) de peur en imposant sa force, son autorité》(自分の力、権威を押しつけることによって人を恐怖の念で満たすこと)であり、類義語として effayer (おびえさせる)や terroriser (恐れおののかせる)といった動詞が挙げられている。intimiderという動詞は、直接目的補語になる人の性格の内気さ、臆病さとは関係なしに、へ恐怖をいだかせる〜という意味で使われることがありうるのである。マニユエルがへ恐怖をいだかせられるのは、言うまでもなく医師のブラールによってである。ではなぜ医師なのか。医師が患者に、いわば生か死かの判決をくだしうる存在であるからではないだろうか。医師は、無罪を言いわたすこともできるし、刑あるいは刑の執行猶予を決定することもできるし、さらには、死刑を宣告することもできる裁判官のごとき存在である。マニユエルの恐怖は、このような医師の役割を視野に入れて考察する必要があるだろう。要するにそれは、死の恐怖が混入したものと理解される。マニユエルは、ブラールの診察をうけているときを振り返って、「ぼくの心臓はどきどきしていた。ぼくは恐かったのだ」(二八一頁)と述べている。ここでの恐怖は、医師とはじめて顔をあわしたときのものでなく、診察中のものであるのだから、明らかに死へのおののきを意味する。では今度は、診察が終わったあとの、マニユエルの反応を見てみることにしよう。

ぼくが服を着るとすぐ、老人はちょっとした説明のようなものをしてくれたが、その説明は若干の当惑と、それにぼくが思うに、

深い悲しみをあらわしていた。彼はぼくの肩を軽くたたき、勇氣と忍耐をもつように言った。(…)

(…) ぼくは死ぬだろうと言われたわけではなかった。それどころか、医師は、恢復と希望という言葉を用いた。だがそれには、たいして、ぼく自身の心の中のもっとも明晰な部分は、医者が口にする希望という言葉はただ単に不吉なだけだと応答していた。人が希望という言葉を用いるのは、危険にさらされた人間にたいしてだけだ。絶望が目に見えるときに、人は希望という言葉を用いるのである(二八一・二八二頁)。

さいごの、「人が希望という言葉を用いるのは、危険にさらされた人間にたいしてだけだ。絶望が目に見えるときに、人は希望という言葉を用いるのである」という文からわかるように、マニエルはブール医師の診断のあと、もしくは、医師から希望をもつように励まされたあと、自分の病いが危険な状態にあると判断している。この判断は、自分がやがて死ぬであろうという思いと表裏をなしている。ブール医師を訪れてから、マニエルはますます自らの死を意識するようになる。このことは、第二部第五章の冒頭の文章からもたしかめることができる。マニエルはエルネスト氏の店での勤めをやめたあとの数週間を顧みて、こう言っている。

ぼくがよろこびを知ったことがあるとすれば、それは続く数週間のことだったような気がする。しかもそれは、死ぬこと、恐ろしい不安が、もはやほとんどぼくの心を離れなかったにもかかわらず、であった。苦しんだことのない人びとには、これらの言葉は理解しがたいものに思われるかもしれない。しかしぼくは内心に生にたいしての熾烈な欲望をかかえていたので、ほんのわずかのあいだの幸福でさえ、窒息と苦悶の時間の埋めあわせをしてくれるのだった(二八七頁)。

ここでは、闘病生活においてマニエルが味わった、生きることのよろこび、幸福感が問題にされている。けれども、このよろこび、幸福感は、「死ぬこと、恐ろしい不安」(une terrible appréhension de mourir)のただなかで、「窒息」(suffocation)や「苦悶」(angoisse)の

長い時間の途中で、瞬間的・例外的に体験されるものにすぎない。マニユエルは闘病生活に入ってから、基本的には死へのはげしい不安または死の恐怖にとりつかれて生きることになるのである。

(3) マニユエルの信仰的立場

マニユエルの死の恐怖と関連して、彼の信仰的立場を明らかにしておきたい。マニユエルの純粹志向を論じたときに指摘したように、彼は欲望の人間になる前に、熱烈なカトリックの信仰をもつ宗教的人間であった。では、物語が始まった時点、あるいは、彼が手記を書いている時点においてはどうかなのか。もちろん、マニユエルは「カトリックの迷信」(Ⅱ・5、二九八頁)という言い方をしているところからもわかるように、カトリックの信仰と訣別している。それゆえ、先に、現在の彼が信仰をもたないと断定した。だが、必ずしもそうとばかりは言い切れない。というのも、マニユエルは第二章第五章において、自らの宗教的態度の変化にふれて、「キリスト教徒となることによって、ぼくはカトリック教徒であることをやめた」(二九〇頁)と語っているからだ。この規定は、マニユエルの信仰的立場というよりも、ジャック・プチが言うように、作者グリーンビシんの、作品執筆当時の信仰的立場を、「幾分簡潔に要約し」たものとうけとることができる。だが、マニユエルがこのように言っている以上、彼が依然としてキリスト教信仰を自分なりの仕方⁽¹⁸⁾で保持していることを一応認めなければならない。

いったい、マニユエルのキリスト教信仰とはいかなるものなのか。この点にかんしては、マニユエルが死の恐怖とのかかわりで、「重要なのは、もはや神が存在するかどうかではなく、夜を無事すごせるかどうか、ということだった」(Ⅱ・5、二九〇頁)と述べているところが考察の手がかりをまず与えてくれる。マニユエルの信仰は神の存在の問題とかかわっていない。このことは、『在り得たこと』のなかで、ネーグルテールの城の教会堂における儀式に参列し、その儀式が終わったとき、マニユエルが次のように考えているところからもたしかめることができる。

神よ、とぼくは出口に向かいながら考えるのだった。ぼくはあなたに祈りをささげることができない。しかし少なくとも正直な

人間の心から発せられる言葉を受け入れたまえ。ぼくはあなたを否認する（CQ、三二八頁）。

「ご」では、「神よ」（Mon Dieu）と呼ばけられて、さいごに「ぼくはあなたを否認する」（Je te renie）と断言されていることが注意をひく。『在り得たこと』を作成しているとき、マニユエルは神を否認しさえもするのである。「ぼくはあなたを否認する」という言葉は、たとえ神が存在するとしても、神によって救われるとか、神の愛を希求するといったことを自分は断固として拒絶するといった意味あいを含んでいるだろう。マニユエルの信仰は、神または神の存在とは無縁のところにある。

マニユエルは復活すなわち生命の蘇りを信じているのだろうか。答えは否定的にならざるをえない。なぜならマニユエルは神を否認し、神に自己をゆだねることを拒否しているのだから。『在り得たこと』において、マニユエルはこう書くに至っている。

カトリックの遺産を捨て去ることによって、ぼくは永遠に消滅することへの期待の中に、奇妙な慰めを見いだしていた。再生する。という観念は、ぼくを疲れさせたし、おびえさせたりもした。あるいは、新たな生に蘇らなければならぬとしても、弱まった意識で蘇りたかつたし、苦しむことなく呼吸し、日の光がぼくの目を傷つけることのない仄暗い大寺院の列柱のあいだを、飽きることなく動きまわること許してほしいものだと、ぼくはつつましく願うのだった（三五二頁）。

マニユエルは「永遠に消滅することへの期待」をいだいている。ということはすなわち、彼は復活への望みをもっていない。それどころかマニユエルは、「再生するという観念は、ぼくを疲れさせたし、おびえさせたりもした」とさえ言っている。マニユエルは再生することに恐怖すら覚えている。この恐怖は、地上での彼の生活が苦悩にみちたものであり、同じような人生を彼が繰り返かえして生きたくないと思っていることとかかわっている。また、マニユエルは「新たな生に蘇」ったとき、「苦しむことなく呼吸」し、「仄暗い大寺院の列柱のあいだを、飽きることなく動きまわる」ことを願っている。この願いも、地上での生活が苦渋にみちたものであること

に立脚している。こうした恐怖、願いと、正統のキリスト者たちの復活信仰とのあいだには相当なへだたりがある。端的に言って、彼らの復活信仰は神の国Ⅱ天国で再生することへの願いから成り立っていて、神による救済を前提としている。これにたいして、マニユエルは神を否認しているので、楽園で生きるという発想・願いをいささかも持ち合わせていない。だからこそ、再生への恐怖が生じるのである。それにマニユエルは、「新たな生に蘇らなければならぬ」という譲歩の表現からうかがえるように、生命の蘇りを全面的に信じているわけではない。マニユエルは正統のキリスト者の復活信仰を有していないとみなされる。

マニユエルは何を信じ、なにゆえに自らをキリスト教徒とみなしているのであろうか。このことに関連して、マニユエルがエルネスト・ルナンの『イエス伝』の愛読者であることは指摘しておく必要があるだろう。作中、マニユエルが『イエス伝』を読む場面は三度出てくる。第一部第六章で、「マニユエルは（…）我が家では信仰の書とみなされていた『イエス伝』の読書に没頭するのだった」（二三九頁）と描写され、第一部第十章では、「わたしは小型円テーブルの上にある『イエス伝』を手にとって、でたらめに本をひらき、マニユエルの前にひろげて置いた。習慣が若者に作用をおよぼして、一瞬平静さを彼にもたらした」（二四九頁）と語られている。そして第二部第二章において、「ぼくは暖炉のそばのいつもの席について、いつものルナンの本の頁をめくっていた。（…）ぼくは読んでいる最中の『イエス伝』を膝の上に置いた」（二七一・二七二頁）と言われることで、マニユエルの読む『イエス伝』がルナンのものであることがわかるのである。

ところで、ルナンの『イエス伝』は周知のように、イエスを神の子ではなく、徹頭徹尾人間としてあつかった作品であり、そこでは、イエスの神性は完全に否定されている。そのため、この作品は教会関係者ら多くの人びとの非難をまねいた。グリーンも『幻を追う人』執筆に着手した一九三二年六月当時、ルナンの『イエス伝』を批判的に読んでいた。グリーンは一九三二年六月四日付の『日記』のなかで、「昨晚、イエスの歴史に、教会のイエスではなく人間としてのイエスの歴史にとても心を奪われた。イエスのことを神聖な人格として考えるのをやめたときから、人はめっちゃめっちゃになるのだ」と書き、また、六月十三日には次のように述べている。

『イエス伝』を再読。私はルナンがキリストを《魅力的な医者》と呼ぶことを容認することができない。（…）彼はわれわれを

キリストに近づけるのではなく、キリストをわれわれに近づけようとした。彼はキリストを愛想のよい哲学者にしようとしたこと
で、キリストを辱めてしまった。そして彼はキリストにわれわれが近づけるようにするために、キリストをわれわれの背丈に縮め
てしまった。⁽²⁰⁾

グリーンは、ルナンがイエス・キリストから神性をとり除き、キリストを人間化したことを批判している。引用文全体からは、イエ
ス・キリストを人間的な次元でとらえることへのグリーンの強い反撥が看取される。こうしたルナン批判は、一九三二年当時のグリー
ンの信仰的立場をかいま見せているかもしれない。当時、グリーンはカトリック教会と絶縁し、ありとあらゆる宗教的実践を放棄して
いた。とはいえ、イエス・キリストの神性そのものは疑っていなかったといえよう。イエス・キリストの神性を信じるという、キリス
ト者の根本的な信仰は相変わらず保持していたと推測される。

『幻を追う人』のマニユエルは、イエス・キリストをどのような存在とみなしているのであろうか。作中、マニユエルがルナンの
『イエス伝』についてどう考えているか、ということを確認に示す記述はない。けれども、結論を先取りして言えば、マニユエルは作
者グリーンとはちがって、ルナンの『イエス伝』の内容に沿ったかたちで、イエス・キリストを認識しているのではないだろうか。こ
のことを明らかにするために、マニユエルがイエス・キリストに思いをはせているところを取りあげることしよう。マニユエルのイ
エスへの思いはまず、第二部第二章において見いだされる。マニユエルは病いの床にふせったあと、ふたたびエルネスト氏の店に勤め
に出た日のことを、こう振り返っている。

翌日、六時に、ぼくはまだ人けのない市場の広場を横ぎり、店のなかに入ってしまった。何とも不快な悪臭がぼくの嗅覚をとらえ
た。というのも、いつものように、便所のドアがあいたままになっていたのである。ぼくはドアを閉めに行った。あるいは閉めよう
とした。それからまた店を出て、石段の上になすわって、両手を顔にうずめた。へこのような場合、へんの子ならいっただうし
ただらうか、と、ぼくは絶望にかられて自問するのだった。矜持の念だけが、涙を流すのをくいとめていた。ぼくは店にもどり、

店の奥から箒を持ってくると、息をとめようとしながら床の上を掃くのがあった(二七二頁)。

マニユエルは、便所から発散する「何とも不快な悪臭」をかきながら、換言すれば、みじめな状況に置かれて、「人の子」(Fils de l'Homme)に思いをはせている。「人の子」とは言うまでもなくイエス・キリストのことである。イエス・キリストはマニユエルの意識をかなり支配する存在である。マニユエルにおいて、イエスとは、交流と連帯を希求する対象としての他者なのである。だからこそ、マニユエルは自らをキリスト教徒と称するのだと思われる。また、この一節で、マニユエルがみじめな状況のなかでイエスのことを考えているという事実は、注目に値する。マニユエルはイエスの境遇を、自らの悲惨な境遇と照らし合わせて考えている。マニユエルのイエスとは、栄光の中で生きた神の子としてのイエスではなく、悲惨のなかで、人間として生きたイエスである。マニユエルは、エルネスト氏の店での勤めをやめて闘病生活に専念しはじめたころを顧みながら、次のように書いている。

成功すること、それはおそらくキリストに似ることなのであろう。それも、《油虫》⁽²⁾やひれ伏した尼さんたちのキリストではない。そんなキリストなど、ぼくにはヘルメスやアポロンと同じくらい不可解なものでありつづけた。そうではなく、ぼくの考えるキリストとは、その言葉で人びとの魂を魅惑した、勇敢で善良な小男のことだ。幼年時代からぼくは彼を愛していた。夜の静寂の中で、彼のことを考えるために目をさますことがあった。このものやあのものをねだりたく思う生きた人間のことを考えるように。彼のみがぼくを理解することができ、ぼくに助言を与えることができるのだと、ぼくは痛切に感じたものだ。しかしぼくは、彼の中に超自然的な存在を見ることはできなかつた。(…)教会の奥の、香がけむり、蠟燭の火がきらめくところには、人がラテン語でしか話しかけず、またぼくが自分の無知な心をおおわずとその方に向かって高揚させようとした、一人の絶対君主がいた。へさあ、あの方なんだ、あの方なんだ」といくら自分に言い聞かせても無駄だった。彼の豪華さがぼくを気づまりにした。ぼくは祈った。(…)しかしぼくが小声でとなえる言葉は真心からのものではなかつた。ぼくはできることなら一人の友だちに、一人の兄に

話しかけたかった。ぼくは神に話しかけるすべを知らなかった(Ⅱ・5、二九〇頁)。

ここでは、「幼年時代からぼくは彼を愛していた」という一文から明らかのように、イエス・キリストへの愛が鮮明に表白されている。しかしながら、マニエルが愛する、もしくは愛していたキリストは、「彼のことを考えるために目をさますことがあった。(…)

生きた人間のことを考えるように」と言われているごとく、あくまで人間としてのキリストである。「ぼくは、彼の中に超自然的な存在を見ることはできなかった」という述懐は、マニエルのキリストが神性(Divine)を欠いていることを証している。このことは、教会のキリストがマニエルにとって「絶対君主」でしかなく、教会のキリストにたいして真の祈りをささげることができなかったことから察知することができる。さいこの、「ぼくはできることなら一人の友だちに、一人の兄に話しかけたかった。ぼくは神に話しかけるすべを知らなかった」という告白からは、マニエルのキリストが神ではなく、自分と同じように人生の苦難を嘗めた一人の人間であり、「友だち」「兄」という言葉が示すように、人間の能力の限界を越えない、あくまで自己と同等の次元の存在であることがわかる。このようにマニエルはキリストを愛しつつも、キリストの神性を認めない。正統のキリスト教信仰は、イエス・キリストの神性を信じることから出発する。したがって、マニエルは正統的なキリスト者ではない。マニエルもまた、そのことを十二分に承知している。マニエルはすでに引用したように、「キリスト教徒となることによって、ぼくはカトリック教徒であることをやめた」と言う一方で、自分の中に宿る「無信仰への意志」を問題にし、こう説明している。

もしもぼくの心に、周囲で話されているあのキリスト教信仰がほんのわずかでもあったならば、ぼくは超自然的な存在を信じたことだろう。だがこの種の感情にたいしては、ぼくはたまたかう用意ができていた。ちょうど人が墮落への誘惑にたいしてたたくように。どこから生じたのかはわからない力がぼくの内心で、この無信仰への意志を助長していた。(…)

祭りの中で十字架の光で輝く、あいつつましやかで、かつ光栄あるキリストにたいして、ぼくはもはや何も言うことはなかった。いまやぼくのまなざし

は、未知なるキリストに向かつていた。家族や群衆にさからい、自らの力を持ち、その人間性によつて偉大だったキリストに。

(…)言葉なしですますことのできる彼の地味な勇敢さ、屈服することのない彼の意志、何事にも反対する彼の本能、確立された秩序を打ち破った彼の忍耐、平和を愛するが、この不服従の人のありとあらゆる人間的性質を、ぼくはうらやんでいた。何という巧妙さで、教会は彼を神とすることによつて自家薬籠中のものとしてしまったかを、ぼくは知りすぎるほど知っていた(II・5、三〇六頁)。

この一節では、「もしもぼくの心に、(…)あのキリスト教信仰がほんのわずかでもあつたならば」(si j'avais eu au cœur un peu de cette foi chrétienne)という非現実の仮定の文を立てているところから明白なように、マニユエルはキリスト教信仰をもたない人間として語っている。マニユエルのキリストは十字架上の「つつましやかで、かつ光榮ある」キリストではなく、「その人間性によつて偉大だった」キリストであり、「ありとあらゆる人間的性質」をそなえたキリストである。要するに人間としてのキリストである。⁽²²⁾さいこの、「何という巧妙さで、教会は彼を神とすることによつて自家薬籠中のものとしてしまったか」という見解からわかるように、マニユエルはイエスを神格化することを非難し、拒否している。これが、マニユエルの言うところの「無信仰への意志」なのである。結局、イエス・キリストの神性を信じないという点で、マニユエルはキリスト教徒ではないともみなしうる。マニユエルのイエス像は、ルナンが『イエス伝』において探求したイエス像に近いものと思われる。作者グリーンとはことなり、マニユエルはルナンのキリスト理解を批判的にうけとめるのではなく、そのままうけ入れていると考えられる。

イエス・キリストを神的存在としてではなく、人間存在として愛するとき、そのイエス信仰はもはや宗教的なものではなくなる。ミシェル・ラクロがマニユエルのイエス探求を評して、「彼が、生きた人間としてのイエスに近づいたと感じれば感じるほど、ますます彼はカトリックの宗教から遠去かることになるのだ」と言っているのも、こうした事情を踏まえてのことだと思われる。そしてイエスを人間としてとらえ、宗教から遠去かることによつて、マニユエルは当然のことながら、死の問題と一人で対峙しなければならなく

なる。マニユエルは死の恐怖と宗教との関係について述べている。

ぼくは一度ならず気づいていた、死と隣り合わせにあるとき、どれだけ宗教が価値のないものであるかを。魂と来世について教えられた一切のことは、ぼくを待ちうけている恐ろしい現実と比べれば、ばかげたごまかしのように思われた。そしてぼくが覚えたとお祈りは、死ぬことの恐怖にたいしてなんの救いにもならなかった。ぼくは額の汗をぬぐうために、顔の上にシーツの端をひき寄せるのだった。ああ、誰かが来てくれたら！ しかしこうした瞬間にぼくは一人きりだった（Ⅱ・5、二九〇頁）。

マニユエルは「死ぬことの恐怖」を問題にし、この恐怖を前にして宗教がまったく救いの手をさしのべてくれなかったことを語っている。神を否認し、キリスト者の復活信仰をもたず、イエス・キリストの神性も信じないマニユエルの信仰的立場を考慮するとき、マニユエルがひとりで死と立ち向かわなければならなくなることは当然の結果である。死はマニユエルにとって「恐ろしい現実」でしかありえないし、「こうした瞬間にぼくは一人きりだった」と書いているように、マニユエルは孤独の中で死の恐怖とたたかわなければならなくなる。それゆえ、マニユエルにおいて、『在り得たこと』の作成は、自分を責めさいなむ死の恐怖とも深くかわることになる。

四 死の城の住人たち

さて今度は、いよいよ『在り得たこと』を死の観点から分析することにしよう。マニユエルにとって、『在り得たこと』の作成は、一つには、死の恐怖の克服のころみの一環としてあるとみなしうる。したがって、物語はマニユエルの現実生活から遊離したメルヘン的なものにはならない。欲望の苦しみからのがれるために、マニユエルが『在り得たこと』の中で自らの欲望を表出したのと同じように、死の恐怖から脱却するためには、死ぬという、人間に課せられた条件を真正面から凝視する必要がある。それゆえ、『在り得たこと』の舞台となるネーグルテールの城は、ジャック・プチがみなしているように、必然的に「死の城」となる。『在り得たこと』の世界は、欲望の世界であると同時に死の世界でもある。以下において、ネーグルテールの城を死の城たらしめている原因を説明するとともに、城の住人たちが死に魅せられるありさまを、また、いかなる仕方でも死と向かいあっているかを概観したい。そのことのために、伯爵、ジョルジュ夫人、アントワーヌ、子爵夫人、マニユエルという順番で、作中人物たちの在り方を死の主題とのかかわりで検討することにした。

(1) 伯爵

ネーグルテールの城が死の城となることには、蟄居して死を待つ伯爵の存在が大いに関係している。マニユエルは伯爵が蟄居するに至った事情を、次のように説明している。

秋の日の或る朝、散歩から帰る途中で、彼（伯爵）は胃の一箇所に、死が指を置くのを感じた。死が力を押しつけ、彼は苦痛を

覚えた。その時、彼は五十二歳だったが、三十歳のころからこの合図を待っていたのだ。最初に感じたのは、激しい恐怖感だった。だが同時に、内心の声は、「ようやく来た！」と叫ぶのだった。

(…)

彼は子どもたちを遠去けることからはじめ、まる一年のあいだ、どうしても離れる決心のつきかねた城の中で、ほとんど一人きりで暮らした。その間、死は相変わらずなかなか訪れてこなかったし、苦痛も幾分和らぎさえもしたので、彼は娘と息子呼びもどした。そして自分は小さな部屋に閉じこもり、もはやそこから出ることはなかった(CQ、三三六・三三七頁)。

ここでは、伯爵が死の兆候を感じて、蟄居するようになった経緯が述べられている。伯爵が子どもたちにいかなる影響をおよぼしたかについて議論するのはあとまわしにして、伯爵が死の兆しを知覚したときの反応を見ておきたい。「最初に感じたのは、激しい恐怖感だった」と書かれているごとく、伯爵は死の恐怖の感情にとらえられている。しかも、「三十歳のころからこの合図を待っていたのだ」とあるとおり、伯爵は長らく死に魅せられて生きてきた。その理由は、次の引用文からわかるように、ネーグルテルの一族が遺伝性の疾患を背負っているからだ。ともかく、この文章からは、伯爵における、死の魅惑と恐怖が読みとれる。

伯爵の蟄居の理由は、子爵夫人の口をおしても説明されている。子爵夫人は、自分の命令に従って伯爵にラテン語の祈禱文を朗読するという務めを果たしたマニユエルに、こう言っている。

(…)わたしたちの一族では、男たちはほとんどいつも同じ仕方死ぬのだということを知っていたただかなくてはなりません。それも恐ろしい仕方死ぬのです。わたしの存じあげているかぎりでのあなたなら、もしその恐ろしさを描写したら、とても耐えられないだろうと思いますよ。でも大丈夫、何もこわがることはありません。神さまのおかげで、今までわたしたちに勇気が欠けたことはありません。でも病気に立ち向かう力がたかひきをひきのぼし、苦しみを倍加させるのです。二年前、父が最初の兆候を感じたとき、それまで送ってきたかなり幅広い生活から身をひいてしまいました。暮らしぶりも必要最小限に切りつめて、父はも

はや誰とも付き合わず、あなたがごらんになったあの部屋のなかに永遠に閉じこもることに決めたのです（CQ、三三二頁）。

子爵夫人は、はじめのほうで、一族の男たちが恐ろしい仕方死ぬのだと話している。そしてその死に方の恐ろしさを描写すれば、マニユエルには耐えられないだろうと付け加えている。子爵夫人の言葉を考慮すると、遺伝的な病いの最初の兆候を感じたことでの伯爵の蟄居は、死に魅せられ、あるいは死の恐怖にかられたうえでの行為であることが察知できる。また、部屋に閉じこもった伯爵を待ちけるものが、死もしくは死の恐怖とのたたかいであり、もはや死の想念しか彼の意識を支配しないことが推測される。このことは、ラテン語の祈祷書を朗読し、いっしょに夜を明かしたマニユエルに、伯爵が、「娘に、まだ今日のことではないようだと伝えておくれ」（CQ、三三四頁）と言っているところからも明らかである。「まだ今日のことではないようだ（ce ne sera pas encore pour aujourd'hui）」という文の主語が「死」（la mortまたはna mort）であることは指摘するまでもない。伯爵はただひたすらに自らの死に思いをはせ、死の訪れを待ちうけている。換言すれば、もっぱら死の想念に支配されて生きつづけている。

伯爵が身を置く状況は、現実生活においてマニユエルが置かれた状況と重なりあう。実際、ラ・コンブの森への散歩のちの、マニユエルの蟄居生活は、死の訪れを待つだけの生活にはかならない。伯爵と同じように、マニユエルは閉ざされた世界のなかで死の想念とともに生きているにすぎない。マニユエルじしん、伯爵が身を置く状況が自分の置かれた状況に類似していることを自覚している。マニユエルは、伯爵のためにラテン語の祈祷文を朗読する場面を振り返りながら、あるいは想像しながら、次のように書いている。

時折、夜が明けようとしているあいだに、自分がネーグルテールの塔の中にいて、瀕死の男のそばでラテン語を朗読していると、信じることができなくなった。しかしよく考えると、この状況はぼくには当然のことのように思われた。というのも、ぼくには説明しがたい仕方、へこの状況がぼくには似つかわしかった（CQ、三三二頁）。

この一節では、「この状況がぼくには似つかわしかった」と言われていることが注意をひく。「この状況」とは、「瀕死の男」、言いかえれば、危篤の病人が誰かに寄りそわれているという状況である。このような状況が「ぼくには似つかわしかった」とマニユエルがみなすのは、現実生活の場で、マニユエルがプラス夫人に付き添われて病い⁽²⁵⁾死とたかっているという状況にこの状況が似ているからだと思われる。ジャック・プチはこの文を問題にしつつ、「場面は一種の二重化でありうるだろう」と註釈している。「二重化」(dédoublement)とは、現実生活における場面を想像世界の中に移しかえたもの、という程の意味であろう。ジャック・プチは、現実生活におけるマニユエルの状況と伯爵の状況との重なりあいを前提にして註釈している。ネーグルテール伯爵とは、『在り得たこと』の作者であるマニユエルの分身であり、現実生活に身を置くマニユエルの内心の死の魅惑と恐怖を形象化したものとみなすことができる。伯爵の蟄居生活の模様をもう少し見ておくことにしよう。『在り得たこと』において、伯爵が病いの進行にともなって、いっそう狭い部屋に移ったことが語られている。

病人の習慣には変わったことは何もなかった。ただ、より小さな、古い城壁の切り込みの中にあるがゆえに、いわばいっそう保護された部屋に、彼が移してもらったという点を除けば。そこはかつては女の寝室で、老人の奇妙な気紛れから、板張りやペンキ塗りの部分や窓にいたるまで、すべてが赤い緞子で覆われてしまった(CQ、三三八頁)。

この文章で二つの点が注目される。一つは、伯爵が移った、より小さな部屋が「いわばいっそう保護された」(comme mieux abritée)と形容されている点であり、もうひとつは、部屋が伯爵の意向によって「赤い緞子」で覆われたという点である。この二つの点について少し考察してみたい。まず、「いわばいっそう保護された」という修飾語にかんしてであるが、部屋はいったい何から「保護されているのか。当然のことながら、死からであり、死の訪れからであり、あるいは死の危険からである。かくして伯爵の小さな部屋は、彼を死からまもる一種の安全地帯、避難場となる。では、伯爵が部屋を覆わせた「赤い緞子」はどのように考えたらよいのか。伯爵の

部屋の赤さは、別のところでは、カーテンの描写とかたちをとって、「乾いたばかりの血の色を連想させる、鈍い赤の、この重たくて、ざらざらとした生地」(CQ、三二六頁)といったように表現されている。ここでは、カーテンの生地の色が、「乾いたばかりの血の色」になぞらえられている。部屋を装飾するへ赤は、伯爵の体内を流れる血と対応し、伯爵の生命力を象徴しているのではないだろうか。もつとも、ここでのへ赤は「鈍い」(assourdi)という形容詞を従えているところからわかるように、鮮烈な色ではない。それゆえ、へ赤の色彩が伯爵の生命力を象徴するといっても、その生命力は旺盛なものではない。死を間際にして、いまなお残っている弱々しいものにすぎない。とはいえ、このような分析を踏まえると、伯爵がより小さな部屋に移り、赤い緞子で部屋を覆わせるといふ事実は、伯爵の生への執着をかいま見せているのではないだろうか。伯爵は死と対峙しながらも、生きることへの意欲を依然として保ちつづけているのである。

伯爵の生きることへの意欲は、掛時計を見つめるという行為からもうかがえるのではないだろうか。伯爵は子どもたちとの面会を拒否したあと、もっぱらジョルジュ夫人の看護を受けて闘病生活をおくることになる。だが、ジョルジュ夫人は子爵夫人の命令にしたがって、伯爵に口をきかない。そこで伯爵は掛時計の位置をかえさせ、掛時計を見つめることによって時をすごす。この件を読むことにしよう。

彼「伯爵」はジョルジュ夫人の親切に頼らなくても時刻を知り得るように、部屋にあつた飾り枠付き掛時計の位置を変えさせた。そのことのほかには、もう何一つ要求しなかった。やがて文字盤と針の歩みとが彼を魅惑し、そのおかげで一日を過ごすことができるようになった。こののち、彼には、自分の全生涯がこの小さなローマ数字の環のなかに刻みこまれていくように思われた。そして苦痛の感じられない時間は、彼に一種の至福をもたらした(CQ、三三九、三四〇頁)。

伯爵は掛時計の「文字盤と針の歩み」に魅惑され、それらをひたすら凝視することによって生きのびている。もしくは死とたたかっ

ている。そして「苦痛の感じられない時間」には、伯爵は「一種の至福」さえも覚えている。ここから、掛時計の凝視は、伯爵の生きることへの意欲を証^{あかし}しているとみなせよう。伯爵は死の危機にさらされ、死の訪れを静かに待ちながらも、なおも生への執着をいんでいる。先に、伯爵における死の魅惑と恐怖を指摘した。この死の魅惑と恐怖は、今見ている生への執着を前提としており、これと裏腹の関係にあるといえよう。生きることへの意欲が伯爵の中にあるからこそ、死が彼を魅惑することになるのだし、死の恐怖が生じ、いやまずのだと考えられる。

さて、このように生きることへの意欲をもつとはいえ、閉ざされた部屋に蟄居し、死の訪れを待つという伯爵の在り方は、他者の目から見れば、死と馴れ合ったもの、死と同化したものに等しいのではないだろうか。マニユエルにとって、伯爵は「生きながらにして閉じこめられた」人である（CQ、三三九頁）。しかも伯爵が閉じこめられた世界は、小さな世界Ⅱ部屋であり、「より大きな部屋の内部にこしらえられたごく小さな部屋」（CQ、三二六頁）にすぎない。伯爵が身を置く世界は、部屋の中の部屋であるかのような、きわめて限定・縮小された世界である。そのような世界に「閉じこめられた」伯爵は、生きながらにして、すでに死んでいる存在に等しいし、生者というよりも、死者同然の存在だとみなしうる。このことは、伯爵にまつわる次の記述からもたしかめることができる。

憐憫、心配、次いで不快、ついには嫌悪の念をいだかせた挙げ句、彼はあたかも、存在するということが合理的には説明することができない何者かに変貌し、生の中で、死者たちの恐ろしい威光を享受しているかのようにであった（CQ、三四六頁）。

伯爵は闘病生活のなかで、不可解な・不合理な存在へと変貌し、「死者たちの恐ろしい威光」(prestige effrayant des morts)を放つに至っている。他者の目から見れば、閉ざされた空間で死を待つ伯爵は、すでに死の領域に足を踏み入れた存在である。この点に関連して、ジャンローラン・プレヴォーは、「生きながらえたおかげで、彼（伯爵）はいわば二つの世界、目に見えるものの世界と目に見えないものの世界との境界に位置している」と述べている。ここで言われている「目に見えるものの世界」とは、現実世界、生者たちの世

界であり、「目に見えないものの世界」とは現実世界の彼方または背後に存在する死者たちの世界、もしくは死の世界を意味すると思われる。伯爵は生きてはいるが、死と対峙し、死とたたかうがゆえに、死の神秘に通曉し、死の世界の入り口に立っていると、プレヴオーは考えるのであろう。そしてまた、そうであるがゆえに、伯爵は生と死との境い目に、生（者）の世界と死（者）の世界との境界に位置しているとみなすのであろう。このような見解をうけられると、伯爵は生者たちにとっては、当然、「死者たちの恐ろしい威光」を放つ存在となり、死と同化した存在と化す。ネーグルテールの城の他の住人たち、すなわち、アントワーヌ、子爵夫人、それにマニユエルが死に魅せられ、死の恐怖にとらえられる原因として、あるいは、ネーグルテールの城を死の城たらしめる要素として、こうした伯爵の存在が第一に挙げられる。

（2）ジョルジュ夫人

ネーグルテールの城が死の城となるという事実には、もうひとりの人物の存在が寄与しているのではないだろうか。すなわち、ジョルジュ夫人の存在である。そこでジョルジュ夫人の在り方を検討することにした。マニユエルがネーグルテールにやってきた時点で、ジョルジュ夫人は伯爵を看護する仕事を与えられている。しかしこの仕事をひきうける以前には、ジョルジュ夫人は長らく低い身分、召使の地位にあった。このことは、「脂肪のために重くなった彼女（ジョルジュ夫人）の顔は、召使の身分のなかで年老いてしまった者たちに特有の重々しさを帯びていた」（CQ、三二五頁）という描写からわかる。けれども、ジョルジュ夫人は召使の地位に満足するような人間ではない。マニユエルはジョルジュ夫人の境遇を、こう書きしるしている。

彼女がネーグルテールで暮らしはじめから、五年以上経っていた。そして彼女がこの生まれだと聞いて、ぼくは驚くのだ。た。それどころか、彼女と子爵夫人とは同じ乳母、すなわちジョルジュ夫人自身の母親の乳を吸ったのである。この事実から、ジョルジュ夫人が、ほんのちよつとネーグルテール家の人びとのいとこにあたると思つて、ぼくは疑わなかった。しかし、それにもましてぼくを驚かせたのは、彼女の年齢とぼくの女主人の年齢とのあいだに、一週間のへだたりもなかったことだ。⁽²⁷⁾

ある（CQ、三三三頁）。

ここでは、子爵夫人が赤ん坊のとき、ジョルジュ夫人の母親の乳を吸ったことが語られている。しかも、子爵夫人とジョルジュ夫人との年齢が一週間の違いもないことから、二人がジョルジュ夫人の母親によって、双子の姉妹のように育てられたことが想像される。このような事情を踏まえて、マニユエルは、「ジョルジュ夫人が、ほんのちよつとネーグルテル家の人びとのいとこにあたると思つている」と推測するのである。この推測から、ジョルジュ夫人が身分向上の野心をいだし、その機会をつけねらっていたことがうかがえる。ジョルジュ夫人の上昇志向は、子爵夫人の次のような話によつても示唆されているように思われる。

あの女（ジョルジュ夫人）がここにやってきたとき、父は元気でした。私たちは、あの女が自分の家にいることさえ知りませんでした。お城の地下室に隠れて、石炭袋の下にある穴の中で眠っていたのです（…）。つつましさがあの女を救いました。彼女は待つすべを、その方法は知りませんが、少しづつ上がるすべを心得ておりました。（…）一段一段と登って行って、父の居る部屋までたどり着いたのです（CQ、三六九・三七〇頁）。

子爵夫人は、ジョルジュ夫人がはじめは城の地下室にいたけれども、一段一段と階段を上がつて、ついに伯爵の部屋にまで達したと言っている。ジョルジュ夫人の、この文字どおりの上昇は、彼女の上昇志向を象徴的に表現している。「彼女は待つすべを、（…）少しづつ上がるすべを心得ておりました」という証言からは、ジョルジュ夫人の秘められた野心がはっきりと読みとれる。

こうして、ジョルジュ夫人は伯爵の世話をするという仕事を獲得する。ただ、この仕事は、作中、子爵夫人がジョルジュ夫人の「機嫌をとつて」、「病人の看護というつらくて嫌な仕事」（CQ、三三八頁）をひきうけさせたと説明されているように、必ずしも楽しいものではない。だがこの仕事を得ることによつて、ジョルジュ夫人は召使たちとは違った待遇をうけることになる。このことは、マニユエルが伯爵のためにラテン語の祈禱書を朗読するという仕事を与えられてからの待遇の変化を、「ぼくはもう台所で食事をする」と

いうことはなく、調理場に隣接した明りのない、さびしい小部屋で、ジョルジュ夫人と共にするのだった。こうしてぼくは、主人たちと召使たちとの中間に位置することになった」(CQ、三三二頁)というふうに書いているところから明瞭である。マニユエルは新たな務めを果たすことで、自分が「主人たちと召使たちとの中間に位置することになった」と認識している。マニユエルは主人たち、つまり伯爵や子爵夫人らと対等の地位に立ったのではないとしても、台所で召使たちといっしょに食事をしなくなったことから、召使の地位を脱したと考えている。同じことは、ジョルジュ夫人についてもいえよう。伯爵を看護するという任務をひきうけることで、ジョルジュ夫人は他の召使たちとくらべて、上位に立つことになる。

ジョルジュ夫人の地位の向上ということと関連して、もう一つ見落としてはならない重要な事実がある。ジョルジュ夫人が、死の間際にある伯爵に接することができる唯一の存在であるという事実である。なるほど、マニユエルは伯爵のために祈祷文を朗読するという役目をひきうけるので、伯爵を見ている。しかしこの仕事は結局一度しかなされない。それゆえ、基本的には、ジョルジュ夫人だけが、病いの床にある伯爵を看取っているとみなしうる。子爵夫人はジョルジュ夫人について、「あの女はその部屋〔父の居る部屋〕の中に、父といっしょに閉じこもってしまいました。あの女をのぞいては、もはや誰もその中に入ることができません」(CQ、三七〇頁)とマニユエルに語っている。子爵夫人の口調には、伯爵といっしょにいたことができるジョルジュ夫人にたいする羨望の気持ちがこもっているように思われる。伯爵の看護という仕事を自分与えたにもかかわらず、父親からは自分が面会することは禁じられているので、子爵夫人の目には、ジョルジュ夫人は特権的な地位にあるようにうつつているのである。

このように特権的な地位にあるジョルジュ夫人は、しかしながら、周囲の者たちに嫌悪感をいだかせている。子爵夫人はマニユエルに、「あの女(ジョルジュ夫人)はわたしの召使たちに嫌悪を催させていました」(CQ、三六九頁)と言い、また、「あの女は醜いのです。もちろんわたしはあの女よりも醜い召使を知ってはいませんが、これほどまでにはわたしに嫌悪の念をいだかせませんでした」(CQ、三六八頁)と告白している。マニユエルもまた、ジョルジュ夫人を知ったばかりのころ、嫌悪感をいだいている。

ジョルジュ夫人の微笑を浮かべているが断乎とした顔つきを前にして、ぼくは激しいと同時に冒瀆的なくつもの言葉を吐きた

い気持ちにかられた。(…)この女を見たときの、ぼくの最初の嫌悪の反応は、おそらくこの上もなく正当なものであっただろう
(CQ、三二七頁)。

マニユエルはジョルジュ夫人に向かって、「激しいと同時に冒流的な」言葉を吐きたい衝動にかられている。それは、マニユエルが夫人にたいして反撥の感情をいだいたからにはかならない。では、この反撥感、あるいは、周囲の者たちが覚える嫌悪感は、何に由来するのであろうか。結論的に言えば、これらの感情は、ジョルジュ夫人が生のだただ中ではなく、死と隣接したところに、否、死の領域に身を置いていることから生じたものとうけとれる。実際、ネーグルテルの城にやってきた当初の、地下室でのジョルジュ夫人の暮らしは、陽のあたらない暗闇の中での生活であるがゆえに、まったく生気を感じさせないし、臨終の床にある伯爵の部屋に入ってから、ジョルジュ夫人はまさしく死と隣り合ったところで、というより、死の世界の中で棲息しているとみなすことができる。ジョルジュ夫人が周囲の者たちの心に植えつける反撥と嫌悪の感情は、ジョルジュ夫人が死を連想させることに起因している。ジョルジュ夫人は、死との結びつきを深めることで、死じたいがもたらすような恐怖感を人びとにいだかせ、死そのものが持ちうるような魅惑の力を行使するようになる。子爵夫人はマニユエルに言っている。

あの女(「ジョルジュ夫人」はわたしよりも強いので、もう追いはらうことはできません。父が亡くなったら、あの女は誰か別の人の枕もとにやってきて腰をすえることでしょう。あの女は、あれをもっとも恐れている者たちをあらがいがたく惹きつけるのです。まずわたしの弟を、それからこのわたしを……(CQ、三七〇頁)。

子爵夫人は、自分の弟アントワーヌと同様に、ジョルジュ夫人を恐れつつも、ジョルジュ夫人に惹かれていること、言いかえれば、魅せられていることを認めている。それはなぜか。もちろん、ジョルジュ夫人が死の属性をもつからである。このことは、伯爵が息をひきとったら、ジョルジュ夫人は臨終の床にある他の者の枕もとに居すわることになると子爵夫人が考えているところから明らかである。

る。このような特権を有するのは、死そのもの以外にはない。死が病いにふせる者を訪れるのと同じように、ジョルジュ夫人は死に瀕した者に近づくのだと子爵夫人は思っている。こうして子爵夫人の脳裡では、ジョルジュ夫人は死と同一化される。「一、二度、わたしはあの女がそれ自身、死なのではないかと自らに問うたことがあります」(CQ、三六九頁)と子爵夫人はマニユエルに語っている。⁽³⁰⁾子爵夫人にとって、ジョルジュ夫人は死を体現した存在である。この見方はマニユエルもまた共有しうるものであり、普遍的な見方であろう。ミシエール・ラクロはジョルジュ夫人について、こう論じている。

この、人に気に入られない、愚かしい女は、奇妙にも嫌悪の念と恐怖とを人にいだけせている城の中であって、一切のものを支配しているが、とりわけ、死に瀕した伯爵の運命を完全に支配しておくことが許されている。それで彼女だけが、もはや誰も入り込むことができない部屋の中で、断末魔の苦しみの進行をたどることができる。この謎めいた人物を解く鍵は、明らかに彼女が人びとにいだかせる説明しがたい恐怖の中に存する。実際、ジョルジュ夫人は死の化身なのだ。⁽³¹⁾

ミシエール・ラクロは、ジョルジュ夫人が臨終の床にある伯爵の運命を完全に掌握していること、周囲の人びとに「説明しがたい恐怖」を感じさせていること、この二つの理由から、夫人が「死の化身」だと断定している。作者グリーンもまた、一九五四年十一月二十六日付の『日記』の中で、「『幻を追う人』において、私は死からある人物を、かなり控え目で、生気のない肉づきをした、ほとんどの言わぬ女性を作り上げた」と書いて⁽³²⁾いる。ここで問題になっている女性がジョルジュ夫人であることは疑いを容れない。ジョルジュ夫人が死を形象化した人物であることは、作者グリーンの証言からも確認することができる。

『在り得たこと』の一人物であるこのジョルジュ夫人は、マニユエルが身を置く日常生活の中の、どの人物と対応しているのだろうか。マニユエルはいつたい、どの女性をモデルにしてジョルジュ夫人を創造したのか。この点にかんして、アントワーヌ・フォンガロは次のように述べている。

恐るべきジョルジュ夫人は、おそらくは死の化身であるこの不可解な家政婦は、プラス夫人の召使であるレオンティーンヌの分身以外の何ものでもない。レオンティーンヌはいつも無口ではあるが、マニユエルの秘密を発見し、それゆえに彼にとっては恐ろしい存在であるからである。⁽³³⁾

アントワーヌ・フォンガロは、ジョルジュ夫人のモデルが料理女のレオンティーンヌであると考察している。その理由は、この二人がどちらも人に仕える身であり、そして共に恐ろしい存在であるからである。しかしながら、この二人の人物の恐ろしさはレベルが違うのではないだろうか。ジョルジュ夫人の恐ろしさは、アントワーヌ・フォンガロも彼女を「死の化身」とみなしているように、死の属性をもつことから由来している。これにたいして、レオンティーンヌの恐ろしさは、たかだかマニユエルの秘密を、つまり彼がマリー・テレーズを連れて夜の散歩に出かけたという事実を知っていることに原因しているにすぎない。ニコラス・コステイスもまた、アントワーヌ・フォンガロの解釈を批判している。

ジョルジュ夫人は、マニユエルがレオンティーンヌともった関係から生じているかもしれないけれども、彼女は死の化身以外の何ものでもないという点において、レオンティーンヌと根本的に異なっている。⁽³⁴⁾

ニコラス・コステイスは、ジョルジュ夫人が死の化身であるという点に、夫人とレオンティーンヌとのあいだの決定的な差異を認めている。けれどもコステイスは、ジョルジュ夫人が、マニユエルの、レオンティーンヌとの関係から生まれたかもしれないと譲歩している。はたしてそうなのであるか。ジョルジュ夫人は、レオンティーンヌではなく、プラス夫人との関係から生まれたのではないのだろうか。プラス夫人は闘病生活に入ったマニユエルに終始付き添い、彼を看護している。マニユエルとプラス夫人のこの関係は、伯爵とジョルジュ夫人との関係に類似している。死に瀕した伯爵がマニユエルの分身とみなされるのと同じように、ジョルジュ夫人は、死の間際にあるマニユエルに執拗に寄り添うプラス夫人に対応する人物であり、プラス夫人をモデルにして想像Ⅱ創造されたと考えられる。ジョ

ルジュ夫人と同様、プラス夫人もまた、死と馴れ合って生きる。ついには死と同化する。ただ、プラス夫人は、ジョルジュ夫人のように死の化身とみることはできない。プラス夫人においては、存在の不安や死の恐怖が想定されるし、死を肉体化したジョルジュ夫人からは、死の恐怖などといった人間的な感情は観察されない。とはいえ、ジョルジュ夫人が、死と馴れ合って生きるプラス夫人の延長上に位置することはたしかかなように思われる。

いずれにせよ、臨終の床にある伯爵にくわえて、このように死を体現するジョルジュ夫人が存在することで、ネーグルテールの城は死の城としての性格をいやますことになる。ジョルジュ夫人は、ネーグルテールの城がいつそう死の魅惑を行使し、住人たちにいつそう死の恐怖をふきこむことに貢献している。

(3) アントワーン

次に、伯爵の息子であるアントワーンの在り方を検討することにしよう。父親が病いの床についたとき、アントワーンは学業を終えようとしていた。アントワーンは監視のゆるみを利用して、しばらく自由を満喫する。しかしアントワーンは毎朝、伯爵に面会しに行かねばならず、しだいに死の恐怖にとりつかれていく。

彼〔伯爵〕は、息子が自分を恐れていることを非常によくわかっていた。それも、自分が言うかもしれないことや、自分の不機嫌や叱責ではなく、自分がはらわたの中にもち、おそらくは息子に遺伝したであろう病いを恐れていることを。この点については、二人は一致して沈黙をまもっていた。⁽³⁵⁾だが若者の恐怖は、月日のたつにつれて、ますます抗しがたいものになっていった。アントワーンは、この世のあらゆる勇気も、一人の男が苦しむのをふせぎきれないことを、その目で見てとった。そしてあまりよく鍛えられていない彼の精神はついに、とても高い家から下に身を投げるように、恐怖に身をゆだねるのだった。いつか、父親と同じように生を終えなければならぬという思いが、そのとき、彼の脳裡を支配したのである(CQ、三三七・三三八頁)。

アントワーヌは父親の病いの遺伝性を意識して、自分もまた、「父親と同じように生を終えなければならない」という思いにとらえられている。そして「あまりよく鍛えられていない彼の精神はついに、とても高い家から下に身を投げるように、恐怖に身をゆだねるのだった」と書かれているように、死の恐怖に支配される。また、別のところでは、一族の遺伝的な病いに思いをはせるアントワーヌが、「常に覚醒している想像力にたいして無力だった」(CQ、三四一頁)と説明されている。この説明からは、遺伝的な病いにかんして際限のない想像をめぐらせて、不安と恐怖に圧倒されるアントワーヌの姿がうかがえる。

このうち、アントワーヌは父親の同意を得て、異国への旅に出る。そして放蕩にふける。このような脈絡のなかでとらえるならば、アントワーヌの放蕩は、欲望の充足のためというより、死の恐怖をまぎらせ、克服するためのこころみと解される。けれどもアントワーヌはやがてネーグルテールの城に呼びもどされ、ふたたび、死と対峙する伯爵を見舞わなければならなくなる。それで以前と同じように、死の恐怖におそわれる。

ぐずぐずするうちに数ヶ月が経った。その間、この上もなく残酷な苦しみを毎日にしたことが、アントワーヌの精神に影響をおよぼした。遅かれ早かれ同じように死ぬだろうという恐れは、今からすでに自分が病いに冒されているのではないかという疑いに席を譲った。(…)ある夜、父親の枕もとにいたとき、彼は不意に嗚咽しはじめ、絶望の大きな叫び声をあげて、自分もまた同じように死ぬだろう、もう病いがはじまっていて、数週間まえからそれを感じていると父親に告げた。実のところ、彼の病いは、この上もなく月並な肝臓の発作以外のもではなかった(CQ、三四二頁)。

死の恐怖が高じて、アントワーヌは、すでに父親と同じ病いに冒されており、父親と同じように死ぬのだという強迫観念にとりつかれている。この強迫観念と、父親を前にしての嚔り泣きは、アントワーヌがいかに死の恐怖にたいして無力であり、いかに死の恐怖に翻弄されているかを、如実に示している。

アントワーヌの嗚咽する姿を目のあたりにした伯爵は、以後子どもたちの面会を拒絶し、完全な蟄居生活にはいることになる。一方、

父親に死の恐怖をさらけ出し、自分の弱さを見せてしまったアントワーヌは、父親の完全な蟄居ののち、すっかり変貌する。

アントワーヌは、父親の見舞いに行く義務から解放されると、かなりすみやかに病いから回復した。だが彼は変わった。恐怖が彼を別の人間にしてしまった。恐怖が彼を成熟させたとも言いうるだろう。というのも、彼の年齢には当たり前前の無頓着さが、厳しい、集中した重々しさに席を譲ったからである（CQ、三四三頁）。

死の恐怖がアントワーヌを成熟させ、無頓着な人間から重々しい人間に変えたことが語られている。けれども、アントワーヌは苦悩から抜け出たのであろうか。父親の断末魔の苦しみを見る義務をまぬかれ、「恐怖が彼を成熟させた」としても、アントワーヌは死の想念、死の恐怖から解きはなたれるのであろうか。答えは否であろう。アントワーヌにそなわった「厳しい、集中した重々しさ」が示唆しているように、変貌ののちも、死の想念が彼の意識を支配し、彼は死の恐怖とともに生きるのだとみなすべきではないだろうか。死はますますアントワーヌを魅惑するようになるのだと考えるべきではないだろうか。

このことは、伯爵の完全な蟄居ののち、アントワーヌが外国に滞在していたときと同じように、放蕩に身をゆだねることから明らかである。前述のように、アントワーヌにおける放蕩は、死の恐怖をまぎらせ、克服するためのこころみとうけとれるからだ。また、アントワーヌの荒々しさ（brutalité）もしくは凶暴さ（violence）もまた、死の恐怖との関連でとらえることができる。ここで、アントワーヌの在り方、性格を特徴づける彼の荒々しさ・凶暴さを分析することにした。アントワーヌの荒々しさ・凶暴さは、酩酊状態の中でジュールジュ夫人を追いかけまわすといった行為からうかがえる（CQ、三四三頁）。とはいえ、何と言っても、マニユエルにたいする二度の暴力をおして、それは認められる。マニユエルへの暴力については、子爵夫人のサディズム的欲求を検討したときに少しふれたことがあるが、最初の暴力の場面をここで見ておくことにしよう。

ある晩、(…)栗林の小径を小走りにしていたとき、ぼくは、じつと立っている二人の人物にぶつかった。二人はおそらくぼくが近よる足音が聞こえなかったであろう。ぼくがあやまろうとしたとき、げんこつの一撃がぼくを地面にころがした。ぼくは大変おそれおののいて、子爵夫人の弟のアントワーヌの姿を認めた。彼は、ぼくが誰であるのかを見ようとして身をかがめた。が、わからなかったので、ぼくの顔の上に荒々しく指をはわせた。へお前が誰であろうと、俺の名前を口にしたら、たたきのめしてやるぞと彼はぼくの耳の中に言い放った(CQ、三二三頁)。

アントワーヌは小径でぶつかったマニユエルを、げんこつの一撃で地面にたおしている。マニユエルはのちに、アントワーヌの暴力が、同行していた子爵夫人のそそのかしによるものと考えるに至るけれども、この場面がアントワーヌの荒々しさ・凶暴さを明るみに出していることは言うまでもない。アントワーヌの荒々しさ・凶暴さは、マニユエルへの暴力行為だけではなく、「お前が誰であろうと、俺の名前を口にしたら、たたきのめしてやるぞ」という激しい威嚇の言葉からも浮かび上がってくる。

アントワーヌの暴力はいつたどのようなように解すべきであろうか。この点にかんして、アントワーヌがマニユエルを、誰だかわからずになぐっていることが注目される。したがって、アントワーヌの暴力はマニユエルその人にたいする怨恨にもとづかない。それは誰にたいしてもふるわれるような性質のものである。第一章第四節でこの場面を問題にした際、アントワーヌにマニユエルをなぐるようにそそのかした子爵夫人のうちに、サディズム的欲求を見た。しかしアントワーヌじしんは、サディズム的欲求にうながされて、マニユエルを地面にたおすのであろうか。そうではないように思われる。アントワーヌの暴力は、死の恐怖をいだいて苦しませなければならないことへの報復手段と考えられるのではないだろうか。アントワーヌの荒々しさ・凶暴さは、欲望の屈折したあらわれとしてあるのではない。死の恐怖によってつちかわれたものとみなされるのではないだろうか。

マニユエルはもう一度、アントワーヌに出会うことになる。ネーグルテールの城をかこむ森の中に散歩に出かけたとき、マニユエルは馬に乗ったアントワーヌに遭遇する。マニユエルは、近づいてきた馬が後ろ脚で立ったので、よろめき、地面にたおれる。アントワーヌは、「誰がお前に、こんなところをうろつくことを許したのだ?」と問い、「立って、こっちへ来い」(CQ、三五五頁)と命

じる。だがマニユエルが命令に従わないので、アントワーヌは、「鞭の先でお前をひっぱたいたら、ちょっとした死がどんなものか、教えてやれるのだがな」（三五六頁）と言いつつ。この脅しから、アントワーヌの荒々しさ・凶暴さが読みとれる。と同時に、「ちょっとした死」(La petite mort)という言葉を用いている点から、アントワーヌが死の想念にとりつかれていることがうかがえる。さらには、アントワーヌの暴力が死の恐怖に起因していることが察知される。つまり死の恐怖で苦しまねばならないことへの報復として、他者に苦痛、ひいては死の恐怖を味わわせたいという願い、言いかえれば、他者の内心に死の恐怖を植えつけることでそこからのがれ出たいという願いに、彼の暴力はもとづいているように思われる。

アントワーヌは立ち去る瞬間、馬の鞭でマニユエルの頬を打ち、マニユエルに手ひどい傷を負わせることになる。ところで、そこに至るまでに、アントワーヌはマニユエルに奇妙な、かつ興味深い命令をくだしている。アントワーヌの荒々しさ・凶暴さから若干話がそれるけれども、この箇所を取りあげることにはしたい。アントワーヌはマニユエルと、次のようなやりとりをしている。

——さあ、(…)お前に復讐の機会を与えてやろう。いわゆる侮辱を血で洗うというやつを、ためしてみるのがいい。(…)石を拾え——うまく選ぶんだぞ——それから道を二十歩さがって、俺をねらうんだ、俺の頭におちあててみる。

——でも、もしあなたを殺したら？ とぼくはたずねた。

(…)

——お前なんかこわくない、と彼は言った(CQ、三五六・三五七頁)。

アントワーヌはマニユエルに、自分の頭をめがけて石を投げるよう命じている。自分に向かって石を投げさせるというふるまいは、一見すれば、子どもじみた戯れとうつるかもしれない。とはいえ、「でも、もしあなたを殺したら？」とマニユエルが問うているところからうかがえるように、それは死への挑戦という意味をもつ。死に魅せられ、死の恐怖におそわれるアントワーヌにとって、マニユ

エルに投石させるといふことは、死の可能性あるいは死の危険に身をさらすことである。そうすることによって、アントワーヌは死の恐怖を克服し、さらには、死をも乗り越えたいと願っているのだと思われる。マニユエルはこのようなアントワーヌを前にして、こう考えている。

(…) ぼくの前には、自分がもうだめだと思っている男が立っているのだ。自分じしんの運命を認識するということは、恐怖にたいしてなんとという鎧になることだろう！ おそらく彼は自分を不死身だと思っているのであろう。ぼくは、恐ろしくて忌まわしい死、彼の死が、彼を保護し、のちのために彼をとっておくために、彼とぼくとのあいだに置かれているような印象をいだいた。(CQ、三五七頁。強調はグリーン)。

マニユエルはまず、「ぼくの前には、自分がもうだめだと思っている男が立っているのだ」と考えている。「自分がもうだめだと思ふとはどういうことなのであろうか。おそらくそれは、死すべき運命からのがれられないと観念することなのであろう。ここから、アントワーヌの内心が死の想念に満たされていることがうかがえる。次にマニユエルは、「自分じしんの運命を認識することとは、恐怖にたいしてなんとという鎧になることだろう」という感慨にふけている。この感慨からは、生きるか死ぬかという岐路に自分を立たせることによって、死の恐怖に打ち克ちたいというアントワーヌの願いが読みとれると思う。それからマニユエルは、「おそらく彼は自分を不死身だと思っているのであろう」と推察している。この推察は、アントワーヌは「自分がもうだめだと思っている」という、はじめの判断と矛盾しているようにみえる。けれどもアントワーヌは一方では、死ぬという宿命を回避しえないと思いつつも、他方では、マニユエルの投石ぐらいでは傷つかないし、けっして死なないと確信しているということなのであろう。アントワーヌがそう確信しているからこそ、マニユエルの投石を待つという行為が死への挑戦という意味をもちうるのだと思われる。さいごにマニユエルは、「恐ろしくて忌まわしい死、彼の死が、彼を保護し、のちのために彼をとっておくために、彼とぼくとのあいだに置かれている」ような印象をいだいている。マニユエルは、アントワーヌと自分とのあいだに、死あるいは彼の死を見てとっている。その理由は、アント

ワーヌが死の想念もしくは死の恐怖にとりつかれているために、マニユエルの目には、彼がすでにして死の領域に足を踏み入れた存在にうつるからであろう。極論すれば、アントワーヌは死の想念と恐怖のために、マニユエルにとっては、死と同化した存在なのだ。だからこそ、マニユエルは、死がアントワーヌを「保護」しているように思うのである。とはいえ、アントワーヌはそれにもかかわらず生きている人間である。アントワーヌはいつの日にか決定的な死の瞬間をむかえなければならぬ。アントワーヌが死と同化した存在であることで、マニユエルは彼の死を看取するのであるが、その死が「のちのために彼をとってお」いているとマニユエルがみなすのは、アントワーヌがそれでも生きた人間であるからである。それゆえ、マニユエルのさいごの印象からは、死と同化したつも、決定的な死の瞬間まで、死の想念と恐怖とともに生きなければならぬアントワーヌの苦悩の姿が浮かび上がってくる。

以上、アントワーヌにおける死の魅惑と恐怖を概観してきた。その過程で、アントワーヌの放蕩、荒々しさ・凶暴さ、および死への挑戦を検討した。この検討によって、アントワーヌの在り方あるいは行いはことごとく、死ぬという人間的現実と密接に関係していることが明瞭になった。アントワーヌはたえず死と対峙しつつ生きている人間なのである。

さいごに、『在り得たこと』の人物としてのアントワーヌが、マニユエルの日常生活の中のどの人物に対応しているかについてふれておきたい。アントワーヌ・フォンガロは次のような見解を表明している。

年老いた城主の息子アントワーヌは、尊大さに満ち満ち、侮蔑的な態度をとり、荒々しい人間であり、恐れおののくマニユエルの顔を馬の鞭で鞭打つのであるが、彼は、マニユエルが勤めていた本屋の主人であるエルネスト氏の、より高貴な次元での置き換えてである。エルネスト氏はマニユエルに恐怖と嫌悪しかいだかせない粗野な人物であり、マニユエルを召使のように扱うのであるが、マニユエルはこの人物を前にして、彼が荒々しい人間であるがゆえに、恐怖のために震えあがっているからである。⁽³⁷⁾

アントワーヌ・フォンガロは、荒々しく、恐怖をそそる人物であるということ、アントワーヌをエルネスト氏の「より高貴な次元

での置き換え」とみなしている。たしかに、エルネスト氏とアントワーヌとは「荒々しい」(grob)人間であるという点で共通性をもつ。しかしエルネスト氏には、アントワーヌのように、すぐさま暴力にうったえるような凶暴さはない。しかも、アントワーヌの内面を支配するような死の懊悩も見られない。アントワーヌにおける死の想念と恐怖を考慮するとき、アントワーヌはマニユエルの内心の苦悩を糧として形象化された人物であるとうけとるべきではないだろうか。ニコラス・コステイスもまた、アントワーヌを、「マニユエルじしんの死の概念にたいするもう一つの反応を肉体化したもの」と解している。第一章では、たやすく肉体的欲求を充足することのできる人間であるという点で、アントワーヌがマニユエルの夢を投影した人物であるととらえた。結局、アントワーヌは、マニユエルの肉なるものへのあこがれだけではなく、死にまつわる苦悩をも結晶化した人物であるといえよう。

(4) 子爵夫人

今度は、アントワーヌと同様に、否、彼以上に、死に魅せられ、死の恐怖にとりつかれる人物を検討したい。その人物とは、もちろん子爵夫人である。子爵夫人は、父親の伯爵が病いの床につく以前から、死の魅惑を体験している。すなわち、妹が他界したときである。このとき、子爵夫人は十四歳と六ヵ月だった。子爵夫人はマニユエルに、こう語っている。

わたしは死んだ妹の顔をおぼえています。その顔はわたしを魅了しました。わたしは十四歳と六ヵ月でしたが、ほかの人たちが微笑みを見てとっていたその唇に、恐怖をいなくことなくじっと目を据えました。わたしはといえ、そこに絶対的な無関心の気配を読みとりました。妹にとって、この地上は何の意味があったのでしょうか？ この世でいちばん愛したものの記憶さえ、もはや妹にはなかったのです。しかし別のものを知ったことで、その額には、超人的な知恵のようなものが刻みこまれていました。でもいつもそうだったというわけではありません。その顔だけが空虚に見える瞬間もありました。それから、思念が不意に、炎のよくな強烈さでもどってくるのです。この仮面の下で、このこめかみの奥で、何ものかが生き、そして死ぬのです。一日に十回も、

わたしは、枕もとで彼女のためにお祈りするという口実のもとに、わたしたちの知らないことを知っているこの少女をながめに行きました。わたしは悲しくありませんでした。死がひきおこす茫然自失の念とともに、制・製・し・が・たい・好・奇・心・が・い・や・ま・す・の・を、内心に感じました。この時から、生とは幻覚であり、大いなる現実とは死であるという考えに、わたしは支配されてしまったのです
(CQ、三七二頁)。

子爵夫人は少女時代に、妹の死に遭遇し、妹がまさしく死んだという事実のために、「超人間的な知恵」を額に刻みこんでいるように思う。この「超人間的な知恵」とは、生きている人間が理解しえない死の神秘につうじたことからくる知恵のことであろう。子爵夫人には、妹が生者の知らないことを知っているように感じられるのである。かくして子爵夫人は、「一日に十回も」妹の枕もとにかよひ、死の謎にせまろうとする。この頻繁な行動と、さいごから二つ目の文に見られる、「制御しがたい好奇心」という語は、子爵夫人が早くも少女時代から死に魅せられていたことを端的に示している。子爵夫人における死の魅惑は、さいごの文に書かれているように、生が「幻覚」(Illusion)であり、「大いなる現実」が「死」であると認識させるほどまでに強烈である。

死に魅せられた子爵夫人において、日常生活は意味無意義をもたない。夫人が誰かを愛するということはありえないし、夫人の行きあたりばったりの結婚も、生が「幻覚」であるという認識とのかかわりで把握することができる。実際、「大いなる現実」が「死」であると考えられる人間にとって、人生の一大事であるはずの結婚は重要性をもたない。結婚は形式的なことにすぎず、娘から一人前の女性になるための通過儀礼のごときものにしかなりえない。結婚は子爵夫人の生活を何ら改善しない。子爵夫人は娘時代と同じ生活をつづける。『在り得たこと』のなかで子爵がほとんど登場しないのは、言いかえれば、子爵夫人が夫と交わりをもたないのは、夫人が子爵を愛していないということもあるが、子爵が生のだただ中において、死に魅せられた夫人とは無縁の存在であるからである。

父親の伯爵が病いの床についてからの子爵夫人の挙動を見ることにしよう。作中、伯爵が子どもたちの面会をゆるしているあいだの、アントワーヌの死の恐怖については語られているけれども、子爵夫人の反応についてはふれられていない。しかし伯爵が子どもたちを

疎んじ、完全な贅居生活に入ってから、子爵夫人の行動は述べられている。子爵夫人は、伯爵がなかなか死なないことに堪忍袋の緒をきらせて、城の中で宴会や舞踏会を幾度も催す。子爵夫人は、父親の病状が快方に向かっていると嘘をついて、客たちをもてなしている。こうしたふるまいは、医師たちの来診をはばむことを目的としている。また、生の喧噪を伯爵の耳にまでとどかせることで、伯爵に生の世界との断絶をいっそう意識させ、伯爵の死期を早めることを目指している。子爵夫人が司祭を伯爵になかなか会わせないのも、伯爵を死に追いやりたいからである。というのも、司祭は伯爵に魂の平安を与えることができ、そうすることによって、結果的に伯爵を生きのびさせることになるからだ。さらに、伯爵の世話をするジョルジュ夫人が、伯爵と話をしないよう命令をうけているという事実も、こうした脈絡のなかで理解することができる。マニユエルは書いてある。

彼女〔ジョルジュ夫人〕は、主人〔伯爵〕に話しかけないよう、また、外部の近況をたずねられても知らないふりをするよう、命令をうけていた。子爵夫人かその弟のどちらが、このような非人間的な規則を思いついたのか、ぼくは知らない（CQ、三三九頁）。

ジョルジュ夫人に伯爵と話をさせないことを思いついたのが、子どもたちのどちらであるのか、ここでは明記されていない。しかしジョルジュ夫人に伯爵を看護させているのは子爵夫人であるのだから、この思いつきが子爵夫人の意向にかなっていることはたしかである。子爵夫人はジョルジュ夫人に沈黙をまもるという命令を課すことによって、伯爵を生の世界から追放し、死の領域の中に幽閉したのであろう。この命令もまた、宴会や舞踏会を催し、あるいは、司祭を城から遠去けるという行為と同様に、伯爵の死期を早めたという願いに立脚している。

子爵夫人のこうした願いは、憎しみ・怨みといったような、父親その人にたいする感情に由来するものではない。なるほど、子爵夫人において、伯爵への娘としての愛情は欠落している。だがこの欠落が伯爵の死を願う直接的な理由になるわけではない。端的に言って、子爵夫人の願いの根底には死の恐怖があるのでないだろうか。つまり伯爵が病いの床につくことによって、死が「大いなる現実」

としていっそう子爵夫人の意識を支配することになる。死への意識は当然のことながら死の恐怖をとまなう。伯爵が生きながらえるかぎり、死の想念と恐怖は消え去らない。子爵夫人はこれらからのがれるために、伯爵の死を願うに至るのだとみなしうる。

けれども、伯爵は生者たちの世界から隔絶したところで生きのびる。その結果、伯爵はますます、「死者たちの恐ろしい威光」を放ち、死はますます子爵夫人を魅惑することになる。子爵夫人はマニユエルに言っている。

わ・た・し・は・知・り・た・い・の・で・す・。・ど・ん・な・ふ・う・に・そ・れ・が・、・生・命・が・お・わ・る・の・か・を・。・そ・う・で・す・、・ど・ん・な・ふ・う・に・し・て・人・が・死・の・中・に・入・っ・て・い・く・の・か・を・。・こ・の・願・い・は・ど・う・し・よ・う・も・あ・り・ま・せ・ん・。・そ・こ・「・伯・爵・の・居・る・小・さ・な・部・屋・」・に・は・わ・た・し・を・惹・き・つ・け・、・わ・た・し・の・心・を・と・ら・え・る・何・か・が・あ・る・の・で・す・。・父・が・発・す・る・言・葉・の・中・に・、・つ・い・に・私・を・教・え・る・な・ん・ら・か・の・言・葉・が・あ・る・こ・と・を・望・み・ま・す・。・す・で・に・久・し・い・以・前・か・ら・、・父・は・、・わ・た・し・た・ち・が・よ・く・知・っ・て・い・る・よ・う・な・生・の・中・に・は・も・う・お・り・ま・せ・ん・。・父・は・す・で・に・、・わ・た・し・た・ち・を・死・者・か・ら・ひ・き・離・し・て・い・る・曖・昧・な・国・を・横・切・っ・て・い・る・の・で・す・（CQ、三七一頁）。

子爵夫人における死の魅惑は、「わたしは知りたいたいのです。どんなふうにもそれが、生命がおわるのかを。そうです、どんなふうにして人が死の中に入っていくのかを」というはじめの文から見とることが出来る。子爵夫人の脳裡を支配するのは、もはやどのような生きべきかではなく、まさしくいかにして死ぬかということであり、生の問題ではなく死の問題が、彼女の重大な関心事になっている。このように子爵夫人が死に魅せられていることと、伯爵の存在とは深く関係している。さいごの文で述べられているように、伯爵は、「わたしたちを死者からひき離している曖昧な国」のなかにいるからだ。伯爵は死の神秘を解く鍵をにぎっているように思われるがゆえに、子爵夫人をいっそう死のほうに惹きつける役割をはたしているのである。また、子爵夫人における死の魅惑は、次の文章からも読みとることができる。

彼女「子爵夫人」は、死に刃向かうこの老人「伯爵」をおそれるに至った。それでその背後で恐ろしいたたかが行われている

扉を眺めるのを避けるのだった。(…)彼女はよく眠れなかった。父の部屋で何が起こっているのか気がかりになって、時折、夜起きて、赤いカーテンのかかった綺麗な部屋の中の、長椅子の上でいびきをかいているジョルジュ夫人をおこすのだった。頭を軽くゆすりながら寒さでふるえている家政婦に、情け容赦なく質問を浴びせて、暁の微光が射しこむまで、この女と話しつづけることがあった(CQ、三四五、三四六頁)。

ここでは、死とたたかう伯爵への子爵夫人の恐怖がまず語られている。この恐怖は、死にたいする恐怖に等しいであろう。そういうわけで、子爵夫人は、伯爵のいる部屋の扉を見つめないようにする。だが、それにもかかわらず、子爵夫人は伯爵の部屋におびきよせられる。子爵夫人は夜、「父の部屋で何が起こっているのか気がかりになって」、居眠りをするジョルジュ夫人をおこして、一晩中、父親の様子を問いただすのである。この行為は、子爵夫人が死に魅せられていることを証している。子爵夫人は死の恐怖をいだいていくからこそ、逆に死はなおさら夫人を魅惑している。

子爵夫人において、死の恐怖が死の魅惑をつのらせていることについては、マニユエルへの次のような打ち明け話からもたしかめることができる。

ネーグルテールから遠去かるにつれて、わたしの心はだんだん軽くなっていくような気がしました。森は歌声や呼びかける声に満ちあふれていました。わたしが通りがけると、獣たちが枯れ葉の中でうごめいていました。声や笑いや鳴き声に満ちたあの暗闇のただ中で、わたしは自分の幸福をもっとよく感じとろうと、一瞬立ちどまりました。死がわたしを探し出さないであろうような隠れ場所を、夜に護られた窪地をみつけたような気がしました。でもわたしはもどりました。城にひきかえたのです。

(…)わたしはここ以外のところでは生きることができません。何かがわたしを心ならずもここにひきとめるのです(CQ、三六七、三六八頁)。

子爵夫人はここで、父親が死ぬと思った日の夕食後の行動を語っているのであるが、まず注目されるのは、死の城であるネーグルテルの城から遠去かることで、夫人が幸福感を味わっているという点である。この幸福感は生きることのよろこびを意味し、死の恐怖とは明らかに対立する。しかも子爵夫人は幸福感を感じているとき、死から自分をまもってくれるような安全地帯にいるという感慨をいっている。けれども子爵夫人は、死が支配するネーグルテルの城にまいもどる。「わたしはここ以外のところでは生きることができません。何かがわたしを心ならずもここにひきとめるのです」というさいこの言葉は、子爵夫人が完全に死に魅せられていることを示している。子爵夫人は城を去れば、生きるよろこび・幸福を享受しうるにもかかわらず、死の魅惑に抵抗することができず、城にひきかえす。このような在り方の根底には、死の恐怖が横たわっているのではないだろうか。死の恐怖が子爵夫人の意識の深層を牛耳っているがゆえに、死の謎の解明にいざなうものとして、ネーグルテルの城が彼女を呪縛していると考えられる。子爵夫人はマニユエルとの別の対話の中で、自分が城から「逃げだしたいと思うことがある」にもかかわらず、「好奇心」のために城から離れられないと言っている（CQ、三七〇頁）。この件りも、死の恐怖と死の魅惑との関係を浮き彫りにしている。死の恐怖は子爵夫人の内心で、死の城からの逃亡の欲求を生じさせるとともに、死の神秘に接近したいという願いを呼びおこし、彼女を城にひきとめるはたらきをしている。つまり死の恐怖は死の魅惑の支配下に子爵夫人を置いている。

このように死に魅せられた子爵夫人は、ありとあらゆる機会を利用して、死の謎を解こうとする。子爵夫人がマニユエルと夜の散歩をしているとき、咳の発作におそわれた彼を注意深く観察するのは、このためにほかならない。

ぼくの女主人は、ぼくの咳がおさまるのを辛抱強く待った。あちこちに目をやったり、また、忘れもしないが、杖を折って細い杖を作ったりするのだった。だがこの無関心は見せかけのものだった。というのも、ぼくがハンカチを口にあてたとき、彼女のまなざしが異常な注意をもってぼくのほうに向けられているのを、ぼくは薄暗がりの中で不意に目撃したからだ（CQ、三四八頁）。

子爵夫人は、咳(せき)込んでいるマニユエルに「異常な注意をもって」視線を向けている。この異常な関心は、子爵夫人がマニユエルの

咳の発作のなかに死の徴候を嗅ぎわけ、そうすることによって、死の神秘に接近したいと願っていることを示唆している。子爵夫人のこのふるまいは、先に引きあいに出したように、十四歳半のとき、死んだ妹の枕もとに足しげくかよっていたという行為、あるいはまた、不眠の夜、伯爵の部屋のそばでジョルジュ夫人を質問責めにするというおこないと同様に、死の謎にせまりたいという願いに立脚している。

子爵夫人は九歳のとき、病氣になった体験を振り返りつつ、マニユエルにこう語っている。

わたしもまた、昔、病氣だったことがあります。九つのときでした。もうなならないだろうと誰もが思いました。ある晩、自分のベッドがゆっくりと右のほうに傾いていくような気がしました。そばには、看護している年^{ねん}老^{らう}いた女^{にょ}がいました。その女がこんなふう^なにベッドを押して、わたしを穴^{あな}の中に落^おとそう^{そう}としていたのだと思いました。そのとき、わたしは眩^{めまい}暈^{えん}がして吐^つきました。それで助^{たす}かったのだと、人は言^いいました。でもわたしはこのひとときについての奇妙な記憶^{きおく}をもっています。まるで新^{あたら}しい能力^{のうりき}が自分^{おのれ}に与^{あた}えられたか^かのよう^{よう}でした。時折^{ときとき}、わたしは、死^しんでいく者^{もの}たちが見^みるものを見^みよう^{よう}としていたのだと思う^{おも}うことがあります

(CQ、三四九・三五〇頁)。

子爵夫人は、病氣だったとき、自分のベッドのそばに「年老いた女」(une vieille femme)がいたと語っている。この「年老いた女」は、子爵夫人が病いから癒えると、姿を消し去っているの、実在する人物ではない。しかもこの「女」は、子爵夫人を「穴の中に落とそうとしている」ことから、死の化身、死を実体化した存在であると解^とけることができる^べ。したがって、子爵夫人にとって、九歳の頃の病いの体験は、死に接近し、死の神秘をかいま見た特権的な体験であったといえよう。子爵夫人は、「まるで新しい能力が自分に与えられたか^かのよう^{よう}でした」と言^いっている。「新しい能力」とは、死の謎を解き明^あかす能力^{のうりき}のことにほかならない。この体験の記憶が生々しいかたちで脳裡に焼きついていることもあって、子爵夫人は、「死んでいく者^{もの}たちが見^みるものを見^みよう^{よう}としている」と思う^{おも}うことがある。

るのであろう。いずれにせよ、この一節から、子爵夫人の死への関心は、自分の病いの体験をも、死への接近の絶好の機会であったとみなすほどに深まっていることがわかる。子爵夫人において、死んだ他者、病める他者だけではなく、病気の自分もまた、死の神秘にせまるための観察の対象となっている。

死と対峙する子爵夫人において、マニユエルが咳の発作におそわれたとか、伯爵が臨終の床についているとかいったように、他者が死のほうに向かっていると思われる場合を除いては、他者は存在しない。この他者の不在は、作中、子爵夫人の夫婦生活の破綻、夫である子爵の登場の少なさによって端的に示されている。それとともに、マニユエルを相手に死にまつわる打ち明け話をするときの子爵夫人の態度からもたしかめることができる。マニユエルは、子爵夫人が死について語るときの様子を書きとめている。

この素っ気なく、横柄な女が、このような内心に秘めたことをぼくに打ち明けるのに、ぼくは驚きながら耳を傾けていた。しかしぼくはまもなく、彼女がただ一人で話しているのだということを、そして、彼女の頭の中では、いつもと同じようにぼくなどうでもよいのだということを理解した。それがどれほど馬鹿げて見えようと、自分自身と語り合うためには、一人の人間がいて、そうして誰かと話をかわしているという幻想を持つ必要があったのだ。実際には、彼女はあまりに重くのしかかる想念から自らを解き放ち、夜に向かつて自分の夢を投げかけているにすぎなかったのだが（CQ、三五〇頁。強調はグリーン）。

マニユエルは、子爵夫人の、死にかかわる話をききながら、彼女が「ただ一人で話しているのだ」という印象をいだいている。子爵夫人の滔々たる打ち明け話は、実質的には、他者との交流を目指さない単調な独白に等しい。死に魅せられた子爵夫人にとって、他者は死の想念から「自らを解き放ち」、「夜に向かつて自分の夢を投げかけ」るための手段にすぎない。子爵夫人が死について語るとき、ということはずなわち、死の想念にとりつかれているとき、他者は彼女の意識のなかでは存在しない。死との対峙は自己との対話を強いるがゆえに、他者から完全に隔絶した状況のなかに、子爵夫人を置いている。

また、子爵夫人は死の想念に支配されるあまり、目に見える世界の实在性を疑うに至っている。死んだ妹を目のあたりにして、「生

とは幻覚であり、大いなる現実とは死である」という認識が生じたことはすでに見た。この認識からは、外部世界あるいは目に見える世界の現実性にたいする疑惑を看取することができる。子爵夫人はこうした類いの考えを、再三表明している。たとえば、「わたしたちが目に見えると思っている世界は存在してはいないので」（CQ、三七二頁）と言っているし、また、城の書齋の中でマニユエルと次のような会話をかわしている。

——（…）このとても激しい、きらきらした雨は、前方にみえる並木道の奏皮とねりこの列の向こう側をみわたすことを妨げていますが、その雨が何をかくしているか、当てることができますか。教えてあげましょう、とモスリンのカーテンをおろしながら彼女（子爵夫人）は言った。雨は何もかくしていません。

——何もですって？ とぼくは叫んだ。雨は世界をかくしていませんよ。
——雨は、お望みとならば、一つの幻影をかくしています。でも可能な唯一の現実、この城の壁のあいだに住んでいるのです。死が存在することによって、その周りの幻覚的な一切のものが絶滅されてしまっていることを、あなたは感じませんか？ わたしたちは死の子どもであり、死はわたしたちを虚妄から遠去けてくれるのです（CQ、三七五頁）。

ここでは、子爵夫人が窓の外の、視界をさえぎる雨を問題にしながら、「雨は何もかくしていません」と断言していることや、「雨は世界をかくしていますよ」と反駁するマニユエルにたいして、「雨は、お望みとならば、一つの幻影をかくしています」と答えているところがまず注意をひく。子爵夫人において、世界Ⅱこの世は「幻影」(mirage)ないし無と認識されている。このような認識と表裏をなすかたちで、死が「可能な唯一の現実」であるとする見方が子爵夫人の意識を支配している。「死が存在することによって、その周りの幻覚的な一切のものが絶滅されてしまっている」という言い方からうかがえるように、死の存在を痛感する子爵夫人にとっては、目に見える世界は、幻覚であり、さらには虚無ですらある。このように子爵夫人における死の魅惑は、目に見える世界の实在性

を根本的に疑わせるほどまでに強烈である。

子爵夫人における死の魅惑と恐怖を概観してきた。ここで、『在り得たこと』の末尾近くに置かれた、マニユエルとの性行為と死の場面に言及しておきたい。この場面については、マニユエルの側に立って分析したことがあった。しかし子爵夫人の内面にそくして考察する必要もあるわけで、再度取りあげることにはしたい。子爵夫人は、父親の伯爵が息をひきとった日の夜明け前、マニユエルの部屋を訪れ、マニユエルのベッドの中にもぐりこむ。子爵夫人はいつたいなぜ不意に出現するのであるうか。その理由として、子爵夫人のうちに潜在する肉体的欲望がまず挙げられる。夫人の抑圧された欲望は、マニユエルにたいするサディズム的態度をとおしてかいま見られた。この欲望が伯爵の死を契機として堰を切り、氾濫し、夫人をうごかしたと解釈することができる。とはいえ、子爵夫人の挙動を、彼女の抑圧された欲望だけによって説明するのは無理がある。子爵夫人がマニユエルと性の交わりをむすぶことになるとしても、夫人の意識を支配するのは、肉なるものへの思いではなく、死の想念であるからだ。子爵夫人がマニユエルの部屋にやってくるのは、死と対峙しつつ生きることでの緊張が極限状態に達したからではないだろうか。子爵夫人は、伯爵が完全な蟄居生活にはいつて以来、いよいよ死に魅せられる。すでに見たように、死の魅惑は死の恐怖を生じさせる。そして死の恐怖を克服しえたとしても、死との対峙は張りつめた精神状態に在ることを余儀なくさせる。その結果、精神的な、さらには肉体的な疲弊をもたらす。伯爵の死によって緊張と疲弊が極限にまで達したがゆえに、子爵夫人は、召使であると同時に *confident* (打ち明け話の聞き手) でもあるマニユエルを訪ねたとも解釈することができる。

この点に関連して、子爵夫人はマニユエルの部屋に入ってきたとき、伯爵の世話をするジョルジュ夫人が「わたしを探しにくるのではないかと恐れたので、ここに来たのです」(CQ、二七六頁)と言っている。この言葉は意味深長である。ジョルジュ夫人の忌避は、死との対峙を避けたいという願いにもとづいている。ジョルジュ夫人にみつかることは、必然的に、死んだ父親と対面するという事態をひきおこすからだ。子爵夫人は、死の恐怖もしくは死にまつわる苦悩に翻弄されることを回避したいのだと思われる。このことは、ジョルジュ夫人がへ死の化身であることを考えあわせるとき、いつそう明瞭になってくる。子爵夫人にとって、マニユエルとの性行

為は、欲望の行為であるというより、へ死へから逃避するための、あるいは、死の恐怖、死にかかわる苦悩からのがれるための絶望的なくわだてという意味をもつとみなされる。

では、子爵夫人はどうしてマニユエルとの性行為のさなかに息たえるのか。子爵夫人の最期はいかなる意味をもつのか。第一章第四節では、子爵夫人の死を、マニユエルの純粹志向とのかかわりで考察した。ここでは、子爵夫人の側に立って分析することにした。まず考えられるのは、死との対峙が、極度の精神的緊張とともに、肉体的な衰弱をもたらし、死をまねいたということである。伯爵が果てる時、子爵夫人は、自らの生命も尽きてしまうほど憔悴していたのであろう。疲弊のなかで死と向かい合う子爵夫人にとって、父親の死は自らの死に等しい。マニユエルとの性の交わりは、子爵夫人のうちにほんのわずかに残っていた生命力のさいごの燃焼にほかならず、自らの滅亡へのむなしい抵抗であると同時に、自己の人生を完結するためのがむしゃらなところみであるとうけとれる。グリーンは『幻を追う人』を制作中、すでに引用したように、「マニユエルの人生のさいごの日々は、一種の死の修業とならねばならぬであろう」と書いていた。伯爵が完全な蟄居生活にはいつてからの、子爵夫人の城での日々もまた、「マニユエルの人生のさいごの日々」と同じように、まさしく「一種の死の修業」とみなすことができる。伯爵の他界によって、子爵夫人の「死の修業」は終止符を打つ。「死の修業」をおえた子爵夫人を待ちうけるのは、死だけである。それゆえ、マニユエルとの性行為は、死出の旅路につくための儀式という性格を帯びている。

さいごに、子爵夫人の、マニユエルの日常生活における人物との対応関係についてふれておきたい。欲望の観点から作品を分析したとき、『在り得たこと』の子爵夫人がマニユエルの欲望の対象となるがゆえに、現実生活におけるマリー・テレーズと対応するとみなした。とはいえ、子爵夫人が死に魅せられ、死の恐怖をいだくという点を考慮するならば、夫人は語り手マニユエルの分身的存在であるともいえよう。伯爵およびアントワヌと同じく、子爵夫人もまた、マニユエルにおける死の魅惑と恐怖を形象化した人物であると判断することができる。そしてグリーンが言うように、「マニユエルの人生のさいごの日々」が「一種の死の修業」となることには、『在り得たこと』のなかで、子爵夫人が死の修業をおこなうという事実が決定的に関係している。

(5) 作中人物のマニユエル

死の主題とのかかわりでネーグルテールの城の住人たちの在り方を見てきた。『在り得たこと』の中で、検討しなければならぬ人物がもう一人のこっている。作中人物としてのマニユエルである。マニユエルは現実の日常生活において病いにたおれ、死とたたかうことを余儀なくされた。もともと、マニユエルの想像世界への脱出、『在り得たこと』の作成は、死の恐怖からの逃亡のこころみとしてあった。『在り得たこと』の中の人物としてのマニユエルが、死の恐怖との関連でどのように成長していくかを概観することにした。

マニユエルは子爵夫人から、死を待つ伯爵のためにラテン語の祈禱文を朗読するという仕事を与えられ、伯爵と対面する。このときの心の動きを、彼は追憶している。

この男〔伯爵〕がぼくにいだかせる恐怖と、その恐怖よりもさらに強い好奇心とに、心を一つにひき裂かれて、ぼくは一瞬、ベッドの足もとに立ちすくむのだった。恐怖というもののなかには、どんなに勇気ある人びとでさえ味わう魅惑の力がひそんでいる。生きながらにして、死の中に滑りこみつつあるこの人間の奇妙な光景を見ることによって、ぼくは自分自身からひき離されるのを感じた。そして、この人間のそばに居あわせることによって、ぼくたちの沈黙よりもずっと深い沈黙の国の境目にまで接近していくような気がした。(CQ、三三二頁)。

マニユエルは、臨終の床にある伯爵を目のあたりにして、恐怖におそわれている。この恐怖は、言うまでもなく死への恐れと等価なものである。だが注目されるのは、マニユエルが同時に、「その恐怖よりもさらに強い好奇心」にかられているという点である。これはもちろん死への好奇心である。「恐怖というもののなかには、(…)魅惑の力がひそんでいる」と述べているように、マニユエルは死に魅せられる。死に恐怖をいだきながらも、というより、恐怖をいだくからこそ、死に惹きよせられるのだ。さいごにマニユエルが、「この人間のそばに居あわせることによって、ぼくたちの沈黙よりもずっと深い沈黙の国の境目にまで接近していくような気がした」

と書いている点はとくに重要だろう。「ぼくたちの沈黙よりもずっと深い沈黙の国」とは、死の国のことであろう。結局、マニユエルは伯爵に接することによって、生と死との境界線に近づいたような、死の神秘に肉薄したような感覚をいだいたのである。このような感覚をもつことは、死の恐怖を乗り越えることにつながる。伯爵との対面のひとときは、マニユエルにとって、死の恐怖の克服の可能性を開示した特権的瞬間であったとみなしうる。

このような特権的瞬間を体験した以上、マニユエルはネーグルテルの城から離れられなくなる。マニユエルは子爵夫人からしばしば横柄な態度をとられ、アントワーヌからは、二度にわたって暴行をうける。恥辱をこうむったマニユエルは、一たんはネーグルテルを去る決意をする。しかし子爵夫人から待遇の改善を申し出られて、決意をひるがえしてしまふ。マニユエルが城にとどまるのは、子爵夫人にたいするひそかな執着の感情のせいでもあった。だがこれとともに、ネーグルテルの城が死の城であることも関係しているであろう。「心の底からぼくはネーグルテルを憎んでいた」と言いつつも、「たとえぼくが追い払われたとしても、おそらくぼくは戻ってきただろう」(CQ、三六六頁)とマニユエルが書くのは、彼が死に魅せられ、死の謎を解き明かしたいからだと思われる。

しかし死の城にとどまることによって、マニユエルは死の恐怖におそわれる。子爵夫人が「今夜、父は死ぬでしょう」(CQ、三六三頁)と言った日の夜、マニユエルは死の恐怖にさいなまれて、苦悩のひとときをすごしている。この件りを読んでおこう。

一枚一枚、ぼくは毛布をはぎ、それからシートも投げ捨てた。そして体を汗びっしょりにして、自分の呼吸の音を不安におびえながら聞いた。ぼくのように苦しんだことのない人には、ぼくのことをとやかく言わないようにしてもらいたい。とうとうぼくはベッドから飛びおりた。ベッドで休むことがあるとしても、そこで死ぬということもまた同様に真実であるからだ。そしてこうし
た思いは、真つ昼間には馬鹿げているとしても、夜には道を切りひらくことができるのだ。恐怖にあってもつとも奇妙なのは、恐怖が人を教えないということだ。幾度となくぼくは死の恐怖を味わったが、いつもそれを前にして同じように無防備のままだった。
自由になろうとしてもがくたびに、だんだんと締まる罫にとらえられて、どうしてよいのかわからなかった(CQ、三六四頁)。

マニユエルは夜、死ぬのではないかという不安におびえて、寝つくことができません、ベッドから飛びおりている。マニユエルが「体を汗びっしょりにし」ていることや、「幾度となくぼくは死の恐怖を味わったが、いつもそれを前にして同じように無防備のままだった」という述懐は、彼における死の恐怖の深さをうかがわせる。すでに見たように、死の恐怖は死の魅惑の力を強める。死ぬことにたいして戦慄することによって、マニユエルはますます死に魅せられ、ネーグルテールの城を憎みつつも、いよいよ城から離れにくくなる。こうしてマニユエルの立場は、アントワーヌや子爵夫人の立場と等しくなる。この二人の人物もまた、死に魅せられるがゆえに、城にとどまっていた。彼らと同様、マニユエルは、城から逃げ出すことができずにいつそう苦しむのである。

マニユエルにおける死の魅惑は、子爵夫人の *coincident*（打ち明け話の聞き手）として、夫人と死にかんする会話をかわすことによつていやましている。子爵夫人と散歩しながら、死にまつわる打ち明け話に耳を傾けている際、マニユエルは、「彼女にたいしても、ぼくにたいしても、死が抵抗しがたい魅惑の力をふるい、ぼくたちと戯れている」ように感じている（CQ、三五二頁）。ここから明らかなく、マニユエルは子爵夫人の話を聞くことで、なおさら死に魅せられ、死に接近していく。そして夫人の供をつとめることによつて、マニユエルは死の神秘にせまることにもなる。二人の会話を引用することにしよう。

——死ぬことの恐怖は、あなたをひどくさいなんだのですか？

ええ、大変、とぼくは告白した。

——あなたは死をどんなふうに思っていますか？ と彼女は訊いた。

これはぼくにとつて、頻繁に瞑想した一つの主題だった。幾つもの返事が頭にうかんだ。が、そのいずれをも口にすることを躊躇した。伯母の家で味わった数々の不安が、また記憶のなかをよぎった。そして生まれてはじめて、ぼくは苦しんだことで自分が豊かになったのを感じた。死と隣り合うなかで、一つか、二つの本質的な事柄を学んだように思えた。

——もう覚えていません、と自分でも説明できない一種の羞恥から、ぼくはようやく答えた。おそらく後ろに落ちていくような

感じでしょうが……でももう覚えていないのです（CQ、三四九頁）。

マニユエルはプラス夫人の家で、病いの悪化のために死の危機に瀕したときのことを振り返りながら、「死と隣り合うなかで、一つか、二つの本質的な事柄を学んだように思えた」と述懐している。「本質的な事柄を学んだ」時点は、もちろんプラス夫人のところでは病いとたたかっていた時点である。とはいえ、ここで重要なことは、マニユエルが死と隣接した特権的な体験を自発的に思い出すのではなく、子爵夫人が問いを発することによって、マニユエルにその体験を想起させているという点である。死が、「後ろに落ちていくような感じ」であるという答えをひき出しているのは子爵夫人であり、子爵夫人の問いかけがなければ、マニユエルは自己の体験を糧として、死にかんする考察を深めることはなかったように思われる。マニユエルは、「苦しんだことで自分が豊かになったのを感じた」と書いている。マニユエルを「豊か」にするのは、病気の体験であるとともに、子爵夫人の存在であろう。子爵夫人は、マニユエルにとって、ネーグルテールの城での滞在がそうであるところの「死の修業」にたいして、必要不可欠な存在である。

マニユエルは子爵夫人に同伴し、死の神秘に肉薄することで、徐々に死の恐怖を乗り越えていく。マニユエルは、子爵夫人が死について語っていたときのことを顧みながら、こう書いている。

心ならずもぼくは、だまらなかつたということで彼女（子爵夫人）をいくらか軽蔑した。それにぼくは、彼女が死にたいして思っているイメージがあまり好きではなかつた。実際、数週間まえから、ぼくは昔の恐怖から徐々に解きはなたれていた。カトリックの遺産を捨て去ることによって、ぼくは永遠に消滅することへの期待の中に、奇妙な慰めを見いだしていた（CQ、三五二頁）。

三番目の文で言われている「昔の恐怖」とは、言うまでもなく死にまつわる恐れのことである。マニユエルは死の恐怖から少しずつ脱却し、再生ではなく永遠の消滅をもたらさずの死にたいして、ある種の期待さえいだく。死へのおののきからの解放は、死への接

近ということと関係している。けれどもそれを可能にしたのは、マニユエルが子爵夫人に寄り添い、夫人の confident (打ち明け話の聞き手) になったという事実であろう。子爵夫人との会話は、語り手マニユエルにとっては、夫人がマニユエルの分身的存在であるがゆえに、内心の対話にすぎない。しかし作中人物としてのマニユエルの立場に立てば、子爵夫人はその打ち明け話によって、マニユエルを死の恐怖の克服という方向に向かわせている。

子爵夫人はマニユエルとの性行為のさなかに絶命することによって、マニユエルにたいして決定的な役割をはたしている。子爵夫人との性の交わりは、マニユエルの側からとらえるならば、死との交合を、したがって、「死の修業」を意味するのではないだろうか。というのも、その行為は、死をもっとも身近なところで見させるがゆえに、ほとんど死そのものの体験といえるからだ。ネーグルテールの城での滞在がマニユエルにとって「死の修業」となるのは、ただ単に、臨終の床にある伯爵が存在するという理由からだけではない。マニユエルにおいては、伯爵の死よりも子爵夫人の死のほうが、はるかに重要性をもつ。マニユエルは「憎しみ」(haine)、「恐怖」(terreur)、「嫌悪」(horreur)、あるいは「苦悶」(angoisse)の中で、子爵夫人の抱擁に耐え、夫人の最期に立ちあう(CQ、三七七・三七八頁)。これはまさしく「死の修業」を構成する。子爵夫人との性行為は、マニユエルにおける死の魅惑と恐怖が頂点に達する場面だといえよう。子爵夫人はその他界の仕方によって、マニユエルの「死の修業」を完結させているとみなせよう。「死の修業」を完了したマニユエルに残るのは、自らの死しかない。げんにマニユエルは、このあと現実世界にもどり、死のほうに赴き、死をむかえることになるのである。

五 まとめ

『幻を追う人』を、死の主題との関連で読解してきた。マリー＝テレーズの死の想念、プラス夫人の不幸への愛と死への歩みをしらべ、それから、現実生活におけるマニユエルの死の想念と恐怖を一瞥したあと、マニユエルの作成した物語『在り得たこと』を死という観点から分析した。すなわち、伯爵、ジョルジュ夫人、アントワーヌ、子爵夫人、作中人物としてのマニユエルが死とどのようにかわっているのかを概観し、死を体現するジョルジュ夫人をのぞいた城の住人たちが、死の恐怖を覚えつつも、死に魅せられていくありさまを見た。ここまでの検討によって、作品『幻を追う人』の全体、とくにマニユエルの内面世界を形象化した『在り得たこと』が、死の想念と恐怖の充満する世界であることは十分に納得できる。

『幻を追う人』における死の想念と恐怖は、作者グリーンが共有しうるであろう。というより、作者グリーンじしんのものであるかもしれない。ちょうど『在り得たこと』が語り手マニユエルの内的世界を暗示しているのと同じように、『幻を追う人』全体は、作者グリーンの内面世界を反映したものと受けとれる。この章の第四節で、『在り得たこと』の人物である伯爵、アントワーヌ、子爵夫人が死に魅せられ、死の恐怖をいだくという点で、マニユエルの分身的存在であると指摘した。それと同様に、マニユエル、マリー＝テレーズ、プラス夫人は作者グリーンの分身的存在であるとみなしうるし、『在り得たこと』の中の人物たちもまた、結局のところ、語り手マニユエルの内心とともに、というより、マニユエルの内心を越えて、作者グリーンの内的世界を投影していると解される。『幻を追う人』は作者グリーンにおける死の魅惑と恐怖を表出している。とすれば、グリーンにとって、作品創造は、『在り得たこと』を物語るマニユエルの行為と同じく、欲望との関連とともに、死の苦悩とのかかわりにおいても、カタルシスまたは exorcisme の価値を有することになるのではないだろうか。書くことが肉体的な欲望のレベルでのカタルシスないし exorcisme の営みであることはすでに

論じた。グリーンは『幻を追う人』を制作中、すなわち、一九三三年三月三十日付の『日記』のなかで、こう綴っている。

夜明けに、人生が終わるのではないかという息苦しい不安をいだいて目をさましたことのない人びとは、私の本を好きにはなれないだろう。私は暗示の助けをかりて、死ぬことの恐怖が何であるかを言おうとこころみだ。このような本のなかで、病いや死のことをほのめかすことは、言うならばそれらの威光をいやますことになるのだ。(…)

私の今度の小説は、これまでに書いてきたすべての小説のうちで、もっとも常軌を逸したものだ。しかし自分の本の中にこの狂おしい思いを移し入れることがなければ、それが私の人生のなかに腰を据えないかどうか誰が知ろう？ 私に均衡のようなものを保つことができるようにしてくれているのは、おそらく私の本なのだ。

グリーンは後半の段落で、「自分の本の中にこの狂おしい思いを移し入れることがなければ、それが私の人生のなかに腰を据えないかどうか誰が知ろう？」と問うている。「狂おしい思い」(obsession)とは、前半の段落で死の恐怖が問題になっていることから、死の想念に関連するものだとして理解できる。死にまつわる苦悩の表白がグリーンに、「均衡のようなものを保」たせていることがうかがえる。『在り得たこと』の語り手マニユエルが、死の魅惑と恐怖を徹底的に言いあらわすことによって、死の苦悩の克服をくわだてたのと同じように、作家グリーンもまた、死にかかわる「狂おしい思い」を作品の中におちまけることで、死の恐怖からの脱却を指向しているのである。とはいえ、グリーンは一九三三年十二月二日付の『日記』のなかで、次のように述懐している。

かつて死ぬことの恐怖は、不意に私に襲いかかり、私の心を凍らせたものだった。しかし時とともに、またよく考えるにつれて、私は、死の中に、私たちが苦しみに入って行くはずの暗い大寺院しか見なくなるに至った。

ここでは、死の恐怖が過去のもので、今では、死を、「苦しみ」(angoisse)をいなくことなしに入り込む「大寺院」のようにみなすまでになったことが述べられている。この日記がしたためられたのは、一九三二年十二月であるから、『幻を追う人』の中の『在り得たこと』を執筆しているころである。この認識は当然、作品に影響をおよぼしており、マニユエルは『在り得たこと』のなかで、死後の世界を、「日の光がぼくの目を傷つけることのない仄暗い大寺院」(三五二頁)のように想像している。しかしながら、この一節で顧みられているように、死の恐怖はグリーンにおいて、ほんとうに過去のものになったのであろうか。答えは否であろう。というのも、作品のなかで、様々な人物たちをおして描出される死の恐怖は、グリーンの内心に宿る死へのおののきを糧としていると考えないかぎり、説明がつかないからだ。死の魅惑と恐怖にみちた作品世界は、作家グリーンの意識の深層を浮き彫りにしているとみるべきである。このようにグリーンにとって、書くことは、死の恐怖との関連でも、カタルシスあるいは exorcisme の価値をになっているのである。

ここで、『幻を追う人』において、幻想とは何か、という点について考察しておきたい。はじめに言及したように、カステックスの定義にしたがえば、幻想とは現実生活における「神秘」の「闖入」によって特徴づけられるがゆえに、『在り得たこと』全体が幻想的であるとみなしうる。同様に、幻想とは日常的なものとの「断絶」、日常生活における「裂け目」を示すと考えるシュネデルの見解によっても、『在り得たこと』全体の幻想性は確認される。トドロフによれば、幻想とは「一見、超自然的な出来事」を前にして感じられる「ためらい」のことであり、この定義にそくするならば、作品の幻想性は、『在り得たこと』における伯爵の存在と、終わり近くの子爵夫人の不意の出現と死によってもたらされる。以上のことを想起しつつ、作品における幻想の特質を明らかにしよう。マニユエルの物語る『在り得たこと』は、作品の残りの部分で開示される死の主題を統括するものとして、換言すれば、マニユエルの現実生活における死の苦悩の延長上に位置するのではなく、マリー・II テレーズの死の想念、プラス夫人の死への歩みを極限にまで押しすすめたものとして、死の魅惑と恐怖に支配された世界を提示している。ネーグルテールの城の住人たちはジョルジュ夫人をのぞけば、死を恐れつつも死に魅せられている。トドロフの定義にしたがえば、その存在が作品の幻想性を保証する伯爵の内心からもまた、死の魅

惑と恐怖は観察されたし、また伯爵は「死者たちの恐ろしい威光」を放つ存在として、周囲の者たちに死の魅惑を行使し、死の恐怖をふきこんでいた。そして伯爵が息たえたととき、子爵夫人がマニユエルのもとに突然やってくるのは、へ死∨から、死の苦惱や恐怖からのがれようとしているからだと解せた。性行為のさなかでの子爵夫人の死は、死の魅惑と恐怖によって特徴づけられる自らの生を完結するものとしてあった。かくして、『幻を追う人』において、幻想は、死ぬという人間の条件と密接に関係しているといえよう。つまるところ、幻想とは、死の魅惑と死の恐怖との交錯から発するもの、もしくは、この二つが交錯したものであり、死にまつわる苦惱を形象化したものだと言断することができる。

- (1) 『容易な歲月』、『日記』第一卷、一九三一年十月五日、IV、一二三頁。
- (2) 同右、一九三〇年六月三十日、IV、七〇頁。
- (3) カッコ(へ)はイタリック体で書かれていることを示す。
- (4) アンジェールはゲレから暴行をうける以前、洗濯屋に勤めるとともに、食堂をいとなむロンド夫人の客たちを相手に、売春婦まがいのことをしていた。
- (5) Jacques Petit *Julien Green, « l'homme qui venait d'ailleurs »*, Desclée de Brouwer, 1969, p. 69.
- (6) André Blanchet: 《Julien Green en proie à l'existence》, in *La Littérature et le spirituel*, tome II, *La Nuit de feu*, Aubier, 1960, p. 155.
- (7) 同右、一七〇頁。
- (8) Antoine Fongaro: *L'Existence dans les romans de Julien Green*, Angelo Signorelli, Roma, 1954, pp. 116-117.
- (9) 『亡霊』、『日記』第五卷、一九四九年十月二十九日、IV、一一一四頁。
- (10) たとえば、『人みな夜にあって』(一九六〇)では、臨終の床にあるホレーズの死の恐怖をとおして、存在の不安が描出されている。
- (11) 『容易な歲月』、『日記』第一卷、一九三二年十一月二十五日、IV、二〇七頁。
- (12) 鈴木覚: 『フランス語動詞時称体系再考(続)』、愛知県立大学外国語学部「紀要」第十三号、一九八〇、七二頁、および、矢野正俊: 『フランス語動詞時称体系試論』、静岡大学教養部「研究報告」第一部、第十六卷第二号、一九八〇、九四頁を参照。
- (13) マニユエルは病いにたおれたことを思い出しながら、「ともかく、ぼくの病気が事態をうまく解決してくれた。ぼくにはいかなる質問もなされなかった」(II・2、二六九頁)と語っている。

- (14) エルネスト氏の店をやめて、闘病生活に入った時点から、森の散歩に出かける時点まで、どれくらいの間かについての正確な記述は、作中見られない。
- (15) マニユエルは闘病生活に入ってから、マドモアゼル・ベルトを訪問している。その折、マドモアゼル・ベルトは、「それから、町であまり姿を見られないようになさいよ」(II・5、二九二頁)とマニユエルに言っている。この謎めいた言葉も、サンクティス神父の言葉と同様に、夜の散歩の一件が町の人びとに知られていることを匂わせたものであるように思われる。
- (16) 「謙言を言う」と訳した動詞 *deiner* は、「精神が錯乱する」という意味もある。
- (17) Jacques Petit: 《Notes》 pour *Le Visionnaire*, in *Julien Green, Œuvres complètes*, t. II, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, p. 1407.
- (18) 同右、一四一三頁。
- (19) 『容易な歲月』、『日記』第一巻、IV、一七五頁。
- (20) 同右、IV、一七七頁。
- (21) 「油虫」(*olates*)とは、神学校の若者たちにつけられた渾名である(II・2、二七三頁)。
- (22) マルク・アイゲルディングはマニユエルのイエス像を次のように説明している:「『幻を追う人』であるマニユエルは、キリストを『生きた人間』のようにみなしている。彼はキリストから、その神性的・超自然的な本性をうばい、キリストをわれわれの内心とこの世に人間的に現存する存在にしまっている」(Marc Eigeldinger: *Julien Green et la tentation de l'irréel*, Aux Portes de France, 1947, p. 68)。アイゲルディングもまた、マニユエルにとってのキリストが神的・超自然的な存在としてのキリストではなく、人間存在としてのキリストであることを指摘している。
- (23) Michèle Raclot: *Le sens du mystère dans l'œuvre romanesque de Julien Green*, Aux Amateurs de livres, 1988, t. II, p. 797.
- (24) カッコ(へ)はイタリック体で書かれていることを示す。
- (25) Jacques Petit: 《Notes》 pour *Le Visionnaire*, in *Julien Green, Œuvres complètes*, t. II, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, p. 1418.
- (26) Jean-Laurent Prévost: *Julien Green ou l'âme engagée*, Emmanuel Vitte, 1960, p. 110.
- (27) この記述から、子爵夫人がジョルジュ夫人と同じ年齢であることがわかる。そしてマニユエルがジョルジュ夫人について、「夫人の髪が黒かつ

たにもかかわらず、ぼくは夫人が五十歳だと推測した」(CQ、三三四・三三五頁)と書いていることから、子爵夫人も同様に五十歳ぐらいだと推定される。しかしながら、この年齢は、『在り得たこと』の終わり近くで、子爵夫人がマニユエルと性の交わりを結ぶという事実を視野に入れると、少し高すぎるように思われる。さらには、父親の伯爵の年齢とも齟齬をきたしている。このことを今、明らかにしておきたい。マニユエルは、伯爵が死の最初の兆候を感じ、贅居生活に入ったのは、「五十二歳」のときだったと説明している(CQ、三三六頁)。この時点と、マニユエルが城にやってきた時点とのあいだには、どのくらいの時間のへだたりがあるのだろうか。この点にかんして、子爵夫人はマニユエルに、「二年前」に「父が最初の兆候を感じた」と言っている(CQ、三三一頁)。したがって、マニユエルが城にやってきた時点は、伯爵が死の最初の兆候を感じたときから二年後のことであるので、伯爵は五十四歳だということになる。また、子爵夫人の話にもとづかないで、伯爵の年齢を考えることもできる。伯爵は死の最初の兆候を感じてから、城に閉じこもり、「まる一年のあいだ」(CQ、三三七頁)、子どもたちを遠去け、それから子どもたちを城に呼びもどし、しばらくは子どもたちの面会をうける。しかし、ついには子どもたちの面会を拒絶し、小さな部屋にひきこもり、ジョルジュ夫人の世話だけで生きるようになる。では、伯爵が死の最初の兆候を感じてから、完璧な贅居生活に入るまでに、どれくらいの月日経っているのだろうか。このことについては、次の記述が決め手となる。「医者たちは、彼〔伯爵〕がこんなに長くもちこたえることに驚いていたが、降誕祭の頃にその死期を定めた。しかしその冬も前の冬と同じに過ぎ去り、病状が特に悪化したということもなく、美しい季節が再び訪れた。そこで二十ヵ月も前から苦しんでいるこの不幸な病人に同情したあとで、人びとは、自然の歩みは随分とのろいのだと考えるに至った」(CQ、三三八頁)。ここでは、「二十ヵ月も前から苦しんでいるこの不幸な病人」というところが注目される。「二十ヵ月」という数字は、もちろん伯爵が死の最初の兆候を知覚した時点から数えられた数字である。そしてこの記述のあとで、伯爵が完全な贅居生活に入ったと語られていることから、伯爵は死の最初の兆しを感じとってから二十ヵ月後、つまり一年八ヵ月後に、ジョルジュ夫人の看護を受けるだけの孤絶の生活に入ったことがわかる。では、ジョルジュ夫人が伯爵の世話をするようになってから、どれくらいの歳月が経過しているであろうか。この点については、この註釈を付けている引用文の中の、「彼女がネーグデルテルで暮らしはじめてから、五年以上経っていた」というはじめの文が手がかりになる。「五年以上」(plus de cinq ans)という言い方はあいまいであるが、ごく普通に考えれば、六年未満のことだと推測される。ジョルジュ夫人ははじめ召使の地位に甘んじていたのであるから、夫人が伯爵の世話をするようになってから、多く見積もつ

ても五年の歳月しか経過していないと思われる。そうすると、伯爵の年齢は、五十二歳に一年八ヶ月と五年をくわえて、五十八歳八ヶ月ということになる。あるいは「五年以上」という表現を、もっと幅をもたせて十年未満というふうに理解して（十年を越えれば十年以上という言い方になる。どれだけ幅をもたせても五年単位でしか考えられない）、十年間、ジョルジュ夫人が伯爵の面倒をみてきたと仮定すれば、伯爵の年齢は六十三歳八ヶ月だということになる。こうして伯爵の年齢が得られた。子爵夫人の言葉をそのまま受け入れれば、伯爵は自動的に五十四歳になるし、他の箇所を総合しても、せいぜい五十八歳八ヶ月か、六十三歳八ヶ月にしかならない。しかしこの数字は決定的におかしい。なぜなら、子爵夫人は前述のように五十歳くらいと推測されるので、伯爵とその娘である子爵夫人とのあいだには、四歳か、もしくは八歳八ヶ月か十三歳八ヶ月しか年のひらきがないからである。これでは親子関係は成立しない。子爵夫人がマニユエルと肉体の交わりを結ぶには、年齢が少し高すぎるように思われることはすでに述べた。同様に、伯爵が「死者たちの恐ろしい威光」を放ち、周囲の者たちに死の恐怖をいだかせるには、少し若すぎるように思われる。いずれにせよ、伯爵の年齢と子爵夫人の年齢とはまったく折り合わず、少なくともどちらかの年齢にあやまりがあることだけはたしかなのである。「在り得たこと」を作成しているのはマニユエルなので、これはマニユエルの過失であるともいえるが、やはり『幻を追う人』の作者ジュリアン・グリーンの錯誤であるとみるべきだろう。数字の間違ひは、綿密にプランを立てたうえで制作するのではなく、visionのおもむくままに書いていくといった作風に起因していると思われる。

(28) ここでの「上がる」(s'élever)は、文字どおり地下室から上の方にあがっていくという意味で使われている。と同時に、地位が上がるという象徴的な意味もこめられている。

(29) マニユエルは、ジョルジュ夫人のこのような在り方を、かなり早い段階から認識していたように思われる。すなわち、『在り得たこと』の舞台となるネーグルテールの城は、まったく架空の城ではなく、「塔」(I・1、二〇六頁)、「鳩小屋」(III、三八八頁)といったような実在するものを媒介として想像されたのであるが、マニユエルは『在り得たこと』の制作に専念する以前、マリー・テレーズに、城にまつわる話を折にふれて語り聞かせていた。第一部第一章でマリー・テレーズは、次のように書いている…「ある晩、彼(マニユエル)はわたしに、見知らぬ女が城に現われたと告げた。偽善者のようなまなざしと蒼白い顔色をした、太った女で、召使のうち古参の連中は、この女が四年前から地下室の中の、石炭倉庫のそばでくらしでいて、こっそりと養われていたと主張するのだった」(二〇五頁)。ここで言われている「見知らぬ女」が

ジョルジュ夫人に結晶する人物であることはまちがいない。物語を本格的に作成する以前から、マニユエルの脳裡で、ジョルジュ夫人が成り上がる人物として夢想し構想されていたことが、この記述からわかる。

- (30) また、子爵夫人はマニユエルに、ジョルジュ夫人が「時として、人間ではないように見えます」(CQ、三六八頁)と言い、「あの女がいるとき、ランプの火が弱まり、あるいは空がくもるような奇妙な印象をうけます」(三六八頁)と述べて、ジョルジュ夫人が不吉な存在であることを指摘し、そして喜怒哀楽をあらわさない夫人の瞳に言及して、ジョルジュ夫人が人間らしい感情とは無縁の存在であることを問題にしたあと、次のように語っている。「ふつう、愚かしさというものは笑いを誘います。しかしあの女の愚かしさはあまりに深遠なので、笑いを誘いません。言ってみれば、あの女は愚かしさを大きくし、この宇宙の中で知られず、説明されていず、見抜かれていない一切のものに、夜の奥に隠れている一切のもの、暗闇の中でよろめき、びっこをひき、早口で口ごもる一切のものに、愚かしさを結びつけているかのような具合なのです。あの女は、死というものの超人的な愚かしさを備えているのです」(三六九頁)。難解な文章であるが、要するに子爵夫人は、ジョルジュ夫人の深遠な愚かしさが、宇宙世界の神秘につうじているがゆえ、死の愚かしさであるとみなしている。子爵夫人の内心で、ジョルジュ夫人が死と同化されていることは、これら一連の言葉からもたしかめられる。

(31) ミシェール・ラクロの前掲書、第二巻、八三頁。

(32) 『内なる鏡』、『日記』第六巻、一九五四年十一月二十六日、IV、一三七三頁。

(33) アントワーヌ・フォンガロの前掲書、一三四頁。

(34) Nicholas Kostis: *The Exorcism of Sex and Death in Julien Green's novels*, Mouton, 1973, pp. 73-74.

(35) ここでは、伯爵は自己の病いの遺伝性について、アントワーヌの前で口をつぐむ配慮を見せている。しかし本文の引用文の二頁先には、次のような記述が見いだせる。「彼(伯爵)は子どもたちに、毎朝、前の夜の話を聞きにくるよう要求した。あたかも彼は子どもたちの健康を許せないかのようなのであった。というのも、苦しみによって性格をゆがめられない人間はいないからである。とうとうある日、彼は息子に、自分の病いの性質を説明し、遺伝の不当な法則のことをほのめかした。彼はそのあと、一種の怨みをはらすために言ってしまった言葉を後悔した。が、悪い種は良い土壌にまかれ、やがて芽を出すことになった」(三四〇・三四一頁)。この引用文では、伯爵がアントワーヌに、「自分の病いの性

質を説明し、遺伝の不当な法則のことをほのめかすことで、アントワーヌの内心に恐怖が芽生えたことになっている。いったい、この記述と本文の引用文とはどのように折り合うのであろうか。まず考えられるのは、本文の引用文とこの記述とは、語られている時点が違うのであり、時間の流れに位置づけるならば、この記述は本文の引用文のあとにくるといふ解釈である。このように解釈すると、アントワーヌは、父親への見舞いを重ねるうちに、死の恐怖をいだくようになったけれども、父親から病いの遺伝性を知らされることで、死の恐怖が決定的なものになった、ということになる。だがこの記述のさいごの、「悪い種は(…)やがて芽を出すことになった」といふ言い方は、死の恐怖の発生を暗示するものであり、死の恐怖が本格的になったことを示唆するものではない。それに本文の引用文とこの引用文とは、伯爵の態度に若干の差異が見られる。本文の引用文では、伯爵は遺伝的な疾患にかんして沈黙をまもることで、息子アントワーヌにたいして父親らしい思いやりを示している。これにたいして、この引用文では、伯爵は、健康を享受するアントワーヌへの「一種の怨み」から病気の秘密をばらし、息子を自らの不幸の道連れにしようとしている。それゆえ、この二つの引用文において、伯爵の態度・性格に首尾一貫性の欠如、不統一が見られるように思われる。さらに、この記述は、アントワーヌがしばらく自由を満喫したという記述のあとにつづくものであり、時間的に見て、伯爵が死の最初の兆しを自覚した時点からさほどへだたっていない頃のことを問題にしている。とすれば、本文の引用文も、この引用文も、どちらも同じ頃のことを語っていると考えられ、二つの記述のあいだには大きな矛盾があると判断せざるをえない。アントワーヌにたいする伯爵の態度のくいちがい、アントワーヌが死の恐怖にとりつかれるに至る経緯いさよつの不統一は、やはり作品の欠陥であるともみなされる。

(36) 第一章第四節でも引きあいに出したように、伯爵が完全な藝居生活に入ってからのこととして、ジョルジュ夫人はマニユエルに、アントワーヌが「まちに放蕩をしに出かけている」と主張し、マニユエルが「天国のように思い描いていた或る種の家」にアントワーヌの姿が「みうけられる」と言いはっている(CQ、三四三頁)。

(37) アントワーヌ・フォンガロの前掲書、一三四・一三五頁。強調は引用者。

(38) ニコラス・コステイスの前掲書、七二頁。

(39) マニユエルは『在り得たこと』の中で、「ぼくは死を一人の老女の姿に思い描いていた」(三六四頁)と書いている。マニユエルにおいてもまた、死はへ老女(une vieille femme)のイメージと結びついている。

(40) 『容易な歲月』、『日記』第一卷、一九三二年十一月二十五日、IV、二〇七頁。

(41) 同右、IV、二三五頁。

(42) 同右、IV、二二〇頁。

終章

以上、『幻を追う人』を二つの角度から、欲望と死の観点から読解・分析した。あわせて、作家グリーンにとっての書くことの意味を考究し、また、作品執筆当時のグリーンの魂の軌跡をたどり、最終的には、グリーンにおける幻想が何であるのかを明らかにすることを目指した。ここで幻想とは何か、という点にかんしてまとめをおこない、そのあと、もう少し論を展開したいと思う。

第一章の「欲望の世界」の結論として、幻想とは、純粹志向が招来する欲望とのたたかいから生じるものであると述べた。欲望をいながら、欲望とたたかわなければならぬ苦しみ、この苦しみが顕在化したものが幻想であると指摘した。第二章の「死の魅惑と恐怖」では、作品における死の主題を統括するものとして、『在り得たこと』が死の魅惑と恐怖に支配された世界を提示しているという事実から、幻想とはこの死の魅惑と死の恐怖との交錯から発するもの、あるいは両者が交錯したものと断定した。それゆえグリーンにおける幻想とは、二つの苦悩、純粹志向とかわる肉体的苦悩と、人間の条件である死にまつわる苦悩とに立脚しており、要するに、この二つの苦悩を形象化したものが幻想にほかならない。

ここから、グリーンの作品における幻想とは、いささかもメルヘン的なものではないことがあらためてたしかめられる。なるほど、作品に幻想的性格を付与する最大の要素である『在り得たこと』の全体は、欲望と死の恐怖に呻吟する日常的現実からのがれ出ようとするマニユエルの努力の結晶である。マニユエルは想像世界に逃避するにあたって、「この世の外に導くどんな道もぼくには美しかった」(Ⅱ・5、三〇八頁)と告白している。しかしマニユエルは、「この世」(Ⅱ 現実世界)からの脱出の糸口をもとめた想像世界においても、現実世界における重荷、つまり苦しみをひきずっている。したがって、幻想とは現実からの逃亡への願いを発しているとしても、かならずしも現実の対立項としてあるのではない。幻想とは、苦渋にみちた現実の延長上にあり、現実の一つの置き換えに

すぎない。このことは、『在り得たこと』の人物たちが、マニユエルの日常生活の中の人物たち、彼じしんをも含めた人物たちとけつして無縁ではなく、一定の対応関係にあることから明白である。幻想とは、一見、現実世界との断絶を示しているように見えながらも、現実の苦悩によって産み出されたものなのである。

マニユエルは『在り得たこと』を作成することによって、作家グリーンは『幻を追う人』を執筆することによって、肉体と死にかかわる苦悩から脱却するのであるか。この点について、少し論及することにしよう。グリーンにおいて、書くことが肉体的欲望と死の恐怖との関連で、カタルシスないし *exorcisme* の価値をもつと述べた。ではマニユエルは肉体や死にまつわる苦悩を、『在り得たこと』の中で表現することによって、この苦悩から最終的・決定的に解放されるのか。答えは否である。たしかにマニユエルは肺肝をひらくことで、一時的に内部の均衡を確立することができるかもしれない。しかしその均衡はあくまで束の間のもにすぎないのではないだろうか。欲望の苦しみについていえば、マニユエルは想像世界において、子爵夫人と性の交わりを結ぶ。だがマニユエルは純粹志向のせいで、この交わりからよろこびを得ていない。くわえて子爵夫人は性行為のさなかに絶命している。したがって、二人の性行為は欲望の充足といった本来的な目標を達成していない。欲望の苦しみは吐露されてはいても、なんら乗り越えられていない。それにマニユエルが息をひきとる間際、マリー・テレーズに、「ぼくが愛していたのは君なんだ」(Ⅲ、三八九頁)と打ち明けているように、マニユエルの愛の対象は子爵夫人ではなく、マリー・テレーズである。とすれば、現実世界にもどったとき、愛の苦しみは相変わらず立ちだかるし、もし生きのびていれば、マニユエルがいつそうはげしい欲望にさいなまれる可能性のあることは否定できないのである。

死の苦悩についてはどうか。すでに見たように、マニユエルは『在り得たこと』のなかで、様々な人物に仮託しながら、この苦悩を語り、そうすることで死の恐怖に打ち克とうと目論む。そして作中人物として、子爵夫人の臨終に立ちあうことによって、「マニユエルの人生のさいごの日々」は「一種の死の修業」となりえた。こうしてマニユエルは現実世界に帰還して、自らの死に立ち向かうことができるようになる。しかしながら、もしマニユエルが『在り得たこと』を完成した直後に他界するのではなく、そのあとも生存していたら、彼は死の恐怖をいだかずにいることができたであろうか。答えは否であろう。なぜなら死の恐怖とは、しばしのあいだまぎら

すことは可能だとしても、肉体の欲望がそうであるように、完全に消滅させることができないものであり、間歇的に襲ってくる感情であると考えられるからだ。

作家グリーンにとっても、事情は同じである。マニユエルは死ぬが、グリーンは生き残る。マニユエルと同じく純粹志向を有するグリーンにおいて、肉体的苦悩は書くことでしばらく癒やされることはありえても、けっして消え去ることはない。カタルシス、exorcismの営みは肉体の問題を根本的には解決しない。その証拠に、『幻を追う人』のあとの作品、とくに第三期（後期）の小説『モイラ』『人みな夜にあつて』（一九六〇）『他者』は、いつそう痛切な欲望の苦しみを表現しており、肉体の問題が長らくグリーンの懊悩の源であったことを印づけている。死にかかわる苦悩についても同様のことがいえる。死の恐怖もまた、単なるカタルシス、exorcismeの営みによっては、容易には克服できないのであつて、死の問題もまた、決着がつかないものとして残る。一九三〇年代、あるいは第二期（中期）のグリーンにおいて、幻想なるものは肉体と死の問題を解決するための手段として探求されているのであろう。しかし幻想はグリーンを肉体と死の苦しみから十全に解き放ちはしない。それどころか逆に、グリーンにおける肉体と死の問題の深刻さを浮かび上がらせているとみるべきであらう。

肉体の問題はさておき、死の問題について言えば、この問題の最終的な解決策は、グリーンにとっては、信仰の全き回復以外にはないのかもしれない。『幻を追う人』のなかで、マニユエルは過去においてカトリックの信仰をもっていたにもかかわらず、物語がはじまる時点では、信仰をうしなっている。けれどもそんなマニユエルにも、きわめて特権的な瞬間が訪れている。その件りを読むことにしよう。

（…）ぼくの習ったお祈りの文句は、死ぬことの恐怖にたいしてなんの役にもたたなかつた。ぼくは顔の上にシーツの端をひき寄せて、額の汗を拭いた。ああ、誰かが来てくれたら。だがこうした時に、ぼくはひとりきりだった。

しかしながら、ある夜のこと（ぼくはほとんど信じる勇気がないのだが）、自分をまどろませようと独り言を言っているときに、

誰かが自分のそばに居るような気がした。家中の者は随分と前から眠りにつき、夜明けに先立つ時刻、病人たちがよく知っているあの時刻に近づきつつあった。それは、生が目に見えない引き潮のようにしりぞき、その引き潮とともに瀕死の人びとの吐息をも運び去っていく時刻なのだ。ぼくの心臓は少し強く打ちはじめた。しかしこわくはなかった。それどころか、ぼくの内心の何かが急に強固になった。ぼくは目を大きく見開いて待った。闇が深かったので、何も見えなかった。数分が過ぎた。「たぶん、あの人ののだ」という、奇妙な考えが心に浮かんだ。可能と不可能とをモヤモヤ区別しない熱病患者の考えが、その時だったと思う、確かに、ぼくの額の上に、非常に心地よい、燃えるようなすがすがしさをもらった、一つの手が置かれたのだ。ぼくは身ぶるいし、ほとんどすぐさま眠りに落ちた(Ⅱ・5、二九〇、二九一頁)。

夜、孤独のなかで死の恐怖におのくマニユエルの前に、「誰か」(quelqu'un)が登場している。この「誰か」は暗闇の中で目には見えないけれども、マニユエルの内心を強固にし、それから、マニユエルの額の上に手を置くことによって彼を眠らせている。つまりこの「誰か」は瞬間的であるにせよ、マニユエルを死の恐怖から救い出している。マニユエルはこの「誰か」の出現に際して、「たぶん、あの人ののだ」(Lui, peut-être)と考えている。「あの人」とは誰か。この文章に先立つ段落で、イエス・キリストへの思いが披瀝されていることから、「あの人」とはイエス・キリストのことだと解釈できる。こうしてこの引用文は、イエスとの出会いという特権的な出来事を叙述したテキストだということになる。

このことは、この引用文を、一九三四年十一月二十四日付の、グリーンンの『日記』の中の記述と比較するならば、いっそう明瞭になる。グリーンンは書いている。

先日の晩、突然の、説明できない心の動きから、そしてまるで前に押し出されたかのように、私は窓の前にひざまずいた。どうして窓の前なのだろう？ 私にはわからない。黄色のカーテンがひかれていた。私は家の中で一人きりだった。しかしながら、誰

か。が一分近くのあいだ背後に居たのだ。

ここでも、「誰か」の出現が語られている。この「誰か」とは、グリーンがひざまづくことによって現われるのだから、しかもグリーンがひざまづくのは祈りをとなえるためであるのだから、祈りの対象となった存在だと解することができる。グリーンはこの日記にかんして、一九六九年に付けた註のなかで、ここに出てくる「黄色のカーテン」のぼろ切れを思い出の品として長らく保管してきたことを伝えている。ここから、この神秘的な出会いの体験が、人生の転機点を印すような決定的な事件であったことが察知できる。さらにグリーンは同じ註で、「この日から私の人生は変わった。しかし私は四年間待たねばならなかった」とも言っている。いったい、何を四年間待たねばならなかったのであろうか。カトリック教会への決定的復帰である。グリーンのカトリシスムへの帰依は一九三九年四月のことなので、正確にはこの日記の日付から四年五ヵ月後のことであるが、決定的回心のこと視野に入れられていることはまちがいない。とすれば、この「誰か」との出会いの体験が、カトリック信仰への回帰、決定的回心へと方向づけた出来事であり、「誰か」がイエス・キリストを指し示すことは疑いようのないかたちで了解される。

『幻を追う人』の中の先の引用文とこの日記の記述とを照合することにしてしよう。『幻を追う人』においては、「誰かが自分のそばに居るような気がした」(『eus l'impression que quelqu'un se tenait près de moi.』)と表現され、日記では、「しかしながら、誰かが(…)背後に居たのだ」(『quelqu'un pourtant s'est tenu derrière moi.』)と言いあらわされている。二つのテキストのあいだには、*près de moi*と*dernière moi*というように、「誰か」が位置する場所に違いがある。また、「居る」(*se tenir*)という動詞の時制が、半過去(*se tenait*)と複合過去(*s'est tenu*)といったように異なっている。けれども、「誰か」の現前を語っているという点で、内容はまったく同じであると断定することができる。一九三四年十一月二十四日付の日記のテキストと突き合わせるとことによっても、『幻を追う人』における先の引用文の中の「誰か」がイエス・キリストであることが確認される。それゆえ、『幻を追う人』において、イエス・キリストはマニユエルを死の恐怖から解き放つただけではなく、マニユエルに信仰の全面的な回復をもたらすためにも出現しているとみなしうる。けれども、

マニユエルはこののち、宗教的な救いをもとめて、カトリック信仰に歩みよることはない。「誰か」が「あの人」つまりイエス・キリストなのだという思いを、「可能と不可能とをもちや區別しない熱病患者の考え」として斥けてしまう。こうして先のテキストは『幻を追う人』のテキスト全体のみならず、物語の展開に影響を与えることのない孤立したテキストとしての位置にとどまる。

おそらく先の引用文は、語り手マニユエルではなく、作家グリーンの内面にそくして把握すべきであろう。先の引用文は、イエス・キリストの顕現を待ち望む作者グリーンの切なる願いを反映していると思われる。繰り返すまでもないが、『幻を追う人』を執筆中、グリーンはカトリック教会から離れていた。しかし宗教的な救いを希求する気持ちもあるわけで、その気持ちがあ先の文章を産み出したのだとみなしうる。先の文章が含まれる第二部は、一九三二年九月二十三日から一九三二年十一月十六日までの時期に書かれた。テキストはその時期におけるグリーン之魂の一面を覗かせているだろう。グリーンが実際にイエス・キリストと邂逅し、恩寵の訪れをうけるのは、引用した日記の日付からわかるように、一九三四年十一月である。『幻を追う人』のなかに忍びこませた願いが、二年後の現実の体験をよび寄せたのだと判定することもできる。一九三四年十一月二十四日付の日記のテキストは、『幻を追う人』の中の先のテキストの延長上にあり、二つのテキストは緊密に結びついている。『幻を追う人』はカトリック教会から遠去かっていることでの苦しみを映し出しながらも、一九三四年十一月の神秘的体験を経て、一九三九年四月の決定的回心へと至るグリーン之魂の軌跡をまかいた見せているのである。

註

(1) 『容易な歲月』、『日記』第一巻、IV、三四七頁。

(2) 同右、IV、三四七頁。

ジュリアン・グリーン研究序説(2)

—『幻を追う人』『モイラ』の読解—

井 上 三 朗

第二部

『モイラ』

序章

ジュリアン・グリーン(1)の文学をへ宿命の文学とみなし、この観点からグリーン(2)の作品を読解するところみは、従来からなされてきた。アントワヌ・フォンガロは『ジュリアン・グリーン(3)の小説における実存』のなかで、孤独、倦怠、時間とともに、運命を作中人物の生成要素とみなし、作中人物たちが自己の自由意志を越えた力、言いかえれば、宿命に盲目的に隷従しているありさまを述べている。オスヴァルト・ムッフはその論文『ジュリアン・グリーン(4)の作品における無と欲望の弁証法』のなかの一章を「運命」と題して、作中人物たちが不可避な運命に翻弄されていることを論じている。ジャンクロード・ジョワは『ジュリアン・グリーンと宿命の世界』において、グリーン(5)の創作作品が総体として提示する宿命の世界の解明に、論文全体をささげ、三つの視座から宿命性の表現を探索している。すなわち、作品の背景(Setting)、人間関係、作中人物たちの内面のドラマを検証することによって、宿命の世界の成り立ちを考究している。

たしかに、グリーン(6)の作品からは、一種の運命観ないし宿命の思想といったものが、一読するとただちに看取される。作中人物たちは、自分の努力とか意志の力ではどうにもならない大きな力に支配されているという感慨に、しばしばふけつてゐる。枚挙にいとまはないが、たとえば、『レヴィアタン』のなかで、どうしようもない愛の情熱にとりつかれてしまったゲレは、「なんとという酷たらしい秩序が世の中を律しているのだろう！」(I、六一一頁)と考へ、「人間たちの生活を統御しているこの気違いじみた法則とは、一体何なのか？」(六六七頁)と自問している。この「酷たらしい秩序」、「気違いじみた法則」とは個人(7)の力ではどうにもならない運命のことであろう。叔母から売春婦まがいのことをするよう強要されながら、このゲレに心を惹かれていくアンジェールは、人生を、「一種のくじ(sort)のようなもの、運があるかないかによって良くも悪くもなるもの」(I、六四六頁、強調はグリーン)とみなし、

自分の人生を司る運命に思いをはせている。アンジェールはまた、人生を、「氣まぐれで恐ろしい人物、議論の相手にしないのが賢明な暴君」(Ⅰ、六五四頁)のごとく想像している。アンジェールの脳裡では、自分の意志を越えた力、自らの人生を弄び、支配する宿命の力が信じられているように思われる。

同じ『レヴィアタン』のなかで、ゲレに執着することになるグロジョルジュ夫人の心理を描写したところで、「ある氣まぐれな力の餌食になっているという感覚は、けっして彼女から離れなかった。自分は、この世を支配している意志に弄ばれていて、自分の自由などはまったく冗談でしかないのだ」(Ⅰ、七一頁)という記述が見いだされる。「ある氣まぐれな力」、「この世を支配している意志」は、運命ないし宿命と読み替えることができる。また、『漂流物』(一九三二)において、平凡な中産階級の人間として単調な家庭生活を送るフィリップは、「おそらく自分は、一度たりとも自由な人間として行動したことはなかったであろう。すべての人と同じように、自分は偶然の奴隷なのだ」(Ⅱ、二四頁)と考えている。ここで言われている「偶然」も、運命または宿命の同義語と解することができる。このようにグリーンの中人物たちは、運命あるいは宿命と名づけうるものに思いをめぐらせている。

グリーン作品において、運命的な出会いが描かれ、愛が選択不可能な性格を帯びていることも、一読してすぐさま気づく点である。『レヴィアタン』で、アンジェールへの愛に懊悩するゲレは、「通りで出会っただけの一人の女の運命に、どうして突然、自分の運命が結びついてしまったのだろうか？」(Ⅰ、六六七頁)と自問している。『他者』第二部のなかで、カーリンに恋をする語り手のロジェは、カーリンとはじめての出会いの瞬間を振り返って、「もし選ぶことができたなら、私は彼女に目を向けさえもしなかったであろうに」(Ⅲ、七三八頁)と考えている。ロジェに心を惹かれてしまったカーリンもまた、「なぜあなたに出会ってしまったのかしら？(…)あなたが通りの名をたずねるだけで十分だった。それであたしの運命は一挙に決まってしまったんだわ」(Ⅲ、八一頁)とロジェに告白している。このようにグリーンの中人物たちは、ひとつの偶然の出会いを契機として、避けがたいかたちで愛の情熱にとらえられる。そしてこの情熱をどうすることもできず、往々にして、苦悩と絶望の果てに、不幸な結末に追いやられてしまう。『アドリエンヌ・ムジュラ』において、モルクール医師とめぐりあったアドリエンヌは孤独地獄のなかで発狂するし、『レヴィアタン』のゲレは、サディスム的行為、次いで殺人行為に走る。『悪人』(一九五五、完全版一九七三)のエドウィージュは、ガストンに遭遇することに

よって自殺に追い込まれる。グリーン作品におけるこうした愛（出会い）の形態は、宿命の世界の形成に大きく寄与しているように思われる。

ここまで、宿命という語を明確に定義しないうまま用いてきた。いったい、宿命とはいかなる意味をもつのか。『広辞苑』第四版（一九九一）によれば、宿命とは、「前世から定まっている運命」のことである。では、運命とは何か。「人間の意志にかかわりなく、身の上にくぐってくる吉凶禍福」の謂である。したがって、宿命とは、前もって定められた、人間の意志を越えた生のありさまを指し示すのであろう。

日本語の「宿命」に対応するフランス語は、*fatalité*である。今度は、*fatalité*の語義をしらべてみよう。『新プチ・ロベール』（一九九三）には、四つの語義が載っている。一つは「*Caractère de ce qui est fatal*」で、*fatal*で言う*fatal*とは、「宿命性」である。二つ目の語義は「*Force surnaturelle par laquelle tout ce qui arrive (surtout ce qui est désagréable) est déterminé d'avance d'une manière inévitable*」で、全体を訳せば、「起るべきこと（とりわけ嫌なこと）すべてを、前もって避けられない仕方決定してしまうような超自然的な力」となる。この説明にそくして考えるならば、宿命とは、個人の人生を支配する、あらがいがたい外部の力ということになる。三番目の語義は、「*Nécessité, détermination*」で、「必然性」「不可避性」の訳語を当てるのが妥当であろう。四つ目の説明は、「*Suite de coïncidences fâcheuses, inexplicables qui semblent manifester une finalité supérieure et inconnue; sort contraire*」である。直訳すれば、「上位にあって未知の目的性をあらわしているように見える、厄介な、解明されていない偶然の一致の連続。逆運」となる。仏和辞典では、この語義には、「不幸な巡り合わせ」「不運」といった訳語が与えられている。以上の説明から、宿命とは、人間の意志とは対立する外部の力であり、不可避的・必然的なものでもあり、不幸な運命でもあることがわかる。

『広辞苑』ならびに『新プチ・ロベール』の語義説明を紹介した。両者の説明を総合して約言すると、宿命とは、前もって定められ、しかも外部の力の働きかけによるものであれ、内的なものであれ、ともかく不可避性・必然性を帯びた運命であると規定しようように

思われる。

さて、本論第二部において、一九五〇年に刊行された小説『モイラ』(Moira)を取りあげることにした。その理由としては、『モイラ』が実質的には、グリーンのカトリシズムへの決定的回心後の最初の小説であり、第三期(後期)の作品群を代表する傑作であることが挙げられる。しかし最大の理由は、グリーンの文学をへ宿命の文学ととらえるとき、何よりもまず問題にしなければならないのは、『モイラ』であると思われるからである。すでにこの小説の表題からして示唆的である。へモイラとは単に作中人物の名前を指し示すだけでなく、作者グリーンも指摘するように、「ギリシア人たちが運命に与えた名前の一つ」⁽⁴⁾なのであって、作品が宿命の世界を提示していることは、その表題から察知することができる。『モイラ』は主人公ジョゼフの変貌過程を中心として展開し、ジョゼフがプロテストタントの厚い信仰を有するにもかかわらず、モイラと呼ばれる混血の女と肉のあやまちをおかし、ついには殺人者となるプロセスを叙述している。作品を読みおわったとき、読者はジョゼフの生の軌跡が避けがたく、必然的なものであり、その悲劇的な終末が宿命論的なものであるという印象をぬぐいがたくいである。

この本論第二部において、宿命性の表現という観点から、『モイラ』の読解と分析をこころみたい。この目的のために、まず第一章で、主人公ジョゼフを取りまく人物たちが、あわせて、様々な事物が、外側からのあらがいがたい力として、不可避的にジョゼフの人生を決定しているありさまを浮き彫りにしたい。次に第二章では、ジョゼフの生の歩みが内的な必然性をもつこと、ジョゼフの《*Leone*》と信仰との関係の解析に焦点を合わせつつ彼の内面のドラマに光をあてることによって、ジョゼフがその悲劇的な結末を、内側から宿命的にまねいていることを明らかにするだろう。それから第三章で、ジョゼフの物語だけでなく、プレローの物語、サイモンの物語、モイラの物語といったように、副次的な人物たちの秘められた物語もまた、へ宿命の物語として読むことができることを論証したい。そうすることによって、『モイラ』が提示する宿命の世界とその成り立ちと瞥見したのである。

註

- (1) Antoine Fongaro : *L'Existence dans les romans de Julien Green*, Angelo Signorelli, Roma, 1954, pp. 23-42.
- (2) Oswald Muft : *La dialectique du néant et du désir dans l'œuvre de Julien Green*, Keller, Zurich, 1967, pp. 60-71.
- (3) Jean-Claude Joye : *Julien Green et le monde de la fatalité*, Arnaud Druck, Berne, 1964, 252p.
- (4) 一九五〇年版『モイラ』への前書き、Ⅲ、一五三三頁参照。

第一章 ジョゼフを取りまく人物たち

ジュリアン・グリーンは『モイラ』を制作中の、一九四九年十一月十七日付の『日記』のなかで、次のように書きしるしている。

私は、もつとも好意ある人物たちさえもが犯罪に必要とする一切のものをジョゼフに与えるのを示したいと思う。すなわち、ある者はどのようにふるまうべきかジョゼフが知るであろう本を与え、ある者は分厚い毛布を与え、ある者はシャベルを与えるのである。これは、彼にほとんど責任がないこと、神が考慮に入れられるであろう、一種の宿命が、彼を押しやっていることを示すやり方になるだろう。⁽¹⁾

ここでは、宿命がジョゼフを犯罪に押しやっていることを匂わせる一環として、ジョゼフの犯罪が、彼とかかわる人物たちによってみちびかれるように、小説を書きたいことが述べられている。実際、完成された作品において、ジョゼフの犯罪は、彼を取りまく人物たちによって誘導されているように見えるし、それどころか、物語が始まってからの、ジョゼフの人生全体は、彼の周辺の人物たちの影響によって形成されているような印象を与える。

この第一章において、ジョゼフの人生が外部の抵抗しがたい力として、彼を取りまく人物たちと様々な事物とによって決定されていることを検証したい。この目的のために、ジョゼフを取りまく人物たちが作中、ジョゼフにたいしていかなる役割をはたしているかを考察したい。まず、プレロー、サイモン、デーヴィッドという順に、ジョゼフの生の歩みにおよぼした影響を考え、それから、ジョゼフとのつながりという点では、それほど重要でない人物たち、すなわち、デア夫人、マック・アリストター、キリグルー、デア夫人の下宿

に集まる学生たち、ジェマイマ、ファーガスン夫人の下宿の女中といった人物たちの機能を検討し、さいごに、ジョゼフにたいするモイラの役割を分析したい。そしてこれらの人物たちの機能を考察する中で、同時に、ジョゼフの周囲に存在する様々な事物、たとえば、シェークスピアの本、追加の毛布、シャベル、ギリシアの神々の彫像、白い木蓮の花、ジョゼフがデア夫人の下宿に置き忘れたセーターなどといった事物もまた、ジョゼフの運命の生成に関与していることを明らかにしたい。

『モイラ』の物語の展開、もしくはジョゼフの生の歩みにおいて、最初に重要な影響をおよぼす人物はプレローである。ジョゼフとプレローとの出会いは第一部第三章で語られる。大学町に到着した最初の日の晩、ジョゼフはデア夫人の下宿の食堂でプレローを見かける。プレローは下宿人ではないが、デア夫人のところへ食事だけにやってくる学生である。ジョゼフは、「できることなら彼は歓迎のことばを言いたかった」(一一頁)と考えているように、初対面のプレローに早速、好意をいづく。しかもこの好意は、隣の席で親しげに話しかけるサイモンとの関係を、ジョゼフが打ち消したい欲求にかられていること⁽²⁾や、「あの青年〔プレロー〕が出ていくために席をたつたとき、彼のところへ行こう」(一一頁)と思いついたあと、ジョゼフが「なぜだ？」と自問して答えられずに狼狽している点を考えあわせると、単なる友情の範囲を越えたものであることがわかる。なぜなら、友情を覚えただけなら、ジョゼフは傍らにいるサイモンとの関係をことさら否定する必要はないし、また自らに発した問いに明確に答えられるはずだからだ。こののち、プレローにたいする思いはジョゼフの脳裡を占めることになる。同じ日の夜、ジョゼフは自室で母親にあてて手紙を書く。この手紙のなかで、ジョゼフは旅のことやデア夫人のことやサイモンのことをすらすらと語る。しかしプレローのことを考え、書く段になると、「それがどんな面白味をもつというのだろう」(I・3、一二頁)⁽³⁾と想つてためらいを示す。このためらいは、ジョゼフの内心でプレローが他の人びとから区別された存在であることをほのめかしている。ここから、ジョゼフのプレローにたいする感情は同性愛的なものであることがうかがえる。

デア夫人の家の食堂ではじめてみかけたときから数日後、ジョゼフはふたたびプレローと出会う⁽⁴⁾。第一部第四章、ジョゼフは大学構内で学生たちから赤毛であることをからかわれる。学生たちのなかの或る者がジョゼフの赤毛をへ火⁽⁵⁾もしくはへ火事⁽⁶⁾になぞ

らえ、「諸君、君たちの中で誰か、この界限にいる消防夫たちの住所を知っているだろうか。彼らに知らせておくのが賢明な用心だと思ふが」（一四頁）といった、たちの悪い冗談を浴びせ、ジョゼフを笑いものにする。ジョゼフは学生たちのなかにプレローがいることに気づく。そこでジョゼフはプレローに、「今のことをば言ったのは君か？」（一四頁）とたずねる。するとプレローはジョゼフの顔から足の先までをしげしげとながめながら、「ぼくじゃない。でも責任はとるよ。気にいったから」と、「冷ややかな調子」で答える（一四頁）。プレローは自分が言ったのでもない冗談の責任をとり、ジョゼフにいどみかかるのだ。プレローの攻撃的姿勢は、ジョゼフをみくだすような彼の態度、口調の冷淡さからも読みとれよう。そしてプレローは自分の住所を知らせることでジョゼフを決闘にいざなうのである。

さて、プレローから挑戦をうけたジョゼフは、「さっきから、もう目が見えなくなり、太陽の光がいっぱい当たっているのに、この小さな群衆が闇につつまれているような気がした」（一五頁）と述べられているように、盲目になるほどまでに激怒の感情にとらえられる。ジョゼフの憤りは、下宿にもどつてからも持続し、ジョゼフは怒りのなかで、「なぜ君（プレロー）はそんなふうに話したのだ？　なぜ？　なぜなんだ？　ぼくが君に何をしたというのだ？」（一六頁）とわめく。この言葉の中には、自分の好意の気持ち⁵が報われなかったことへの口惜しさがこめられているだろう。また、ジョゼフに格別の愛着をいだくサイモンは、部屋にとじこもり興奮し、すっかり取り乱したジョゼフにむかって、「ちがうといってもだめだ、君は恋をしているんだ」（一六頁）⁵と言いはなっている。サイモンの指摘は、恋する者の直観が把握したものであり、正鵠を射ている。それゆえ、ジョゼフの怒りは、彼の自覚しない愛の感情が裏切られたことへの反応であり、欲望の屈折したあらわれとみなすことができる。

こうして怒りの感情に支配されたジョゼフは大学の事務室で手渡された「大学の地図」（I・4、一九頁）⁶をたよりに、夜、プレローのところにおもむき、二人は池のほとりで戦いを繰りひろげる。激怒の発作に身をゆだねてジョゼフがプレローに襲いかかる場面は、次のように描かれる。

不意にジョゼフは彼（プレロー）に飛びかかった。何か抵抗しがたいものに彼はかきたてられ、盲目の力が彼のからだを前に押

し出すのだった。突然の衝撃のためにプレローは平衡をうしなない、相手とともに地面に長々とたおれた。数分のあいだ、二人はたけり狂ったけだもののように暗闇のなかではあはあと息をしながらころがり、もつれあうのだった。しかしジョゼフの方が重たく、少し背も高かったので勝ちを占めた。いきなり、狂おしいよろこびがあまりに強く感じられるほどまでに、彼をとらえた。それで彼は不可解な飢えを満たしているような印象をうけた（I・5、二四頁）。

この場面において、最初の文にあるように、「不意に」(Tout à coup)という副詞句が用いられていることがまず注目される。この表現は、ジョゼフの行動が衝動的・突発的性格を有することを示している。二番目の文では、「何か抵抗しがたいもの」(quelque chose d'insistible)、「盲目の力」(une force aveugle)によってジョゼフが行動にかりたてられたことが語られている。ジョゼフの暴力は自らの意思にもとづくのではなく、自らの意思とは無関係にあらわれる。いったい、ジョゼフを揺りうごかすへ抵抗しがたい力とは何か。この点にかんして、ジョゼフがさいごに「狂おしいよろこび」(une joie folle)にひたされ、「不可解な飢え」(une faim mystérieuse)を満たしているような印象をうけていることは注意をひく。ここで言われている「よろこび」「飢え」が肉体的・性的なものであることはまちがいない。というのも、すでに指摘したように、ジョゼフの怒りは自己の愛が裏切られたことに根ざしており、欲望の屈折したはけ口とみなすことができるがゆえに、ジョゼフの暴力は実現不可能な性行為の代替物と考えることができるからだ。怒りと欲望との結びつきについては、のちにジョゼフを誘惑することになる混血の女モイラも、友達のセリナあての手紙のなかで、「ねえ、怒りというものには欲望のひとつのかたちなのよ」(II・21、一六七頁)と書いている。また、作者グリーンはジョゼフとプレローの決闘の場面について、それが「ラヴシーン」(scene d'amour)であると解釈している。実際、「二人はたけり狂ったけだもののように暗闇のなかではあはあと息をしながらころがり、もつれあうのだった」という文は、見方によれば、愛のからみあいの記述として読むことができる。ここから、ジョゼフを支配するへ抵抗しがたい力とは、彼の内部にやどる肉体の力を意味し、情熱と化した怒りの、あるいは欲望のはげしさを指し示すのではないだろうか。

このことは、決闘ののちのジョゼフのふるまいを検討することによっていっそう鮮明になる。ジョゼフは、池で泳ぐプレローと別れあと、森の中に入ってゆく。そして林間の空地に落ちた太い木の枝を棍棒のように用いて大かえでの樹の幹をたたきまくる。この件りを読むことにしよう。

突然、彼（ジョゼフ）は叫びはじめた。どうしようもなかった。恐ろしい激怒が全身を揺すぶった。彼は身ぶるいし、暗闇のなかを二、三步あるくと、地面に落ちた太い枝につまずいた。すぐに枝を拾い上げて力まかせに折ろうとしたが、頑丈すぎてどうにもならなかった。（…）そこで彼は棍棒のように枝を振りかざし、すこし前に進んで樹の幹をたたいた。すると樹は鈍い音をたてた。それは大かえでの若木だった。（…）今では、自分の腕があたかも他人の腕のようにひとりでに動き、斜めの大きな身振りで勝手に振り上げられたり、振りおろされたりするように思えた。木の枝が大気をひき裂くことによつてたてるひゅうひゅうという音を彼は聞いた（I・5、二七頁）。

この一節で、ジョゼフは大かえでの樹を枝でたたきまくる前、絶叫している。ところがジョゼフの絶叫は、最初の「突然」(Soudain) という副詞の使用からわかるように、発作的なものであり意図にもとづいていない。というより、二番目の「どうしようもなかった」という文が明示するように、ジョゼフは心ならずも、あるいは意志に反して叫び声をあげる。言いかえれば、口はジョゼフのものでありながら、ジョゼフの制禦をはなれて自動的にはたつき、叫喚の声をきかせる。また、ジョゼフが大かえでの樹を枝でたたきまくるとき、「自分の腕があたかも他人の腕のようにひとりでに動」くような感覚をいんでいる点は注目に値する。つまりジョゼフが樹をたたく際、腕はジョゼフの統制をのがれて勝手にうごく。このようにへ叫ぶへたたくという一連の行為をとおして、口と腕の自動性が観察される。

では、ジョゼフの口と腕は、どうして彼の意図・制禦をはなれて自立性を獲得するに至るのだろうか。このことについては、「恐ろ

しい激怒が全身を揺すぶった」という三番目の文が考察の手がかりを与えるだろう。ジョゼフにおける激怒がひとつの情熱であり、欲望と表裏をなすことは繰り返すまでもない。したがって、口と腕の自動性は、ジョゼフが自己のうちにやどる肉体の力、情熱・欲望のはげしさにあらがいがたいかたちで支配されたことと関係している。プレローにたいする暴力によっても完全には消費されなかった肉体の力、ないし情熱・欲望のエネルギーがへ叫ぶへたたくという行為にはけ口をもとめ、その力・エネルギーのすさまじさが口と腕の自動性をもたらしたと解しうる。ジョゼフはかえでの樹をたたいてるとき、にわかには「めまい」におそわれ、「深い眠り」におちいる（I・5、二七頁）。ジョゼフがこのように「深い眠り」におちいるのは、樹をたたくという行為が性行為と類似したものであるからではないだろうか。肉体の交わりにおいて体力のあまりにも急激な消費によって眠りこむことがあるように、ジョゼフは情熱・欲望のエネルギーを使い果たすことによって、寝こむように思われる。そしてかえでの樹の幹は、ジョゼフの怒り＝欲望の対象としてのプレローの身がわりであるとうけとることができよう。こうして絶叫し、かえでの樹をたたくという行為は、これに先行するプレローへの暴力と同じく、肉体のあらがいがたい力、あるいは情熱・欲望のはげしさによってひきおこされたといえる。

プレローとの出会いから、プレローの挑戦を経て、ジョゼフがプレローと決闘し、かえでの樹をたたくに至るまでの経過を見てきた。プレローとの格闘およびその直後の行為は、情熱・欲望のはげしさとしての、内なる《violence》のあらわれ・顕在化とみることができ。それゆえ、プレローはジョゼフを挑発することによって、ジョゼフの内部に《violence》をめざめさせたといえよう。このち、《violence》はジョゼフの生の基盤となる。ジョゼフの《violence》は端的には、第一部第十五章の、マック・アリストターへの暴力によって認めることができる。後述するように、ジョゼフはプレローの身がわりとしてマック・アリストターをバンドで鞭打つ。だからマック・アリストターへの暴力は、第一部第五章の、かえでの樹を枝でたたくという行為とまったく同じ意味を有する。さらにまた、第二部二十二章における、モイラとの性の交わりののちの殺害行為も、プレローへの暴力の延長上に位置づけられるのではないのだろうか。このことについて、決闘のあと、プレローが「君のなかには人殺しがひそんでいるんだ」（I・5、二六頁）と言っている点は重要だろう。この言葉はまぎれもなく殺人者へと変貌するジョゼフの運命を告知しているとともに、ジョゼフの《violence》が外在化すれば

殺害行為をもひきおこす力をひめていること、同じことであるが、第二部二十二章の犯罪がまさしく《violence》のあらわれにほかならないことを示唆している。作者グリーンは『モイラ』にかんして、「ジョゼフとプレローの物語、それがこの本の真の主題だ」と述べている。グリーンがこのように解釈するのは、ひとつには、モイラ殺害行為の場面が結局はプレローとの格闘の場面の蒸しかえしにすぎないからだと思われる。つまりジョゼフは、殺せなかったプレローのかわりにモイラを死に追いやっているという見方もできる。いずれにせよ、ジョゼフの運命はプレローへの暴力が描かれる第一部第五章の時点においてすでに決定したとみなしうる。とすれば、プレローはジョゼフのうちに《violence》をめぐめさせたという点で、ジョゼフを肉なるもののほうに向かわせると同時に、ジョゼフの悲劇的な結末をももたらしていると断定することができる。

二 サイモン

『モイラ』の前半部分、厳密に言えば第一部から第二部第六章までの部分において、サイモンは副次的人物のなかでもとくに大事な位置を占めている。今度は、サイモンがジョゼフの生の歩みにたいしていかなる影響をおよぼしているか、あわせて、作品の展開のなかでどのような機能をはたしているかを考察してゆきたい。

サイモンは、ジョゼフがデア夫人の下宿屋に到着した日からジョゼフにことのほか友情とあこがれをいだき、執拗にジョゼフのそばに寄りそおうとする。はじめのうち、サイモンはデア夫人やプレローらにかんする情報をジョゼフに提供することで、同時にジョゼフを取りまく人物たちの紹介を読者におこなっている。また、第一部第四章、プレローの挑戦をうけて混乱しているジョゼフに、「君は恋をしているんだ」（一六頁）と言いきることによって、サイモンはジョゼフの内面のありようを、すなわち、ジョゼフが自覚しない、プレローへの愛の情熱を、読者に知らせてもいる。けれどもサイモンがとくに大切な役割を演じるのは、第一部第七章の「彫像」の挿話においてである。この章でサイモンはギリシア語の授業が終わったあと、大学の建物の玄関をかざるアポロンとヘルメスの像のまえを一緒に通りがかったとき、これらの彫像を見るようジョゼフをいざなう。「すばらしいな、あのヘルメス像は。ごらんよ、その巻毛の髪、そして首、その首のラインを」（三八頁）とサイモンは言う。だがジョゼフは、「ぼくは偶像が大きらいだ」（三八頁）と答えて見ることをこぼむ。サイモンは、「あれはただ単に非常に美しい人間をあらわしているだけだよ」（三八頁）と反駁するが、ジョゼフは「美しいだって？（…）真っ裸じゃないか」（三九頁）とやり返すのである。この「彫像」の挿話は、ジョゼフの肉体嫌悪を、あるいは、これと表裏をなす純粹志向を浮き彫りにしている。したがって、サイモンはジョゼフの注意をギリシアの神々の像のほうへ向けることによって、ジョゼフのこうした内面の在り方を読者に開示する役目になっている。

同じことは、第一部第九章の「白い木蓮の花」の挿話についてもいえる。サイモンはジョゼフの留守中、ジョゼフの部屋にしのびこんで、勉強机のうえに一輪の白い木蓮の花とともに、「白きこと君におよばず……」（五一頁）と書いた紙きれを置いていく。このメッセージはジョゼフの在り方を読者に知らしめている。ここでの「白く」がただ単に木蓮の花とジョゼフの肌の色だけを問題にしているのではないことは指摘するまでもない。「白く」の色彩は汚れのなき、潔白さを連想させるがゆえに、サイモンがジョゼフの純粹さをたたえるために、紙片を木蓮の花に添えたことは疑いを容れない。サイモンは白い木蓮の花をおくることによっても、ジョゼフの純粹志向を明るみに出している。

右に述べた、サイモンの二つの行為は、しかしながら、ジョゼフの内心のありようを伝えるだけではない。その後のジョゼフの反応をしらべると、サイモンはジョゼフに無視しがたい影響をおよぼしていることがわかる。第一部第九章の冒頭、すなわち、ギリシアの神々の彫像を見たのと同じ日の晩に、ジョゼフは自室の鏡にうつった自分の顔を、目や口を、まじまじとながめている。ジョゼフは鏡のなかの自分の像に満足しない。隈のできた目と、「黒人の口」のように厚い自分の口とをたしかめて、自分の顔が「肉感的だ」と考え、悲しみを覚える（四一頁）。鏡をみるという行為は第一部第十一章でも認めることができる。新調の服を手に入れるため、友人のデーヴィドに連れられて洋服屋に行ったとき、ジョゼフは三面鏡にうつった自分の顔を見つめ、ふたたび顔の肉感性を確認し、自分の顔とデーヴィドの顔とをくらべて、「彼のほうは少なくとも肉欲的な様子をしていない」（五七頁）と思う。このように、ジョゼフは鏡にうつった自分の肉感的な顔に悲しみと落胆の気持ちとをいだいている。けれども鏡をみるという行為をつうじて、自己理解の欲求とともに、自己陶酔ないしナルシシズムの心の動きを読みとることは可能であろう。こうした心の動きがあるからこそ、悲しみと落胆の気持ちが生ずるのではないだろうか。また、第一部第十一章でジョゼフが三面鏡にうつった自分の横顔をはじめに認めたときの感情について、「彼はこの新しい顔を見ないではいられなかった」（五七頁）と述べられている。鏡をみることは、顔をからだの一部とみなし、そのからだを *objet* としてとらえ、*objet* の美しさを愛し、*objet* の美しさに酔いしれたいという願いが介入しているにちがいない。少なくとも、自らの肉体にたいする強烈な意識が鏡をみるという行為をつらぬき、あるいはささえていると思われる。この

ような肉体への意識は、サイモンの彫像へのいざないがひき金となって芽生えたのではないだろうか。ジョゼフにとって、サイモンのさそいは、彫像が美しいとしても人間の裸体を表現しているために、肉なるものへの招きを意味する。サイモンの賛嘆のことばにジョゼフは反撥した。つまり誘惑をはねつけた。しかしサイモンの言葉はジョゼフの記憶に焼きつき、からだにかんすることが否認の対象としてであれ、ジョゼフの意識のなかでひき立ち、鏡をみるという行為を誘発したと考えられる。それゆえ、サイモンは彫像の話をすることで、結果としてジョゼフを肉体的なものほうへ向かわせているとも解釈することができる。

では、白い木蓮の花をみつけたときのジョゼフの反応はどうであろうか。重要な事実として、ジョゼフは木蓮の花の匂いをかきながら陶醉している。

こらえきれない不意の動作によつて、ジョゼフは花をぎゅっと握りしめ、食るかのやうに花を顔のところにもっていき、その白くて甘美なかたまりを唇と目に押しあててつぶした。するとその香りが彼を酔わせた。彼は香りを吸い込み、飲みほした。花の新鮮さ、匂いの一切をうしなわれないやうにするかのやうに、香りを両手の中に閉じこめながら（I・9、五一頁）。

この一節はきわめて官能的な描写だと思う。ジョゼフが木蓮の花に酔いしれる仕方は、自然の風物を楽しむといった態度をはるかに越えている。はじめの「こらえきれない不意の動作によつて」という表現から読みとれるやうに、花を手にとるときは衝動的な動作や、「食るかのやうに」という言い方からうかがえるやうに、花を顔にもっていくときの貪欲な態度は、白い木蓮の花があたかもジョゼフの肉体的な欲求の対象であるかのやうな印象を与えている。ジョゼフは花の香りを吸いこむとき、香りの享受に全神経を集中させることで官能的なよろこびを味わおうとしているやうに見える。このことはつづきの段落を読むことによつていっそう明らかになる。

一分以上ものあいだ、彼はそうした姿勢の中でじっとしていた。言ひよのない悲しみが、彼の感じるよろこびに混じりあつていた。というのも、傷つけることによつて生命をうばいさうとしてこの花は、訳のわからない幸福へのかぎりない欲求を与

えていたから（五一頁）。

ジョゼフは「幸福へのかぎりない欲求」をいだいている。この「幸福」は地上的、したがって、肉体的なものともみらるべきだろう。白い木蓮の花がジョゼフのうちにやどる欲望のはけ口を提供し、時間の有限性、いのちのはかなさへの意識をうえつけながら、地上的・肉体的なよろこびのほうへジョゼフを向かわせているのはたしかなことのように思われる。また、ジョゼフが感じる「言いようのない悲しみ」は、漠然とした欲望をうちにかかえながらも、その欲望が満たされないことに起因していると考えられる。さらに白い木蓮の花を傷つけるという行為は欲望が充足されないことへの報復、一種のサディズム的行為とうけとることができるといえる。このように白い木蓮の花を発見した際のジョゼフの対応を視野に入れるとき、サイモンは花をおくることによって、結局ジョゼフを肉体的なものへみちびいているのだといえる。

〈彫像〉と白い木蓮の花の挿話を検討することによって、サイモンがジョゼフの肉体嫌悪あるいは純粹志向を浮き彫りにするばかりでなく、ジョゼフを肉体的なものへいざなっていることを明らかにした。とはいえ、サイモンが決定的に重要な役割をはたすのは、その死によってであるように思われる。そこで今度は、サイモンの死がジョゼフにいかなる影響をおよぼしているかについて考えてゆきたい。サイモンはジョゼフへの不可能な愛の苦悩と絶望の果てに世を去るのであるが、その死は、第二部第五章、ジョゼフを訪ねたキリグルーの口をおして語られる。サイモンが故郷の実家にかえり、銃器を操作しているうちに死んだことが伝えられる。ジョゼフはキリグルーと別れたあと、図書館に行き、死んだサイモンのことを思う。図書館を出てから、自室にもどるまでの、ジョゼフの心の動きは、次のように書きしるされている。

彼（ジョゼフ）は（……）外に出た。雨の滴が彼の顔を打った。そして彼はしめった地面から立ちのぼってくる心地よい匂いをかいだ。かすかな、少し酔わせるような匂いだった。彼はその匂いを鼻孔をひらいて吸いこんだが、こころよい気持ちを感じないわけにはいかなかった。（……）夜のさわやかさがジョゼフには大変心地よく思われた。それで彼は非常な満足感を味わい、まるでひ

そかな幸福にほほえむかのように、心ならずもほほえみはじめた。彼の胸はふくらんだ。ポケットの奥に手を入れて無意識のうちに、次第に足ばやに歩いていた。にわかには、駆け出したいという欲求にかられたが、己れに打ちかつという習慣からこらえた。けれども、心の奥底にあって、彼の全存在にひろがるようなよろこび、自分でも説明のつけられない、常軌を逸した生きること、よろこびをおさえることはできなかつた(Ⅱ・6、一〇四頁)。

この一節で、ジョゼフはまず雨に濡れた土の匂いをかいでよろこびを覚えていく。ここでの土の香りは、先に挙げた木蓮の花の匂いと同様に、ジョゼフを官能的に陶醉させているのではないだろうか。このことは、匂いを形容する「心地よい」(bonne)、「酔わせるような」(gaisane)という語、あるいはまた、「こころよい気持ち」(clair)という名詞が用いられているところから察知できる。このあと、ジョゼフは夜のすがすがしさに直面して、ついに「生きること」のよろこび「Joie de vivre」におそわれる。この生の歡喜に至るまでに、これにつながるものとして「大変心地よく」(déliçieuse)、「満足感」(bien-être)、「幸福」(bonheur)といった語が見いだされる。これらの語は、土の匂いと関連して引きあいに出した語とともに、ジョゼフの感覚の体験を言いあらわしている。また、ジョゼフが「駆け出したいという欲求にかられ」ているのは、肉体の力に揺りうごかされたためであろう。したがって、さいこの「生きること」のよろこびとは地上的・肉体的な性格をもつと判定できる。

ジョゼフは部屋にもどったあと、窓の外の夜の景色を眺めながら、「不可解な幸福感」(l'incompréhensible bonheur)にとらえられる(Ⅱ・6、一〇五頁)。そして「未知の力」(une force inconnue)がからだじゅうを行き来しているように思われ、ジョゼフは「突然の動作によって指を肩や腕にもついでいゆ」き、肉体をまさぐる(一〇五頁)。ここでの「幸福感」が先の「生きること」のよろこび」と同一のものであり、「未知の力」が肉体の力、欲望のエネルギーを指し示すことは言うまでもない。また肉体をまさぐるという行為が brolique な意味あいをもつ「こと」も、一目瞭然である。「このようにジョゼフはサイモンの死以後、地上的・肉体的なもののように向かっている。この事実はまぎれもなくサイモンの死の知らせをうけとったことと関係している。地上的な幸福感にひたされながら、「サ

イモンは死んだ。(…)サイモンは雨の音を聞けない」(一〇五頁)とジョゼフが考えているところからわかるように、サイモンの死の知らせが、この世に生きていることの実感をジョゼフにもたらし、肉体的なもののようにジョゼフをいざなっている。こうしてサイモンは、ギリシアの神々の彫像に注意をうながしたこと、あるいは、白い木蓮の花をおくったこと⁽¹⁰⁾によってと同様、その死によっても、ジョゼフを肉体的なもの⁽¹⁰⁾のほうへひき寄せしている。

三 デーヴィド

今度は、ジョゼフの唯一無二の友人であり、思想的にも生き方という点でも、ジョゼフにもっとも近いところにいるデーヴィドの機能を検討することにしよう。デーヴィドは、ジョゼフと同様にプロテストタントの信仰をもつ牧師志望の青年である。他の人物たちが地上の国に属するのにたいして、デーヴィドだけはジョゼフと同じく神の国のなかで生きることを目指している。それゆえ、デーヴィドは当然、ジョゼフを霊的なもののほうへみちびく役割をになうべき人物として出現する。げんに第一部第七章で、デーヴィドとジョゼフとが図書館ではじめて出会う場面で、デーヴィドはジョゼフが聖書を探すのを親切に手伝っているし、第一部第九章では、デーヴィドはジョゼフの部屋に立ち寄った際、隣室でみだらな会話がかわされるのを耳にして、ジョゼフを自分の下宿に連れて行き、ジョゼフが福音書を原典で読むために選択したギリシア語の勉強を教えてやっている。さらに第一部第十章において、デア夫人の下宿から自分の下宿にかわるよう、ジョゼフをさそっている。結局、第二部第八章で、ジョゼフはデーヴィドの下宿にかわるのであるが、二人が始終宗教にかんする会話をかわしていることを勘察すると、デーヴィドは今述べた一連の言動によって、たしかにジョゼフを肉なるものから霊的なもののほうへ向かわせているように見える。この点に関連して、作者グリーンは次のように言っている。

デーヴィドの割り込みは(…)摂理的である。(…)それは淫蕩のメカニズムを打ち砕いている^(せ)。

ここで語られている「デーヴィドの割り込み」とは、ジョゼフがプレローとの出会い以後、欲望をうちにかかえて生きているとき、また、ジョゼフの宗教観とはまったく相容れない人びとに囲まれて、言いかえれば、肉体的な現実のただ中で生きているとき、デーヴ

イドが登場するという事実を指し示すだろう。そして「淫蕩のメカニズムを打ち砕く」とは、ジョゼフが欲望に支配されて肉なるもののほうへ接近することを阻止するということだと思われる。この点で「デーヴィドの割り込み」は「撰理的」だとグリーンは解釈するわけである。かくして、デーヴィドはジョゼフのへ守護天使へたるべき存在だといえよう。⁽¹²⁾

このようにデーヴィドはジョゼフを悪からまもり、肉なるものから霊なるものの方へ誘導する役割をはたすべき存在である。とはいえ、注目すべきことに、彼は必ずしもジョゼフのへ守護天使へたりえていない。まず第一に、二人はすでに言ったごとく、始終宗教にかんする会話をかわしているけれども（I・9、14、18、II・7、12、17、20）、こうした会話は全面的にジョゼフを霊なるものの方へ向かわせていない。すなわちデーヴィドとジョゼフは同じプロテスタントの信仰をもち、このことで両者は一致する。だが信仰形態がくいちがっているのだ。デーヴィドがおだやかなたちでの信仰をもち、世間（この世）と妥協する傾向を有するのは対照的に、ジョゼフは狂信的とみなせるほどのげいしい信仰をもつために、世間（この世）にたいして非妥協的な態度をとる。このことはたとえば、「いいかい、ジョゼフ、この世は不純なものだ。そのことは甘んじて受けいれなければならないんだよ」とさすデーヴィドにむかって、「この世の不純さを甘んじて受けいれるなんてことは、福音書を否定することじゃないか。（…）ぼくはこの世を憎むんだ（…）。キリストも、自分が祈るのはこの世のためではないと言われたよ。この世は神から見棄てられているんだ」とジョゼフが反論しているところからうかがうことができる（I・14、75頁）。ジョゼフの非妥協性は、信仰とからみ合った純粹志向に由来している。したがって、二人は当然、肉体と性の問題にかんする見方の点でも衝突することになる。第二部第十二章、デーヴィドから婚約していることを告げられた折、ジョゼフは、「結婚は危険な誘惑だよ。（…）君がその相手の女性を抱きしめたとき、君は神さまのことを考えるだろうか？（…）神さまは姦通を犯す者たちを呪われたのだよ」（一三〇頁）と言いはなつ。

このように二人の世界観・宗教観はちがっている。そしてこの差異が際立つとき、デーヴィドはジョゼフをまもる立場に立つことはできない。というのも、宗教観の違いによって、デーヴィドはジョゼフを反撥させ、いっそう純粹志向を強めさせる結果となる。けれども純粹志向の強化は、一方では宗教感情をたかめるとしても、他方では肉体的なものの方へ歩みよることを招来するからだ。実際、肉体的なことからは忌避・排斥の対象になればなるほど、ますます意識にこびりつき、誘惑の力を発揮することになる。それゆえ、

デーヴィドは宗教的な話をする事で、ジョゼフを靈的なもののようにみちびいているように見えながらも、その実、宗教観・世界観の相違によって、ジョゼフの純粹志向を明るみにだし、いっそう強化させるために、結果的にジョゼフを肉体的なもののおいやっているとも理解しうる。

デーヴィドがジョゼフのへ守護天使へになっていないことを示す端的な例として、デーヴィドがジョゼフの告白の受け手の立場にありながら、ジョゼフの打ち明け話にしかるべき対応をしていないという事実が挙げられる。ジョゼフは宗教的な不安・悩みをデーヴィドにうったえる。けれどもデーヴィドはジョゼフの不安・悩みに十分満足にこたえていない。たとえば第一部第九章で、ジョゼフは救いのたしかな証しを得るため、キリストを見たい、キリストに触れたいとデーヴィドに胸の内をあかすにもかかわらず、デーヴィドはなんら納得のいく回答をしていない（四九頁）。また第二部第七章において、ジョゼフは肉欲にとりつかれたことで、自己の宗教的な救いに疑念をいだき、「ぼくはもうだめだよ (Je suis perdu)、デーヴィド」（一〇八頁）と告白する。だがデーヴィドは、「君がだめかどうか知っているのは神さまだけしかないよ」（一〇八頁）と言って、ジョゼフを突きはなす。もつとも、デーヴィドの話していることは正しい。しかしデーヴィドの言葉のなかには、ジョゼフの内心の問題にかかわりたくないという気持ちがある。こもっているのではないだろうか。事実、このあとジョゼフが欲望に屈したことを語りだそうとしたとき、デーヴィドはジョゼフの頬をぶち、ジョゼフをだまらせようとしている。デーヴィドは、ジョゼフが後悔することになると考えてこのようにふるまうのであろう。けれども、ジョゼフの告白をこれ以上聞きたくないという感情がはたらいっていることもまたたしかだと思われる。さらに第二部第十七章でも、デーヴィドは同じような態度をとっている。モイラへの欲望に責めさいなまれるジョゼフがそのことを打ち明けようとした際、デーヴィドは、「ぼくは知りたくない。ぼくに関係ない」「ぼくは君に言ってほしくないんだ」と言ってジョゼフを突きはなす（一四八頁）。このようなデーヴィドの姿勢が、ジョゼフをますます苦悩のなかにおちいらせることは必然の帰結である。デーヴィドからなんの有効な助言を得られないジョゼフは、靈なるものから肉なるもののほうにおもむき、ついにモイラと肉体のあやまちをおかすことになる。見方によれば、ジョゼフの肉体のあやまちは、デーヴィドが無能な *confesseur*（告白の聞き手）であることに原因しているかもしれない。つ

まりデーヴィドが無能な confesseur であるために、この結末をふせぐことができなかつたのだし、さらに言えば、この結末を招来したとも認定できるのである。

デーヴィドがジョセフのへ守護天使になり得ていない三番目の理由を指摘しよう。その理由とは、デーヴィドがそうとは知らずにジョゼフの犯罪に係しているという点である。ジョゼフはモイラと性の交わりをむすんだあと、モイラを絞殺し、死骸を庭にうずめる。デーヴィドはジョゼフのこうした行動に影響を与えている。まず第二部第十七章でデーヴィドが、『ロメオとジュリエット』の書物をやぶいた⁽¹³⁾ジョゼフに、削除版のシェークスピアの本を友情のしるしとして贈っていることが目にとまる。この本の中には、作品『オセロ』が収録されている。周知のように、『オセロ』とは、嫉妬の情念に苦しめられた主人公がついに愛する妻を絞め殺してしまう物語である。ジョゼフはデーヴィドから本を贈られたその日の晩、早速『オセロ』の物語に目をおし、「一人の男が愛している女を殺すなんてどうしてあるのだろうか」(Ⅱ・18、一五〇頁)と考えている。さらにジョゼフは第二部第二十一章、彼を誘惑するために部屋にしのび込んだモイラと肉体の交わりをむすぶ直前にも、『オセロ』を読んでいる。モイラが友人のセリナにあてて手紙を書いているあいだ、ジョゼフのほうはモイラを無視しあるいは黙殺するために『オセロ』をひもとくのである(一六九頁)。モイラ殺害に先立って、このようにジョゼフが『オセロ』の本を通読していることは看過できない。ジョゼフは物語の真実性をうたがっているとしても、『オセロ』の読書は、ジョゼフがたどるべき道筋を教唆したといえるのではないだろうか。なぜならジョゼフもまた、『オセロ』の主人公と同じように、自分の執着する女を絞め殺してしまうのだから。もっとも、ジョゼフはこの物語の顛末を知らなくても、モイラを殺していたかもしれない。しかし犯罪の間際にジョゼフが『オセロ』を読んでいることを考えると、やはり『オセロ』が、もしくはこの読書が、ジョゼフの犯罪を不可避的にみちびいてるとみなすのが妥当だと思われる。ここから、デーヴィドはシェークスピアの本を贈ることによって、ジョゼフに殺人者としての道を踏み出させたと判断することができる。

また第二部第十二章で、デア夫人の下宿から、デーヴィドの居るファーガスン夫人の下宿にかわったばかりのジョゼフを、デーヴィドが夫人の家の庭に案内するところには注意を払うべきであろう。デーヴィドは庭の端にある「黒い板小屋」のところまでジョゼフを

連れて行き、この「小屋」について説明している。

——ここは園芸道具をならべておくところなんだよ、とデーヴィドは戸を押しながら説明した。数年前、散水用ホースのむこうにガラガラ蛇がいるのがみつかってね。そこで、まさにそのために、ファーガスン夫人はその小さな塀をこしらえさせたんだ。その塀は、人ならばひとまたぎで飛びこえられるけれども、蛇が庭の中に入ってくることをふせいでいるからね。

ジョゼフは首をのびした。すると小屋の内部に、デーヴィドが話していたホースとともに、熊手やシャベルがあるのが見えた（一一九頁）。

この章では、デーヴィドの婚約の知らせと、結婚にかんする二人の議論が主として語られているので、大方の読者は右に引用した場面を見すごしてしまいがちである。しかしこの場面はのちにきわめて重要な意味をもつことになる。この「小屋」については、第二部第十七章、二人の会話の中でふれられる（一四四頁）。そして第二部第二十二章、ジョゼフがモイラを殺したあと、「小屋」は再度出てくる。ジョゼフは雪の降りしきる中、モイラの亡骸をかかえてこの「小屋」に向かう。「小屋」についてからのジョゼフの行動を見ることにしよう。

背の低い小塀にまでたどり着くや否や、彼（ジョゼフ）はモイラのからだを雪の上にそっと置いた。そして小屋の中に入り、壁を手探りしはじめた。そしてとうとうデーヴィドが前に見せてくれたことのある園芸道具をみつけた。それから彼はシャベルを手に取り、小塀のむこうに投げた。（…）小塀はちょうど、彼がまたいで通れるほどの高さだった。（…）

（…）今では彼は昔、畑で働いていたときしてたのと同じように、土を掘っていた（一七五・六頁）。

このようにジョゼフは「小屋」からシャベルを取りだし、そのシャベルを用いて地面に穴を掘っている。この行為が死体をうめるこ

とを目的としていることは言を俟たないけれども、こうした殺害後の行動は、第二部第十二章においてデーヴィドの案内で小屋のなかの園芸道具を見たことよって決定されているのではないだろうか。換言すれば、シャベルがあるということの記憶が死体遺棄の行動をまねいているのである。死体遺棄は殺害行為に付随したものにすぎない。しかしそれが犯罪を構成することはほんとうである。とすれば、シャベルはジョゼフを犯罪のほうにみちびいているといえるし、同時に、デーヴィドは「黒い板小屋」をジョゼフに見せることよって、モイラ殺害後になすべきことを教示したと論定することができる。

以上、デーヴィドがジョゼフにたいしてはたす役割を検討してきた。デーヴィドはジョゼフのへ守護天使のように見えながらも、世界観・宗教観の差異によつて、そして無能な *confesseur* であるがために、ジョゼフを肉なるもののほうに、さらにはモイラのほうに押しやり、モイラとの肉体のあやまちを避けがたいものにしていく。そればかりかシェークスピアの本を贈り、また、シャベルの置いてある黒い板小屋に案内することよつて、ジョゼフの犯罪さえもひきおこしている。

四 へ取るに足りない人物たち

これまでプレロー、サイモン、デーヴィドといったように、ジョゼフと比較的緊密な関係を有する人物たちの役割を検討してきた。今度はジョゼフとそれほどつながりをもたない人物たちの機能を考えてみることにしたい。すなわち、デア夫人、マック・アリストアー、キリグルー、デア夫人の下宿に集まる学生たち、ジェマイマ、およびファーガスン夫人の下宿の女中である。これらの人物たちはジョゼフとほとんどかわりをもたないために、一見取るに足りないようにみえる。しかしその実、彼らもまた、物語の進展に、あるいは、ジョゼフの生の歩みに一定の影響をおよぼしている。

(1) デア夫人

デア夫人は作品の冒頭、下宿に到着したジョゼフのまえに厚化粧をしてあらわれる。そして「夫人は今では彼(ジョゼフ)のあまりにそばにいたので紅白粉^{ベニシロコ}の下の肌のきめがみえた。その紅白粉は彼を憤慨させた」(I・1、六頁)と語られているように、デア夫人は厚化粧のためにジョゼフを反撥させている。この反撥は同時に、肉なるものへの嫌悪を意味するだろう。同じ日、ジョゼフは両親にあてて手紙を書いている折、夫人のことを書こうかどうかまよい、「デア夫人が紅をつけていることを両親が知ったら……(……)あの化粧した顔が彼にはおぞましく思われた」(I・2、七頁)と考えている。ここでデア夫人にたいする反感は歴然としている。しかしジョゼフが否認の対象としてであれ、デア夫人の化粧した顔を想起している点は注目し値する。このことは、デア夫人の顔の記憶がジョゼフの脳裡に生々しく焼きついていることを意味する。デア夫人はその厚化粧ゆえにジョゼフを反撥させながらも、それでいてジョゼフを眩惑している。結局、デア夫人はジョゼフを肉体的なものほうへ惹きつけていると判定しうる。

デア夫人が第一部第一章でモイラのシガレットケースにジョゼフの注意を向けていることは重要だろう。ジョゼフを下宿に迎え入れたデア夫人はジョゼフを部屋に案内したあと、「モイラったら、シガレットケースを置き忘れてるわ」（六頁）と叫んでいる。この時点において、夫人のことはさして意味をもたない。しかしのちに女中ジェマイマから、ジョゼフの使っている部屋がかつてモイラのものであったことを聞かされたとき、ジョゼフはこのシガレットケースのことを思い出しているし（Ⅱ・2、九七頁⁽¹⁴⁾）、さらにその後の物語の展開、すなわち、ジョゼフがモイラと出会い、モイラを相手に性の交わりをむすび、モイラを殺すという展開を考えあわせるならば、デア夫人の言葉は、もしくは置き忘れられたシガレットケースは、ジョゼフとモイラの結びつきを生成したといえるのではないだろうか。この点にかんして、遠藤周作氏は『モイラ』を論じたエッセーのなかで、「下宿の部屋の中に、モイラとよぶ娘がおき忘れた煙草入れをジョゼフがみた時、我々は、彼が、この娘を必ず殺すであろうと知っています⁽¹⁵⁾」と述べている。遠藤周作氏が認めるように、ジョゼフの犯罪がシガレットケースの存在によって作品冒頭から告知されているとは言えないにしても、少なくともこのシガレットケースが、モイラのほうに不可避免的にひきよせられていくジョゼフの運命を示唆していることだけはたしかであろう。こうしてデア夫人はシガレットケースのことに言及することによって、ジョゼフをモイラのほうにいざなっていると論定しうる。

（2）マック・アリストアー

デア夫人の下宿の住人であるマック・アリストアーは、ジョゼフの篤い信仰と真面目さのせいで、終始ジョゼフに敵対的な姿勢をとる。第一部第十五章、マック・アリストアーはふとした機会をとらえてジョゼフの部屋に許可なしに入ってくる。そしてサイモンがジョゼフにたいしていただく感情⁽¹⁶⁾のことでジョゼフをからかい、ジョゼフの宗教を馬鹿にし、いかがわしい女の話をしながらベッドの上でみだらな仕草をする。そこでジョゼフは激怒の発作におそわれ、黒いベルトを用いてマック・アリストアーを鞭打つ。

（…）ジョゼフは耳が燃え立つような気がした。返事もせず、彼は腰にしていた黒いベルトをはずし、そしてこの鞭を手に持って、いきなり腕を振りあげた。すると森の中で樹の幹を枝でたたいたときと同じように、自分の腕がひとりで動くような気

がした。幅のせまい革紐がひゅうひゅうという音をたてて生あたたかい空気をひき裂き、マック・アリスターの背中に振りおろされた。相手は唸り声をあげてベッドからころがり落ちた（七八頁）。

この場面で、「森の中で樹の幹をたたいたときと同じように、自分の腕がひとりで動くような気がした」と書かれていること、腕の自動性が観察される。この腕の自動性をひき起こすものは、マック・アリスターの挑戦的な態度を目のあたりにして爆発した怒りのすさまじさである。ジョゼフにおける怒りと欲望との結びつきはすでに指摘した。ここでの怒りもまた、抑圧された欲望の表現と受けとれる。このことは、マック・アリスターに暴力をふるったあと、ジョゼフの内心の声が、「お前が殴りたかったのはあいつではない」、それは「ほかの男」で「その名はプレローだ」とつぶやいているところからたしかめることができる（七九・八〇頁）。第一章第五章、林間の空地に落ちた木の枝を用いて幹をたたきまくったかえでの樹がそうであったように、マック・アリスターは、ジョゼフが自覚しないで愛するプレローの代替物である。⁽¹⁷⁾したがって、「ジョゼフは耳が燃え立つような気がした」というはじめの文のなかの「燃え立つ」(Brennen)という動詞は、耳もとの血のざわめきを示すとともに、情熱・欲望のエネルギーとも関係し、ジョゼフがこのエネルギーに隷従する寸前の状態を語っていると思われる。激怒の発作は《Violence》のあらわれにほかならない。とすれば、マック・アリスターはその挑発的姿勢によってジョゼフの《Violence》を顕在化させ、この点でジョゼフを肉なるもののほうへまねいていると解釈できる。

マック・アリスターはさらに第一部第十六章、『ボリス・ガゼット』という雑誌をジョゼフに見せることで無視できない働きをしている。この章でジョゼフはマック・アリスターに暴力をふるったことを後悔し、彼と和解するために部屋を訪ねる。ちょうどそのとき、ジョゼフはマック・アリスターが『ボリス・ガゼット』を読んでいるところに出くわす。

ベッドの上に腹ばいに寝そべり、両手で頭をかかえたマック・アリスターは『ボリス・ガゼット』を読んでいた。その雑誌のバ

ラ色の頁には、裸体の女の写真が飾られていた(八二頁)。

『ポリス・ガゼット』に裸体の女の写真が載っていることが注意をひく。この描写はジョゼフの視点に立つてなされているので、ジョゼフは当然のことながら写真に目をやっている。しかしこのときのジョゼフの反応にかんしては、作中、何もふれられていない。とはいえ、この雑誌が、すでに引きあいに出したギリシアの神々の裸体の彫像と同じように、ジョゼフを肉なるもののほうにいざなっていることは自明であろう。そうであるならば、マック・アリストアは『ポリス・ガゼット』を見せることによって、また、ジョゼフを肉体的なものほうにさそっている。

(3) キリグルー

ラテン語の復習教師キリグルーは、第一部第十二章、同郷のサイモンの口ききによつてはじめてジョゼフのまえにあらわれる。ジョゼフの部屋を訪ねたキリグルーは肉体的ことに話題をむけ、学生たちは「女と酒のことしか考えない」(六八頁)し、「本能に屈服している」(六九頁)と言い、そして「君だって他の連中とおなじ」(六八頁)で、「われわれ一人ひとりの中にはけだものがひそんでいるんだ」(六九頁)と断定する。予言的な響きをもつ、キリグルーの指摘にジョゼフは興奮し、ひどく反撥する。こうしてキリグルーはジョゼフのなかの肉体的部分にふれること⁽⁸⁾で、ジョゼフの純粹志向を顕在化させている。しかしキリグルーの言葉は忌避すべきものとしてあれ、肉なるものにたいする意識をうえつけるがゆえに、同時にジョゼフを肉体的なものほうにひきよせているのではないだろうか。

このことは、次につづくエピソードを一瞥することによつて明瞭になる。ジョゼフはキリグルーが訪問したとき、シェークスピアの『ロメオとジュリエット』を読んでいたのであるが、たまたま意味不明の箇所があり、キリグルーに問いただす。ところが問題の箇所はキリグルーの教示によつて卑猥なことを暗示していることが判明する。激昂したジョゼフは書物を二つにひき裂く(七〇頁)。この件りはジョゼフの肉なるものへの反撥のすさまじさを露呈しており、ジョゼフの純粹志向をあらわにしている。だがキリグルーはここ

でもまた同時に、ジョゼフの意識を肉体的なものほうへ向かわせているのではないだろうか。げんに第一部第十三章、指導教官のタック先生に授業科目の変更を願い出る際、『ロメオとジュリエット』のなかに猥褻な箇所があることを伝えているし（七三頁）、第十四章でも、友人のデーヴィドに本をやぶいたことを告白している（七五頁）。これらの発話は、みだらな箇所がいかにもジョゼフに衝撃を与え、いかに生々しく脳裡に焼きついていくかを如実に示している。キリグルーは真実を教えることでジョゼフに肉なるものを強く意識させたことになる。同じことは、その前の発言についてもいえるよう。かくしてキリグルーは肉体の話をし、『ロメオとジュリエット』の中の意味不明の箇所にかんして教えることによって、ジョゼフの純粹志向を表面化させるとともに、肉なるもののほうにジョゼフを押しやっていると判断することができる。

キリグルーは第二部第十三章でも登場する。主として学生たちの陰謀を伝えるためにジョゼフのところへやってくる。この陰謀についてはのちに取りあげるけれども、このときキリグルーはモイラのことを話題にしている。「あの女（モイラ）は、もしゴリラが言い寄ることがあるとすれば、ゴリラにだって身をまかせたろうさ。（…）あれは、ラテン人たちがルーバと呼んだもの、つまり牝狼だよ、絶えず飢えたけどものなんだ」（一三六頁）と彼は言う。キリグルーの話は、モイラの肉体的側面のみを強調しており、全面的に正しいわけではない。しかしこの話は、モイラにたいするジョゼフの見方を固定したという点で意味をもつ。この時点でジョゼフはすでにモイラに遭遇し、モイラへの欲望に苦しめられているとはいえず、キリグルーの話を聞いたために、ジョゼフがモイラを決定的に肉の化身とみなし、モイラとの愛を肉欲と同一視するようになることは明白である。事実、ジョゼフはモイラと性の交わりをむすんだあと、「ルーバ、牝狼」というキリグルーの言葉を思い出し、「まさにそうなのだ、モイラは、そして愛とはまさにそれなのだ」（一七三頁）と考えている。キリグルーはモイラの話をするので、まぎれもなくジョゼフの思いをモイラのほうへ向けている。この点で彼はジョゼフを肉なるものほうへ近づけている。

また第二部第十三章において、キリグルーがジョゼフのもとを立ち去る瞬間、握手をするつもりでジョゼフの手に触れるところは無視することはできない。このときジョゼフは怒りのなかで、「どうしてぼくにさわるのですか（Pourtou me touchez-vous?）」（一三八頁）

と叫んでいる。肉体の接触を断固として拒否するこのような態度をとおして、ジョゼフの純粹志向がかいま見られることは言うまでもない。とはいえ、この場面の意味を完全に把握するためには、第二部第二十一章の終わりの場面、すなわち、モイラがジョゼフの髪に手をやるところを引きあいに出さなければならぬ。ジョゼフを誘惑するために彼の部屋にしのび込んだモイラは、ジョゼフのひたすらな無視と沈黙をまえにして、とうとう部屋を出ていこうとする。だが出ていく間際、モイラはジョゼフの部屋の鍵を床の上に落とし、ジョゼフに鍵を拾わせることによって彼の髪にさわると、ここでもまた、ジョゼフは憤怒にかられ、「どうしてぼくにさわったんだ (Pourquoi m'avez-vous touché?)」(一七二頁)と大声を張りあげている。つまりキリグルーが手に触れたときに言ったのとはほぼ同じ言葉をお口にす。そしてジョゼフは形相を変え、欲望にたけり狂った顔つきでモイラにせまっていく。髪にさわられたことがきっかけとなって、それまで抑えつけられてきた欲望が堰を切り、氾濫するわけである。モイラと肉体の交わりをむすぶに至る、こうしたいきさつを視野に入れると、キリグルーが手に触れた際のジョゼフの怒りは、欲望がいや応なく目覚めさせられることへの反応だと解することができよう。したがって、キリグルーの行為はジョゼフの純粹志向を浮き彫りにするだけではない。キリグルーはモイラの話をするこゝによつてと同様、ジョゼフの手にさわることでも、ジョゼフを肉なるもののほうに傾斜させている。

(4) デア夫人の下宿に集まる学生たち

今度はデア夫人の下宿に集まる不特定の学生たちの動きを瞥見することにしよう。第一部第九章、ジョゼフがデア夫人の下宿に逗留しているとき、マック・アリストアーをふくむ、隣室の学生たちが性にかんするみだらな話をかわし、ジョゼフを赤面させている。ジョゼフのうけた衝撃の深さは、「これらのことばは無慈悲なまでに正確な一連の映像をかたち作って、永遠にそこから動くまいとでもするのように、彼(ジョゼフ)の記憶のなかにやどった。(…)不意に彼は自分の中に悪魔が巣くっているのを感じた」(四四頁)と語られているところからうかがうことができる。また第二部第一章、マック・アリストアーに暴力をふるった同じ日の晩、ジョゼフは隣室の学生たちの話し声に眠りを妨げられている。集まりの中にはマック・アリストアー、キリグルーもまじっているが、学生たちは淫売宿の

話をし、性体験をした者の認定をし、ジョゼフをやり玉にあげ、「あいつ〔ジョゼフ〕にまいてしまわない女にお目にかかりたいよ。(…) いいかい、やつはこうやって女の腰を抱きしめるんだ……」(九二頁)などと言ひ、ジョゼフの肉欲について色々とあげつらうのである。このような性と肉体にかんする淫猥な会話はもちろんジョゼフに反感をいだかせる。しかし学生たちの会話がジョゼフを反撥させるとしても、同時にジョゼフの記憶のなかに鮮明にのこり、ジョゼフを肉なるものに呪縛する作用を有することは打ち消しがた⁽²⁰⁾い事実である。

第二部第十三章で、キリグルーの口から漏らされる、学生たちの陰謀についても言及する必要があるだろう。陰謀とは、品行のよくないモイラをジョゼフのところへやって、ジョゼフを誘惑させ、そうすることでジョゼフを物笑いの種にするというものである。モイラは学生たちのくわだてに同意し、ジョゼフを誘惑する役をひきうける。作品の後の展開を考慮すれば、この陰謀がジョゼフとモイラとの結びつきを不可避免的に生じさせ、ジョゼフを肉なるものに直面させることは贅言を要しない。このように、デア夫人の下宿に寄り合う学生たちは、卑猥な会話と陰謀とによってジョゼフを肉体的なもののように押しやり、また陰謀によって、ジョゼフをモイラに結びつける役割をはたしている。

(5) ジェマイマ

デア夫人の下宿の女中ジェマイマは第二部第二章、ジョゼフの部屋を掃除しにくるというかたちをとって登場する。このとき、ジェマイマはデア夫人の養女のモイラのことを口にする。女中は、ジョゼフの使用している部屋が以前、モイラのものであったことを伝えるとともに、「モイラお嬢さまはきれいな方ですよ。ただお嬢さまにはお考えがおありなのです。それにほかのこともありますし……」(九七頁)と教える。この話はモイラにたいする興味・好奇心をひきおこさずにはおかない。実際、第二部第九章で、「へモイラお嬢さまはきれいな方ですよ……」。年とった女中のこの月並みなことばが格別の魅力を付与されて、彼の脳裡にうかんだ。心ならずも彼はモイラのことを思い浮かべようとした」(一一七頁)と語られているように、ジョゼフは女中の言葉を思い出し、まだ見たこともな

いモイラのことを想像しようとしている。またジェマイマの話のなかで、「ただお嬢さまにはお考えがおありなのです。それにほかのこともありますし……」という部分はモイラの放縦・不品行を示唆するのであろう。けれども意味内容が不鮮明であるがゆえに謎をのこし、モイラへの関心をいつそうそそっていると思われる。とはいえ、第二部第二章のジェマイマの話のうちでとりわけジョゼフの注意をひくのは、ベッドへの言及である。「モイラお嬢さまがいらっしやったところは、ベッドはほとんど部屋の真ん中であって、すこし斜めに置かれていました」(九六頁)、「ただお嬢さまは、ベッドがほとんど真ん中であって、すこし斜めになることを望まれるのです」(九七頁)というように、ジェマイマはベッドの置き方についてのモイラの習慣のことを繰りかえし語っている⁽²⁾。この話はジョゼフに衝撃を与え、ジョゼフは女中が部屋を立ち去ったあと、ベッドを上げしげと見つめ、「自分が眠っているベッドの中で、彼女「モイラ」もまた眠ったのだ」(II・3、九七頁)と考えている。ここにおいてベッドはジョゼフとモイラのつながりを密接にしているといえるが、さらに、ジェマイマから話をきいた日の晩、ジョゼフはモイラがかつてそうしていたように、ベッドの位置をかえて身を投げる。この件りを引用することにしよう。

主の祈りをとなえている最中に、ベッドの位置を変えようという奇妙な考えが心に浮かんだ。どうやってみても、その考えは彼「ジョゼフ」を支配した。(…)一瞬のち、かれは立ち上がり、部屋の中央にベッドをひっぱり、暖炉とドアから等距離のところに、斜めに置いた。(…)ベッドを一周したあと、彼はおそおそとした、それでいて愛撫するような仕草で、枕とシーツの上を指先でそつとなでた。突然、彼はその狭い寢床の上に身を投げた。するとバネが体の重みのためにきしんだ。彼は長々と体をのばした(II・6、一〇六頁)。

この一節で、かつてモイラが置いていたのと同じ場所に、ジョゼフがベッドを置きなおしていることは一読して明らかである。ベッドの位置をかえるという行為から、まだ見ぬモイラへの思いにジョゼフがとらえられていることがわかる。しかも、ベッドの位置を変えるといふ考えが、主の祈りをとなえるという宗教的な実践のただ中で生じていることから、モイラへの思いは信仰を圧倒するほどま

でもたげたのだとみなしうる。また、ジョゼフがベッドに身を投げる寸前、「おずおずとした、それでいて愛撫するような仕草」で枕とシーツをなでている点は注目される。ジョゼフの仕草はまぎれもなく *stougue* ないろどりを帯びている。置きかえられたベッドは枕やシーツとともに、モイラの代用物となっているのではないだろうか。ジョゼフがベッドに身を投げるとき、モイラと合体したいという欲求が、あるいはモイラのからだを所有したいという欲求がジョゼフをうごかしていると推察される。このようにベッドは、モイラへの肉体的欲望をひき起こすに至るまでに、ジョゼフをモイラのほうに誘引している。女中ジェマイマはモイラことや彼女の習慣のことを話すことで、ジョゼフをモイラのほうにみちびくばかりでなく、肉なるもののほうへ追いやる機能をはたしているといえる。

(6) ファーガスン夫人の下宿の女中

ファーガスン夫人の下宿の女中が出てくるのは、第二部第十三章においてである。この章では、学生たちの陰謀を伝えるためにやってきたキリグルーとジョゼフとの会話が中心として語られる。だが途中、女中がジョゼフの部屋に入ってきた、冬の寒さにそなえて追加の毛布を置いていくところがある。この場面は次のように書かれている。

(…) ドアがあいて、黒い服を着、足もとまで垂れさがる白いエプロンを腰にしめた年とつた黒人の女が中に入ってきた。(…)
彼女は四つに丁寧に折りたたんだ灰色の分厚い毛布を腕をのばしてかかえていた。

— 追加の毛布がお入り用になるだろうって、ミセス・ファーガンがおっしゃってましたもので、と彼女は重い荷物をベッドの上に置いて言った(一三七頁)。

キリグルーとジョゼフとの会話の合間にさりげなく挿入されたこの場面は、のちに重要な意味をもつことになる。女中が運んできた「灰色の分厚い毛布」は第二部第二十二章において、ジョゼフがモイラを殺すときに利用されることになるからだ。ジョゼフはモイラ

と肉のあやまちをおかしたのち、しばらく寝こみ、目をさましたとき傍らに幸せそうに眠っているモイラを見いだす。そこでジョゼフは怒りにかられてモイラを絞め殺す。少し長いモイラ殺害の場面を読むことにしよう。

——起きろ！ と彼（ジョゼフ）は命じた。

彼女は手の甲を顔のところにもっていき、半ば目をあけた。

——寒いわ！ と彼女はつぶやいた。

——寒いだと、と彼は声を変えて言った。

そして床の上ですべり落ちた灰色の分厚い毛布を両腕をいっぱいひろげて拾いあげ、急に若い女の顔の上に押しつけた。モイラは体を突然おどろがらせたので、危うくベッドの外に投げ出されそうになった。だがジョゼフは全力でその大きな毛布のかたまりの下に彼女を抑えつけた。その毛布のかたまりの下からは、子どもの叫びに似たうめき声がかきこえてきた。

——寒いだと！ と彼は憤然として繰り返した。寒いだと、モイラ！

小さな体が異常なはげしさで一方から他の方向に向いた。非常な力が不意にモイラの体を動かしたので、ジョゼフはモイラの体が自分の手から逃がれるのではないかと心配した。それで彼は両手をとて深く毛布の中に押し込んだ。そのため両手で毛布の厚みの下の顔かたちが認められた。

彼は、彼女の上で体を曲げて、苦しそうに息をしていた。（……）彼女がまったく動かなくなったとき、彼は深い溜息をつき、毛布をひきはがした（一七三・四頁）。

この場面を読んでわかるように、ジョゼフは、第二部第十三章で女中が持ってきた「灰色の分厚い毛布」をモイラ殺害のための道具としている。もっとも、ジョゼフは最終的にはモイラの首をしめて殺すのであり、必ずしも毛布がなくてもジョゼフの犯罪はなされていたかもしれない。しかしこの場面において、ジョゼフはまず毛布をモイラの顔の上におおいかぶせて、顔を見えなくするとともにモ

イラを動きにくくし、そして息苦しくし、そのあとで首をしめている。この一連の行動ははっきりした意図をもってなされているとは考えにくい。むしろジョゼフは肉体の誘惑に負けたことへの怒りと絶望に支配されて、半ば無意識のうちに行動におもむいているとみるべきだろう。とすれば、モイラの顔に押しつけた毛布が首をしめるといふ次の行為をうながし、あるいは誘導しているともいえる。したがって、「灰色の分厚い毛布」はジョゼフの犯罪をひき起こしているし、と同時に、ファーガスン夫人の下宿の女中は追加の毛布をもってくることによって、ジョゼフを犯罪のほうにみちびいていると断定することができる。

以上、デア夫人、マック・アリストアー、キリグルー、デア夫人の下宿に集まる学生たち、ジェマイマ、そしてファーガスン夫人の下宿の女中がはたす役割について検討してきた。ここでこれらの人物たちの役割をまとめておこう。デア夫人はその厚化粧のためにジョゼフを肉体的なものほうへ惹きつけているし、シガレットケースへの言及によってモイラのほうにいざなっている。マック・アリストアーはその挑戦的姿勢と『ボリス・ガゼット』の雑誌を見せることによって、ジョゼフを肉なるものほうへまねいている。キリグルーは肉体の問題について話し、『ロメオとジュリエット』の曖昧な箇所の意味を教え、そしてジョゼフの手に触れることで、ジョゼフの純粋志向を明るみに出すとともに、ジョゼフを肉なるものほうへ誘導している。また、モイラの話をするることによってもジョゼフを肉体的なものほうへ向かわせている。デア夫人の下宿に集まる学生たちはみだらな会話をかわし陰謀をくだてることによつて、ジョゼフを肉なるものほうへ駆りたて、さらに陰謀によつては、ジョゼフをモイラに結びつける役割をはたしている。ジェマイマはモイラのことや、ベッドにかんする彼女の習慣のことを話すことで、ジョゼフをモイラのほうへみちびき、と同時に、肉なるものほうへ追いやっている。そしてファーガスン夫人の下宿の女中は追加の毛布を提供することでジョゼフを犯罪のほうに押しやっている。このように、ジョゼフとの関係においてそれほど重要性をもたない、これらの人物もまた、ことごとくジョゼフの生の歩みになんらかの影響をおよぼし、ジョゼフの運命の形成に貢献している。こうした中でモイラと遭遇したジョゼフが、モイラと肉体の罪をおかし、モイラを殺すに至るのは必然の成り行きだといえよう。

五 モイラ

さいごにモイラの役割を検討しておきたい。モイラが肉なるもののほうにジョゼフをいざなっていることは火を見るより明らかであるが、ここではモイラがいかなるかたちでジョゼフを誘惑しているかを見ていくことにしよう。

モイラが実際にジョゼフの前にはじめてあらわれるのは、第二部第十章においてである。ファーガスン夫人の下宿にかわったジョゼフは、セーターをもとの下宿に置き忘れたことに気づき、早速デア夫人のところにおもむく。このときジョゼフは、郷里の実家にもどったばかりのモイラに出会うのである。この出会いの場面で、ジョゼフはまずモイラの赤い服に注目している。

彼〔ジョゼフ〕は彼女〔モイラ〕を見た。彼女は赤い服を着ていた。くすんだと同時に強烈な赤の服だったが、それは彼に衝撃を与えた（一一二頁）。

赤い服とともに赤い唇もまた、ジョゼフの注意をひいている。ジョゼフはモイラの白い顔色、青い目、きめ細やかな肌を観察したあと、どぎつく口紅を塗った唇を注視する。ジョゼフの視線をとおして見られた、モイラの赤い唇は次のように描かれている。

（…）口はあまりにも赤く、ほとんど荒々しい勢いで塗りたくられていた（一一二頁）。

このように、ジョゼフはモイラの赤い服と赤い唇を注視している。この赤い服と赤い唇はその色彩によってジョゼフに強烈な印象を

与え、ジョゼフの記憶のなかに生々しくとどまることになる。事実、第二部第十一章、モイラとわかれてチョーサーの授業に出た際、ジョゼフはモイラのことを考え、「黙示録に出てくる淫売婦のように赤い服を着、唇を塗りたくって」（一二五頁）と述べられているように、モイラの赤い服と赤い唇を思い出している。また第二部第十二章では、「彼女（モイラ）があまりにびったりと体の線を出した服を着ていたので、彼女の体のある部分のはっきりと見えたことを思い出すのだった。しかも服の赤いことが、そのみだらさをいやましているのだった」（一二八頁）と語られているように、ジョゼフはモイラのみだらな服の着こなしとあわせて、赤という服の色彩を思い浮かべている。さらにまた、第二部第十四章で、ジョゼフはデーヴィドと講義に行く途中、大通りでモイラとすれちがい、このあとモイラのことを話題にし、「君は、彼女がどれだけ口紅を塗りたくっているか、気づいたかい？ 彼女の口ときたら……」（一四〇頁）とデーヴィドに問いかけている。この言葉は、モイラの赤い唇がいかにジョゼフに衝撃を与え、いかに彼の記憶に鮮明に焼きついているかを端的に示している。⁽²⁾ジョゼフにとって「赤」が情欲のシンボルであり、みだらな、煽情的な色彩であることは論を俟たない。それゆえ、赤い服、赤い唇はジョゼフにおいて、モイラの肉体的・官能性をひき立たせるものとして意識されている。

赤い服、赤い唇と同様に、リラの香水の匂いもまた、モイラの肉体的・官能性を浮き彫りにしているのではないだろうか。第二部第十章の最初の出会いの場面において、リラの香水の匂いが描写されている。

その部屋の中には、おそろしく心地よくて人を酔わせるような匂いが漂っていた。彼（ジョゼフ）はその匂いを吸いこまないようにした。それはリラの匂いだった（一二二頁）。

また、モイラがジョゼフを誘惑するため彼の部屋にやってきた、第二部第二十一章の場面でも、リラの香水の匂いはジョゼフに感じとられている。

突然、彼女のつけている香水の匂いが彼のところまで漂ってきた。ごくかすかなリラの匂いだった。しかしそれはあまりにも微

妙だったので、すぐに宙に消えてしまった。けれども彼はこの匂いに気づき、快樂と、この快樂によってひき起こされるいら立ちとの入りまじった奇妙な感情を覚えた（一六五頁）。

このように、ジョゼフはモイラのからだから発散するリラの香水の匂いを嗅ぎわけている。このリラの香水の匂いは、「おそろしく心地よくて人を酔わせるような匂い」をしているところからわかるように、官能的なよろこびにいぎなうものである。ジョゼフがこの匂いを「吸いこまないようにした」り、この香りに「快樂」をおぼえながらも同時に「いら立ち」の念をいだくのは、肉体的な快樂、もしくは肉なるものになりたいする反撥の力が咄嗟にはたらくからにはほかならない。かくしてリラの香水の匂いはモイラの肉体性・官能性を際立たせているといえるし、モイラは赤い服、赤い唇によってと同じく、リラの香水の匂いを漂わせることによって、ジョゼフを肉なるもののほうにまねいていると論定できる。

第二部第十章の出会いの場面で、ジョゼフがかつての自分の部屋、そして今はモイラのものとなった部屋のなかに、モイラの衣類が乱雑に放り散らかされているのを目撃するところには注意を払うべきだろう。

おずおずと彼「ジョゼフ」は彼女「モイラ」のあとについて部屋にはいったが、洋服や帽子やボール箱が山ほど積まれていた。で、家具を見わけけるのに苦労した。白い絹のブラウスが揺り椅子の上で一種みだらな様子で腕をひろげていた。そしてまだ乱れているベッドのまん中には、肌色の靴下とピンク色をしたネグリジェとが山積み放り出されていた。彼はぞつとして目をそらせた（一一二頁）。

ここでただちに気づくことは、モイラの衣類がかもし出す官能的な雰囲気である。揺り椅子の上に置かれた白い絹のブラウスはまるでジョゼフを肉なるものに迎え入れるかのように、「一種みだらな様子」で「腕をひろげてい」る。ブラウスはそのならべ方のみならずによって官能的な雰囲気を醸成している。とはいえ、このブラウスにもまして重要なのは、乱れたベッドの上に置かれた、肌色の靴

下とピンク色のネグリジェである。これらの下着類は、その *exotic* な色彩のために、そしてまた、それが素肌にじかにふれ、それ自身につける人の肉体を連想させるという理由のために、いっそう官能的な雰囲気をもり上げている。これらの下着もまた、モイラの肉体性・官能性と密接に関係するがゆえに、ジョゼフをモイラのほうに、あるいは肉なるもののほうにいざなっているにちがいない。ジョゼフが「ぞつとして目をそらせ」るのは、これらの下着をとおして肉なるものの誘惑を感じとったからにはかならない。したがって、モイラは肌色の靴下とピンク色のネグリジェを見せることによっても、ジョゼフを肉なるもののほうにまねている。

はじめての対面の場面で、モイラがジョゼフの置き忘れたセーターを手渡すのではなく、床の上に投げつけるという事実もまた看過できない。モイラは床の上に投げたセーターを、片足でジョゼフのほうに押しやりながら、「これ、あたしの靴をふくぼろ屑かと思っただわ」と皮肉り、「何をぐずぐずなさっているの？ それ拾ってお帰りなさい」と言う（一二三頁）。モイラが高飛車な態度をとったことにたいして、ジョゼフは当然はげしい怒りをいだく。「急に彼は心に憤怒を感じながら、その女（モイラ）の前で二つに身を折った。セーターをつかんだ拳がびくびくとふるえていた」（一二三頁）と書かれているように。ここでの手の痙攣がジョゼフの内心の激怒を浮き彫りにしていることは言うまでもない。

モイラの前で屈辱的な姿勢をとったことで生じた怒りは、こののちジョゼフの内心で反芻されることになる。第二部第十四章において、モイラと大通りですれちがったあと大学構内でプレローをみかけた際、ジョゼフは、「ぼくがセーターを取りに行ったとき、それがプレローだったら、彼女（モイラ）だってぼくにきいたような口のきき方をする勇氣はなかっただろう」とし、「それに彼なら決して彼女の前で身をかがめたりはしなかっただろう」と考えているように、モイラの横柄な態度と自分の受けた屈辱を思い出して、「怒りの発作」にかられている（一四〇頁）。また第二部第十一章、チョーサーの講義をきいている最中、モイラの横柄さと自分のふるまいが忘れられず、憤りの感情に揺りうごかされている。

あの小柄な、誇り高くて横柄な女、それがまさしく彼女（モイラ）なのだ。（……）彼はセーターを拾うため、彼女の前で背中を

曲げている自分の姿を思い出した。(…)彼女を殴り、罰したなら、そうだ、彼女の傲慢さを罰したなら、なんという恐ろしい悦びであることだろう。こう考えると血が頭にのぼってくるのだった。(一二五頁)。

ここではジョゼフは、激昂のあまり暴力への欲求にかられている。この暴力への欲求は怒りの感情とともに、肉体的な欲望と結びついているのではないだろうか。ちょうどプレローにたいする怒りと暴力への欲求が愛の欲望の屈折したはけ口であったように。さいごの「血が頭にのぼってくるのだった」という文は、ジョゼフが肉体ないし欲望のエネルギーに支配されたありさまを示していると解釈できる。かくしてジョゼフはモイラにたいして怒りをおぼえ、暴力への欲求にとらえられることで、モイラにどうしようもなく執着し、モイラへの情熱に隷従してしまう。のちに、「怒りに胸をふくらませて、セーターを拾うため彼女の目の前で身をかがめたまさにその瞬間、彼にはすでにもう自分の自由というものがなかった」(Ⅱ・18、一五〇頁)と振り返られるように、モイラに怒りの感情をいだいたことが、モイラとの結びつきを決定的なものにしてしまう。それゆえ、モイラはセーターを床に投げつけることによって、ジョゼフを肉なるもののほうに向かわせている。

では今度は、第二部第二十一章における誘惑の場面を分析することにしよう。すでにふれたように、モイラは学生たちのたくらんだ陰謀に加担し、ジョゼフを誘惑するためジョゼフの部屋に闖入する。二人のやりとりのなかで、ジョゼフの部屋の鍵が重要な役割をはたしていることに気づく。まず部屋にしのび込んだモイラは、ジョゼフがもどってきたのを見とどけてから、ドアに鍵をかけ、「ドレスの胸の切り込み」の中に鍵をすべりこませる(一六二頁)。モイラが鍵を胸の奥にしまいこむのは、もちろん、鍵をジョゼフに渡さないようにするためである。また、部屋を閉めきって部屋から追い出されないようにすること、ジョゼフを部屋にとじこめて二人きりで時をすぎすことを目的としている。「出て行って下さい」と命じるジョゼフにたいして、モイラはこう答えている。

もちろんだめだわ。だってそうでしょう。だいいち、あたしを出て行かせるには、あなたの鍵を、あたしが置いたところから取りかえさなくてはならないのよ(彼女は胸に手をあてた)。あなたにはそんな勇氣はないと思うわよ(一六二頁)。

こうしてモイラはジョゼフの部屋に居すわることになる。ジョゼフはモイラの存在を無視することによって、自発的にモイラを部屋から出て行かそうする。モイラのほうははじめのうちジョゼフに話しかけ、自分に関心を向けようとする。だがまともに相手にされないで、仕方なく友人のセリナあてに手紙を書くことで時間をつぶす。手紙を書きおえたあと、モイラは誘惑することを断念し、部屋を立ち去ろうとする。ところがドアのそばで胸から鍵を取りだそうとしたとき、鍵がすべって床の上に落ちる。モイラは、「さあ、鍵を取ってちょうだい」（一七二頁）と言って、ジョゼフに鍵を拾わせようとする。ジョゼフはモイラの前で身をかがめる。そのときモイラがジョゼフの髪に手をやる。するとこのことが引き金となって、これまでジョゼフの内部で抑えられてきた欲望が堰を切り、氾濫する。ジョゼフはけだもののようにモイラのほうにせまり、モイラと肉のあやまちをおかすに至る。

モイラがジョゼフの部屋にしのびこんでから、二人が性の交わりをむすぶまでの経過をごく簡単にたどってきた。ここから、鍵がジョゼフとモイラの二人を結びつけるはたらきをしていることがわかる。まず、モイラが部屋に鍵をかけたことによって、鍵は、ジョゼフがモイラから離れられないようにしているし、また章の終わりのほうで、モイラが胸から床の上にすべり落とした鍵は、ジョゼフとモイラを最終的に結びつけるきっかけを作っている。なぜなら、ジョゼフの突然の変貌をもたらす直接の原因は、モイラがジョゼフの髪にふれたことにあるとしても、この行為を誘発するのは床の上に落ちた鍵であるからだ。

けれども、第二部第二十一章における鍵の機能はこうした点だけにとどまらない。鍵はモイラの胸の奥にしまいこまれることで、意外な効力を発揮している。何よりもまず、鍵は誘惑の道具となっているのではないだろうか。この点にかんして、モイラは鍵を胸の奥にかくした直後、「肌の上にこの鍵を押しあてているとへんてこな感じがするわね。鍵は燃えているようで、同時に凍てつくようだよ。ちよつとあなたのようなわ」（一六三頁）とジョゼフに言っている。ここでモイラは、ジョゼフが鍵をほしがっていることを前提にしたうえで、鍵が自分の胸の肌じかに接触していることを知らしめ、そして、鍵が燃えるようで冷たい感じを与えることから、鍵をジョゼフになぞらえている。胸に押しあてた鍵をジョゼフに比較することによって、モイラはジョゼフを肉体的に誘惑しているのではないだろうか。また、鍵を胸の中に入れることで、モイラはジョゼフをいや応なく肉体の試練にかけている。というのも、鍵を手に入れ

るためには、モイラの肉体にさわることは避けられず、ドレスの下にかくれたからだの一部分をあらわにすることを余儀なくされるから。鍵を取りもどそうとすることは、欲望に屈服する危険性ははらんでいなのだ。モイラはセリナあての手紙のなかで、「あたしはかなり粗暴な獲物を相手にするというのがわかっていたので、部屋に鍵をかけ、胸の中に鍵をいれたのよ。実際、もしもそんなところをひっかきまわせば、彼はもうおわりだということを知っていたから」(一六七頁)としたためている。この文章から、ジョゼフが胸の中から鍵を取り出すことの意味を、モイラが認識したうえで鍵を胸の奥にしまいこんだことがわかる。とすれば、モイラが鍵をジョゼフになぞらえるところは明らかに誘惑の場面であるといえるし、鍵が誘惑の道具として利用されていることは容易に了解される。

また、鍵はモイラの胸の奥にしまいこまれることで、ジョゼフにモイラのからだを想像させている。ジョゼフはモイラを無視・黙殺することによって、モイラを部屋から出て行かせようと決心する。このときの心の動きは次のように叙述されている。

彫像のようにここでじっとしていよう。彼女「モイラ」がそういう自分を見ることに飽き飽きするまで。そうすれば彼女は出ていくだろう。彼女はあの鍵を、しまった所から、ドレスの胸の切り込みの中、二つの乳房のあいだから取り出すことだろう(一七〇頁)。

このように、モイラが部屋を立ち去るところをジョゼフを思いうかべる部分で、鍵はドレスの胸の切れ込みにあることから、モイラの乳房を連想させている。ここでは鍵はモイラの肉体を想像させるがゆえに、ジョゼフの欲望をつのらせるはたらきをしている。さらに、鍵は章の終わり近くでは、モイラのからだを感じさせるものにもなっている。モイラが鍵を床の上にすべり落とし、ジョゼフがその鍵を拾うことはすでに述べたけれども、このとき、「彼は彼女のまえに身をかがめた。そして手で鍵をつかんだ。鍵はまだ彼には大変あたたいように思えた」(一七二頁)と語られているように、鍵はモイラの肌のぬくもりをつたえている。鍵はモイラのからだを感じさせることでもジョゼフをモイラのほうにみちびいている。鍵はジョゼフとモイラを二人きりにし、二人を最終的に結びつけるきっかけをつくるばかりではなく、誘惑の道具として役立ち、また、モイラの肉体を想像させ、あるいは感じさせるものともなっている。

鍵は第二部第二十一章において、様々な点からジョゼフをモイラに結びつける役割をはたしている。ここから、モイラはジョゼフの髪にさわることによってと同様、鍵を胸の中にしまいこむこともまた、ジョゼフを肉なるもののほうに誘導していると論断しうる。

ここまでは、第二部第十章の出会いの場面と第二部第二十一章の誘惑の場面とを取りあげて、モイラがジョゼフを肉なるもののほうにいざなうありさまを概観した。そしてモイラが赤い服と赤い唇、リラの香水の匂いによって、下着を見せることによって、また、ジョゼフのセーターを床の上に投げすてることによって、ジョゼフを肉なるもののほうにみちびいていること、決定的な局面では、鍵を胸の奥にしまいこみ、ジョゼフの髪にふれることで、ジョゼフを肉なるもののほうにまねいていることを指摘した。さいごにモイラとジョゼフの犯罪との関連性を考察しておきたい。モイラはセリナあての手紙のなかで、「あはれは楽しむための機械であることはもう決^たんだわ。(…)あたしのほうこそ、恋をしているのよ」(Ⅱ・21、一六九頁)と書いているように、ジョゼフと性の交わりをむすぶ直前、過去のふしだらなおこないを反省するとともに、ジョゼフへの愛を自覚するに至っている。また、「彼女(モイラ)は彼(ジョゼフ)が認めなかったような品位をそなえていた」(Ⅱ・21、一六二頁)という描写からうかがえるごとく、モイラは肉体だけでなく、魂をもちあわせた一人の若い娘である。⁽²³⁾しかしジョゼフの目には、モイラは肉ないし肉欲の化身としてしかうつらない。だからこそジョゼフはモイラを殺害するのである。なぜなら肉あるいは肉欲は、純粹志向を有するジョゼフにとって、悪なのだから。モイラはもっぱら自己の肉体的側面をジョゼフに意識させたがゆえに、ジョゼフの犯罪を招来したといえるかもしれない。つまりモイラは自己の肉体的・官能性を故意に際立たせることによって、ジョゼフを肉なるものと同時に犯罪のほうにもみちびいていると解することができる。

六 まとめ

以上、ジョゼフを取りまく人物たちがジョゼフにいかなる影響をおよぼしているか考察してきた。ここで、おのおのの人物が果たす役割をもう一度要約しておこう。プレローは挑戦と決闘とによって《Violence》をめざめさせたという点で、ジョゼフを肉なるものと同時に犯罪のほうに向かわせている。サイモンはギリシアの神々の彫像に注意をうながし白い木蓮の花をおくることによって、およびその死によって、ジョゼフを肉体的なものほうにまねいている。デーヴィドは世界観・宗教観の差異によって、また無能な *coites* *se* であるために、ジョゼフを肉なるものほうへ押しやり、さらにシェークスピアの書物を贈り、シャベルの置いてある黒い板小屋を見せることでジョゼフの犯罪すらもひき起こしている。デア夫人はその厚化粧ゆえにジョゼフを肉体的なものほうに惹きつけ、シガレットケースへの言及によってモイラのほうにいざなっている。マック・アリストアはその挑発的な姿勢と『ポリス・ガゼット』の雑誌を見せることによって、ジョゼフを肉なるものほうにひき寄せている。キリグルーは肉体的の問題やモイラのことについて話し、『ロメオとジュリエット』の曖昧な箇所の意味を伝え、あるいはジョゼフの手に触れることで、ジョゼフを肉なるものほうに誘引している。デア夫人の下宿に集合する学生たちは卑猥な会話をかわし、陰謀をくわだてることで、ジョゼフを肉なるものほうにおおりに立て、また陰謀によってジョゼフとモイラとのつながりを断ちがたいものにしていく。ジェマイマはモイラのこと、とくにベッドにかんする彼女の習慣のことを教えることで、ジョゼフをモイラのほうにかり立てるとともに、肉なるものほうに追いやっていく。フアーガスン夫人の下宿の女中は追加の毛布の供給によって、ジョゼフを犯罪にみちびいている。そしてモイラは赤い服と赤い唇によって、リラの香水の匂いをただよわせ、肌色の靴下とピンク色のネグリジェを見せ、またジョゼフのセーターを床の上に投げることによって、さらに決定的な局面では、鍵を胸の中にかくし、ジョゼフの髪にふれることによって、ジョゼフを肉なるものほうにまねいて

いる。あわせてモイラは自らの肉体性・官能性をことさらひき立たせたがゆえに、ジョゼフの犯罪を招来している。このようにジョゼフを取りまく人物たちは多かれ少なかれジョゼフの生の歩みに影響をおよぼし、その悲劇的な結末にむかってジョゼフを誘導している。同じことは、ジョゼフの周囲に存在する様々な事物についてもいえるのではないだろうか。ファーガスン夫人の下宿の女中が持ってきた追加の毛布や、『オセロ』が収録されたシェークスピアの本、それにファーガスン夫人の家の庭の黒い板小屋に置いてあるシャベルは明らかに、ジョゼフを犯罪のほうにみちびいている。また、デア夫人が言及したシガレットケース、ジョゼフがデア夫人のところへ下宿しているときの部屋の中のベッド、⁽²⁴⁾ジョゼフがデア夫人の下宿の部屋に置き忘れてきたセーター⁽²⁵⁾は、ジョゼフをモイラに結びつけるはたらきをしているし、モイラの煽情的な赤い服、ジョゼフがモイラのベッドの上にかいま見た肌色の靴下とピンクのネグリジェ、そして第二部第二十一章でモイラが誘惑の道具として用いる、ジョゼフの部屋の鍵は、肉ないし肉欲の化身としてのモイラのほうにジョゼフをいざなっている。さらに作品第一部では、様々な事物がジョゼフを肉体的なもの⁽²⁶⁾のほうに向かわせている。すなわち、大学構内の建物の玄関前を歩いている際、サイモンがジョゼフに注意をうながしたギリシアの神々の彫像、ジョゼフが自室と洋服屋で自分の顔がうつっているのをみた鏡（I・9、四〇頁およびI・11、五七頁）、サイモンがジョゼフにおくった白い木蓮の花、意味不明の箇所が卑猥なことを暗示しているのを聞き知ってジョゼフがひき裂いた『ロメオとジュリエット』の本、および、マック・アリスタットの読む『ポリス・ガゼット』の雑誌がそれである。これらのものがジョゼフを肉なるもの⁽²⁷⁾のほうにいざなっていることはすでに見た。また、第一部第四章の「大学の地図」（一九頁）も同様の機能をはたしているのではないだろうか。この地図をたよりに、ジョゼフはプレローの住まいにおもむき、プレローと決闘し、『Violence』を発現させるに至る。とすれば、この大学の地図はプレローへの暴力をひき出したという意味で、ジョゼフを肉なるもの⁽²⁸⁾のほうへみちびいていると解される。同じように、第一部第五章の林間の空地に落ちた太い木の枝も、大かえでの樹の幹をたたきまくるといふ行為をひき起こしているがゆえに、言いかえれば、『Violence』を顕在化させているがゆえに、ジョゼフを肉なるもの⁽²⁹⁾のほうに誘導している。さらにまた、ジョゼフがマック・アリスタットに暴力をふるう際に用いる、腰にしまった黒いベルトも、同じはたらきをしているとみなされる。このように、ジョゼフの周囲に存在する様々な事物は、彼

を取りまく人物たちがそうであるように、ジョゼフを肉なるもののほうに、あるいはモイラのほうに、あるいは犯罪のほうにみちびいている。それゆえ、ジョゼフの運命は、外部のあらがいがたい力として、ジョゼフを取りまく人物たちと、ジョゼフの周囲に存在する様々な事物とによってかたち作られている。この点にこそ、『モイラ』が提示するへ宿命への世界の構造を、同じことであるが、作品を支配する宿命性の具体的なあらわれを見ることができるといえる。

- (1) 『亡霊』、『日記』第五卷、一九四九年十一月十七日、IV、一一二〇・一一二一頁。
- (2) ジョゼフはプレローに、「自分とサイモンが親しくないこと、二人のあいだには、サイモンのひそひそ話がそう思わせうるような秘密はまったくないこと、二人はほとんど知り合いでさえないこと」をわからせたい欲求をいだいている(一一頁)。
- (3) 頁数の前のローマ数字とアラビア数字とによって、第何部第何章かを示す。なお、『モイラ』はプレイアード版「全集」第三卷に収録されている。
- (4) プレローはデア夫人の家の食堂で、ジョゼフを見かけたときから、夫人のところにはやってこなくなる。第一部第五章で言っているように、プレローはジョゼフのせいでデア夫人のところでは食事をすることをやめる。この理由については、第三章で考察する。
- (5) サイモンは、部屋でジョゼフがプレローへの怒りにかられてあやうく机をひっくりかえしそうになり、書物を落として物音を立てたのを聞きつけてやってきたのである。
- (6) この地図のことにかんしては、この章の結論部分でふれる。
- (7) 怒りと欲望との結びつきについては、「怒りのなかには快楽がひそんでいる」(『開かれた千の道』、V、九九五頁)という自伝の中の一文からもうかがえる。また『悪人』においては、「ぼくの心のなかでは怒りが煮えたぎり、それとともに、怒りに似てはいるが異なった感情が沸き立っていた。ぼくはその感情をはじめ強烈に味わった。すなわち欲望のことである」(III、三〇七頁)という文章も見いだせる。さらに『レヴィアタン』のなかで、主人公ゲレは自分の執着するアンジェールの顔を、自分の愛の情熱が報われないものと誤解し、はげしい怒りかられて木の枝でたたきまくっている。ゲレの怒りとサディズム的行為はまぎれもなく抑圧された欲望の屈折したあらわれと理解できる。このようにグリーンにおいて、怒りは肉体的欲望と結びついて、肉のよろこびを汲みとる手段となりうる。この点にかんして、ジャン・クロード・ジョ

フは次のように書いている：「グリーンにおける怒りは（…）いつも純粋な状態にとどまっているわけではなく、しばしばエロティシズムが混ざっている」（Jean-Claude Joye : *Julien Green et le monde de la fatalité*, Arnaud Druck, Bern, 1964, p. 117.）

(8) グリーンは、「池のほとりでの戦いは実際、ラヴィンである」と述べている（『内なる鏡』、『日記』第六巻、一九五〇年九月二十三日、IV、一一七六頁）。

(9) 『亡霊』、『日記』第五巻、一九五〇年三月二十四日、IV、一一四二頁。

(10) サイモンの死を知ったあとのジョゼフの変貌について、作者グリーンは『日記』の中で次のように述べている：「サイモンの死を知ったジョゼフははげしい肉体的欲求にとらえられる。彼はこの欲求について何もわかっていない。（…）死の観念が彼を肉欲のなかに投げ入れるのだ」

（『亡霊』、『日記』第五巻、一九四九年七月二十日、IV、一〇九二頁）。

(11) 同右、一九五〇年三月二十四日、IV、一一四二頁。

(12) ジャック・ブチはプレローを「黒い天使」(l'ange noir)とみなすのにたいし、デーヴィドを「救う人」(le sauveur)と規定している (Jacques Petit :

Julien Green, « l'homme qui venait d'ailleurs », Desclée de Brouwer, 1969, p. 227)。

(13) ジョゼフが書物をやぶく理由については後述する。

(14) 女中ジェマイマが部屋から出ていったあと、ジョゼフは、「自分がここに着いた日に見たあのシガレットケースは、彼女「モイラ」のものであったのだ」と考えている (II・2、九七頁)。

(15) 遠藤周作「情慾の深淵」(『カトリック作家の問題・宗教と文学』所収)、「遠藤周作文学全集」第十巻、新潮社、一九七五、六四頁。

(16) すでにふれたように、サイモンはジョゼフにたいして同性愛の感情をいだいている。

(17) ジョゼフの恋愛感情について大ざっぱにいえば、作品第一部においては、プレローがジョゼフの意識を支配し、第二部では、モイラがジョゼフの思いを占める。

(18) キリグルーは、第二部第一章、ジョゼフの隣室に集まった学生たちの会話のなかで、ジョゼフのことを話題にし、「彼だって肉と血でできている、ぼくらと同じようにね。ただ彼はおくてなんだ、それだけのことだよ」とも言っている (九二頁)。

(19) この点にかんしては、次節(五 モイラ)のさいごでふれる。

(20) 『モイラ』第二部が、学生たちのみだらな話によってはじまるのは興味深い。第一部第十六章から第二部第一章までは同じ日の出来事をあつかっているのに、ジョゼフが目をさまして学生たちの話をきくところだけ、第二部の冒頭に置かれているのである。このことは、第二部においてジョゼフが人間の肉体的現実と直面しながら、いつそう肉なるものに魅せられて生きることを暗示していると思われる。

(21) この習慣は第一部第一章においてすでにほめかされている。デア夫人の下宿に着いて自分の部屋に案内されたジョゼフは、ベッドの位置に注目している。「銅製のベッドは奇妙な具合に斜めに置かれて、ドアが全開することをさまざまに注目している」(五頁)。

(22) ジョゼフは第二部第二十一章の誘惑の場面でも、モイラの赤い唇に注目している。「(…)彼はあまりにも赤い唇を認め、こっそりとながめた」(一六二頁)。

(23) また、第二部第二十一章には、「彼女(モイラ)のからだ全体にひそむ何かしらきゃしゃな感じは小鳥の姿を喚び起こしていた」(一六四・五頁)という描写があるが、ここから浮かび上がってくるのは、肉あるいは肉欲の化身ではなく、保護されるべきひ弱な存在のイメージである。

(24) このベッドはすでに述べたように、かつてモイラによって斜めに置かれていたことで、モイラの代替物となり、ジョゼフの肉体的欲望をひきおこしているからである。

(25) 言うまでもなく、このセーターは、ジョゼフがモイラに出会うきっかけをつくっているからである。第二部第十章、ジョゼフがデア夫人の下宿に行つてモイラをはじめに見る直前、ジョゼフはデーヴィドに、もとい下宿にセーターを忘れてきたことをむきになって主張している(一一二〇頁)。この時点でジョゼフはデア夫人から聞かされてモイラの帰郷を知っており、したがってジョゼフの興奮はモイラと会いたいという下心をかいま見せている。つまりこのセーターはモイラと会うための口実をジョゼフに与えているのである。また、このセーターをモイラが床に投げすてたことで、ジョゼフのうちに怒りⅡ欲望が生じたことはすでに指摘した。

(26) この鏡については、サイモンの役割を検討したところ(第二節)で、言及した。

第二章 ジョゼフの内なるドラマ

前章において、ジョゼフを取りまく人物たちの役割をしらべ、ジョゼフの運命が、ジョゼフのまわりに存在する人物たちと様々な事物とによって形成されていることを明らかにし、この点に、小説『モイラ』が提示する「宿命」の世界の成り立ちを、あるいは、作品を支配する宿命性の具体的なあらわれを見た。

しかしながら、ジョゼフの運命は、単にジョゼフの「外側」からの観察のみによって説明しきれるものではない。ジョゼフの人生の悲劇性が、ジョゼフの周囲の人物たちと事物とによってもたらされているとしても、同時に、ジョゼフの純粹志向や《violence》とも密接に関連していることは、火を見るよりも明らかであり、彼の生の軌跡はいわば内的な必然性(necessity)を帯びているようにも思われる。ここから、ジョゼフの「内側」に焦点をあわせて作品をふたたび読解することが、どうしても必要な課題となってくる。

この第二章においては、ジョゼフの生の歩みの宿命性を、ジョゼフの内面のドラマを解析するかたちで、とくにジョゼフの《violent》の分析を中心にすえ、《violence》と信仰との関係を考察しつつ検証していきたい。そしてジョゼフの内なるドラマに光をあてることで、『モイラ』のいっそう精密な読解を目指し、あわせて、ジョゼフの犯罪ののちの行動や彼の宗教的な救いを問題にすることによって、作品をより全体的・総合的に把握したいと思う。

この目的のために、第一節で、ジョゼフの宗教性・神への志向を浮き彫りにしたい。まずジョゼフの純粹志向を指摘し、次に、ジョゼフの宗教の特徴を考え、さいごに彼の伝道熱を吟味する。この作業によって、ジョゼフの信仰のはげしさが浮かび上がってくるだろう。第二節では、ジョゼフにおける肉なるものへの志向を検討する。プレローとの決闘、マック・アリストターへの暴力、モイラのベッドに身を投げる場面、肉体の交わりと殺害行為といったような、肉体的高揚が最高潮に達する箇所に照準をあわせて作品を分析する。

そうすることによって、ジョゼフの情熱・欲望のはげしさ、つまり《violence》を観察したい。第三節において、ジョゼフの信仰と欲望あるいは《violence》との関連をいよいよ考究する。そのことのために、まず、作中にあらわれた「火」（または「光」）のイメージ、くわえて「燃える」という隠喩を抽出し、次いで、violenceという語が用いられているところを引きあいに出す。ここから、ジョゼフのうち二つのviolence、すなわち、信仰のはげしさと情熱・欲望のはげしさが存在していて、この二つのviolenceが敵対し、せめぎあっているという仮説が提出されるだろう。けれども、ジョゼフの内部の、肉体的高揚と宗教的高揚とのあいだの揺れ動き、言いかえれば、前者から後者への、もしくは後者から前者への瞬間的移行を示す箇所を検討し、さらに、肉体的高揚と宗教的高揚との混濁をあらわす部分を取りあげると、この仮説の正当性はくずれぬだろう。そこで、ジョゼフの《violence》がいちじるしく顕在化する場面、すなわち、マック・アリストターへの暴力、プレローとの決闘、モイラ殺害の場面を再度分析し、《violence》の意味を論考することにした。この分析から、《violence》とは単に情熱・欲望のはげしさを指し示すだけでなく、肉なるものまたは欲望とたたかうはげしさ、そしてまた、欲望の対象を殺したいという欲求のはげしさを意味することが明らかになるだろう。ジョゼフの《violence》の論究のあと、犯罪後のジョゼフの行動をたどり、また、ジョゼフの救いの問題について考察したい。さうして《violence》と信仰との関係をまとめたい。結論を先取りしていえば、ジョゼフが《violence》をうちにかかえることで、自らの悲劇的な結末を内側から必然的、宿命的にまねていることはほんとうであるとしても、ジョゼフの《violence》は彼の熱狂的(fanatique)な信仰をささげる基盤にもなっているのではないだろうか。そしてもしジョゼフが救われることがあるとすれば、彼の救いは《violence》を生き抜くことによつてしかあり得なかつたのではないだろうか。

一 神への志向

(1) 純粹志向

ジョゼフの内面の、信仰にかかわる部分を検討することからはじめよう。『モイラ』の読者を最初に瞠目させるのは、ジョゼフの純粹志向である。ジョゼフの純粹志向は、彼の強烈な肉体嫌悪・肉体敵視の姿勢から見てとることができる。ジョゼフは己れの純粹さを希求する一環として、肉体と魂とを可能なかぎり切り離し、肉体にまつわることがらを罪悪視し、これを徹底的に忌避・排斥する。この姿勢は、第一部第七章の「彫像」の挿話をとおしてうかがうことができる。大学構内の或る建物の正面をかざるギリシアの神々の彫像を、サイモンが賛美し、その彫像にジョゼフの注意をうながしたとき、ジョゼフは、「美しいだつて？（…）真っ裸じゃないか」（三九頁）と言って、彫像に目を向けることを断固として拒否する。あるいは、第一部第十二章において、『ロメオとジュリエット』のなかの意味不明な箇所が卑猥なことを暗示していることをキリグルーから教えられて、ジョゼフが本をひき裂く場面（七〇頁）、また、第二部第一章で、隣室の学生たちが性にかんするみだらな会話に興じているとき、ジョゼフが皆をだまらせるために椅子をドアにむかつて投げつけるところ（九二頁）は、ジョゼフの肉体敵視の姿勢をまざまざと見せつけている。さらに次の記述は、ジョゼフの肉体敵視をもっとも鮮明に示している。

子どものころから、彼（ジョゼフ）は暗闇の中で服を脱ぎ、いつも自分のからだに目をやらないようになってきた。（…）昔、父親は自分に教えたものだ、肉体は地獄に人をみちびき、魂は天国に連れていくと。そのとおりだ、肉体はキリスト教徒の敵なのだ。（Ⅱ・6、一〇六頁）。

ジョゼフの肉体忌避ないし肉体敵視は、自分のからだにさえ目を向けまいとする習慣によって明白である。そしてここでくれぐれも確認すべきことは、「肉体はキリスト教徒の敵なのだ」と考えられているように、肉体にたいするこうした態度がジョゼフにおいて宗教と密接に関係しているという点である。

肉体敵視あるいは純粹志向は恋愛観からもうかがうことができる。第一部第十三章、指導教官のタック先生との会話のなかで、「君の年頃では、人生の大事といえ、それは恋愛ですよ」と言うタック先生にたいして、ジョゼフは、「タック先生、ほくにとって人生の大事は宗教なんです」と反駁している（七四頁）。ここから察知できるように、ジョゼフにとって、恋愛は宗教と相容れないもの、両立しがたいものとしてある。ジョゼフは『ロメオとジュリエット』を読んでいるとき、次のような感想をいだいている。

この二つのイタリアの家族の争いが、彼にどんな意味があるのだろうか。それに女にたいする、否、十四歳の娘にたいする、男のこうした情熱が？ 彼に関心のあるものは魂の救いだ。そしてこの人たちがかつて実在したのだとすれば、その人たちの魂はどこにあるのだろうか。間違ひなく、二人の魂は燃えているのだ。彼がこの静かな図書館の中で二人の物語を読んでいるまさにその瞬間に、二人の恋人たちはただ欲望の満足しか考えなかつたために、裁きの炎によって永遠に焼かれながら、けだもののように唸り声をあげているのだ（I・8、三九・四〇頁）。

ここではジョゼフは、『ロメオとジュリエット』に描かれた恋愛を、宗教的な次元から断罪している。ジョゼフには、恋の情熱は肉なるものの領域に属し、「魂の救い」に對立するものにしか思われぬ。このことは、さいこの文にあるように、二人の恋人たちが「けだもの」に擬せられていることからわかるし、また、二つの箇所へ火へにかんする語が用いられているという点からも了解される。すなわち、「二人の魂は燃えているのだ」(elles brûlaient)という文のなかの「燃える」(brûlent)という動詞と、「裁きの炎によって永遠に焼かれながら」(Sous l'éternelle morsure de la flamme justicière)という表現における「裁きの炎」という語である。二人の恋人たち

の魂を燃やすものが愛の情熱であることは論を俟たない。そして愛の情熱は、罰として「裁きの炎」をまねいているというより、地獄の火であるところの「裁きの炎」それじたいとして認識されている。このようにジョゼフは、肉なるものを敵視する姿勢を有するがゆえに、恋愛を宗教的な滅びにつながるものとしてみなしている。

恋愛と同様、ジョゼフは結婚をも信仰とのかかわりで罪悪視している。ジョゼフの結婚観は第二部第十二章におけるデーヴィドとの対話をおして明るみに出される。牧師志望の友人デーヴィドがうれしげに、そして誇らしげに婚約者の写真を見せながら、婚約していることをジョゼフに打ち明けたとき、ジョゼフは、「結婚は危険な誘惑だよ」（一三〇頁）と言いきり、「肉や肉のよろこびやそれ」「結婚」が必然的に予想させるありとあらゆる不純なもの（一三〇頁）のためにデーヴィドの結婚に反対する。そして「君がその女性を抱きしめたとき、君は神さまのことを考えるだろうか？」（一三〇頁）とデーヴィドに問いかける。ジョゼフは結婚のなかに、純粋さをおびやかすもの、つまり肉体のいとなみしか見ない。それゆえ結婚は、神あるいは信仰からひき離す「危険な誘惑」になる。もともと、正統のキリスト教においては、結婚後の性行為は生殖という目的のために正当化されるし、祝福されうるものである。だがジョゼフは、結婚が肉体の交わりを合法化するというまさしくそのことのために、結婚を断罪する。このようにジョゼフは肉なるものへの反撥から、恋愛とともに結婚をもまた罪と結びつけ、敵視する。

ジョゼフの純粹志向と関連して、彼の性本能の嫌悪にも注意を払う必要がある。第一部第十八章、ジョゼフはデーヴィドとの会話のなかで、いかがわしい場所・淫売屋にかような学生たちをばげしく非難する。これにたいしてデーヴィドは、「われわれの年頃では、本能はほとんどさからいがたいものなんだ、……性の本能はね」（八六頁）と述べて、学生たちをかばい、ジョゼフの怒りをなだめようとする。しかしジョゼフは、「ぼくは性の本能を憎むんだ⁽¹⁾。（……）この盲目の力は悪なんだ」（八七頁）と断言する。デーヴィドは、「かならずしもそうじゃないよ」（八七頁）と言って、生殖行為における性本能のはたらきを評価し、容認する。ところがジョゼフは、「いや、いつもそうだよ。ぼくらは錯乱の発作の中ではらまれるんだ⁽²⁾」（八七頁）と反論する。ジョゼフは受胎の瞬間を、性本能の盲目的な力がひきおこす「錯乱の発作」と規定している。この規定から、ジョゼフが性本能を完全に否定し、生殖行為すら認めていないことがわかる。人間とは、悪そのものである性本能の力によって産み出されるがゆえに、悪もしくは罪の結晶にはかならない。ジョゼ

フにおいて、性本能への嫌悪は、罪の子としての人間認識をもたらすほどまでに徹底化されている。

ジョゼフの肉体敵視、恋愛観と結婚観、および性本能の嫌悪を指摘してきた。これらのものをおして、ジョゼフの純粹志向がうかがえる。この純粹志向がジョゼフの宗教とわがちがたくからまり、ジョゼフの信仰を支えているのである。

(2) ジョゼフの宗教の特徴

ここで、ジョゼフの宗教の特徴を考えてみることにしよう。ジョゼフの宗教は二元論的な世界観によって成り立っている。ジョゼフの二元論的発想は、彼の靈肉分離の傾向もしくは純粹志向によってうかがえるが、端的には、次の引用文からはっきりとたしかめることができる。新しい服の購入に際してデーヴィドがたてかえてくれた金をデーヴィドに返済するため、簡易食堂ではたらいっているとき、ジョゼフはイエス・キリストの名がけがされるのを耳にする。そこでジョゼフは考える。

唯一の現実とは、それは、たとえ冒流の言葉をはく場合でも、神の許しを得ることによってしか口にしてはならないその名「キリストの名」なのだ。もうひとつの現実、すなわち肉の現実、欲望の現実は、ある時刻にはどれだけ残酷なものであろうとも、今の瞬間には偽りのものであるように思われた。二つの国がある。神の国と地上の国と。そしてこの二つの国は人のところからたがいな他方を追い出そうとしているのだ(Ⅱ・19、一五五頁)。

この文章で、「二つの国がある。神の国と地上の国と」という認識が示すように、ジョゼフの二元論的な考え方は歴然としている。この「神の国」はイエス・キリストの現実と言いかえられるし、「地上の国」は「肉の現実、欲望の現実」に対応し、サタンが支配する国とみなしうる。ジョゼフにおいて、この二つの国、二つの現実はたがいに相容れず、敵対しあっている。ジョゼフは「神の国」、イエス・キリストのうちにとどまろうとする。したがって、ジョゼフは「肉の現実、欲望の現実」であるところの「地上の国」から、

できるかぎり遠去からなければならぬし、「地上の国」が近づいたときは、徹底的にこれを排斥しなければならぬのである。ここから、世界嫌悪までは一步である。ジョゼフの世界嫌悪は、デーヴィドとの次の対話からたやすく読みとることができる。

—「ねえ、ジョゼフ、この世は不純なものなんだ、このことは甘んじて受け入れなければならないんだよ。」

—「いやだ、とジョゼフは立ち上がって言った、この世の不純さを甘んじて受け入れるなんてことは、福音書を否定することじゃないか。」

—「(…)でも君がこの世に生きているのは、神さまが君をこの世に置かれたからだよ。」

(…)

—「ぼくはこの世を憎むんだ、わかるかい？ キリストも、自分が祈るのはこの世のためではない、と言われたよ。この世は神から見棄てられているんだ(Ⅰ・14、七五頁)。」

ジョゼフの世界嫌悪は、「ぼくはこの世を憎むんだ」(Je hais le monde.)という言葉から明瞭である。このように三元論的世界観は、その必然的帰結として世界嫌悪をもたらしている。

また、右に引用した対話において、ジョゼフの宗教の非妥協性が、デーヴィドの宗教の寛容さとの対比のもとでひき立っている。すなわち、「この世は不純なものなんだ、そのことは甘んじて受け入れなければならないんだよ」という、はじめのデーヴィドの意見からは、この世と妥協し、人びとと寛容さをもって接しようとする態度がうかがえる。これにたいして、ジョゼフは、「この世の不純さを甘んじて受け入れるなんてことは、福音書を否定することじゃないか」と明言し、「この世は神から見棄てられているんだ」と断定している。ここからわかるように、ジョゼフは、神に見はなされたこの世と妥協せず、あくまでたたかう姿勢をつらぬいている。ジョゼフとデーヴィドとの宗教の違いは、右の対話をかわしたあと、ジョゼフがいだいた次のような考えから

いつそうくつきりと浮かび上がってくる。

それにしてもいったいどうして、デーヴィドはいつも自分をいらさせなければならぬのだろうか。へ原始状態の宗教でなければ、と彼「ジョゼフ」は思った、へあの男「デーヴィド」が望んでいるのは、飼いなされた宗教だ、法衣の白い胸飾りとよく手入れのした瓜とを持った宗教なんだ（I・15、七七頁）。

ジョゼフの脳裡では、自分の目指す宗教が「原始状態の宗教」(religion à l'état sauvage)であるのにたいし、デーヴィドの宗教は「飼いなされた宗教」(religion apprivoisée)であると位置づけられている。「飼いなされた」という形容詞の中には、世間にすっかり順応してしまったという意味あいがかめられているだろう。さらに「法衣の白い胸飾り」という語句は、習慣もしくは画一化した儀式のなかで、人びとを安易にまねき入れようとする妥協的な宗教の在り方を暗示しているように思われる。「よく手入れした瓜」という言い方もまた、相手を傷つけまいとする寛容な宗教、つまり戦闘性をうしなった宗教の在り方を示唆しているとうけとれる。

一方、ジョゼフの目指す「原始状態の宗教」という表現からは、人びと・世間とまったく妥協せず、習慣にいささかも順応せず、世の悪と徹底的にたたかい、宗教の始源の状態を厳格に保持していこうとする戦闘的な姿勢が読みとれる。また、「原始状態」(l'état sauvage)の *savage* という語は、「原始の」という語義のほかには、「野生的な」「粗野な」などといった意味をも有しており、このことを考えあわせると、ジョゼフの宗教の非妥協性もしくは戦闘性がいつそうあざやかになる。さらに、作中、ジョゼフは学生たちから「皆殺しの天使 (l'Ange exterminateur)」(I・15、七七頁および II・21、一六八頁)と渾名されている。この渾名はジョゼフの非妥協性・戦闘性に起因しているだろう。したがって、この渾名もジョゼフの宗教の特徴を際立たせている。

このままで、ジョゼフの二元論的思考、世界嫌悪、非妥協性・戦闘性をしらべてきた。このあと指摘する選民意識と相俟って、ジョゼフの宗教は結局、これら三つのものによって形成されている。

(3) 伝道熱

ところで、ジョゼフの宗教性、神への志向は、その伝道熱によっても見さだめることができる。ジョゼフは、人びとをキリスト教に回心させたいという願いにしきりにかられている。こうした願いは、すでに検証した二元論的な世界観から派生した選民意識によってささえられていると考えられる。すなわち、「神の国」にいる自分は救われ、選ばれているのにたいして、「地上の国」にとどまり、「肉の現実、欲望の現実」に支配された人びとは救われていない、地獄におちているという認識がジョゼフの中にはあつて、この認識が伝道熱をもたらしていると思われる。ではジョゼフの伝道熱を少し具体的に見ていくことにしよう。

ジョゼフの伝道熱は作品の冒頭からうかがえる。「モイラ」は、ジョゼフがデア夫人の下宿に到着したところからはじまるのであるが、ジョゼフは、自分を迎え入れたデア夫人の厚化粧に反感を覚えている。

あの化粧した顔は彼(ジョゼフ)にはぞっとするもののように思われた。自分の故郷では、有徳な青年は化粧した女には話しかけないものだ。それにあの女(デア夫人)はイゼベルのように化粧している(Ⅰ・2、七頁)。

ここで言われているイゼベルは、「ヨハネの黙示録」第二章第二十節以下に出てくる人物であるとみなされる。⁽³⁾「黙示録」では、このイゼベルについて、「この女は(…)わたし(ヨハネ)の僕たちを教え、惑わして、不品行をさせ(…)ている。わたしは、この女に悔い改めるおりを与えたが、悔い改めて不品行をやめようとしな⁽⁴⁾い」と語られている。つまり「黙示録」におけるイゼベルは人びとを惑わし、不品行にふける女性である。ジョゼフがデア夫人をこのイゼベルになぞらえるのは、デア夫人の厚化粧した顔が、ジョゼフに夫人の肉体的性感じさせ、肉なるもののほうにいざなっているように見えたからだと思われる。そこでジョゼフは、「おそらくあの女は、ぼくが救ってやるために、ぼくの行く手にあらわれたのだらう」(Ⅰ・2、七頁)と考えているように、イゼベルを悔い改めさせようとした「黙示録」のヨハネと同じく、デア夫人を救ってやりたいと願うのである。

ジョゼフの伝道熱は、第一部第十四章のデーヴィドとの会話からもうかがうことができる。牧師をころざすデーヴィドが、「人びとの魂というものは、やさしきによって、忍耐によって獲得しなければならないんだ。なんらかの仕方です誘惑しなければならないんだ」（七五頁）と言って、人びとを宗教にまねき入れるための方法を披瀝したとき、ジョゼフはデーヴィドの生ぬるいやり方に反撥し、憤慨する。デーヴィドはジョゼフの怒りをなだめようとし、そして、「神さまがぼくらの手に渡したありとあらゆる武器を用いて、悪魔とたたかわなければならぬだよ」（七五頁）と言葉をつづける。ここでの「悪魔」とは人びとの中にやどり、人びとを神から遠ざけているものごとであり、「武器」とは、先にデーヴィドが言った「やさしさ」とか「忍耐」とかを指し示すだろう。これにたいして、ジョゼフは、「鞭を使ってだよ、神殿におけるイエスのように」（七五頁）と反論している。つまりジョゼフは、人びとを回心させるための武器は「鞭」だときめつけ、また、「鞭」を用いての布教活動を「神殿におけるイエス」のふるまいに重ねあわせて考えている。「神殿におけるイエス」の行動は、「ヨハネによる福音書」第二章第十五節で語られている。周知のように、イスラエルの民の過越の祭が近づいたとき、人々が参詣すべきエルサレムの神殿で商人たちがあきないのを見て、イエスは鞭を使って商人たちを追い払った。この事実を踏まえて、ジョゼフは、肉に支配され、悪魔にとりつかれた人びとを悔い改めさせるための武器を「鞭」にもとめるのである。この箇所は、すでに指摘した、ジョゼフの宗教の非妥協性・戦闘性をかいま見せているけれども、同時に、デーヴィドの発言に刺激されて沸きあがった、ジョゼフの伝道熱を識別させるところでもあるといえよう。

ジョゼフの伝道熱は、第二部第二章、第十四章でも見られるのであるが、第二部第二十章において絶頂に達することになる。ジョゼフの二元論的思考を検討した際に述べたように、ジョゼフは簡易食堂ではたらいっているとき、イエス・キリストの名がけがされるのを耳にする。このことがきっかけとなって、ジョゼフは人びとを悔い改めさせ、救いたいという欲求にかられる。ジョゼフは考えている。

椅子の上にあがって、人びとに地獄や、彼らの魂や、罪の話をすること、何もかも消し去ることのない炎から彼らを救い出すこと、自分の天職とはこれなのだ（一五七頁）。

ジョゼフの伝道熱は、彼が椅子の上から人びとに説教するさまを思いえがき、「炎」(Flames)から人びとを救い出す使命を感じているところから読みとることができる。この「炎」は人びとを地獄につきおとしていく欲望ないし情熱を象徴していると考えられよう。このあとジョゼフは、自分が神に選ばれたことを確信し、故郷のまちで不意に靈感に打たれ、「神のメッセージ」(一五九頁)を伝えたい人になら^①って、自分もまた人びとの群れの前に立って伝道したいという望みをデーヴィドに熱っぽく打ち明ける。

ここでもまた(…)、教知れない魂が永劫の火に焼かれる危険にあるのだ。神さまは、誰かが彼らに知らせることを願われているのだ。必要なら、このぼくが彼らに話しかけよう。椅子の上にあがって、地獄のことを話してやるのだ(Ⅱ・20、一五九頁)。

ここで述べられている「永劫の火」(Eternal fire)は、先に引用した文に見られる「炎」と同様に、地獄の火であり、人びとの内なる情熱もしくは欲望によってもたらされるものであろう。ここでもまた、ジョゼフはこの「火」から人びとを救いたいと考えている。ジョゼフはさらに、こう言葉をにつづけている。

学生たちを集めよう、どこでもよい、ぼくの部屋でもよいし、そ^②うだ、戸外でもよい。そしてデーヴィド、彼らを揺すぶってやるのだ。彼らを揺すぶって、神への恐れが病んだだけのように地を這わせるようにしてやるのだ、わかるかい？(Ⅱ・20、一六〇頁)。

ジョゼフが伝道熱にみだされ、揺りうごかされていることは、一目瞭然である。こうした伝道熱は、はじめに指摘したように、強烈な選民意識によってささえられている。ジョゼフの伝道熱の根底には、自己の救い、自己の選民性への確信が横たわっている。したがって、ジョゼフの伝道熱は、そのまま彼の宗教的な高揚をしるしづけるものにはかならない。言いかえれば、彼の熱狂的な信仰(Can-

side)の具体的なあらわれとして理解することができる。

以上のように、ジョゼフの純粹志向、彼の宗教の特徴および伝道熱を検討することをおして、ジョゼフの中の宗教性、神を志向する部分を瞥見してきた。ここから浮かび上がってくるのは、神からひき離すもの、とくに人間の肉体的現実を全面的に否認・拒絶し、ひたすら神のほうに向かおうとするジョゼフの信仰のはげしさである。

二 肉なるものへの志向

ジョゼフの中の、神を志向する部分を吟味し、ジョゼフがはげしい信仰の持ち主であることを指摘してきた。しかしながら、ジョゼフは純粋志向を有し、あるいは熱狂的な信仰 (passion) をもつにもかかわらず、肉なるものの誘惑におちいり、モイラと罪をおかし、殺人者へと変貌する。それゆえ、今度はジョゼフの中の、肉なるものを志向する部分を検討することが是非とも必要になってくる。管見によれば、作中、ジョゼフの肉体的高揚が頂点に達する場面が四つ見いだされる。プレローとの決闘の場面 (I・5)、マック・アリスターに暴力をふるう場面 (I・15)、モイラのベッドに身を投げる場面 (II・6)、そしてモイラと性の交わりをむすび、そのあとモイラを殺害する場面 (II・21、22) である。そこでこれら四つの場面に至るまでの経過を簡単にたどり、それからこれらの場面を分析することによって、ジョゼフにおける、肉なるものへの志向を一瞥することにした。

(1) プレローとの決闘

まずプレローとの決闘に至るまでの経過を素描しておこう。ジョゼフは大学町に着いた最初の日の晩、デア夫人の下宿の食堂でプレローを見かける。そしてプレローにたいして友情ないしは共感を、さらに言えば、自覚しない愛の感情をいだけ。だが数日後、ジョゼフは大学構内でへ赤毛 (red hair) であることを学生たちからかわれ、その場に居あわせたプレローから挑戦をうける。プレローがことさら攻撃的・挑発的な態度をとったことで、プレローにたいする、ジョゼフの好意の、ひいては愛の感情が裏切られる。かくしてジョゼフの感情は、はげしい怒りに変容し、第一部第五章で語られているように、ジョゼフはこの怒りに支配されてプレローと決闘することになる。

ジョゼフの怒りは、プレローとの出会いによって芽生えた愛が報われなかったことへの反応であり、しかるべき発現を見うしなった情熱・欲望の屈折したはけ口とうけとれる。怒りと欲望との結びつきについては、のちにジョゼフを誘惑することになるモイラも、友達のリナあての手紙のなかで、「ねえ、怒りというものは欲望のひとつのかたちなのよ」(II・21、一六七頁)と書いている。また、ジョゼフがプレローにふるう暴力も、怒りの結晶としてあるがゆえに、情熱・欲望のはげしさと関係している。このことは、決闘のとき、ジョゼフが「何か抵抗がたいもの」、「盲目の力」(I・5、二四頁)に押し出されてプレローに襲いかかるころからもたしかめることができる。ここで問題となるへ抵抗がたい力とは、ジョゼフの内部にやどる肉体的力を意味し、怒り＝欲望のはげしさを指し示していると思われる。さらにジョゼフはプレローを倒し、ねじふせることで「狂おしいよろこび」を感じ、「不可解な飢えをみだしているような印象」をうけている(二四頁)。この「よろこび」「飢え」が性的・肉体的なものであることはまちがいない。第一章でも述べたように、作者グリーンはジョゼフとプレローの格闘の場面について、それが「ラヴシーン」(scene d'amour)であると解釈している⁽⁸⁾。ここから、ジョゼフの暴力は実現不可能な行為の代替物とみなしうる。かくしてプレローとの決闘の場面は、ジョゼフが怒り＝欲望のたかまりの、同じことであるが、肉体的高揚の頂点をむかえる瞬間をうつし出しており、情熱・欲望のはげしさととの《violence》を顕在化させていると判断することができる。

プレローとの決闘の直後のジョゼフの行動にも注意を払う必要があるだろう。ジョゼフはプレローと別れたあと、ひとりで森の中にはいり、林間の空地に落ちた太い木の枝を用いて大かえでの樹の幹をたたきまくる。この行為に先立って、ジョゼフはまず絶叫する。このとき、「どうしようもなかった」(I・5、二七頁)と書かれているように、ジョゼフのへ口は彼の意図をはなれて自動的に機能する。このあとジョゼフは、「恐ろしい激怒」(二七頁)に揺りうごかされて、大かえでの樹をたたくという行為におよぶ。この行為の最中、ジョゼフは「自分の腕があたかも他人の腕のようにひとりでに動く」ような印象をいだいている(二七頁)。今度はへ腕がジョゼフの統制をのがれて自動的に機能する。ジョゼフを圧倒する「激怒」とともに、このへ口とへ腕の自動性は、ジョゼフの内に存在する力、情熱・欲望のエネルギーに、ジョゼフがあらがいがたいかたちで支配されているありさまを示唆している。換言すれ

ば、プレローにたいする暴力によっても完全には消費されなかった肉体の力、情熱・欲望のエネルギーがへ叫ぶへたたくという行為にはけ口をもとめ、その力・エネルギーのすさまじさのために、へ口へ腕への自動性を、あるいはその印象をもたらしたと考えられる。ジョゼフは大かえでの樹をたいたあと、にわかにな「めまい」におそわれ、「深い眠り」におちいる(二七頁)。この「眠り」は肉体の力、情熱・欲望のエネルギーを使い果たしたことに原因しているだろう。それは、性行為のあと、体力の急激な消費によって寝こむ現象と類似している。また、ジョゼフをとらえる「めまい」は、肉体の交わりの際の性的陶醉になぞらえることができるかもしれない。大かえでの樹の幹をたたきまくるといふ行為は、ジョゼフにとって性行為と等価のものとしてあり、大かえでの樹の幹は、怒り欲望の対象としてのプレローの身がわりであるともみなされる。それゆえ、プレローとの戦いにおいてと同様、大かえでの樹の幹をたたくという行為によって、ジョゼフは内なる《violence》を発現させるとともに、本人の自覚しないところで極度の肉体的高揚を体験していると判定することができる。

(2) マック・アリストアーへの暴力

プレローとの決闘ののち、ジョゼフは牧師を志望するデーヴィドとの交遊にもめぐまれて、比較的平穩のうちに日々を過ごしている。もつとも、ジョゼフは戦いのあと傲岸な態度をとったプレローのことを思い出し、欲望のあらわれとしての怒りの感情、あるいは暴力への欲求にかられている(I・7、三四頁およびI・13、七一頁)。しかしジョゼフはすぐさまこの感情・欲求を、キリスト教的なゆるしの観念、隣人への愛の思想に依拠することで克服しようとしている。大づかみにいえば、第一部第六章以後、マック・アリストアーに暴力をふるう直前まで、ジョゼフの内部では、信仰(宗教的高揚)が欲望(肉体的高揚)よりも優位に立っている。

こうした中で、ジョゼフがしばしば肉なるものの誘惑に遭遇していることは重要であろう。大学構内の建物の入口をかざるギリシアの神々の彫像(I・7)、『ロメオとジュリエット』の本(I・8、12)、白い木蓮の花(I・9)、および自室と洋服屋に置かれている鏡(I・9、11)がジョゼフを肉なるものにいざなう。なぜなら、白い木蓮の花については後述するが、ギリシアの神々の彫

像は裸体を表現しているし、『ロメオとジュリエット』は男女間の情欲を描き、おまけに猥褻なことを暗示した箇所をふくんでいて、鏡は人間の肉体の一部である顔をうつし出すからである。ジョゼフは彫像に目をやることを断固として拒否し、『ロメオとジュリエット』のなかの、救いたい情欲にもだえる恋人たちを断罪し、さらに意味不明の箇所が卑猥なことを示唆していることをキリグルーから聞き知って書物を二つにひき裂く（I・12、七〇頁）。また、ジョゼフは鏡にうつった自分の顔の肉感性を確認して、悲しみの気持ちを抱く。彫像、『ロメオとジュリエット』、鏡をまえにしてのこうした反応は、肉なるものへの反撥としてとらえることができ、ジョゼフの純粹志向を浮き彫りにしている。

しかしながら、こうした肉なるものへの反撥は、もしくは純粹志向は、一方ではジョゼフを神のほうに向かわせるエネルギーになるとしても、他方では逆にジョゼフを肉なるもののおもむかせる危険性をもはらんでいる。というのも、肉なるものは反撥・排斥の対象となることで、意識の中ではかえってひき立つ結果となるから。つまりジョゼフは肉なるもののおもむかせる危険性ならざるを得ず、しかもこれを誘惑としてうけとめ、この誘惑とたたかわなければならなくなるのだ。たたかひの過程で欲望は抑圧される。しかし抑圧された欲望はその力を蓄積し、たえず発現する機会をつけねらうことになる。先に述べたプレローへの怒りは、言うまでもなくこの抑圧された欲望のはけ口であるし、第一部第九章の白い木蓮の花の挿話も、ジョゼフの欲望の揺れうごきを跡づけているのではないだろうか。すなわち、デア夫人の下宿の住人サイモンはジョゼフの純粹さをたたえるために、そしてまた、愛の告白の意味をこめて、ジョゼフの部屋の机の上に白い木蓮の花を置く。ジョゼフはこの木蓮の花を制禦できない衝動的な動作によって握りしめ、花の香りをむさぼるように吸いこむ。そしてこの花の匂いに酔いしれながら、「訳のわからない幸福へのかぎりない欲求」（五一頁）をいだく。ここで言われている「幸福」が地上的なもの、したがって、肉体的なものであることはたしかであろう。とすれば、ジョゼフが木蓮の花の匂いをかぐことによってあじわう陶醉、よろこびは官能的なものであり、匂いをかぐという行為をとおして、ジョゼフの中の抑圧された欲望がかいま見られる。

抑圧された欲望は、第一部第十五章、マック・アリストターへの暴力のかたちをとって一挙に噴出する。この章で、ジョゼフと同じ下宿に住むマック・アリストターは、ふとした機会をとらえてジョゼフの部屋に許可なしに入りこみ、ジョゼフに報われぬ愛をいだいて

るサイモンのことを話の種にしてジョゼフをからかい、それからジョゼフの宗教を馬鹿にし、ついにいかがわしい女の話をしながらベツドでみだらな仕草をする。激怒の発作におそわれたジョゼフは、腰にしめていたベルトをはずし、このベルトを用いてマック・アリストアーを鞭打ち、ベツドからころがり落とす(七八頁)。この場面において、ジョゼフが「森の中で樹の幹を枝でたたいていたときと同じように、自分の腕がひとりりで動いているような印象」(七八頁)をいんでいる点は特筆に値する。ここでもまた、へ腕はジョゼフの意思とはかかわりなしに自動的にうごいている。ジョゼフの暴力は、マック・アリストアーの挑発的な態度を目のあたりにしてジョゼフの怒りが爆発したことに端を発しているけれども、このへ腕の自動性、あるいはその感覚から、ジョゼフが制禦をはなれた肉体の力、欲望のエネルギーに翻弄されることがうかがえる。マック・アリストアーへの怒りは、抑圧された欲望のはけ口にすぎず、この欲望が凶暴な行為をみちびいていると考えられる。このことにかんじて、マック・アリストアーを鞭打ったあと、ジョゼフの内心の声が、「お前がなぐりたかったのはあいつではない。(…)別の男だ。(…)お前はその名を知っている。(…)その名はプレローだ」(七九・八〇頁)とつぶやいている点は重要だろう。ここからわかるように、マック・アリストアーは、ジョゼフの愛と欲望の対象であるプレローの身がわりである。したがって、マック・アリストアーの挑発は、ジョゼフの《violence》が顕在化するための口実にほかならない。ジョゼフは、森の中で大かえでの樹を枝でたたいたあとと同じように、マック・アリストアーに暴力をふるったあと、まもなく眠りにおちいつている(八〇頁)。この眠りが肉体の力、欲望のエネルギーの急激な消費によるものであることは言うまでもない。それゆえ、この眠りは、ジョゼフがマック・アリストアーの暴力によって、肉体的高揚の頂点に達したことを示している。

(3) モイラのベツドに身を投げる

今度は、ジョゼフがモイラのベツドに身を投げる場面(Ⅱ・6)を吟味したい。まず先に、第一部第十六章以後、この場面に至るまでの経過を説明することにしよう。マック・アリストアーを鞭打ったあと、ジョゼフはしばらく宗教的なものほうに向かう。第一部第十六章におけるマック・アリストアーへの謝罪と、彼との和解のころみは、キリストの教えにもとづく宗教的な実践であるとみなすこ

とができるし、第一部第十八章（最終章）では、ジョゼフはデーヴィドと二人で、暗闇の中で神に祈り、至福の感情を味わっている。さらに第二部第二章において、ジョゼフは聖書を読んで感動し、自己の救いを確信している。このように、第一部第十六章以後、ジョゼフは暫時、信仰によって生きる。

とはいえ、ジョゼフを肉体的なものの方に向かわせる要素も散見できる。第一は、マック・アリスターの部屋でジョゼフがみかけた『ポリス・ガゼット』の雑誌である（I・16、八二頁）。この雑誌は裸体の女の写真を載せており、ジョゼフを肉なるものの方にいざなっていることは疑いを容れない。第二の要素は、学生たちの、性にかんするみだらな会話である。第一部第十七章で、ジョゼフは夕食の際、マック・アリスターがいがわしい場所に行っていることを聞き、くわえて第二部第一章では、同じ日の夜、隣室にあつまった学生たちのかわす、肉体とセックスについての卑猥な会話に目をさまされている。学生たちのみだらな会話は当然のことながらジョゼフを反撥させる。しかし同時に、肉なるものへの意識を植えつける役割をはたしていることはたしかであろう。

ジョゼフを肉なるものに接近させる第三の要素は、女中ジェマイマの話である。第二部第二章、日曜日の朝、女中ジェマイマはジョゼフの部屋を掃除するため、部屋に入ってくる。その折、ジェマイマは、ジョゼフの使っている部屋が、デア夫人の養女のモイラのもので、モイラが綺麗な娘であり、そして、モイラがかつてベッドを部屋の真ん中に、すこし斜めに置いて寝ていたことを伝える（九六・九七頁）。ジェマイマの話はジョゼフに衝撃を与える。ジョゼフのうけた衝撃の深さは、次章で、教会からもどったジョゼフが自室のベッドを見て、「ぼくはもうこのベッドでは寝ないぞ」（II・3、九八頁）とつぶやいているところからうかがえる。ベッドは、以前モイラがそこで寝ていたがゆえに、肉体的に誘惑するものとして認識されている。

ジョゼフはサイモンの死をきっかけにして肉なるものの方に傾斜していくことになる。サイモンと同郷のキリグルーからサイモンの死を知らされたジョゼフは、キリグルーと別れたあと、図書館に行き、死んだサイモンのことを思う。そして図書館を出たジョゼフは自室にもどる途中、雨に濡れた土の匂いに酔いしれ、「こころよい気持ち」を味わう（II・6、一〇四頁）。この陶酔は、白い木蓮の花の匂いをかいで得たよろこびと同様に、官能的なものであろう。それから、ジョゼフは夜のすがすがしい空気を吸いこみ、「満足感」をおぼえ、「常軌を逸した生きることのよろこび」を感じている（一〇四頁）。ここでの「満足感」「よろこび」が地上的「肉体

的なものであることはまちがいない。また、ジョゼフは不意に「駭けだしたいという欲求」（一〇四頁）にかられている。この欲求は、ジョゼフのうちにやどる肉体の力にうながされて生じたものと思われる。生の歡喜は帰宅ののちもジョゼフをとらえる。死んだサイモンが雨の音を聞けないのに、生きている自分は聞けるという思いが、ジョゼフに「不可解な幸福感」（一〇五頁）をもたらす。この「幸福感」もまた、地上的な肉体的なものであることは指摘するまでもない。そしてジョゼフは「未知の力」に揺りうごかされて、指でからだをまさぐる（一〇五頁）。この「未知の力」が肉体の力、欲望のエネルギーを意味することは明白である。このように、サイモンの死の知らせは、この世に生きていくことの実感をジョゼフにいだかせ、ジョゼフを地上的な肉体的なものに向かわせる。

ジョゼフの欲望は、このあと彼が寢床につこうとするとき、いよいよはっきりとした輪郭をとるに至る。ジョゼフは暗闇のなかで寝巻に着かえ、ひざまずいて主の祈りをとなえる。だがそのとき、「ベッドの位置を変えようという奇妙な考えが心にうかぶ」（Ⅱ・6、一〇六頁）。この考えはどうしようもなくジョゼフにとりつき、ジョゼフは、かつてモイラがそうしていたように、ついにベッドを部屋の中央にひっぱり、斜めに置く。ジョゼフの行為はまだ見ぬモイラへの思いに彼がとらえられていることを明示している。ジョゼフのそれからの行動は次のように語られている。

ベッドを一周したあと、彼はおすおすとした、それでいて愛撫するような仕草で、枕とシーツの上を指先でそつとなでた。突然、彼はその狭い寢床の上に身を投げた。するとバネが体の重みできしんだ。彼は長々と体をのばした（Ⅱ・6、一〇六頁）。

以前、モイラの所有物であったベッドに身を投じる間際、ジョゼフが「おすおすとした、それでいて愛撫するような仕草」で枕とシーツをなでている点は注目し値する。この時点において、モイラへの思いがジョゼフの脳裡を占めているのであるから、彼の仕草はまぎれもなく *erotique* な意味あいを帯びている。置きかえられたベッドは枕やシーツとともに、モイラの代用品となっているように思

われる。ジョゼフがベッドに身を投げるとき、モイラと合体し、あるいはモイラを所有したいという欲求がジョゼフを支配していると解することができる。ここにおいて、ジョゼフの肉体的な欲望は明確なかたちをとって一気に爆発したとみなせよう。しかも、プレローとの格闘、マック・アリストアーへの暴力の場合とはちがって、ここでは行為の意味が本人にもはっきりと理解されることになる。それゆえ、ベッドに身を投げるといふ行為は、はじめて自覚的に生きられた、欲望（肉体的高揚）の体験だといえる。

(4) 肉体の交わりと殺害行為

このようにジョゼフは第二部第六章、モイラのベッドに身を投げることによって、自らの肉体的欲望をはじめて意識する。自覚された欲望は当然ジョゼフに罪悪感をいだかせ、宗教との葛藤をひきおこすことになる。第二部第七章以後、ジョゼフの内心では、肉体と魂の相剋が繰りひろげられ、ジョゼフは欲望（肉体的高揚）と信仰（宗教的高揚）とのあいだをひんぱんに揺れうごく。そしてさいごには、欲望が勝ちを征し、ジョゼフはモイラを相手に肉体のあやまちをおかし（Ⅱ・21）、モイラを殺害してしまう（Ⅱ・22）。では今度は、ジョゼフがその悲劇的な結末に至る過程をごく簡単にたどってみることにしよう。

ジョゼフはモイラのベッドに身を投げた日の翌日、自分の罪深さを知り、デーヴィドの住むファースン夫人の下宿にかわる。第二部第九章で記述されているように、その日の晩、ジョゼフは前日の夜の罪あるふるまいをあがなうために、ベッドで寝るかわりに床板の上に身を横たえる。けれどもこの苦行もむなしく、ジョゼフはモイラへの思いにとりつかれ、モイラのからだを想像してしまう（一七頁）。

そして第二部第十章で、ジョゼフはついにモイラと出会う。デア夫人の下宿に置き忘れてきたセーターを取りに行ったとき、故郷にもどったばかりのモイラに出くわす。このはじめての出会いで、モイラの、口紅を塗りたくった唇と赤い服とがジョゼフの注意をひき、モイラの官能性・肉体性を感じさせるものとして記憶の中にとどまることになる。また、床の上にセーターを投げ、それをジョゼフに拾わせたモイラの傲岸な態度が、逆に言えば、怒りをおぼえつつセーターをひろったときの自らの屈辱的な姿勢が、ジョゼフの脳裡に

焼きつくことになる。事実、第二部第十一章、チャーサーにかんする授業に出ているとき、ジョゼフはモイラの赤い服と赤い唇を、反感をいだいて思いうかべ、そしてモイラのままで屈辱的な姿勢をとったことを振り返り、怒りの中で暴力への欲求にかられている（一二五頁）。第二部第十二章では、ジョゼフは嫌悪の念をいだいて、モイラの赤い服をその着こなしたあわせて思い返している（一二八頁）。さらに第二部第十四章で、ジョゼフはデーヴィドと講義に行く途中、大通りでモイラとすれちがうのであるが、このときもモイラの唇の赤さに注目し、そのことをデーヴィドに話している（一四〇頁）。また、このあと大学構内でプレローを見かけたとき、ジョゼフは、セーターを取りに行ったのがプレローである場合のモイラとプレローの態度を、自分のうけた屈辱と対比しながら想像することで「怒りの発作」にかられている（一四〇頁^(リ)）。このようにジョゼフはモイラの赤い唇と赤い服に反撥しながらもそれを思い出し、あるいは注目し、そしてセーターを拾わせたモイラの横柄さと自己の屈辱を振り返っては怒りの感情にとらえられている。

しかしながら、反撥をもってであれ、怒りをいだいてであれ、モイラのことを想起することは、つまるところ、モイラに心をうばわれ、モイラのとりこと化すことにほかならない。反撥は執着の裏返し^(リ)の反応であるし、モイラへの怒りは、プレローへの怒りと同様に、欲望のあらわれと解することができる。ジョゼフじしんも、「彼女（モイラ）はおそろしく魅力的だった」（Ⅱ・18、一五〇頁）と認め、「セーターを拾うため、怒りに胸をふくらませて彼女の前で身をかがめたまさにその瞬間、彼にはすでにもう自分の自由がないのだった」（一五〇頁）と回顧しているごとく、モイラに魅せられ、モイラへの情熱に隷従してしまったことを痛感している。さらに第二部第十七章では、ジョゼフはデーヴィドに、自分の胸のうちを次のように語っている。

ぼくは、自分の犯さないこの罪〔肉体の罪〕をぞっとするほど望んでいるのだ。君はこの肉体の飢えがどういふものであるのか、わかっていない。ぼくは時として、肉体から切り離されているような気がする。それは、あたかもぼくの中に二人の人間がいて、一人が苦しみ、もう一人が苦しんでいるのを眺めているかのような具合なのだ。（…）

ぼくが考えている一人の女性がいる。（…）その女は神さまとぼくとのあいだに立ちほだかっているんだ（一四八頁）。

この告白から明らかなように、ジョゼフはモイラへの肉体的欲望にひき裂かれていること、ならびに、モイラのせいで、もしくはモイラへの情熱のせいで、自分が宗教からひき離され、神のほうへ向かいえないことを自覚するに至るのである。

ジョゼフがモイラへの情熱・欲望を確認するまでの経過、つまり、肉なるものを志向するいきさつを要約してきた。けれども第二章第七章以後、肉体的高揚と並行して、あるいはからみあって、宗教的高揚を示す箇所も見いだされる。カトリックの学生テレンス・マック・ファドンにたいする信仰上の反撥⁽¹²⁾(Ⅱ・11)とこの学生を改宗させたいという欲求(Ⅱ・14)、デーヴィドの婚約を知ったときの宗教的反撥(Ⅱ・12)、自己の純粹さをもとめての神への祈り(Ⅱ・13)、デーヴィドへの、罪と信仰の告白(Ⅱ・17)がそれである。そして第二部第二十章において、はげしい伝道熱と信仰がデーヴィドにぶちまけられることで、ジョゼフの宗教は狂信的な領域にまでおよぶのである。

だが最高潮に達した宗教的高揚は、まもなく肉体的高揚によって代わられることになる。第二部第二十一章、デーヴィドとの会話を覚えて自室にもどったジョゼフは、彼を誘惑するために待ちうけているモイラに遭遇するからだ。ジョゼフの宗教を笑いものにするため、学生たちはモイラをジョゼフの部屋におもむかせるといふ陰謀をたくらんだのである。ジョゼフはモイラの存在を無視・黙殺することによって、誘惑とたたかおうとする。モイラをまえにして、ジョゼフの内心で葛藤が繰りひろげられる。

彼「ジョゼフ」が彼女「モイラ」を欲したとしても、彼のあやまちではなかった。彼の男としてのからだは彼女を欲していた。しかし肉体は、もしそれに屈すれば、人を地獄に連れて行くのだ。彼のからだは欲するものを、彼の魂は望まなかった(一七〇頁)。

ジョゼフが必死になって肉体的欲求とたたかっていることは、一読して明らかである。一方、モイラのほうは、友人のセリナあてに手紙を書き、時間をつぶそうとする。しかしモイラは、これまでに相手にしてきた男たちとはちがったものをジョゼフのうちに見だし⁽¹³⁾、ついにジョゼフへの愛にめざめる⁽¹⁴⁾。こうしてモイラはジョゼフを誘惑することをやめ、部屋を立ち去ることにする。けれどもモイラが部屋を出て行くとしたとき、鍵が胸からすべり落ちる⁽¹⁵⁾。ジョゼフが鍵を拾うために身をかがめる。この瞬間、モイラがジョゼフ

の髪に触れる。このことがひき金となって、それまで抑えられてきた欲望が堰を切り、氾濫し、ついにジョゼフはけだもののようにモイラに襲いかかる。肉体の交わりを結んだあと、二人は眠る。第二部第二十二章の冒頭の、ジョゼフが眠りからさめたときの記述を見てください。

息苦しい感覚が彼（ジョゼフ）を眠りからさました。（…）彼の視線は天井に向けられた。彼は光を目にしたが、はじめのうちそれが何であるのわからなかった。というのも、その光は火事の反映に似ていたからである（一七三頁）。

ここで「光」の描写がなされていることは注意を要する。「火事の反映に似」たこの「光」(Que)はベッドの下にころがった小さなランプが投げかける光である。そしてランプは、ジョゼフがベッドの上でモイラと争っているときに落ちたものであることから、「光」はジョゼフの情熱・欲望もしくは「violence」を暗示し、象徴していると解釈することができる。

ジョゼフはこのあと、傍らに幸せそうに眠るモイラをみとめ、憤怒のなかでモイラを絞殺する。そしてモイラの亡骸に服を着せてからふたたび眠りにおちいる。

服を着せおわるや否や、彼は死者のそばにあお向けにどっとたおれた。そして深い眠りのなかに沈んでいった。

長い時間がすぎて、（…）彼は目をあけた。同じ火事のような光が天井を照らしていた（一七四頁）。

このようにジョゼフはモイラを殺害したのち、モイラと肉体の交わりをもったあとと同じように眠りにおちいつている。この眠りは二つの行為の、すなわち性行為と殺人行為との質的な類似性を示していると思われる。つまり二つの行為は、どちらも「violence」のあらわれとみなしうる。性行為ののちの眠りは、明らかに肉体の力、欲望のエネルギーが急激に消費されたことに起因している。モイ

ラ殺害後の眠りも同じ理由にもとづくのではないだろうか。この点にかんして、「二度目の眠りからさめたあと、「同じ火事のような光」(La même heure d'incendie)が「天井を照らしてい」ることは、注目される。この「光」もまた、ジョゼフの情熱・欲望あるいは《violence》を暗示・象徴しているにちがいない。また、これまでのジョゼフの肉体的高揚が頂点に達したとき、いつもジョゼフが眠っていたことを今思いあわせてもよい。大かえでの樹の幹を枝でたたいたあと、ならびに、マック・アリスターをバンドで鞭打ったあと、ジョゼフは眠っていたし、同様に、モイラのベッドに身を投げたあとも寝込んでいる。ここから、モイラ殺害は、ジョゼフの肉体的高揚を示すこれら一連の行為の延長線上にあると推察することができる。ジョゼフの《violence》は性行為を経て、殺人行為にまでジョゼフをみちびいているのである。

プレローとの決闘、マック・アリスターへの暴力、モイラのベッドに身を投げるといふ行為、そして性行為と殺人行為に焦点を合わせながら作品を分析し、ジョゼフが肉なるものに向かうありさまを大ざっぱに見てきた。この過程でジョゼフの《violence》が観察された。要するにジョゼフは熱烈な信仰とともに、はげしい欲望をも持ちあわせた存在なのである。

二 《violence》と信仰の関連

はじめに、ジョゼフの中の、神を志向する部分を、次いで肉なるものを志向する部分を検討した。この検討の過程でジョゼフが狂信的 (fanatique) と形容しうるほどのはげしい信仰の持ち主であるとともに、情熱・欲望のはげしさ、つまり《violence》をうちにかかえて生きていることを見た。それでは、ジョゼフの欲望と信仰とは、あるいは、《violence》と宗教とはどのように関連しているのだろうか。この節においては、この問題についての考察を中心に論を進めていきたい。そのことのために、作品にあらわれたへ火∨(またはへ光∨)のイメージを最初にしらべることにしたい。あわせてへ燃える∨という隠喩を抽出し、分析したい。次に作中、violence という語が用いられた、ジョゼフの言葉を引きあいに出す。ここから、ジョゼフのうちには二つの violence が存在するのだという仮説が提出されるだろう。だが、ジョゼフの内面の動きを示すものとして、宗教的高揚と肉体的高揚とのあいだを揺れうごく場面、すなわち前者から後者に、あるいは逆に、後者から前者へと瞬間的に移行する場面、さらに両者が混じりあっている場面を取りあげて吟味すると、この仮説の正当性はくずれぬだろう。そこでさらにもう一度、ジョゼフの《violence》の顕在化した場面を分析し、《violence》の意味を考察したい。それから犯罪後のジョゼフの生の歩みをたどり、ジョゼフの救いの問題について考え、さいごに《violence》と信仰との関連性に言及し、この二つの関係を明らかにしたい。

(1) へ火∨(またはへ光∨)のイメージ

まず、これまでに見たへ火∨またはへ光∨にまつわる表現を振り返っておこう。『ロメオとジュリエット』の恋人たちにジョゼフは反撥していたが、彼らが愛の情熱・欲望のとりこになっているありさまを、ジョゼフは、「裁きの炎によって永遠に焼かれながら」

(sous l'éternelle morsure de la flamme justicière, I - 8, 二九頁) という言い方によって把握していた。この「裁きの炎」は恋人たちの内なる情熱・欲望を指し示す。そして「裁きの」という形容詞がついていることから、この「炎」は地獄につきおとすもの、あるいは地獄の火そのものと考えられていることがわかる。へ火へにかんする表現は、第二部第二十章、ジョゼフがはげしい伝道熱に揺りうごかされるところでも用いられていた。ジョゼフは、「何もかも消し去ることのない炎(Flammes)から彼ら〔人びと〕を救い出すこと」を自分の「天職」(一五七頁)だと考え、デーヴィドに、「ここでもまた(…)、数知れない魂が永劫の火(à jamais)に焼かれる危険があるのだ」(一五九頁)と語っている。この「炎」そして「永劫の火」はどちらも、人びとにとりつき、人びとを罪におちいらせ、地獄につきおとす情熱・欲望の火であると解釈することができる。また、ジョゼフの内面を象徴するものとして、モイラとの肉体の交わりおよび殺害のちにジョゼフが眠り、そしてめざめたときの天井の光の描写があった(II・21, 一七三、一七四頁)。天井を照らす「火事のような光(Quand)」(一七四頁)は、性行為の間際、ジョゼフがモイラと争っている折に、ベッドからこがりおちたランプが投げかける光であり、すでに述べたように、ジョゼフの情熱・欲望もしくは《Violence》を暗示し、象徴している。

とはいえ、ジョゼフの内面を象徴するものとして、何よりもまず彼のへ赤毛へを挙げなければならないだろう。第一部第四章で、ジョゼフは大学構内で学生たちから自分のへ赤毛へをへ火へまたはへ火事へ(à)にたとえられ、からかわれている(一四頁)。へ火へを連想させる、ジョゼフの赤毛は目立ち、人びとの注意をひく。すでに作品冒頭から、ジョゼフの赤毛はデア夫人の目をおして観察され、描写されている。

心ならずも彼女(デア夫人)には、彼(ジョゼフ)が赤毛であるにもかかわらず美しく思われた。その炎のような髪、牛乳のように白いその顔色、それが彼女の心をかき乱すのだった。彼女は、彼が自分にいだけさせる或る種の嫌悪感を悟られないように感情をおさえた(I・1, 三頁)。

ここでデア夫人はジョゼフの顔色の白さとともに、「炎のような髪」(chevelure de flamme)、つまり髪の赤さに注目している。この白と赤の対照は重要だろう。白はジョゼフの純粹志向、というより純粹さに対応し、赤はジョゼフの純粹さにもかかわらず、彼のうちで眠っている《violence》を暗示すると考えられる。デア夫人のいづく「嫌悪感」は、ジョゼフの純粹さの背後にひそんでいる情熱・欲望のはげしさを本能的に感じとったことへの反応だとうけとれる。このようにへ火があるいはへ炎のイマージュと結びつくジョゼフの赤毛は、彼の内なる《violence》を表象している。作品冒頭に置かれた「炎のような髪」という描写は、のちに繰りひろげられる、ジョゼフの《violence》のドラマを告知しているといえよう。

へ火のイマージュは、作中、ジョゼフの内面それじたいを表現する際にも利用されることになる。第二部第二十章、モイラへの情熱にひき裂かれたジョゼフは、自己の内面の状況を、平穩のうちに生きるデーヴィドの現状と比較しつつ、デーヴィドに語っている。

(…)ぼくは欲望の人間だ。そのためぼくは君よりも恩寵をうしなう危険にさらされているし、ある意味では君が今後そうなる以上に地獄に近づいているのだ。君は、地獄が何であるかを知らない。でもぼくは知っている。なぜならぼくは、火(火)が何であるかを知っているから。火はぼくの祖国だ(一六〇頁)。

このようにジョゼフは、自己の内面のありさまをへ火という語あるいはイマージュを使って言いあらわしている。このへ火は地獄にうつじるものであるから、言うまでもなく、情熱・欲望に支配されたジョゼフの内面、彼の内なる《violence》を指し示している。しかしながら、ジョゼフの内面のへ火、「火はぼくの祖国だ」と言うときのへ火は、単に情熱・欲望とだけ関係するのであるか。恩寵をうしなわせ、地獄へとジョゼフをみちびくものだけであろうか。ジョゼフがデーヴィドに話した言葉のつづきを読むとき、けっしてそうでないことがわかる。

ぼくは一度、子どものころ、神の存在という燃えさかる炎の中に投げ入れられたことがある。ぼくはエマオの使徒たちの心に感じられた火傷のような痛みが何であるか、そして五月二十四日の夜、ウェズリーの心に感じられた火傷のような痛みが何であるかを知っている。だが、神の不在によって燃え上がる炎もあるのだ。というのも、神は火であるからだ、デーヴィド、そして神が火であることといったら、その非存在の恐怖もまた、火によって、黒い火によって表わされるほどなんだ……（一六〇頁）。

ここで述べられていることはきわめて難解である。けれども、大ざっぱに言えば、二つの種類のへ火があることをジョゼフは語っているように思われる。ひとつは、「神の存在という燃えさかる炎」(le brasier allumé de la présence de Dieu)とあるように、神の存在によって燃え上がる火であり、もう一つは、「神の不在によって燃え上がる炎」(le brasier allumé par l'absence de Dieu)と述べられているごとく、神の不在によって燃え上がる火である。あとのほうの火は「黒い火」(feu noir)とも言われているが、おそらく地獄の火であり、神を見うしない、情熱・欲望にはげしく責めさいなまれるありさまを暗示していると解することができる⁽¹⁹⁾。これにたいして、神の存在によって燃え上がる火とは、「神」が「火である」とジョゼフが語っていることと照らしあわせて、神をはげしくもとめ、神を見いだし、実感する内面のありさまを示唆している⁽²⁰⁾とみなすことができる。そして神を追いもとめるはげしさがジョゼフに、神をへ火となるものに知覚させていると考えられるのである。このようにへ火という表現ないしイマージュは、肉なるものを志向する心的状態とともに、神を志向する心的状態を指し示すものとして用いられている。

この点に関連して、へ火にかかわる言葉であるへ燃える(être)という動詞が、ジョゼフの内心の状態をあらわす語として使用されていることに注意を払うべきだろう。第二部第十七章で、モイラへの欲望を自覚したジョゼフは、デーヴィドに胸襟をひらいてい

る。
君のほうは神さまを見いだした。神さまはけっして君から離れることはないだろう。でもぼくはありとあらゆる瞬間に、神さま

をうしなうのではないかとびくびくしているんだ。なぜって、ぼくは目のところまで罪の中に沈んでいるような気がするからだ。デーヴィド、ぼくは燃えているんだ (Je brûle) (一四八頁)。

さいごの文で「燃える」(brûler)という動詞が認められる。この「燃える」(brûler)という語は神から離れ、罪ある情熱・欲望にとりつかれ、呻吟するジョゼフの内面をひき立たせている。また、第二部第二十章では、ジョゼフが自らの狂信的な信仰をデーヴィドに打ち明けるところで、「燃える」(brûler)という語が見いだせる。

子ども時代から、ぼくはほとんど天国と地獄のことしか考えたことはなかった。ぼくは、神から見放された人びとが怒りと憎しみに燃える (Brûlent de colère et de haine) ように、選ばれた者たちが愛に燃えている (Brûlent d'amour) ことを知っている。ぼくは聖書を読むとき、往々にして胸が燃え立つ (s'embraser) のを感じる。デーヴィド、ぼくらは燃え上がるだろう (nous brûlerons)、永遠のよろこびの中で燃え上がるだろう (Brûlerons) (一六〇・一六一頁)。

この一節ではまず、「怒りと憎しみに燃える」「愛に燃えている」といったように、「燃える」(brûler)という動詞は、二つの異なる状態を示すものとして用いられている。最初の「燃える」(brûler)は、「怒り」とか「憎しみ」といった情熱に支配された状態をあらわし、この情熱も肉体的欲望と同様に、神からひき離し、地獄にみちびくものと考えがゆえに、ジョゼフは「怒りと憎しみ」にもてあそばれる人びとを「神から見放された人びと」と規定するのである。あとの「燃える」(brûler)のほうは、まぎれもなく神への愛と隣人への愛、要するに信仰に心が高揚する状態を指し示している。このあと、ジョゼフは自己の内心の動きを示す隠喩として、brûlerの類義語である s'embraser (燃え立つ) という動詞を使っている。この動詞は聖書の読書との関連で用いられているのであるから、ジョゼフの内心で生じた宗教的高揚を言いあらわしている。さいごに、「燃え上がるだろう」というように、brûlerの単純未来形が二度使用されてい

る。この語は、熱烈に神をもとめ、宗教的なよろこびにひたるありさまを表現していると思われる。このように『モイラ』において、へ火（あるいはへ光）のイマージュと同じく、へ火を連想させるへ燃える（brûlerあるいはs'embraser）という隠喩もまた、肉なるものを志向する心的状態とともに、神を志向する心的状態を指し示している。

（2）二つの violence

今度は、作中、violenceという語が用いられた箇所を検討することにした。この語は、ジョゼフがデーヴィドに話しているところで見いだされる。第二部第十七章、ジョゼフは、デーヴィドが結婚することに反対したことを反省して、こう語っている。

ぼくは君のことを悪く考えていた。君が結婚の中に、ただ、肉体の飢えの満足しか見ていないと想像したんだ。なぜなら君は、ぼくがぼくじしんであるのと同じような人間であると思っていたからだ。（…）君はぼくのように罪を犯すことなんかできはしない。君には心の平和が永遠に与えられていて、君の中にはいささかの混乱もない。それにたいして、ぼくの中すべてははげしさ（violence）なのだ（一四七頁）。

ここで violence なる語が用いられている。この violence が、はじめの定義とおり情熱・欲望のはげしさを意味することは疑いを容れない。モイラへの情熱・欲望にはげしく責めさいなされる内面のありさまを、ジョゼフは violence という語によって表現している。

ジョゼフは第二部第二十章、デーヴィドの信仰形態と対比しつつ、自己の信仰の在り方を述べている。この件りで violence なる語が見いだされる。

君は主を平安のうちに愛している。だがぼくにあるのは神の怒り〔神へのはげしい欲求〕(la rage de Dieu) なのだ。ぼくははげし

さでもって (avec violence) しか愛することができない。なぜなら、ぼくは欲望の人間だから (一六〇頁)。

この文章で、*la rage de Dieu* は「神の怒り」とも「神へのはげしい欲求」とも訳せることを、最初にことわっておきたい。ジョゼフが「神の怒り」を感じつつ生きているのは、自らの肉体的な欲望にたいして強烈な罪の意識をいだいているからにほかならない。だからこそ、ジョゼフは、デーヴィドのように「平安のうちに」神を愛するのではなく、「神へのはげしい欲求」を覚えつつ、言いかえれば、熱狂的な愛によって、神を愛し、もとめるのである。したがって、「はげしさでもって」愛するとジョゼフが言うときの愛の対象は、言うまでもなく神である。とすれば、ここでの *violence* は当然、宗教的狂熱、信仰のはげしさを意味する。

このように、ジョゼフが使っている *violence* という言葉は、 \heartsuit のイマジユおよび \heartsuit という隠喩がそうであったように、二つの心的状態を指し示している。情熱・欲望のはげしさと信仰のはげしさ、同じことであるが、肉なるものを志向する *violence* と神を志向する *violence*、である。ここから、ジョゼフのうちには二つの *violence* が存在していて、この二つが葛藤しているという仮説が成り立つ。もう少し説明すれば、肉体と魂とが相容れないように、もしくは敵対するように、欲望のはげしさの反動のエネルギーとして霊的なはげしさが生じ、両者がジョゼフの内部で対立し、争っているというふうに一応考えられる。この仮説を受け入れるならば、先にしらべた \heartsuit (または \heartsuit) のイマジユ、それに \heartsuit という隠喩は、二つの *violence* を象徴するものとして用いられているということになる。

(3) 宗教的高揚と肉体的高揚のあいだの揺れうごき

ところで、『モイラ』はジョゼフの宗教的高揚 (信仰のたかまり) と肉体的高揚 (欲望のたかまり) とを交互に描きながら展開しているけれども、作中、ジョゼフが宗教的高揚と肉体的高揚とのあいだを揺れうごく場面、言いかえれば、宗教的高揚から肉体的高揚へと、あるいは逆に、肉体的高揚から宗教的高揚へと瞬間的に移りゆく場面がしばしば見られる。そこで、こうした瞬間的移行を示す箇

所を取りあげることによって、右に述べた仮説が正しいかどうか検証していきたい。

第一部における、ジョゼフのプレローにたいする感情の揺れうごきを問題にすることからはじめよう。まず第一部第五章で、瞬間的な移行を示す件りがある。この章は、すでにふれたように、ジョゼフがプレローと決闘し、そのあと大かえでの樹の幹をたたきまくるところである。ジョゼフの肉体的高揚がはじめて最高潮に達するところであるが、問題の箇所はプレローとの決闘の場面の直前に見いだされる。すなわち、ジョゼフはプレローの挑戦に応じて、彼の住まいを訪れる。しかしプレローが不在なのを知って、ジョゼフは近くの芝生に寝ころび、プレローの帰宅を待つ。その間のジョゼフの心の動きは、次のように叙述されている。

へ必要なら一晩中でも待つてやろうと彼は思った。

一晩中。いつたい自分はいいつ「プレロー」を嫌っているのだろうか。だが問題はそれほど単純ではなかった。あいつを嫌っているのではない。ただあいつをなぐりたいだけなのだ。心ならずも、この見方は彼をほほえませた。自分はプレローの横柄さをゆるしているのだ。ほんとうにそれをゆるしているのだ。もしゆるさないのなら、福音書を読んだところで何になるのだろうか。しかし時どき、怒りの発作が頭をくらくらさせた。悪人たちを叱責し、必要とあらば彼らの幸福のためになぐることは、彼には義務のように思われた。たとえ怒っても、罪を犯さないことだ。福音書は言っている、へ理由もなく兄弟にたいして怒る者は……（二二頁）。

この一節ではまず、「ただあいつをなぐりたいだけなのだ」とあるように、肉体的高揚が見られる。なぜなら、この暴力への欲求は、プレローへの自覚されない愛の感情が報われなかったことに根ざしており、欲望のはけ口とみなされるからだ。次いでジョゼフは、プレローへのゆるしの感情にかられている。このゆるしの感情は、「もしゆるさないのなら、福音書を読んだところで何になるのだろうか」と考えられているごとく、聖書・福音書の教えとのかかわりで生じている。それゆえ、この感情は宗教的な高揚を示しているといえる。このあとジョゼフは、「怒りの発作が頭をくらくらさせた」と書かれているように、怒りの激情にとらえられている。この怒りは欲望

と結びついていることから、ジョゼフの内面はふたたび肉体的高揚に揺れうごいたわけである。けれどもこの肉体的高揚の中で、ジョゼフは「たとえ怒っても、罪を犯さないことだってあり得るのだ」と考えて、自らの怒りを宗教的な次元で正当化しようとしたり、福音書の記述を思い出して、怒りをなだめようとしたりしている。ということはすなわち、肉体的な高揚のなかに、わずかな程度であれ宗教的高揚が混じりあい、あるいは介入したことになる。したがって、全体をまとめてみると、この一節では、肉体的高揚から宗教的高揚への瞬間的移行、そして宗教的高揚から肉体的高揚への瞬間的移行、さらには肉体的高揚の中への宗教的高揚の混じりあい、もしくは介入が認められる。

次に、第一部第七章における、プレローにたいするジョゼフの感情を検討してみることにはしよう。プレローとの決闘の翌日のことを語ったこの章で、ジョゼフはギリシア語の授業中、プレローのことや、彼との決闘の場面を思い出している。

ジョゼフは自分の意に反して前日のつらい場面を、鞭のように自分の顔を切り裂くような気がしたあの声を思いうかべた。へ君はこわいんだ……今度はぼくが君を足もとにのぼしてやろうじゃないか……。制禦しがたい怒りが彼の胸にこみあげてきた。彼は血管が喉もとでふくらみ、血がどくどくと脈打つのを感じた(三四頁)。

ジョゼフはプレローにたいする「制禦しがたい怒り」を味わっている。この怒りは、繰りかえして言うように、欲望の屈折したあらわれである。「彼は血管が喉もとでふくらみ、血がどくどくと脈打つのを感じた」という生理的な次元の叙述は、ジョゼフが肉体的力、欲望のエネルギーに支配されているありさまを如実に示している。それゆえ、この箇所は、ジョゼフにおける肉体的高揚をかいま見せている。

さて、このあと、ジョゼフは気分が悪くなり、教室を出て、地下にある便所にかげこみ、吐き気をもよおす。そして階段を上がり、建物の一階の玄関のところにたどりついたとき、ジョゼフはこう考えている。

もつとも単純で、もつともキリスト教徒的なことは、遺恨をすっかり忘れ、プレローへの恨みを一切捨て去ることだろう。唇の上で言葉がほとんどひとりでにつくられていった。へぼくは君のことをもう恨んではいないよ、ブルースと、彼はそつとささやいた(二六頁)。

ジョゼフはキリスト教徒の名においてプレローへの恨みを忘れようとしている。換言すれば、プレローへの怒りを押さえ、プレローのことをゆるそうとしている。「へぼくは君のことをもう恨んではいないよ」(Je ne t'en veux plus)という言葉は、キリスト教的な隣人愛にうごかされたジョゼフの気持ちであらわしているだろう。右の記述はジョゼフの内心の宗教的高揚をわずかながらもしるしづけている。かくして肉体的高揚から宗教的高揚への揺れうごきが見られることになる。とはいえ、先の引用文からうかがえた肉体的高揚から、ここでの宗教的高揚に至るまでには、一定の時間のへだたりが介在している。教室を出て、便所に入り、一階玄関に行くまでの時間である。けれどもジョゼフはこの間、プレローへの怒りないし恨みを持続させているのではないだろうか。ジョゼフが便所で吐き気をもよおしているとき、「彼は噴怒を病んでいたのだ」(三五頁)と説明されているところからわかるように、ジョゼフの嘔吐感、彼が相変わらずいだきつづけている怒りの激情に起因しているし、それに、「プレローへの恨みを一切捨て去ること」という語句や、「へぼくは君のこともう恨んではいないよ」という言葉は、宗教的高揚の瞬間まで恨みをかかえてきたことを逆に証拠立てているように思われる。というより、宗教的高揚の瞬間においても、ジョゼフは恨みあるいは怒りをいだきつづけているとさえみることができるとはいないだろうか。つまり「へぼくは君のことをもう恨んではいないよ」という言葉は、プレローへの恨みもしくは怒りが存続しているからこそ言われたのだと解することもできる。とすれば、第一部第七章でも、プレローへの感情の揺れうごきをおして、肉体的高揚から宗教的高揚への瞬間的移行、または、肉体的高揚の中への宗教的高揚の介入・入りまじりが見いだされる。

第一部第十三章においても、プレローにたいする同様の感情の揺れうごきが見られる。授業科目の変更を願(23)い出(23)るため、ジョゼフは夜、指導教官のタック先生のところに行く。そして客間で先生がくるのを待つあいだ、プレローのことを考えている。

プレローのことは決して悪い出さないうがよい。心の中に怨みしかひきおこさないのなら、この名を記憶から抹殺したほうがよい。しかし一方では、敵のために祈らなければならないという気もした。そして実際、彼は力のかぎり両手を組み合わせ、思った、へ主よ、プレローにあなたの祝福を与えたまえ。だが熱意の足りなさが彼に恥ずかしい思いをさせた。(…)心の奥底では、プレローに神の祝福がくだるのを見たいという気持ちはさらさらなかった。何よりも望むのは、彼の顎を打ち砕くことだった。(七一頁)。

ジョゼフはまず、「心の中に怨みしかひきおこさないのなら、この名を記憶から抹殺したほうがよい」と考えているところから察知できるように、プレローにたいして怨みの感情をいだいている。この怨みは、第七章における先程の怨みと同じように、愛の裏返しのような感情であり、肉体的高揚のあらわれである。それからジョゼフは「敵のために祈らなければならない」と思い、事実プレローのために祈っている。この祈りはキリスト教隣人愛にもとづくものである。しかしこの祈りもむなしく、「何よりも望むのは、彼の顎を打ち砕くことだった」と書かれているごとく、ジョゼフはまもなくプレローへの暴力の欲求にとらえられる。この暴力への欲求が肉欲の屈折したはけ口であることは指摘するまでもない。したがって、ここでは肉体的高揚から宗教的高揚への瞬間的移行、つづいて宗教的高揚から肉体的高揚への瞬間的移行が見られる。しかしながら、この一節でのジョゼフの内心は、先に引きあいに出した第七章の部分と同じく、プレローへの怨み・怒りを基調としてみるとみることできる。この怨み・怒りが継続する途中で、祈りの義務感が生じたとも考えられる。とすれば、この箇所は、肉体的高揚の中への宗教的高揚の介入・入りまじりが問題であるともいえる。

ここまで、プレローにたいするジョゼフの感情を描写した部分を分析してきたのであるが、肉体的高揚と宗教的高揚とのあいだの揺れうごきは、第二部第六章の、ジョゼフが服を脱ぐ場面からも観察される。この章において、かつてモイラの所有物であったベッドに身を投げることで、ジョゼフの肉体的高揚が頂点に達することはすでに述べた。この直前、ジョゼフは自分のからだとかかわり、二つの高揚を短い時間のうちにつづけて体験する。すでに一部分は引用したことがあるけれども、ジョゼフが服を脱ぐところは次のように語られている。

薄暗がりの中で彼は伸びをした。そして疲れのためにあくびをした。それからワイシャツを脱ぎ、ベルトをはずし、ズボンを足もとに滑り落とした。子どものころから、彼は暗闇の中で服を脱ぎ、いつも自分のからだに目をやらないようにしてきた。しかし今夜だけは、四肢の白さを見ないではいられなかった。たとえ明かりがなくても、腕や膝のかたちが見わけられた。昔、父親は自分に教えたものだ、肉体は地獄に人をみちびき、魂は天国に連れていくと。そのとおりだ、肉体はキリスト教徒の敵なのだ（一〇六頁）。

この記述で、「子どものころから、彼は暗闇の中で服を脱ぎ、いつも自分のからだに目をやらないようになってきた」という文がまず注目される。この文はもちろん、ジョゼフの日頃の習慣を伝えている。しかし同時に、服を脱いだ時点でのジョゼフの心の動きを言いあらわしている。自分のからだに目をやるまいとする心の動きである。この心の動きは肉なるものへの反撥と等価なものであり、純粹志向をのぞかせているがゆえに、一種の宗教的高揚のあらわれといえる。だがこのあと、「今夜だけは四肢の白さを見ないではいられなかった」と書かれているように、ジョゼフは自分のからだを見たいという誘惑にかられている。この誘惑は、一定程度、ジョゼフの内心の肉体的高揚をかいま見せている。ところがジョゼフは、腕や膝の輪郭をたしかめたのち、父親の教えを思いだし、「肉体はキリスト教徒の敵なのだ」と自分に言いきかせている。この部分は、宗教との関連で肉体敵視の思想が表明されているので、明らかに宗教的高揚を示している。それゆえ、この場面からは、宗教的高揚から肉体的高揚への瞬間的移行、さらに肉体的高揚から宗教的高揚への瞬間的移行が見いだされるのである。

同様に、ジョゼフがモイラのベッドに身を投げるにいたるまでの内心の動きにも注意をはらうべきだろう。そこで、服を脱いでからのジョゼフのふるまいを確認しておきたい。

彼は寝巻きを着、祈りをとなえるためにひざまずいた。しかしいそいで、そして早く終わりたいというひそかな欲求をいだいて

祈りを朗唱した。主の祈りをとなえている最中に、ベッドの位置を変えようという奇妙な考えが心にかんだ（一〇六頁）。

ジョゼフは祈っているとき、「ベッドの位置を変えようという奇妙な考え」をいだき、まだ見ぬモイラへの欲望に支配されて、ベッドに身を投げるわけである。ジョゼフの祈りは熱心なものではないとはいえ、先の肉体敵視の考えの延長上にあり、やはり宗教的高揚を顕在化させている。したがって、ここでは宗教的高揚から肉体的高揚への瞬間的移行が認められる。そうすると、服を脱ぐ場面から合わせると、二つの高揚をめぐって三度も瞬間的移行が観察されたことになる。けれども、さいごの瞬間的移行においては、祈りの最中にベッドの位置を変えることが思いつかれていたことから、宗教的高揚のただ中で肉体的欲望が生じたとはいえず、宗教的高揚と肉体的高揚とが混じりあっているとみることもできるのではないだろうか。また、第二部第六章全体を視野に入れて服を脱ぐところからベッドの位置を変えるところまでの部分を考えると、サイモンの死を知ってからジョゼフの内心を支配するのは、基本的には肉体的欲望であるから、肉体的な高揚のなかに宗教的高揚が介入し、入りまじっているという見方をすることも可能なように思われる。

瞬間的移行は、第二部第九章、ジョゼフがモイラへの思いにとらえられるところでも見いだされる。この章では、デーヴィドのいるファীগスン夫人の下宿にジョゼフがかわった日の夜のことが語られている。ジョゼフは前日の晩、デア夫人の下宿でモイラのベッドに欲望をいだいて身を投げたことが忘れられず、自分のおかした罪をあがなうために、ベッドではなく床板の上に寝る。このときの、ジョゼフの心の動きは次のように書き記されている。

へぼくの肉体は苦しいけれど、魂は平和だ」と彼は考えた。手足に感じるこの苦痛を、何というよろこびをいだいて主にささげることだろう。彼は、拷問のなかで信仰を告白する自分の姿を想像し、大きな満足をいだいた（一一五頁）。

この部分は、ジョゼフが自らの肉体的苦痛を神にささげようとしていることから、信仰のたかまり、宗教的高揚を明示している。だが、ジョゼフはこうした苦行のさなかに、女中ジェマイマの言葉を思い出し、モイラへの想念にとりつかれる。

へモイラお嬢さまはきれいな方ですよ……。年とった女中のこの月並みなことばが格別の魅力を付与されて、彼の脳裡によみがえった。心ならずも彼はモイラのことを思い浮かべようとした。わけても彼女の肌は美しく、すっかり琥珀色に輝いているにちがいない。そして目はあかるく、胸は、隠されたあのからだの一部、胸から見られるものは……（一一七頁）。

ジョゼフはまだ見ぬモイラの肉体を想像している。ということは、ジョゼフはモイラへの肉体的欲望に支配されたことになり、結局、第二部第九章では、宗教的高揚から肉体的高揚への瞬間的移行が認められる。とはいえ、モイラへの想念が、床板の上に寝るという苦行のさなかに生じていることから、この記述は、宗教的高揚の中への肉体的高揚の介入・入りまじりを示していると解することもできる。

以上、宗教的高揚と肉体的高揚のあいだの揺れうごき、すなわち、前者から後者への、あるいは後者から前者への瞬間的移行をあらわす箇所を列挙し、分析してきた。ではいったい、この瞬間的移行は何を意味するのであろうか。言うまでもなく、この移行はジョゼフにおける肉体と魂の深刻な対立、熾烈な葛藤を端的に物語っている。しかしながら、分析の過程で、問題の箇所が、肉体的高揚の中への宗教的高揚の、もしくは、宗教的高揚の中への肉体的高揚の介入・入りまじりの現象としても理解できることを指摘してきた。この介入・入りまじりの現象は、宗教的高揚と肉体的高揚とが単純な敵対の、または一律背反の関係には必ずしもないということを示唆しているのではないだろうか。ここまでの検討から、宗教的高揚と肉体的高揚とは、信仰と欲望とは、もちろん対立関係にあるけれども、相剋のなかでたがいに重なりあう部分をも有していると判断できるように思われる。こう考えると、先に提示した、二つの violent といふ仮説の正しさは若干揺らいでくる。というのも、この仮説は信仰と欲望との図式的な二元論に立脚しているからである。

（４）宗教的高揚と肉体的高揚の混濁

さて今度は、宗教的高揚と肉体的高揚とが純粹に混じりあっていると思われる場面を取りあげてみたい。同一の行為、同一の心の動

きが同時に宗教的高揚と肉体的高揚とをあらわしているように見えるところを問題にしたい。作品の記述の順序にしたがうならば、問題の箇所として、第一部第十章、ジョゼフが突然の幸福感におそわれるところがまず挙げられる。この章は、ジョゼフが白い木蓮の花の匂いをかいで官能的なよろこびを体験した第九章のあとにつづく章であり、第九章の時点から数日後の出来事を物語っている。ある朝、ジョゼフは授業がおわってデーヴィドと散歩しているとき、不意に得体の知れない幸福感を味わう。この件りは、次のように書かれている。

これほどまでに美しく晴れ、金色に輝いた一日を、誰も想像することはできないだろう。そしてジョゼフは不意に人生にたいし、また生きとし生けるものたちにたいして、心の高揚のようなものを感じた。自分のぐるりに存在するありとあらゆるものにたいして、漠然とした愛情を感じた。(…)

——デーヴィド！ と彼は叫んだ。時として君はしあわせに、訳もわからずにしあわせに感じることはないかい？ ほくはそう感じると笑いたくなるんだ、ちょっとばかり子どもが笑うみたいに、はっきりした理由もないのに……(五四頁)。

ジョゼフが突然の、不可解な幸福感におそわれていることは、「時として君はしあわせに、訳もわからずにしあわせに感じることはないかい？」とデーヴィドに問いかけているところから明らかである。では、この幸福感はいかなる性質のものなのであるか。宗教的なものなのか。それとも肉体的なものなのか。結論的にいえば、ここでの幸福感は両方の性質をあわせもっているように思われる。このことを説明しよう。ジョゼフはデーヴィドに話しかける寸前、「人生」や「生きとし生けるもの」にたいして一種の心の高揚(①)を覚えている。こうした「心の高揚」は、一方では、信仰をもつことによつて与えられ、神とともにいるのだというたしかな自覚とともに生じると考えられる。信仰によつて生きることのこうした幸福感がこうした「心の高揚」をささえていると思われる。とすれば、ジョゼフの「心の高揚」はまずもつて宗教的なものである。しかしながら、他方、この「心の高揚」は、ジョゼフが太陽の光を

あびて、地上に生きることのよろこびを感じたことに立脚しているともみなされる。こうしたよろこびは感覚的・官能的な性格を有し、神からジョゼフをひきはなすものだともうけとれる。⁽²⁴⁾つまりジョゼフがここで味わうよろこび・幸福感は前章（第九章）で描かれているような、木蓮の花の匂いもたらす官能的なよろこび・陶醉の延長上に位置づけられると解することもできる。ここから、ジョゼフの「心の高揚」は宗教的なものであると同時に地上的・肉体的なものであるともいえよう。こうして第一部第十章における突然の幸福感は、宗教的高揚と肉体的高揚の混じり合いを示しているのである。⁽²⁵⁾

この混じり合いは、第一部第十二章、ジョゼフが『ロメオとジュリエット』の本をひき裂く場面からも読みとれるのではないだろうか。すでにふれたように、ジョゼフは、『ロメオとジュリエット』の中の恋人たちに反撥し、情熱にもだえる恋人たちを宗教的に断罪していた。ジョゼフはこの作品を読みつづけるうちに、意味不明の箇所におちあたる。そこで彼は、たまたま自分の部屋を訪れたキリグルーに質問する。問題の箇所が猥褻なことを暗示していることが判明する。それでジョゼフは怒り、書物をひき裂く。

そのとき、開いた本を両手でつかんで、若者は二つにひき裂いた。それから激怒の表情をうかべて、その本を床の上に投げつけた（七〇頁）。

この場面は、ジョゼフの肉体敵視、あるいは純粹志向を浮き彫りにする例としてすでに引きあいに出した。実際、本を「二つにひき裂く」という行為は、ジョゼフの肉なるものへの反撥のすさまじさを露呈しており、ここから当然、宗教的高揚がうかがえる。しかしながら、この行為をひきおこす、ジョゼフの「激怒」(fury)のなかには、抑圧された欲望が入りまじっているのではないだろうか。ジョゼフの怒りが欲望と結びついていることは、これまでに再三再四指摘してきた。ここでの「激怒」についても同様だと思われる。というのも、本を「二つにひき裂く」という行為は、肉なるものへの反撥、ないし純粹志向にもとづくとしても、ジョゼフの内部に宿る肉体の力を前提とし、看取させるからである。ごく常識的に考えて、本を二つにひき裂くことは普通の人間にとって不可能ではない

にしても、少なくとも困難である。しかしジョゼフはこれをいとも容易にやりとげている。こうした行為を可能にするのは、ジョゼフの内部に蓄積された肉体の力、欲望のエネルギーにほかならない。つまり肉なるものへの反撥のすさまじさのなかには、抑圧された欲望のげしさが混入していると考えられる。したがって、『ロメオとジュリエット』の本をひき裂くという行為をとおして、宗教的高揚と肉体的高揚との混淆が読みとれる。

さいごに、第二部第十一章において、ジョゼフがモイラのことを思い出すところを取りあげることになろう。前章（第十章）で、ジョゼフは置き忘れたセーターを受けとりにデア夫人の下宿屋に行った際、モイラをはじめて見た。第十一章は、モイラと別れてからのジョゼフの行動をたどっているのであるが、チョーサーにかんする講義に出ているとき、ジョゼフは早速モイラのことを思い出す。

じっさい、心ならずも、彼の記憶は、モイラと出会ったときのありさまのすべてをたどり直していた。あの横柄で、高慢ちきで、ちっぼけな女、それがまさしく彼女なのだ……。……異邦の女、まさにそのとおりだ。遠い異国の女だ。黙示録に出てくる淫売婦のように赤い服を着、唇に口紅を塗りたくって。彼はセーターをひろうため彼女の前で背中を曲げている自分の姿を思い出した。彼女の口をそのざらざらした毛糸の服でこすってやったら、なんという悦びであることだろう。彼女を殴り、罰したなら、そうだが、彼女の傲慢さを罰したなら、なんという恐ろしい悦びであることだろう。こう考えると血が頭にのぼってくるのだ。た（一一三五頁）。

ここでジョゼフは意に反してモイラへの思いにとらえられ、そしてセーターを拾ったときの自己の屈辱的な姿勢を思い出して、憤りの感情におそわれ、暴力への欲求に駆りたてられている。この暴力への欲求は怒りの感情とともに肉体的な欲望と結びついている。モイラにたいするジョゼフの反撥は、プレローへの反撥がそうであったように、執着の裏返しにあらわれにほかならない。さいごの「血が頭にのぼってくるのだ」という文は、ジョゼフの内部の欲望のたかまり、肉体的高揚を如実に示している。とはいえ、この一節で「黙示録に出てくる淫売婦のように」という直喩からわかるように、ジョゼフがモイラを黙示録の淫売婦になぞらえ、モイラの肉体的・官能性の象徴である赤い服と赤い唇に反撥している点は重要だろう。この反撥はモイラへの執着の裏返しに反応であるとしても、

同時に、肉なるものへの反撥を意味し、ジョゼフの純粹志向に根ざしている。モイラへの暴力の欲求は、肉欲のはげ口としてだけでなく、宗教的な次元での処罰の欲求として生じていることもたしかなのである。とすれば、この一節においてもまた、肉体的高揚と宗教的高揚の混じり合いを見てとることができる。

このように、宗教的高揚と肉体的高揚との混淆を示す箇所・場面を三つ取りあげ、検討をくわえてきた。この検討から、信仰と欲望との重なり合いがいつそう鮮明に浮かび上がってきた。したがって、ジョゼフにおける信仰と欲望とを安易に切り離し、両者の単純な対立・葛藤の図式によって、ジョゼフの内面のドラマを理解することは決定的なあやまりである。ここにおいて二つの violence という仮説の正当性は完全にくずれる。ジョゼフにおいて信仰と欲望とが混じり合い、わかちがたくからまりあうことがあるという点を考慮にいれながら、ジョゼフの《violence》を再度分析することが是非とも必要な課題となってくるのである。

(15) 《violence》再々考

ジョゼフの内面のドラマを安易な二元論対立の図式のなかでとらえることが決定的なあやまりであることを指摘した。情熱・欲望のはげしさとしての《violence》をさらにもう一度、分析・考察するために、マック・アリスターへの暴力、プレローとの決闘、モイラ殺害の場面に焦点をあわせることにしよう。そしてこれらの場面を吟味するなかで、ジョゼフの《violence》の意味を明らかにしたい。というのも、ジョゼフの《violence》が顕在化するところは、モイラのベッドに身を投げる行為とか、モイラとの性行為といったように、ほかにもあるけれども、これら三つの場面は、ジョゼフの《violence》の深い、秘められた意味を内包しているように思われるからである。

a. マック・アリスターへの暴力

そこで最初に、第一部第十五章のマック・アリスターへの暴力を振り返ってみることにする。この暴力はマック・アリスターの不遜な、挑戦的な態度がひき金となって生じた。ジョゼフの部屋に無断で入り込んだマック・アリスターは、まずサイモンのものでジョゼ

フをからかう。サイモンは生前、ジョゼフにたいして報われぬ愛の情熱をいだいていたのであるが、ジョゼフの周囲の者たちは、サイモンのこの倒錯した感情を知っていた。それでマック・アリスターはジョゼフに、「サイモンは病氣なんだ」（七八頁）と教え、このほのめかしを理解しない彼に、「あいつ（キリグルー）なら君にフロイトにかんする大演説をきかせてくれるだろうさ」（七八頁）などと言つて馬鹿にする。それからマック・アリスターは、ジョゼフの宗教をあざける。マック・アリスターは皮肉をこめて、「君はぼくの魂を救うために、ぼくがここに居て、君の御意のままになるってことをどうして利用しないんだい？」（七八頁）と問い、そして淫売宿のことをにおわせながら、ジョゼフと一緒に来ないかと誘い、ジョゼフのベッドの上でみだらな仕草をする。この件りを引用することにしよう。

——ご婦人がたは学生どもにお酌をしてくれるんだ。そのあとと一緒にダンスという寸法さ。ジョー、君はどうやってやるか知りたいかい？

——君が何を言わんとしているのか、ぼくにはわからないよ。
——もちろんさ。でも今にわかるよ。

こう言ふと同時に、彼「マック・アリスター」はベッドの上で腰を左右に揺りうごかしはじめた。しかもその仕方はとても雄弁なものであつたので、ジョゼフには耳が燃え立つような気がした（七八頁）。

マック・アリスターはジョゼフにダンスの仕方を教示している。しかしベッドの上でからだをうごかしていることから、同時に性の交わりを暗示している。マック・アリスターの卑猥なふるまいを目のあたりにしたジョゼフは、「耳が燃え立つ」のを感じている。ここの「燃え立つ」(burn)という語は耳もとの血のざわめきを指し示す。だがこれとともに、ジョゼフの《violence》と関連する激怒の発作に彼がとらえられたことを示唆している。かくしてジョゼフは憤怒のなかで、腰にしめていた黒いベルトをはずし、このべ

ルトを用いてマック・アリスターをはげしく鞭打つのである(七八頁)。

先に、この場面から、ジョゼフの情熱・欲望のはげしさを読みとった。その理由として、第一に、ジョゼフの怒りが、抑圧された肉体的欲望と結びついていること、第二に、腕の自動性が観察されること、第三に、ジョゼフが自覚されない愛の対象であるプレローの身がわりとしてマック・アリスターを鞭打つたこと、第四に、マック・アリスターに暴力をふるったあと、ジョゼフが睡魔におそわれていること、を挙げた。これらの事項は、ジョゼフの《violence》が何よりもまず、情熱・欲望のはげしさを意味することを端的に示している。

けれども、ジョゼフの《violence》もしくは激怒は、ただ単に彼の情熱・欲望のはげしきのみに関係するのだろうか？ ジョゼフの怒りが欲望の屈折したあらわれであることはたしかだとしても、同時に、ここでの怒りが、自分の宗教を嘲笑し、ベッドの上で淫猥な仕草をしたマック・アリスターの傲岸な、挑発的な姿勢にたいする当然の反応でもあることは疑いようのない事実である。とすれば、ジョゼフの怒りは、彼の熱烈な信仰ともかかわっていることになる。ジョゼフが「皆殺しの天使(『Ange exterminateur』)(I・15、七七頁およびII・21、一六八頁)と渾名されるのも、ここからであろう。マック・アリスターを鞭打つたあと、「君は説教を望んでいた。これがそうなんだ」(七八頁)とジョゼフが言っていることを考え合わせて、マック・アリスターへの暴力は、宗教的な次元での処罰の意味を有しているとも認定することができる。

また、ここでのジョゼフの怒りは、肉なるものへの反撥あるいは彼の純粹志向ともかかわっているように思われる。この点において、マック・アリスターへの暴力は、キリグルーの前で『ロメオとジュリエット』の本をひき裂いた行為(I・12)と類似している。すでに述べたように、意味不明の箇所が猥褻なことを暗示しているとわかったとき、ジョゼフは「激怒」のなかで書物を「二つにひき裂いた」(七〇頁)。この「激怒」は欲望と結びついているとしても、肉体的なものへの反撥、ないしは純粹志向に立脚していた。マック・アリスターへの怒りもまた、同質のものであるだろう。マック・アリスターを鞭打つとき、『ロメオとジュリエット』の本をひき裂いた際と同様に、ジョゼフの内心では、肉体的高揚と宗教的高揚とは混じりあい、わかちがたくからみあっていると思われる。それ

ゆえ、ジョゼフの《violence》とは、ただ単に情熱・欲望のはげしさを意味するだけではない。それはまた、純粹志向が人間の肉体的現実と向かいあつて繰りひろげられたたかいはげしさでもあり、要するに、肉なるものとたたかうはげしさ、あるいは欲望とのたたかいはげしさを意味するとも考えられる。ジョゼフの欲望がえてして怒りにはけ口をもとめ、暴力というかたちをとつて発現するのも、ジョゼフの《violence》が欲望とのたたかいを包含しているからにほかならない。逆にいえば、ジョゼフの《violence》が二重の意味をもつからこそ、それが外在化するとき、まさしく、暴力のかたちをとらざるをえないのである。

ジョゼフの《violence》が欲望のはげしさとともに、欲望とのたたかいはげしさをも意味するという点から、先に仮説をたてたように、ジョゼフのうちに二つのviolenceを認めるのは致命的なあまりであることが再確認される。ジョゼフのうちにはただひとつの《violence》しかなく、二重の意味を有するこの《violence》が肉なるものへの志向のみならず、神への志向とも関係していると判断すべきである。実際、ジョゼフの信仰もしくは宗教は、彼の《violence》の影響を抜きにしては到底理解することはできない。マック・アリストアーへの暴力行為は、『ロメオとジュリエット』の本をひき裂くという行為と同じく、見方によれば、「皆殺しの天使」としてのジョゼフの熱狂的な信仰(Canatism)の具体的なあらわれだとうけとれる。すでに見たジョゼフの強烈な伝道熱も、欲望とのたたかいはげしさを内包する《violence》と表裏をなしているように思われる。結論を先取りしていえば、ジョゼフの信仰または宗教は、彼の《violence》それじたいによってかたち作られ、ささえられているのではないだろうか。

b. プレローとの決闘

次に、第一部第五章に置かれた、プレローとの決闘の場面を再検討してみよう。この決闘は、ジョゼフがプレローに同性愛的な感情をいだいているにもかかわらず、プレローがことさらジョゼフに挑戦的な姿勢をとつたことよつて誘発された。プレローの挑戦から二人の決闘に至るまでに、ジョゼフは怒りの激情(肉体的高揚)とキリスト教的な隣人愛あるいはゆるしの感情(宗教的高揚)とのあいだを揺れうごき、そしてついに激怒の発作に身をゆだねてプレローに襲いかかるのである(二四頁)。この格闘の場面を取りあげた際、まず、ジョゼフの怒りが、愛の感情が裏切られたことに根ざして、欲望のはげ口になつてゐること、次に、プレロー

に襲いかかるとき、ジョゼフが肉体の抵抗しがたい力に支配されていること、それから、プレローに暴力をふるうことによってジョゼフが性的・肉体的なよろこびを味わっていること、この三点から、この場面がジョゼフの情熱・欲望のはげしさとしての《Violence》を顕在化させているとみなした。

ところで、プレローから挑戦をうけたのちのジョゼフの怒りの感情が、時として、プレロー殺害の欲求によって表現されているという点は、ジョゼフの《Violence》を考察するうえで等閑に付すことができない。大学構内で学生たちの一人がジョゼフの赤毛をからかい、プレローがその冗談の責任をとり、「ぼくに会いたい方に知らせておくよ。ぼくは東アーケード街四十四番地に住んでいるんだ」(I・4、一五頁)と言ってジョゼフを挑発したとき、ジョゼフは、「どうしてこの男はこんなことを言うんだらう? (…)もしぼくが手を振りあげたら、こいつを殺してやるんだが」(一五頁)と考えている。また、下宿にもどったジョゼフは怒りのなかでプレローの挑発の言葉を思い出し、咀嚼しつつ、「もしけさがた、ぼくが君(プレロー)を殴っていたら、殺していたんだが」(I・4、一六頁)と心の中で言っている。「こいつを殺してやるんだが」(Je le tuerais)、「殺していたんだが」(Je t'aurais assommé)という思いは、ジョゼフが自覚していないとしても、プレロー殺害の欲求にかられていることを明示している。

プレロー殺害の欲求は、決闘の際にも見てとることができる。不意にプレローに飛びかかり、肉体的な「飢え」を一定程度みたしたジョゼフは、プレローの上で馬乗りになったままの体勢で、「もしその気になれば、卵を割るのと同じくらいかんたんに、君の頭に穴をあけることができるよ」(I・5、二四頁)と言いはなっている。この言葉から、プレロー殺害の欲求がジョゼフの内心で持続していることがうかがえる。そして殺害の欲求は、このあとの二人のやりとりからいっそう鮮明に浮かび上がってくる。すなわちプレローはジョゼフのことばに、「君は怖じ気づいているんだ」(二四頁)と返答し、「ルールに従ってたたかわなければ君の言うことを信じてないね」(二五頁)と応酬する。これにたいしてジョゼフは次のように反応する。

この言葉に、ジョゼフの両手は不意にプレローの頭をはなし、震えながら迷っているかのように首のまわりに置かれそうになっ

た。

——よせ！ とプレローは大声で言った。絞首刑になるぞ！（二五頁）

プレローの首にのびてくる、ジョゼフの手の動きと、「絞首刑になるぞ！」というプレローの言葉から、ジョゼフが無意識的にプレローを絞め殺そうとしていることが見てとれる。また、プレローは、たたいがおわってジョゼフから立ち去る間際、「君は人殺しだ」「君のなかには人殺しがひそんでいるんだ」（二六頁）と言いのこしている。この証言によっても明らかのように、ジョゼフは決闘の折、殺害の欲求をいだいてプレローと対峙し、行動している。

この事実によって、ジョゼフの《violence》はさらに新たな意味が付け加わることになる。《violence》とは欲望のはげしさ、欲望とたたかうはげしさを意味するだけでなく、さらには、欲望の対象を殺したいという欲求のはげしさをも意味するのではないだろうか。この点にかんして、作者グリーンは『日記』のなかで、プレローとの格闘の場面を問題にしつつ、「私の主人公（ジョゼフ）は、人殺しの狂おしい情熱をいだいている。これはたしかだ。彼は自分の欲するものすべてを殺したいと思っているのだ」と書いて（²⁹）いる。この見方はジョゼフの《violence》の核心をついている。《violence》とは、まさしく「人殺しの狂おしい情熱」であり、「欲するもの」を「殺したい」という欲求であろう。すでに述べたように、ジョゼフの《violence》は、彼の純粹志向が人間の肉体的現実と直面したときにひき起こすたたいのはげしさとして把握される。つまりジョゼフの《violence》は彼の純粹志向と緊密にかかわっているわけであるが、この純粹志向は当然のことながら欲望の対象を抹殺し、消滅させたいという願いを惹起せずにはおかない。なぜなら欲望の対象とは、とりもなおさず人間の肉体的現実にはかならないからだ。このようにジョゼフの《violence》は、欲望の対象を殺したいという欲求をもうちにふくんでいるのである。

かくしてプレローとの決闘の場面は、「君は人殺しだ」「君のなかには人殺しがひそんでいるんだ」というプレローの予言的言辞とともに、第二部第二十二章で語られるモイラ殺害を讀者に告知する役割をはたしているのではないだろうか。この決闘の場面は、ジョ

ゼフの《violence》が必然的に、避けられないかたちで、あるいは宿命的なかたちで彼を殺人者にしむける恐ろしさを有することを示すがゆえに、モイラとの肉体の交わりを経て、モイラ殺害へと至るジョゼフの運命を、その悲劇的な結末を予告していると思われる。作者グリーンは『モイラ』について、「ジョゼフとプレローの物語、それがこの本の真の主題だ」と述べている。グリーンがこのように解釈するとき、ジョゼフとプレローとの同性愛的な関係ないし感情の重要性を視野に入れていることはたしかであろう。しかし同時に、二人の決闘の場面にいわばすべてが語られていること、この場面にその後のジョゼフの悲劇的な運命が刻印されていることを考慮に入れているのではないだろうか。とすれば、第二部第二十一章・第二十二章で物語られるモイラとの性行為およびモイラ殺害は、第一部第五章のプレローとの決闘の場面の、必要な置き換えをほどこしたうえでの繰りかえし・蒸しかえしであるともうけとれる。

c. モイラ殺害

今度は、ジョゼフのさいごの《violence》の発現であるモイラ殺害の場面を再度分析することにしよう。ジョゼフは肉体と魂との葛藤の果てに、ついにモイラと性の交わりを結び、寝込んでしまう。そして目をさましたとき、傍らにしあわせそうに眠っているモイラを見いだす。ジョゼフは事の重大さに気づき、二人のあいだで起こったことを振り返る。

少しずつ、事の詳細が記憶のなかによみがえってきた。女は、二人がたおれた床の上で、それからこのベッドの上で、自分に哀願しながらもがいていた。それなのにあの突然の同意、あの理解しがたい放棄。女は急に屈服した、急にけだものようになったのだ……（Ⅱ・22、一七三頁）。

ジョゼフはモイラの不意の変容を思い出している。そしてモイラを評してキリグルーが言った、「ルーパー、牝狼」（Ⅱ・13、一三六頁）という言葉を想起し、「まさにそうなのだ、モイラは。そして愛とはまさにそれなのだ」（Ⅱ・22、一七三頁）と確認しつつ、変貌したモイラへの怒りをつのらせる。それからジョゼフはモイラに「起きろ」と命令する。モイラは「寒いわ」とつぶやく。この文

句をきいたジョゼフは突如豹変し、毛布を用いてモイラを絞殺する。この場面を再度読むことにしよう。(3)

——寒いだと、彼(ジョゼフ)は声を変えて言った。

そして床の上にすべり落ちた灰色のぶあつい毛布を両腕にいっぱいひろげて拾いあげ、急に若い女の顔の上には押しつけた。モイラは体を突然おどろかされたので、危うくベッドの外に投げ出されそうになった。だがジョゼフは全力でその大きな毛布のかたまりの下に彼女を抑えつけた(……)。

——寒いだと！ と彼は憤然として繰り返した。寒いだと、モイラ！

小さな体が異常なはげしさで一方から他の方向に向いた。非常な力が不意にモイラの体を動かしたので、ジョゼフはモイラの体が自分の手から逃れるのではないかと心配した。それで彼は両手をとて深く毛布の中に押し込んだ。そのため両手で毛布の厚みの下の顔かたちが認められた。

彼は、彼女の上で体を曲げて、苦しそうに息をしていた。つながりのない言葉が彼の口から洩れ出ていた。そしてある瞬間、彼は自分でも気づかずに涙を流した。彼女がまったく動かなくなったとき、彼は深い溜息をつき、毛布をひきはがした(一七三—七四頁)。

はじめに、この場面で、ジョゼフが怒りの人間と化していることに注目しておきたい。ジョゼフの怒りは「寒いだと」と繰り返して言うときの声の変化(「声を変えて」)、および憤りの口調(「憤然として」avec fureur)によつてたしかめることができる。ここで怒りもまた、まづもつて、情熱・欲望のはげしさとしての《violence》のあらわれと解することができる。モイラとの性行為によつても完全には消費されなかった、もしくは眠りによつて蓄積された情熱・欲望のエネルギーが怒りに結晶したとみなされる。ジョゼフの肉体のすさまじい力は、「全力で(……)彼女を抑えつけた」という表現や、抵抗するモイラからだが発揮する「異常なはげしさ」

(une violence extraordinaire)あるいは「非常な力」(une telle energie)によつてうかがうことができる。

しかしながら、ここでの怒りが欲望のはげ口だけにとどまらないことは言を俟たない。この怒りは明らかに肉体的現実遭遇したときの反撥をふくんでおり、ここでの欲望のはげしさには、マック・アリスターを鞭打つときそうであったように、肉なるものまたは欲望とたたかうはげしさと、そしてプレローとの決闘の際のように、欲望の対象を殺害したいという欲求のはげしさとが、渾然と混じりあっている。モイラ殺害は、三重の意味をもつ《violence》の完璧なあらわれである。したがって、ジョゼフの怒りは、自己を肉なるものに誘惑し、肉体の罪にまねいたモイラにたいしてぶちまけられた荒々しい感情であるし、同時にまた、肉体の欲望について屈してしまつた自己にたいしての猛烈な憤りを意味するかもしれない。モイラを絞め殺しつつ、ジョゼフは「涙を流し」ている。この涙には、肉欲の奴隷となり、欲望のなすがままになつてしまつたことへの悲しみと絶望の気持ちがかめられているだろう。ジョゼフを犯罪にみちびくもの、それはもちろん、肉の化身であるモイラ、というより、肉なるものそれじたいにたいする限りない反撥と憎悪である。だがジョゼフがモイラを殺すとき、彼は「欲望の人間」(II・20、一六〇頁)としての自己を責め、とり返しのつかない罪を犯してしまつた自分のからだを抹殺したいと願っているのではないだろうか。ジョゼフがモイラの首を絞めることによつて殺したいのは、欲望に支配された自分自身なのだと解することができる。この点にかんして、ジャック・プチは次のように言っている。

モイラを殺すとき、彼「ジョゼフ」ができることなら殺したいと願っているのは、彼の中に居るもう一人の人間、肉と欲望の人間なのではないだろうか。⁽³²⁾

ジャック・プチもまた、ジョゼフがモイラを殺すことによつて、同時に「欲望の人間」としての自己を殺したいのだと解釈している。それゆえ、ジョゼフが犯行におよぶとき、彼は悲しみと絶望のなかで自己処罰をこころみているのであろう。純粹志向を有するジョゼフにとつて、そうすることは、自己への忠実さをあかすための唯一の方途なのではないだろうか。肉の誘惑に負けたことへの反逆とし

て、自己を処罰し、自分の肉体と欲望をほろぼそうとすることで、ジョゼフは見うしなつた神をもとめ、その神のもとにたどりついたいと切願しているのではないだろうか。ジョゼフが犯罪のさなかにふと洩らす「つながらの言葉」は一種、祈りのようなものとみなすのが妥当であろう。ジョゼフは苦悩の涙のなかでの犯罪Ⅱ自己処罰によって、できることなら、欲望にひき裂かれ、盲目になつた自己をあるがままのかたちで神にささげたいのだと思われる。自己処罰は、ひたすらに純粹さをもとめる人間の、欲望に屈服し、罪をおかしたことへのせめてもの抵抗、たとえむなししいとしても可能なさいこの抵抗だともうけとれる⁽³⁷⁾。こうしてモイラ殺害は、ジョゼフの純粹志向が、そしてこれと深いかわりを有する彼の《Violence》がもたらす必然的帰結であり、結局、《Violence》をかかえて生きるジョゼフの宿命だと断定することができる。

(6) 犯罪後のジョゼフ

ここで、モイラ殺害後のジョゼフの行動の軌跡をかんたんにたどっておきたい。すでに述べたように、ジョゼフはモイラを絞殺したあと、しばらく眠りにおちいる。そして目覚めたジョゼフはモイラの亡骸をかかえて庭に運び出す。それから物置き用の板小屋に行き、シャベルを取り出し、そのシャベルで地面に穴を掘り、モイラの亡骸を埋める。第二部第二十二章は、死体遺棄を完了したジョゼフが自室にもどり、ふたたび眠るところでおわっている。

第二部第二十三章・第二十四章・第二十五章（最終章）は、モイラと肉体のあやまちを犯し、モイラを殺害した翌日のことを叙述している。第二十三章は、翌朝七時から正午までのことを語っている。ジョゼフは七時に起床し、デーヴィドとともに朝食をとり、いつものように授業に出かける。だが注意を集中することができないため、講義のおわつたあと、電車に乗ってまちなに行き、あてもなくさまよう。そして再度電車に乗り、大学にもどり、図書館で時をついやし、正午をむかえている。この第二十三章で二つの点が注意をひく。その第一は、ジョゼフが普段にもまして人びとのまなざしに敏感になっているという点である。

様々な人びとの注意がいつもより少し多めに自分に向けられているように彼には思われた。なるほど彼は髪の色で、いつでも人から眺められた。しかし今日ばかりは彼はそのことに耐えられなかった（一七八頁）。

このようにジョゼフは、人びとの投げかける視線に鋭敏になり、苦痛を覚えていた。ジョゼフが他人の視線を必要以上に意識するのは、ことわるまでもなく、モイラを殺したことでうしろ暗さがジョゼフを支配しているからにほかならない。しかし同時に、モイラと肉のあやまちを犯してしまったことでの罪悪感もまた作用しているであろう。道徳的な次元とともに宗教的なレベルでの有罪感が、ジョゼフにことさら他者を意識させていると思われる。

第二に気づくことは、この有罪感と関連して、ジョゼフが自分を見うしなっているという点である。このことは、デーヴィドとの朝食風景から看取することができる。

しばらくたって、彼（ジョゼフ）はデーヴィドと、いつものように二人きりで朝食をとっていた。そしてデーヴィドはやさしい声で彼に話しかけ、パンやコーヒーを取ってくれた。それなのに返事をし、食べているのは別の男だった。ジョゼフにとって何よりも奇妙に感じられたのは、自分がここにいるのに、別の人間が自分にかわって行動していること、ある意味で自分自身が存在しないことだった（一七七・一七八頁）。

ジョゼフが自分を見うしなっていることは、「返事をし、食べているのは別の男だった」という言い方や、「別の人間が自分にかわって行動している」という感慨から読みとることができる。ジョゼフにとって、自己はもはや自分じしんではなく、他者のごときものと化してしまっている。ジョゼフの自己喪失は、まちの彷徨の描写からもかいま見ることができている。

まるで彼の両足はひとりにかわるがわる前に踏みだされ、夢の中のように、思うがままに彼を導いていくようであった。自

分が、自分の体がどうにもならないというのは、奇妙なことだった（一八〇頁）。

この一節ではへ足への自動性が観察される。ジョゼフの両足は、彼の意思とはかかわりなく、「ひとりでに」うごき、勝手に彼のからだを運んでいる。このへ足への自動性は、もちろん抑圧された欲望とは関係ない。そうではなく、確固とした自我意識がうしなわれ、日常性の感覚が麻痺しているからこそ、足が自動的に機能しているような印象を与えるのであろう。「夢の中でのように」という表現は、ジョゼフが夢遊状態にいたること、したがって、彼が自己を喪失していることを明示している。このように第二部第二十三章では、ジョゼフの罪悪感と自己喪失とが、際立った事実として注目される。

第二部第二十四章は、ジョゼフとプレローとのやりとりを記述している。ジョゼフが図書館を出て、体育館に向かって歩いている折、プレローが彼を呼びとめる。このときジョゼフは、「目をさませ！（…）君は屋根のへりを歩いている夢遊病者のようじゃないか」（一八六頁）とプレローが言っているように、依然として夢遊状態にあり、自分を見うしなっている。だがプレローの出現によって、ジョゼフは事態の変化に直面し、きびしい現実のなかにひきもどされる。プレローはジョゼフの犯罪を察知し、ジョゼフを助けるためにやってきた。プレローはジョゼフに、モイラがジョゼフの部屋に前日の晩、行ったことは、デーヴィドをのぞけば誰でも知っていると伝える。しかし翌朝になってもモイラがデア夫人のところにもどらなかつたため、友人のセリナがファーガスン夫人の家を訪ねたこと、そのあと皆でモイラの行方を探したがみつからないので、セリナが警察に通報したこと、を知らせる。そしてプレローはジョゼフに残された道は二つしかないと教える。自首するか、さもなければ、逃亡するか、である。プレローは、もしジョゼフに逃亡する気があるならば、その手助けをすと言明し、船に乗って国外へ脱出するまでの方策を滔々とまくしたて、提案を受けられるかどうかの決断をせまる。プレローがどうしてジョゼフを助けて逃亡させようとするか、という点については、次章で分析するので、ここではジョゼフの対応のみを指摘しておきたい。ジョゼフはしばらく逡巡するけれども、とうとう「わかっぬよ（Facepale）」（一八八頁）とこたえてプレローの誘いにのる。プレローは、「言われたとおりになれば、君はたすかるんだ」（一八八頁）と言い、ジョゼフと握手

して立ち去る。

第二部第二十五章では、プレローと別れたあとのジョゼフの行動が記述される。ジョゼフは、「部屋にもどるな」(一九〇頁)というプレローの忠告を思い出しながらも、結局、人目をしのんでファーガスン夫人の家に帰り、デーヴィドの部屋の窓をたたく。デーヴィドはジョゼフを窓から部屋の中に入れ、ベッドの上に横にならせる。ジョゼフは早速、モイラを殺害したことをデーヴィドに告白する。⁽³⁶⁾デーヴィドは何も言わず、ジョゼフを眠らせる。そして自分は、人が入ってくるのを妨げるためにドアをおしつけて置いた椅子に腰かけ、ポケットから小さな聖書を取りだして読もうとする。しかしからだはげしくふるえるので、デーヴィドは聖書を落としてしまふ。そのあとのデーヴィドのふるまいを見ておこう。

それからくずれるようにひざまずき、彼は祈りの文句をとなえようとした。それでいて、あたかも誰かに肩から押さえつけられたかのように、不意に床に顔を当ててその場にうち伏してしまった。

ようやく彼が立ちあがったとき、彼の最初の関心事は、タオルの端を水に濡らし、顔を拭って涙の跡かたを消し去ることだった(一九一頁)。

デーヴィドが悲しみの涙にかきくれ、打ちふるえていることは、一目瞭然である。この場面は、デーヴィドのジョゼフにたいする篤い友情を刻み込むところとして読者に深い感銘を与えずにはおかない。

さて、ジョゼフは午後四時すぎに目をさまし、プレローとの約束を思い出す。ジョゼフをノーフォーク(Norfolk)の港まで運んでいく車に乗るため、峡谷の待ち合わせの場所におもむく時刻が近づいている。⁽³⁷⁾だがこの時点において、ジョゼフは逃亡することを断念している。このことは、デーヴィドとの問答からたしかめることができる。

——これから君はどうするつもりなんだ？ 先程、君の部屋に人が来ていた。それから家のそばの通りで誰かがいるのを見かけたよ。

——ぼくはどうしなければならぬかはわかっているよ、とジョゼフはオーバーを着ながら言った。もう沢山だ。ぼくはすべてを自由するつもりだよ。(一九二頁)。

ここで、「ぼくはすべてを自由するつもりだよ」(Je vais tout dire.)という言葉から、ジョゼフが警察に自首しに行く意向をかためていることが察知される。それと、デーヴィドの話の中で、ジョゼフの部屋に「人」(un)が入り、近くの通りに「誰か」(quelqu'un)がいたことがふれられており、注意をひく。この「人」「誰か」については、のちほど問題にしたい。ともかくジョゼフは、「そんなことはできなかつた(ce n'était pas possible)」(一九三頁)というプレローへの伝言をデーヴィドに託して、ファーガスン夫人の家をあとにする。この伝言のなかの「そんなこと」が、プレローの計画した逃亡を指すことは疑いを容れない。出発したジョゼフは覚悟をきめて通りを歩く。するとまもなく「ひとりの男」がジョゼフのほうにやってくる。作品『モイラ』は、

通りの端から、ひとりの男が彼に向かって歩いてきた(Au bout de la rue, un homme vint vers lui.) (一九三頁)。

という一文でおわっている。

では、「通りの端」にいる「ひとりの男」とは、いったい誰のことなのであろうか。先にデーヴィドの話に出てきた「人」あるいは「誰か」にかんする考察とあわせて、この点について、あらゆる解釈の可能性をさぐってみたい。まず第一に考えられるのは、この「男」がジョゼフとはなんの関係もない人間であるということである。この場合、読者が本のさいこの頁を読みおえ、本を閉じたあと、ジョゼフはこの「男」と擦れちがい、警察にひとりそのまま向かうことになる。しかしながら、この見方は現実の人生にはかなりあ

ではまるとしても、虚構の世界にたいしてはあまり適合性をもたないように思われる。なぜなら、小説が「ひとりの男が彼に向かつて歩いてきた」という文でおわる以上、やはりこの「男」が主人公のジョゼフとなんらかのかかわりを有する人物であると理解するのがまともだし、自然だからである。

そこで第二の解釈が生じる。この「男」をプレローの使者とみなす解釈である。第二部第二十四章でプレローはジョゼフの逃亡を強く望んでいた。それでプレローがジョゼフの自首を阻止し、国外脱出を幫助するために、彼に使者をさしむけることは充分あり得る。また、ジョゼフの帰宅以前に部屋に入った「人」が、モイラの安否をたしかめる官憲の人物であることは動かせない事実だとしても、家の近辺にいた「誰か」のほうは、ジョゼフの逮捕をはばむためにプレローが放った使者だとうけとることは可能であろう。あるいは、この「誰か」はジョゼフの行方を追う刑事で、さいごにあらわれる「男」だけがプレローの使者だと考えることもできる。いずれにせよ、問題の「男」をプレローの使者だと解釈すると、読者が本を閉じたあとのジョゼフはどのようなようになるであろうか。ジョゼフには二つの道がひらかれている。一つは、「男」の援助をはねつけて自分の意思をつらぬき、決然と警察に自首しに行く道であり、もうひとつは、自首する意図を放棄し、プレローとの約束をまもって「男」の誘導にしたがって逃亡をくわだてる道である。とくにジョゼフが後者を選択したと仮定すれば、『モイラ』の次に書かれた小説『人みな夜にあつて』との不可分のつながりができ、この仮定は魅力的な読解となる。すなわち『人みな夜にあつて』は『モイラ』の連作として、ジョゼフと同様に信仰をもちながらも、たえず肉体的欲望に負け、快楽にふける主人公ウィルフレッドの生き方を物語っており、それゆえ、ウィルフレッドは、モイラを殺したあとのジョゼフが自由に生きのびていたらそうであつたかもしれない姿を表現しているとうけとれる。『人みな夜にあつて』との関連性を考慮に入れるとき、問題の「男」をプレローの使者とみなし、ジョゼフが逃亡したと解する読みは、かなり整合性のあるものとなる。

けれどもこの解釈も相当の問題をはらんでいる。なぜなら、『人みな夜にあつて』が『モイラ』と連作をなすとしても、『モイラ』はあくまで独立した一箇の宇宙を形成し、提示しており、固有の作品ととらえるべきだからである。その場合、「通りの端」の「男」をプレローの使者だと考えると、この「男」は自首しようとしているジョゼフの意思に反して出現することになり、作品はきわめて不自然で、不合理なおわり方になってしまう。ここから、第三の解釈が成り立つ。ジョゼフの帰宅まえに部屋に入りこんだ「人」および

家の近くにいた「誰か」とともに、「男」を警察の人間とみる解釈である。そして大部分の読者も、この「誰か」ならびに「男」を刑事だと判断しているのではないだろうか。⁽⁴⁾このように認定すると、「男」はジョゼフの自首の決意と合致・呼応するかたちで登場することになり、作品は非常に真実らしくおわるといえる。したがって、第三の解釈がもっとも妥当なものとして評価することができる。

以上のように、モイラ殺害後のジョゼフの行動の軌跡を手みじかにたどってきた。有罪感をいただき、自己を喪失しながらも、ジョゼフがプレローとの出会いによって、逃亡か自首かの二者択一をせまられ、混乱のはてに警察にむかうまでのありさまを見てきた。今度は、右に述べたことを前提としつつ、作品のなかでも提起されている、ジョゼフの宗教的な救いの問題を検討することにしよう。

(7) 救いの問題

ジョゼフは肉体の罪をおかし、さらに人殺しと化す以前、しきりに人びとの救いのことに思いをはせていた。純粹志向を有し、二元論的世界観をもつジョゼフにおいては、「この世は神から見棄てられている」(I・14、七五頁)のだという認識が圧倒的に優勢であり、この認識が、すでに検討した伝道熱をもたらししていた。ジョゼフはサイモンの死を知ったとき、「サイモンのために祈るのはこれからは無駄なことだ。サイモンはもう裁かれているのだ」(II・6、一〇四頁)と考えている。二つのあやまちをおかすまでのジョゼフの最大の関心事は救いの問題であったといっても過言ではないだろう。では、ジョゼフじしんは救われるのだろうか。あるいは救われないのだろうか。この問いは、『モイラ』を読みおえた大方の読者がいなく素朴な疑問であると思われる。

この点に関連して、救いか滅びかについての裁きをくだすべき当事者の神が、この作品においてはほとんど登場しないことを、はじめに指摘しておきたい。⁽⁴⁾第二部第二十三章のエピグラフとして、ロバート・ブラウニング(Robert Browning)の、「されど神は一言も洩らし給わず」(一七七頁)という詩句がかかげられていることは象徴的である。作者グリーンも『モイラ』を評して、「この小説の中で、神は話すことはない。というのも神は小説の登場人物ではないし、それに、一人の人間の人生において神が姿をあらわすことはきわめて稀であるから」と述べているように、神の沈黙さらには神の不在が、この小説の基調となっている。それゆえ、ジョゼフが救

われるか否か、についての絶対的な確証を得ることは困難であるし、不可能であるときさえいえる。

しかしながら、作品における神の沈黙はまさしくそれじたいによって、逆に神に語ってほしいという願いを読者にいだかせるし、また、神の不在は逆に神が存在してほしい、神の愛がジョゼフにそがれてほしいという熱望をかきたてるにちがいない。第二部第二十章において、ジョゼフからモイラ殺害の告白をきいたとき、デーヴィドが流す悲しみの涙はもちろんジョゼフへの篤い友情に根ざしている。しかしこの涙には、ジョゼフほどの熱烈な信仰をもつ人間がどうして人殺しをしなければならなかったのか、という無念さの感情が、さらにくわえて、神の沈黙にたいする悲しみとともに、ジョゼフの救いを切望する気持ちがかめられているはずである。そこで以下において、ジョゼフの救いの可能性を示すと思われる若干のしるしを取りあげ、検証してみたい。

まず最初に、へ雪のイマージュを分析することからはじめよう。へ雪は、作品において、第二部第二十章の時点、ジョゼフが肉体のあやまちをおかす前、つまりジョゼフがデーヴィドに伝道熱を打ち明けるときから見いだされる。ジョゼフが熱狂的な信仰を披瀝しはじめた際、デーヴィドは外のへ雪に注意をうながしている。

——ごらん、雪が降っているよ。

たしかに、細かい雪片が、かろうじて見わけられる黒い木の枝々のあいだを、灰色の空からゆっくりと舞いおりていた（Ⅱ・20、一五八頁）。

このへ雪は、第二十一章・第二十二章を経て、第二十三章の途中、翌朝の九時十五分まで降りつづいている。第二十三章の、雪にかんする記述を見ておこう。

外はもはや雪は降っていないなかった。（…）ジョゼフが教室の中に入ったとき、まだ雪はふっていた。しかしほんのしばらく前から、もう雪はふりやんでいた。そしてジョゼフの頭の中では、二度も十度も二十度も、その意味がすっかり会得されるまで、この

へ雪がやんだ」という文句が繰り返しつぶやかれた。幾時間も幾時間も雪は降っていたのだ。そして今ややんでしまった。(…)
幾時間も雪が……。昨日の四時から今朝の九時十五分まで(一七八頁)。

このようにへ雪は、ジョゼフが二つのあやまちを犯した日の午後四時から、翌朝の九時十五分まで降っている。ここで重要なのは、第二十一章・第二十二章の時点においても、言いかえれば、ジョゼフが肉体の欲望に屈したときにも、モイラを殺した瞬間にも、外ではへ雪が降っているはずだという点である。事実、第二十二章でも、ジョゼフがモイラの死体を土の中に埋めるとき、へ雪がふりしきっており、へ雪の描写を読むことができる。

彼「ジョゼフ」の頭の上から、樹々の枝々のあいだから、斑点のような雪が数かぎりなく彼のほうに舞い落ちてきた。彼は思った、へもしこのまま雪が降りつづくようなら、ぼくは助かる」と(一七六頁)。

この一節で、「もしこのまま雪が降りつづくようなら、ぼくは助かる」とジョゼフが考えている点は注目値する。なぜジョゼフはそう考えるのか。ことわるまでもなく、降りしきることで積もっていくへ雪が、モイラの屍骸を、ということはずなわち、ジョゼフの犯罪を覆い隠してくれるからである。モイラを殺害した日の翌朝、ジョゼフが外のへ雪に心をうばわれているのも、ひとつには、へ雪が彼の罪跡を掩蔽するからにほかならない。とはいえ、へ雪と「ぼくは助かる」(Je suis sauvé)という思いとは、このような地上的な次元にとどまらない、深い意味をも有しているように思われる。当然のことながら、《Je suis sauvé》という表現は「助かる」だけでなく「救われる」と訳すこともでき、宗教的な救いを問題にする際にも使われる。そしてへ雪は、その白という色彩が連想させる清らかさから、汚れた欲望と罪とを洗いきよめ、浄化するはたらきになっているのではないだろうか。遠藤周作氏は『モイラ』におけるこの箇所^(註)に言及しつつ、へ雪のもつ秘められた意味をこう論じている。

このまま雪が降り続くようならば、僕は助かる。それはたんに雪がモイラの死体をかくしてくれるという意味だけではないでしょう。雪はこの場面、神の恩寵をも意味しています。地上のよごれたものを純白にする雪、それは人々の泪、人々の苦しみ、黒い染みをきよめる聖母マリアの祈りを思わせます。⁽⁴⁴⁾

この文章を読んでただちにわかるように、遠藤周作氏もまた、「助かる」という言い方と雪とを、地上的なレベルだけではなく、宗教的な次元で理解している。しかしながら、へ雪を「神の恩寵」とみなすのは、少し早計であり、断定的すぎると思われる。なぜなら降雪そのものは、あくまで単なる自然現象にすぎないからだ。けれども、ジョゼフがモイラの亡骸を埋めるとき、暗闇のなかで、うす白い光彩をはなちながら降るへ雪は、洗いきよめ、浄化するというその機能を考慮すれば、もしかしてジョゼフは救われるかもしれないという希望の光を投げかけているとみなせるのではないだろうか。また、へ雪は、第二十三章で降りやんだあとも、あちこちで積もったままのこり、その白く反射する光を最終章におけるまで投げかけている。⁽⁴⁵⁾ かくしてへ雪が放つ希望の光は、作品においてさいごまでジョゼフを照らしていると判断することができる。

次に、デーヴィドの証言を分析したい。ただ、それに先だって、デーヴィドが作品の中でいかなる位置を占めるのかを明らかにしておく必要があるだろう。すでに一部分は引用しているが、作者グリーンは、『モイラ』におけるデーヴィドの登場について、次のように解釈している。

デーヴィドの割り込みは（…）摂理的である。その割り込みがジョゼフの運命を変容させ、淫蕩のメカニズムを打ち砕いている。⁽⁴⁶⁾
という意味において。

ここでグリーンは二つのことを指摘している。一つは、ジョゼフの人生におけるデーヴィドの介入が神の意向にそったものであるという点であり、もうひとつは、ジョゼフが肉なるもののはうに向かい、欲望に身をゆだねることをデーヴィドがはばんでいるという点

である。しかしあとの指摘は反論の余地がある。たしかにデーヴィドはジョゼフと同じく敬虔なキリスト教信仰をもち、ギリシア語の勉強を手伝ったり、下宿を変えさせたりすることによって、一見、ジョゼフを神のほうに歩ませているようにみえる。だが第一章第三節で論証したように、デーヴィドは世界観、宗教観の差異によって、そして無能な confessor であるがために、ジョゼフを肉なるもの、ひいてはモイラのほうに押しやっている。それどころか、『オセロ』が収録された、シェークスピアの本を贈り、また、シャベルの置いてある黒い板小屋に案内することで、ジョゼフを犯罪にも誘導している。したがって、デーヴィドの介入は「淫蕩のメカニズムを打ち砕いている」とはいえないし、ジョゼフが二つの過失を犯すことを、デーヴィドがふせこうとしているともみなせない。逆にデーヴィドはジョゼフの悲劇的な運命の形成に積極的に参与している。

ところが、グリーンはデーヴィドの介入を神の摂理によるものと理解している。この解釈はたしかに、「淫蕩のメカニズムを打ち砕く」という点を前提としている。しかしデーヴィドはそれでもやはり、信仰に生きるジョゼフの唯一の同伴者であることを考えれば、前提事項を欠いてもこの解釈は相変わらず有効であり、動かしがたいように思われる。とすれば、ジョゼフの運命は神によって予定され、神の意志にもとづくものであるという見方が成り立つ。そしてこのこととともに、「デーヴィドの割り込み」が「摂理的」であるとすれば、⁽⁸⁸⁾ 見解をおしすすめるならば、デーヴィドはジョゼフの救いの問題にかんじての、神の代弁者であるとみなしうるのではないだろうか。同じことであるが、ジョゼフの救いの問題についてのデーヴィドの証言は、神がデーヴィドの口をかりて語ったことばでもあると受けとれる。しかしここまで考えるのは早呑みこみであるかもしれない。というのも、デーヴィドが神の代弁者であるかどうかは実際のところ、明確にはわからないし、デーヴィドの証言は、ただ単に、ジョゼフの救いへの、彼の、あるいは作者グリーン⁽⁸⁹⁾の願い・祈りがこめられたものにはすぎないとも了解されるからだ。とはいえ、デーヴィドの言葉が、依然として、神のことばになる可能性をはらんでいることだけはたしかである。このことを念頭に置いて、デーヴィドの証言を見ていきたい。

ジョゼフの救いにかんするデーヴィドの証言は、第二部第二十五章において見いだすことができる。⁽⁹⁰⁾ すなわち、ジョゼフが警察に自首しに行くために出発する直前、二人がかわした会話の中に認められるのであるが、あわせてジョゼフの反応あるいは姿勢にも注意を

私いつつ検討することにしよう。二人は、ジョゼフがおちいった今の事態を踏まえて、次のように語りあっている。

——どうしてこんなことになったんだらう？ と彼〔ジョゼフ〕は訊いた。

デーヴィドは首を横に振った。

——わからないよ、と彼はつぶやいた。でも神さまは時として赦されることがあるんだ……。

——神の話はよそう、とジョゼフは不意にいつもとは違った声で言った。

(…)

——今後ぼくは、と彼〔ジョゼフ〕は靴の紐を結びながら言った、こうしたことすべてを胸におさめて生きていくよ(一九二頁)。

この対話のなかで、デーヴィドの、「神さまは時として赦されることがあるんだ」という言葉が注意をひく。これは言うまでもなく、二つのあやまちを犯したにもかかわらず、ジョゼフが救われるであろうことを予想した重大な証言である。だがここで、デーヴィドの発言にもまして注目されるのは、ジョゼフが「神の話はよそう」と言って、デーヴィドの話をさえぎり、デーヴィドの意見に少しも耳をかそうとしないという点である。ジョゼフは、モイラを相手に肉体の罪におちいる前、自分が神から召され、選ばれた人間なのだという意識をいっていた。ジョゼフの伝道熱は、強烈な選民意識によってささえられていた。しかしながら、この選民意識は二つの過失をおかすことによって完全に粉碎されたといえよう。ジョゼフはつみびとの意識をいだがゆえに、デーヴィドの言葉に耳を傾けないのちがいない。二つの過失の体験を経て、自分が選ばれ、救われるに値しない人間なのだということを痛感しているからこそ、ジョゼフはデーヴィドの発言を無視するのであろう。とはいえ、ほんとうの意味での救いへの道は、傲慢とも形容できる選民意識ではなく、深刻なつみびと意識をもった時点からはじまるのではないだろうか。そして救いが達成されるためには、つみびととしての自己を全面的に神にゆだね、神のゆるしを真摯に希求する態度が必要なのかもしれない。ジョゼフには、自己を断罪することはあっても、神のゆるしをもとめる姿勢はない。しかしジョゼフが「今後ぼくは、(…)こうしたことすべてを胸におさめて生きていくよ」と言うこと

き、彼の内心では、選ばれた人ではなく、一人のつみびととして謙虚に生きていく決意が固められているはずである。したがって、この瞬間から、救いに向かつての新たな生のいとなみが始まったともみなしうる。

デーヴィドとジョゼフの会話の続きを引用することにしよう。

デーヴィド、君はぼくと同じことを信じている。キリストは人を裁くのを禁じられたこと(52)を、君はおぼえているかい？
「ぼくは君を裁かないよ、一度も君を裁いたことはないよ、とデーヴィドは熱烈さと一種の性急さをこめて答えた。ぼくはいつでも、君がぼくよりも値打ちがある人間だと信じてきた。今でもそう信じているよ。(一九二頁)。

さいごの、「ぼくはいつでも、君がぼくよりも値打ちがある人間だと信じてきた。今でもそう信じているよ」という言葉もまた、看過できない重要な証言である。この言葉からわかるように、デーヴィドはジョゼフとジョゼフの生き方とを、終始一貫して評価している。その理由は、ジョゼフが純粹さをもとめて、デーヴィド以上に、そして誰より以上に、罪(肉なるもの)とたたかってきたという点に存する。デーヴィドにとって、ジョゼフがたたかいに負けたことは問題ではない。たとえ敗北することになるとしても、罪(肉)との争闘を徹底的に生きる者は評価すべき人間、救われるに値する人間だと、デーヴィドは考えているのであろう。この見方は作者グリーンが共有しうるものである。グリーンは『日記』のなかで、「おそらく(…)重要なことは、勝つことではなくて死ぬまでたたかうことなのだ(53)」と書き、あるいはまた、「大事なものは、たとえそのたびごとに敗れるとしても、たたかうことなのだ。受け入れ、同意することは、おぞましいことだ(54)」と述べている。ここでのたたかいが、肉なるものあるいは欲望との闘争を意味することは言を俟たない。グリーンは、勝敗を度外視したたたかいの重要性を見きわめている。さらにグリーンは、「思うに必要なことは、少なくとも葛藤があるということである。たたかいを拒むとき、心の静けさのようなものが得られる。しかしそのときは、神は去ってしまうのだ(55)」と語り、肉体と魂、欲望と信仰との相剋の大切さを確認するとともに、たたかう姿勢を放棄して、心の平安を得ることが、神を見うしなうことにつながると判断している。逆に言えば、肉なるものとの争いによってもたらされる苦悩と内的な混乱の中にしか救いはありえ

ないのだと、グリーンはみなしている。デーヴィドの証言は、作者グリーンのこうした見解を色濃く反映しているといえよう。

さて、デーヴィドはさいごに、「ぼくはちっばけな牧師にしかないだろう。でも君はといえば……」（一九二頁）と述べ、中断したことを言いつなぐかわりに、ジョゼフの胸に手を置き、ジョゼフの出発を見送っている。胸に手を置くという仕草についてはのちに取りあげるので、ここではデーヴィドの中途半端な言葉だけを問題にしたい。いったい、デーヴィドは、「でも君はといえば」

(Mais toi)のあとに何を言いたかったのであろうか。遠藤周作氏は、グリーンの『日記』の中の、「二つの形でしか人間の志向がない」という事が私にはよくわかった。それは神に没入する人間になるか、淫乱者になるかである。なぜなら両者とも極限にまで走り、ともにそれぞれの形で絶対的なものを志向するからである」という文章を援用しつつ、次のように解釈している。

「しかし君は……聖者になれる人だ」とデーヴィドは言いたかったのです。(…)たしかに聖者になれる人はひよっとするとすさまじい淫乱な人間になる人なのかもしれません。

このように遠藤周作氏は、「しかし君は」(Mais toi)のあとにくる言葉を「聖者になれる人だ」とみなしている。しかしながら、「聖者」それ自体だと理解し、Mais toiのあとにはHes en saint.ということばが続くと考えるのが妥当であろう。なぜなら、聖者こそ、肉なるものまたは欲望と、誰よりもはげしくたたかうがゆえに、もつとも淫乱な人間でありうるかもしれないからだ。『モイラ』のジョゼフの場合がまさしくそうであるように、人は宗教的高揚の頂点にあるとき、もつともはげしい肉の誘惑に遭遇する危険にさらされるのである。たしかに、一方では、聖者あるいは「神に没入する人間」(de Hystique)と「淫乱者」(de debauché)とは絶対を志向するという点で類縁性をもつという議論は正当である。しかし他方では、グリーンが『日記』の中で、「聖者がつみびとの心のなかで、つみびとが聖者の心のなかで動きまわっている。これが人間の条件だ」と書き、また、「われわれの各々の内心には、つみびとと聖者とが棲んでいるのだ」と言っているように、人間が同時に「聖者」への志向と「つみびと」への志向とをはらんでいることもまた真実な

のだ。ここでの「つみびと」とは淫乱者の同義語であると考えて差しつかえない。とすれば、聖者とは淫乱者のことであり、逆に、淫乱者こそ聖者でありうる。要するに、聖者か淫乱者か、ではなく、聖者でありかつ淫乱者であるということなのである。聖なるものは汚れたものと隣接しているというより、汚れたものの中にこそ見いだされるものなのかもしれない。それゆえ、デーヴィドの言いたかった言葉を、「聖者になれる人だ」とみなすのではなく、「聖者だ」と考えるほうがいっそう適切なのである。

今度は、作品のなかに挿入された聖書の一節に目を向けてみたい。第二部第十七章において、デーヴィドは、ジョゼフが『ロメオとジュリエット』の本をやぶいたことをキリグルーから聞き知って、削除版のシェークスピアの書物を友情の記念としてジョゼフに贈ることにする。⁽⁶²⁾ その際、デーヴィドは見返しの頁に、二人の名と、一九二〇年十一月二十五日の日付とともに、何か聖書の文句を書きこみたいと思う。しかし適当な文句が思いつかばないのでジョゼフに相談する。するとジョゼフは靈感に打たれたかのように、不意に次の文句を叫ぶ。

たとえあなたの心があなたを責めるとしても、神はあなたのこころよりも大いなり(Di votre cœur vous condanne, Dieu est plus grand que votre cœur) (一四七頁)。

これは「ヨハネの第一の手紙」第三章第二十節の文句である。⁽⁶⁴⁾ ジョゼフがこの文句を口にするのは、自己の欲望に有罪感をいだき、それだけになおさら、救いを、また神の愛を切実に希求しているからにはほかならない。げんに、ジョゼフはこのあと、「この言葉はほかに答えてくれているんだ」(一四七頁)と説明し、デーヴィドに自らの肉体的苦悩とモイラのことを告白している。第二部第十七章は、デーヴィドが本の見返しの頁に書きこんだ聖書の一節を、ジョゼフが自分に言い聞かせるように朗読するところでおわっている。⁽⁶⁵⁾

右に引用した「ヨハネの第一の手紙」の中の一節は、第二部第十八章でさらにもう一度出てくる。ジョゼフはデーヴィドと別れたあと、自室で早速、デーヴィドがくれたシェークスピアの本をひもとぎ、さいごに、デーヴィドが聖書の文句をしるした頁に立ちかえる。

頁を逆方向にめくると、彼（ジョゼフ）は、デーヴィドの書いたいくらかの言葉が記入されている最初の頁にたどり着いた。そして彼は、目がぼんやりとするまで、その言葉をみつめた。文字は目の前でゆらめいていた。へたとえあなたの心があなたを責めるとしても、神はあなたの心よりも大いなり。彼はそつと本に顔を近づけ、愛された弟子（ヨハネ）の言葉の上に唇をあてた（一五一頁）。

ジョゼフは聖書の一節を「目がぼんやりする」まで、また、「文字」が「ゆらめく」まで凝視している。ではなぜ「目がぼんやり」とし、「文字」が「ゆらめく」のだろうか。それは目の疲労によるものではもうとうない。おそらく、この一節を読んでジョゼフが深く感動し、目に涙があふれたからであろう。したがって、ジョゼフが救いを、あるいは神の愛をもとめる気持ちはこの時点においてもきわめて強く、痛切なのである。

このように、『モイラ』において、「ヨハネの第一の手紙」からの引用は、合わせて三度なされている。そしてさらには、第二部第二十五章における、ジョゼフと別れる間際のデーヴィドの仕草も、この聖書の言葉との関連で理解することができるのではないだろうか。すでに指摘したように、デーヴィドはさいごに、「ぼくはちっぴけな牧師にしかならないだろう。でも君はといえは……」（一九二頁）と言い、「君はといえは」のあとに続く言葉を付け加えるかわりに、ジョゼフの胸に手を置くという仕草をしていた。この仕草をすることによってデーヴィドは、「たとえあなたの心があなたを責めるとしても、神はあなたの心よりも大いなり」という言葉をジョゼフに思い出させたかったのではないだろうか。こう考えると、この聖書の一節は、第二部第十七章以降の作品において、ライトモチーフを形成しているときえみることができるといえる。

ところで、この聖書の文句が意味するものは、たとえひとり人間がなんらかのせいで自分を責め、苦しみにさいなまされることがあるとしても、神は人間の心よりもはるかに大きな器の持ち主なのであるから、その苦しむ人に深い愛とあわれみとをそそいでくださるのだ、ということであろう。あるいは逆に考えて、苦しむ人間こそ、神の愛とめぐみを受けるにふさわしく、救われる値打ちがあるのだということも、この言葉は語っているのかもしれない。この点、この聖書の一節は、グリーンが若い頃に書いた『フランス・カト

リック信者たちに対するパンフレット』(一九二四)の中の次の考え、すなわち、「神につかえること、それは苦しむことだ」(I、八九二頁)という見方についている。この一節は『モイラ』においては、モイラへの情熱・欲望にとらえられたことで、さらには、肉体のあやまちを犯したことでジョゼフがいだく苦悩にたいする聖なる返答としてこだましているように思われる。それゆえ、この聖書の言葉は、作品のなかでことのほか大きな重みをもって横たわり、へ雪のイマージュ、デーヴィドの証言と同様に、否、それ以上に、ジョゼフの救いにかんして希望の光を投げかけていると判定しうる。

ジョゼフの救いの問題に関連して、へ雪のイマージュ、デーヴィドの証言、「ヨハネの第一の手紙」第三章第二十節の言葉を検討してきた。ここで、以上のことを踏まえて、作品最終章の、ジョゼフがファーンガス夫人の家をあとにするところを再度瞥見しておきたい。ジョゼフは、自分がつみびとであることを認め、警察に自首することを決意するのであるが、三つの角度からの分析によって浮かび上がってきた、ジョゼフの救いの可能性、ジョゼフの生に投げかける希望の光を視野に入れるならば、ジョゼフが警察に向かうとき、彼は自分の意図を越えて、同時に神のほうにおもむいているといえるのではないだろうか。ジョゼフは、この世の裁きに身をゆだねるためとともに、この世の次元を超越したいと高き者、神の法廷に向くために、神の大いなる愛によってさばかれるために、家を出発するのではないだろうか。とすれば、「通りの端から、ひとりの男が彼に向かって歩いてきた」(II・25、一九三頁)という、作品のさいごの文における「ひとりの男」とは、ジョゼフを逮捕するために近づく刑事であるばかりでなく、ジョゼフを迎えにやってくる神の使者だと解することもできるように思われる。

(∞) 《violence》と信仰との関連

ジョゼフの《violence》に焦点をあわせて作品を分析したあと、犯罪後のジョゼフの行動をたどり、それから、ジョゼフの救いの問題について考察してきた。ジョゼフが救われる可能性の中にあることを前提にしたうえで、さいごにもう一度、ジョゼフの《violence》に論点をもち、《violence》の意味を再確認することにも、《violence》と信仰との関連についてまとめておきたい。

ジョゼフの《violence》は、すでに見たように、プレローとの出会いもしくはプレローの挑戦がきっかけとなってめざめ、顕在化する。しかしジョゼフの《violence》の根底には、彼の純粹志向が横たわっている。純粹志向は、当然のことながら、肉なるものへの強烈な反撥をひき起こす。この反撥のすさまじさは、欲望（肉なるもの）とのたたかいはげしさとなって結晶するし、さらには、欲望の対象を消滅させたいという願いはげしさをもたらす。これがまさしく《violence》であり、この《violence》の意味を、マック・アリストアーへの暴力、プレローとの決闘、モイラ殺害の場面の再度の分析をおして明らかにした。

しかしながら、肉なるものへの反撥ないし純粹志向は、すでにふれたように、肉なるものを罪悪視し、ことさら肉なるものを忌避・排斥するがゆえに、肉なるものは忌避・排斥の対象としてかえってジョゼフの意識のなかで浮き彫りにされる結果となる。第二部第十章における、デーヴィドとジョゼフの会話は、このかんの事情をうまく語っている。ジョゼフがデーヴィドの結婚に、「危険な誘惑」（一三〇頁）であるとして反対したとき、デーヴィドはジョゼフのことを心配する立場から、こう話している。

ジョゼフ、ぼくがこれから言うことを許してくれたまえ、でも君は……姦淫のことを、君が姦淫と呼ぶもののことをあまりにも考えすぎているのだ。君がその姦淫を避けていることはわかっている。しかし君はそのことを考えているのだ（一三二頁）。

これにたいしてジョゼフは、「ぼくは、人が大嫌いなものを考えるように、そのことを考えているだけだよ」と反駁する。しかし、「どんなことがあっても、そんなことはけっして考えるべきじゃないよ」と言いはるデーヴィドに、「ぼくはそのことを考えないではいられないんだ」とジョゼフは答える（一三二頁）。このようにジョゼフは「姦淫」を「避け」ながらも、「姦淫」のことを「考えないではいられない」ことを認めている。ジョゼフは肉なるものを避けつつも、これを意識しないではいられないことになる。けれども、肉なるものを意識しないではいられないということは、結局のところ、肉なるものに呪縛され、従属し、支配されることにほかならない。ここから、情熱・欲望のはげしさとしての《violence》が生じる。ことにモイラのベッドに身を投げるといふ行為、モイラとの肉

体の交わりは、この《violence》を鮮明に際立たせている。

こうしてジョゼフの《violence》は、すだにも述べたように、欲望のはげしさ、欲望とのたたかいはげしさ、欲望の対象を殺害したいという欲求のはげしさ、という三重の意味をあわせもつ。しかもこの《violence》は、プレローとの決闘の際の暴力、モイラ殺害行為がそうであるように、この三重の意味を同時にふくみながら外在化する。したがって、このような《violence》をうちにかかえることで、ジョゼフがその生の悲劇的な結末を内側から必然的に、不可避的に、要するに宿命的なかたちでまねていることはたしかなのである。

さいごに、《violence》と信仰、欲望と宗教のあいだの関係について整理しておきたい。そこでまず、ジョゼフの内的なドラマを、肉体と魂、あるいは欲望と宗教との単純な対立・葛藤の図式のなかで理解することはまちがっているという点を再度確認しておこう。肉体的高揚と宗教的高揚との間の揺れうごきを示す箇所を検討したとき明らかになったように、欲望と信仰とが相剋の中で重なりあう場合が見られるし、さらには『ロメオとジュリエット』の本をひき裂くという行為がそうであるように、宗教的高揚（信仰）と肉体的高揚（欲望）とが純粹に混じりあうこともある。《violence》の発現である、マック・アリスターへの暴力行為も同様である。ジョゼフにおいて、信仰は欲望から安易に切り離すことはできない。そうではなく、ジョゼフの肉体的欲望、《violence》こそが、彼の宗教をささえているとみるべきである。なぜなら《violence》とは欲望のはげしさとともに、欲望とたたかうはげしさをも意味するのだから。第二部第二十章において、ジョゼフがデーヴィッドに語る次の言葉を振り返ることにしよう。

君は主を平安のうちに愛している。だがぼくにあるのは神の怒り「神へのはげしい欲求」なのだ。ぼくははげしさでもって
(avec violence)しか愛することができない。なぜなら、ぼくは欲望の人間だから（一六〇頁）。

先にこの文章を引用したとき、情熱・欲望の violence と敵対するものとして、信仰の violence を仮りに設定した。なるほどここでは

ジョゼフの熱狂的な信仰が語られている。しかし、「ぼくははげしさでもってしか愛することができない。なぜならぼくは欲望の人間だから」という言い方から読みとるべきことは、欲望のはげしさの反動のエネルギーとして生じた霊的なはげしさがジョゼフの宗教を形成しているということではなく、欲望のはげしさとしての《violence》、もしくは欲望をいなくことでの肉体的苦惱それじたいが、ジョゼフの激越な信仰をもたらしているという点ではないだろうか。「はげしさでもってしか愛することができない」と彼が言うときの「はげしさ」とは、欲望とは別箇のエネルギーではなく、まさしく欲望のはげしさをよくむ《violence》そのものことであると考えられる。また、肉欲の苦しみがそのままジョゼフの宗教をささえていることについては、第二部第十七章における、ジョゼフとデーヴィドの会話が示唆に富んでいる。モイラへの欲望に責めさいなまされるジョゼフは、イエス・キリストのことを話題にし、二人のやりとりはこう続けられている。

——キリストは荒野にあって試みにあわれた。なぜなら飢えをおぼえられたからだ。キリストの受けた誘惑は飢えだった、肉体的飢えだ……⁽⁹⁾

——そうだよ、とデーヴィドは質問を予感して言った。

——ではデーヴィド、もうひとつの飢えは……。キリストがその飢えを知られたかどうか、君にわかるかい？

デーヴィドの目は、突然の恐怖におそわれたためであるかのように大きくなった。

——わからないよ、と彼はささやいた。ぼくは一度もそんなことを考えたことがない。そんなことは考えないほうがよいよ、ジョゼフ。ほとんど冒険に近いよ。

——ぼくは冒険することを望んでいるわけじゃない、とジョゼフはごく低い声で言った。でも、あの人もまたそんなふうに苦しまれたのだと、誰かがぼくに教えてくれたら、ぼくは自分をもっと強く感じられるだろうし、へあの人もまた……と自分に言い聞かせられるような気がするんだ(一四四・一四五頁)。

ジョゼフはこの対話のなかで「もうひとつの飢え」のことを語っている。この「飢え」が肉欲にまつわることがらを指し示すことは言を俟たない。ジョゼフは、イエス・キリストもまた、自分と同じようにこの「肉体の飢え」(faim du corps)に苦しむことがあったのなら、「あの人もまた……」と思うことで、「自分をもっと強く感じられるだろう」、言いかえれば、よりたやすく生きられるだろうし、救われるだろうと考えている。ここでは、「肉体の飢え」つまり肉欲の苦惱は、それじたいでジョゼフを神のほうに向かわせているとうけとれる。「肉体の飢え」がそのまま神への渴望、絶対へのはげしいあこがれにつうじ、結びついていると推察することができ⁽⁶⁸⁾る。ジョゼフの《violence》あるいは欲望は、苦しみをともなうとしても、彼を肉なるものに向かわせると同時に、神のほうにも押しやる強烈なエネルギーになっているといえるのではないだろうか。グリーンは『日記』の中で「人は肉体によって魂に達する⁽⁶⁹⁾」と書いている。この命題はまさしくジョゼフの場合にあてはまる。またグリーンは同じく『日記』のなかで、次のように述べている。

肉の狂乱の中には、失われた楽園への盲目的な欲求にも似た何かがある。……快樂の熱狂は、……それに神的なもの、神的なものへの郷愁がまじりあっていることを認めなければ、断じて理解することはできない⁽⁷⁰⁾。

この文章において、「肉の狂乱」そして「快樂の熱狂」という表現のかわりに、《violence》もしくは欲望という語を置いて読みかえることは可能であろう。ここから《violence》あるいは肉欲は、「失われた楽園」へのすさまじい欲求と「神的なものへの郷愁」とをうちにふくんでいることになる。結局のところ、ジョゼフの宗教、ないし熱狂的な信仰(fanatism)は、彼の《violence》あるいはまた肉体的欲望を基盤として成り立っていると結論することができる。

四 まとめ

以上のように、まず、小説『モイラ』のジョゼフの内面における神への志向をしらべ、次に、肉なるものへの志向を検討した。それから、《violence》と信仰との関連を考究するために、《violence》の分析を中心にしつつ、また、作品における「火」のイマージユや、宗教的高揚と肉体的高揚とのあいだの揺れうごき、および両者の混淆を示す箇所を引きあいに出しながら、作品を読解してきた。あわせて犯罪ののちのジョゼフの行動やジョゼフの救いの問題にも言及した。ここで明らかなのは、ジョゼフの《violence》が一方では、ジョゼフを肉なるもの（罪）のほうにみちびき、彼を殺人者に変貌させてしまう必然性・宿命性をもつとしても、他方では、ジョゼフを神のほうに向かわせるエネルギーとなり、彼の熱狂的（Tandem）な信仰の基盤となっているという点である。

『モイラ』にあらわれた「火」（または「光」）のイマージユをあらためて見なおすことにしよう。すでに述べたように、「火」にまつわる語ないしイマージユは、情熱・欲望に責めさいなまされる内面のありさまとともに、はげしく神を追いもとめる内面のありさまを表出していた。同じことであるが、「火」は肉なるものを志向する心的状態とともに、神を志向する心的状態を表象するものとして用いられていた。このようにこの作品では、「火」は二つの心的状態を指し示すイマージユとして出てきている。しかしながら、「火」はどちらの心的状態を言いあらわす場合でも、ジョゼフの《violence》を象徴しているといえよう。なぜなら《violence》はジョゼフを肉なるものに向かわせるとしても、同時に神への志向をささえる基盤にもなっているのだから。《violence》の有するこの両義性が、「火」のイマージユの両義性につながっているのである。

このことをもう少し説明しよう。第二部第二十章で、モイラへの情熱に支配されたジョゼフは、「ぼくは、火が何であるかを知っている。火はぼくの祖国だ」（一六〇頁）とデーヴィッドに告白し、そして「神は火である」（一六〇頁）と言いつつも、「その「神の」

非存在の恐怖もまた、火によって、黒い火によって表わされる」(一六〇頁)と述べていた。それからジョゼフは自己のうちにやどる信仰、神への志向を、へ火を連想させるへ燃える(Orler)という語をもちいて、「ぼくらは燃え上がるだろう。(Hous brulerons)、永遠のよろこびの中で燃え上がるだろう。(Orlerons)」(一六一頁)と表現していた。このあと、ジョゼフはデーヴィドにこう話している。

ぼくたちが天国からひき離されているのは、ただ炎の厚みによってだけなんだ(一六一頁)。

ここでもジョゼフはへ火のイマージュを利用して、自己の内面のありさまを浮き彫りにしている。きわめて難解であるが、この言葉からまず読みとるべきことは、熱狂的な信仰をもち、救われることよろこびを打ち明けたあとに語られたものであるのだから、ジョゼフがかぎりなく神のほうに近づいているという点、あるいは近づこうとしている点であろう。神への無限接近をもたらすもの、それはもちろん「炎の厚み」(l'épaisseur d'une flamme)である。ではこの「炎の厚み」とは何なのか。言うまでもなく、それはジョゼフの宗教をささえる《violence》を暗示している。けれどもこの言葉は同時に別のことを意味している。「炎の厚み」が、《violence》が、神からジョゼフをひき離す危険性をもはらんでいるという点である。というのも、《violence》は肉なるもの(罪)にみちびくものでもあるから。かくしてジョゼフの《violence》に照応するへ火は、神の火ともなりうるし、地獄の火ともなりうる。「モイラ」におけるへ火のイマージュを問題にしつつ、ジャック・プチは次のように述べている。

火は神的にもなりうるし、地獄的なものにもなりうる。同じviolenceが欲望にも、あるいは、魂の愛の中にもあらわれ出るのだ。ジョゼフが生きる宗教的な高揚は、デーヴィドのおだやかな信仰よりも、焼き尽くすような人間的な愛に近いようにみえる。⁽⁷⁾

ジャック・プチのこの見解は、本章のこれまでの議論と抵触しない。それどころかへ火や《violence》について論じてきたことの

正当性を強めている。はじめの文では、ジャック・プチはへ火のイマージュの両義性を適切に指摘しているし、二番目の文においては、「同じ violence が」という言い方からわかるように、二つの violence ではなく、ただ一つの violence しか認めず、しかもその violence の有する二つの方向性を見さだめている。さいこの文でジャック・プチが言いたいのは、ジョゼフの宗教的高揚のなかには肉体的高揚が入りまじっているということであろう。本章では、この点にも言及した。ただ、「ジョゼフが生きる宗教的高揚」が「人間的な愛に近い」というジャック・プチの論定はもう少し発展させて考える必要があるように思われる。この点にかんして、グリーンは『日記』の中でこう語っている。

かつて一度も顔を見たことがなく、声も聞いたことがない誰かを死ぬほどまでに愛すること、これがキリスト教のすべてなのだ。(72)

グリーンはここで信仰を、「誰かを死ぬほどまでに愛すること」と定義している。この定義はジョゼフの信仰にもそのままあてはまるだろう。苦しみ悶えつつ神をひたすら愛し、追いもとめるジョゼフの信仰は、恋愛状況において見いだされるような人間的な情熱から成り立っているのかもしれない。ジョゼフの宗教が欲望もしくは「violence」によってささえられていることはすでに述べた。ジョゼフは「violence」を生きぬくことによって、自己の全体的な上昇・救いを希求しているのではないだろうか。換言すれば、ジョゼフは魂によってのみならず、肉体によっても、ないしは肉体とともに神を愛しているがゆえに、自己の肉体をもふくめた上昇・救いを切実に願っているとみなされるのである。ジョゼフが「violence」をかかえることで、肉体のあやまちをおかし、犯罪者になることは彼に課せられた宿命であるとしても、ジョゼフにとって、宗教は情熱・欲望あるいは「violence」を抜きにしてはありえなかったであろう。先に、ジョゼフが救いへの道を歩んでいる可能性を有していることを指摘した。もっとも、人が救われるかどうかは、神のみが知る問題である。しかし、もしジョゼフが救われるとすれば、ジョゼフの救いは身をもって「violence」を生きることによってしかありえなかったのである。

- (1) ジョゼフの性本能の嫌悪は、作者グリーンも共有するものである。一九四九年の『日記』のなかでグリーンは書いている…「幾年ものたたかいと考察の挙げ句、私がたどりついた真実は、自分が性本能を憎んでいるということなのだ」(『亡霊』、『日記』第五卷、一九四九年二月二十六日、IV、一〇六五頁)。
- (2) この考え方も、作者グリーンのものである。一九五五年の『日記』には、「一種の錯乱の中ではらまれたのに、私たちがその痕跡をとどめていないことがどうしてあるだろうか」(『美しき今日』、『日記』第七卷、一九五五年六月九日、IV、一四一九頁)という文が見いだされる。
- (3) この「イゼベル」にかんして、『モイラ』の翻訳者福永武彦氏は、「烈王紀下」に出てくるアハブの妻と解している。プレイアード版のテキストには何の注釈も付されていない。
- (4) 「ヨハネの黙示録」第二部第二十節・第二十一節を参照。なお、聖書は、日本聖書協会(一九七三年刊)のものを使用した。
- (5) 第二部第二章、ジョゼフは下宿をかわろうと決心したとき、「ほかのところによって、魂を救ってやらねばならない連中がいるのだし、それには自分は彼らを忍耐強く、あらゆる愛情をこめて救ってやるだろう、若干の人びとの顔をみるとすぐ、やさしさの大きな潮うしほのように心を浸すあの愛情をこめて」(九五頁)と考えている。また第二部第十四章において、ジョゼフは、カトリックの学生テレンス・マック・ファドンをプロテストスタントに改宗させたい気持ちでデーヴィドに打ち明けている(一三九頁)。
- (6) ジョゼフはデーヴィドに、「ぼくは召されたのだ、デーヴィド。君のように。キリストに召されたのだ。ぼくはそれを感じるし、それがわかっている」(一五八頁)と言っている。
- (7) 作中、「彼の生まれ故郷のまちでは、人びとが突然立ち上がり、並外れた説得力を発揮して神のメッセージを告げたものだった」(一五九頁)と説明されている。

(8) 『内なる鏡』、『日記』第六卷、一九五〇年九月二十三日、IV、一一七六頁。

(9) 第一部第九章、ジョゼフは夕食後、部屋にもどって勉強にとりかかる直前、鏡に自分の顔をうつす。そして限のできた目や、黒人のように厚い口を認めて、自分の顔が「肉感的だ」と思い、悲しみを覚えている(四一頁)。また第一部第十一章では、友人のデーヴィドに連れられて行った洋服屋で、三面鏡にうつった自分の横顔を見て、自分の顔の肉感性を確認し、「大きな悲しみ」の気持ちにとらえられている(五七頁)。そしてジョゼフはデーヴィドの顔を自分の顔とくらべながら、「少なくとも彼(デーヴィド)のほうは、肉欲的な人間の様子をしていない」(五七頁)と考えている。

(10) ジョゼフは、自分にたいするサイモンの感情をはっきりとは知らないのである。

(11) 作中、次のように語られている。「へぼくがセーターを取りに行ったとき、それがプレローだったら、彼女(モイラ)だってぼくにしような口のきき方をする勇氣はなかっただろう」と彼(ジョゼフ)は考えた。へそれに彼なら決して彼女の前で身をかかめたりはしなかっただろう。大学に来て以来、自分の受けた屈辱の数々を思い出すと、彼は怒りの発作のためにかたく口を閉じた」(II、14、一四〇頁)。

(12) 授業中、横にすわっているテレンス・マック・ファドンがカトリック信者であることを知ったとき、ジョゼフはテレンス・マック・ファドンが「地獄の息子たちのひとり」であるがゆえに「救われない」(Pardé)し、「天国は偶像崇拜者たちには永遠にとぎされているのだ」と考えている(一一七頁)。

(13) たとえば、モイラはジョゼフに飲み物を要求したとき、ジョゼフがアルコールではなく水をもってきたことに驚いている(一六五頁)。モイラはジョゼフのうちに純粋さを認めるのである。

(14) モイラはセリナあての手紙のなかで、「楽しむための機械であることはもうたくさんだわ。(…)あたしのほうこそ、恋をしているのよ」(一六九頁)と書いている。

(15) ジョゼフの部屋に闖入したモイラは、ジョゼフがもどってきたのを見とどけてから、ドアに鍵をかけ、鍵を胸の中に隠していたのである。

(16) 第二部第六章はジョゼフがモイラのベッドに身を投げるところでおわっている。そして第七章は、「午前一時ごろ、彼(ジョゼフ)はマック・アリストアの声で眠りからさました」(一〇六頁)という文ではじまっている。したがって、モイラのベッドに身を投げたあと、ジョゼフは

しばらく眠っていたことになる。

(17) ここは、「ルカによる福音書」第二十四章の記述を踏まえている。周知のように、イエスが処刑されてから三日後、墓からイエスの亡骸が消えうせた。このことを二人の弟子たちがエルサレムからエマオという村に向かう途中で語りあっていると、復活したイエスが弟子たちのもとにあらわれ、旧約聖書の予言、すなわち、救い主は三日目に死人の中からよみがえり、人びとを悔い改めさせるという予言が実現したこと、自分こそ救い主であることを教えた。イエスの姿が見えなくなったあと、二人の弟子たちは、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき、お互いの心が内に燃えたではないか」(二四・三二)と言っている。使徒たちの、このような火の感知、あるいは「火傷のような痛み」(burning)は明らかにイエス・キリストの顕現によるものといえよう。

(18) ウェズリー(一七〇三・九一)はメソヂイスト派の創始者で、一七三八年に回心を経験し、信仰の内面性を深め、以後熱心な伝道活動をおこなった。ウェズリーが味わった「火傷のような痛み」もまた、イエス・キリストの顕現に起因するように思われる。

(19) ちなみに、聖書でも、地獄は火のイマージュによって描かれている。たとえば、「マルコによる福音書」には、「地獄では、うじがつかず、火も消えることがない」(九・四八)という記述が見られるし、「マタイによる福音書」において、「また、ばか者と言う者は、地獄の火に投げ込まれるであろう」(五・二二)という一文を読むことができる。

(20) 聖書においても、神は地獄と同様に火のイマージュによって言いあらわされている。「あなたの神、主は焼きつくす火、ねたむ神である」(「申命記」四・二四)。また、火は神をばげしくもとめる心的状態を指し示している。「ルカによる福音書」のなかで、イエスは、「わたしは、火を地上に投じるためにやってきたのだ。火がすでに燃えていたならと、わたしはどんなに願っていることか」(一二・四九)と語っているが、ここでは、人びとの内心にやどるべき神への愛、信仰心が火のイマージュによって表現されている。

(21) ジョゼフは第二部第十二章、「結婚は危険な誘惑だよ」(一三〇頁)と言って、デーヴィドの結婚に反対していた。

(22) 「マタイによる福音書」には、「兄弟にたいして怒る者は、だれでも裁判を受けねばならぬ」(五・二二)という記述が見られる。

(23) ジョゼフはシェークスピアを主題とする近代英語の講義を選択していた。しかし、『ロメオとジュリエット』の中の恋人たちへの反撥から、そしてさらに、この作品が猥褻な箇所をふくんでいることをキリグルーから聞き知るにおよんで、ジョゼフはシェークスピアではなく、チャール

サトにかんする授業に出ることに決める。

- (24) この点に関連して、グリーンが「大いなる拒絶」(le grand refus)と呼ぶ事件を思い起こすことは、あながち無駄ではあるまい。一九一六年四月のカトリシスムへの回心以後、グリーンは、クレテ神父の導きもあって、修道士になることを夢み、目指していた。だが一九一九年四月、グリーンは、コルタンベール街にある教会の地下礼拝堂から通りに出たとき、突然、修道生活の計画を放棄する。この放棄をグリーンは「大いなる拒絶」と呼んでいるのであるが、この経緯は『日記』のなかで次のように回想されている…「その瞬間、大地全体が私にさし出され、自分が一種の中世からルネサンスの真っ只中に到達したように思われた。通りに、田舎風の魅力をもち、すっかり春の光にひたされたこの通りに出たとき、自分の人生が新しい方向に向かうように思われた」(『日記』第三卷、一九四一年三月三十日、IV、五七一頁)。ここでは、教会の暗闇から地上の明るみの中に出たとき、グリーンは修道士になることを断念するのであるから、地上で生きることのよろこびが「大いなる拒絶」をひきおこし、グリーンを神から遠去けたと考えられる。ジョゼフの「心の高揚」はこうしたよろこびと同じ性質のものをふくんでいると受けとれる。

- (25) プレイアード版テキストの注釈者ジャック・プチは、この幸福感を取りあげて、「官能的な陶醉」と「宗教的な陶醉」とが「混じりあっている」とみなしている(『モイラ』への「註」、III、一五七九頁)。

- (26) この節のはじめのところで、(燃える) (brûle) という語を取りあげ、この動詞が神を志向する心的状態と同様に、情熱・欲望にとりつかれ、肉なるものを志向する心的状態を指し示す隠喩として用いられていることを指摘した。この指摘はここでもあてはまるだろう。なぜならここで「燃え立つ」(brûle)はジョゼフの怒りを暗示しているが、彼の怒りはこのあとでも指摘するように、もちろん肉体的欲望と結びついているからである。

- (27) 原田武氏は「ジュリアン・グリーンにおける sensualité について」と題された論文の中で、グリーン自身の《violence》を問題にし、次のように考察している…「homosexualité に一部分源を発する彼(グリーン)の《violence》は、そのままかれの欲望のつよさを意味するというより、これにおいて根づよいビュリタニズムが人間の肉体的現実とぶつかりあって生じる、内なるたたかいはげしさを指すものと解すべきであろう」(大阪外国語大学フランス研究会発行 *Studies Françaises*、第八号、一九六八、三二二頁)。同性愛のことはさておき、この見解はジョゼフの《vio-

「violence」を考へる場合にも全面的に有効であり、ほぼ適応するだろう。ただ、ジョゼフの《violence》は彼の純粋志向と深くかかわっているとしても、まずもって情熱・欲望のはげしさを指し示すのではないだろうか。あるいは、少なくとも「内なるたたかいはげしさ」と同程度に「欲望のつよさ」を意味するとみなすべきだと思われる。

(28) この一端は、本節の(3)で瞥見した。また、決闘の場面の直前には、次の記述も見いだされる。「この傲慢な顔を殴りつけ、彼が言ったこと、ひそかに考へているすべてのことを罰したいという不意の欲求が二、三度生じた。だが別の瞬間には、この内心のはげしさは、突然の、酔わせようなやさしさ、生きとし生ける者たちを愛したいという奇妙な欲求に席をゆずった。そしてこの欲求は彼においては宗教的な本能とまじりあっているのだった。だから、だまって歩いている自分の横にいる青年の、朝のあの侮辱を、自分はなんとしようこびをいだいてゆるすことだろう！ もう少しのところで自分は不意に訳を説明することもなく彼の手をにぎるだろう。だがプレローは理解しないだろう。恐怖のためにそのような仕事をしたのだと思うことだろう。どんな軽蔑の言葉が彼の唇にのぼってくることだろう！ こう考へるだけで、ジョゼフは、あまりにもしばしば自分を盲目にした例の怒りのめまいをふたたび感じた」(I・5、二三・二四頁)。ここでは、ジョゼフはまず、怒りからプレローへの暴力の欲求にとらえられている。それからジョゼフはキリスト教的な隣人愛の衝動にかられ、プレローをゆるめたいという願望をいだいている。しかしプレローの横柄な態度を想像して、再度怒りの発作におそわれている。したがって、この記述においては、肉体的高揚と宗教的高揚とのあいだの往復が見られるわけである。また、この文章の中で、プレローを殴りつけたいという欲求が「この内心のはげしさ」(cette violence intérieure)という表現に言い換えられていることが注意をひく。ここから、ジョゼフの《violence》が発現されるとき、その語義どおりには暴力へのかたちをとることを確認することができる。

(29) 『亡霊』、『日記』第五卷、一九四八年十月十三日、IV、一〇四三頁。

(30) 同右、一九五〇年三月二十四日、IV、一一四二頁。

(31) 以下の場面は、第一章第四節で、ファীগスン夫人の下宿の女中がジョゼフにたいしてはたす役割を検討したときに引用したことがあった。

(32) Jacques Petit: *Jules Green, coll. « Écrivains devant Dieu »*, Desclée de Brouwer, 1972, p. 61.

(33) この段落における、ここらあたりまでの考察は、原田武氏の解釈を踏まえた。氏はジョゼフによるモイラ殺害行為についてこう論じている：

「ついに誘惑に敗れたことを恥じて女に狂暴な力をふるうとき、かれ（ジョゼフ）はいわば自滅をこころみるのであろう。それも混乱の果ての自滅であるというより、かれの中で苦悩が行きつくところまできた今、内心の矛盾に責められる自己を、その極限の姿で神に捧げることであつたのであろう。かれに残されたことは、せめて、ひき裂かれた自己をそのまま神に委ねることではかなく、そうすることがかれにとって、誠実のあかしであつたのかもしれない」（前掲論文「ジュリアン・グリーンにおける *sensualité* について」、三五頁）。

(34) 私は以前、「ジュリアン・グリーン」の作品における肉体的自動性について——初期小説を中心として——という表題の論考の中で、グリーン
の作品に見られるへ足への自動性を、へ口へやへ腕への自動性ととも問題にし、人物たちの抑圧された欲望と関連させて考察したことがあつた（山口大等「文学会志」第三十四巻、一九八三、七八・七九頁）。

(35) このように、ジョゼフはプレローの忠告を「部屋にもどるな (*Ne retourne pas à ta chambre*)」というふうに思い出しているが、前章でプレローが言つた実際の文句は、「部屋にもどつてはいけない (*Il ne faut pas retourner à ta chambre.*)」(II・24、一八七頁)である。

(36) ジョゼフはデーヴィドに、「ぼくはモイラを殺した……。 (……) 彼女は小さな塀の向こう側の樹々の下に埋めてある」(一九一頁)と打ち明けている。

(37) 逃亡の手筈については、プレローが第二部第二十四章、一八七頁で仔細に語っている。

(38) 第二部第二十四章で、プレローはジョゼフに逃亡の計画を提示し、返答をせまる。そして「わかつたよ」(*«accepte»*)という返事をひきだしたときのプレローの反応はこう書かれている。「プレローは目に見えてほつとした様子で彼に近寄つてきた」(一八八頁)。この「目に見えてほつとした様子で」(*visiblement soulagé*)といふ言い方や、さらに、格闘の際に「ぼんだ握手をこんどは自分からもとめるといふ、このあとの態度から、プレローがジョゼフの逃亡を強く念願していたことがわかる。

(39) ただし、ジョゼフがプロテスタントの信仰をもつのにたいして、「人みな夜にあつて」の主人公ウィルフレッドはカトリック信者である。

(40) ジャック・ブチはブレイアード版テキストの「註」のなかで、この「誰か」のことを問題にし、「明らかに刑事だ」と断定している(《Notes》 pour *Maïra*, III, p. 1595.)。

(41) もっとも、『モイラ』において、神の存在が感知されるところも見いだせる。第一部第十八章で、ジョゼフとデーヴィドは暗闇のなかで神

に祈る。するとジョゼフは「かつて経験したことの無い幸福」にひたされ、「心地よい安堵感」を味わう(八九頁)。このときの体験を顧みて、のちにジョゼフはデーヴィドにこう語っている。「ぼくらがいっしょにお祈りをあげた晩のことをおぼえているかい？(…)あの晩、神がぼくらのそばにいたような気がしたよ」(II・20、一五八頁)。

(42) 『亡霊』、『日記』第五卷、一九五〇年三月二十四日、IV、一一四二頁。

(43) ジョゼフがへ雪に心をうぼわれるもうひとつの理由として、彼が放心状態にあることが挙げられる。

(44) 遠藤周作：「キリスト教は肉欲を否定するか——『モイラ』をめぐる——」、主婦の友社版『モイラ』へのへ解説、
「キリスト教文学の世界」J・グリーン ジッド」所収、一九七七、一八頁。強調は引用者。

(45) 最終章(第二部第二十五章)の冒頭には、「ジョゼフのまわりじゅうで、太陽の光線がきらきらする雪の白さに吸い込まれ、雪の白さは太陽の光線を空に向かって送り返しているように見えた」(一八九頁)という描写がみられる。また、最終章の末尾、ジョゼフが自首しに行くところでは、「光が樹々の背後でたゆたい、その枝の一本一本は、灰色に変わりつつある薄青い空の色を背景に、白くくっきりと浮かびあがっていた」(一九三頁)という一文を読むことができる。ここでの樹々の枝の白さが、積雪によるものであることは言うまでもない。

(46) ジャック・プチは、『モイラ』の終わりの部分を問題にして、「たとえどんなにわずかであれ、希望の光が結末で輝いている。そしてその希望の光を、依然として明るい黄昏が象徴している」と述べている(Jacques Petit: *Julien Green, « l'homme qui venait d'ailleurs »*, Desclée de Brouwer, 1969, p.236)。しかしながら、希望の光は黄昏の光ではなく、へ雪の光によって暗示されているとみるのが適切であると思われる。

(47) 『亡霊』、『日記』第五卷、一九五〇年三月二十四日、IV、一一四二頁。

(48) 遠藤周作氏もまた、デーヴィドの融和的な信仰に言及しつつ、次のように述べている。「神はそのデーヴィドを通して部分的にジョゼフに語られていることも事実です」(強調は遠藤氏。前掲評論「キリスト教は肉欲を否定するか——『モイラ』をめぐる——」、主婦の友社版、『モイラ』へのへ解説、一五頁)。

(49) デーヴィドは第一部第十八章でジョゼフに、「君は信じている。君は救われているんだ」(八八頁)と語っている。また第二部第二十章で、「神が君を選ばれたことを、ぼくはずっと確信してきたよ」(一五八頁)と言いはなっている。しかしこれらの言葉は、ジョゼフが二つのあや

まちを犯す以前に言われたものなので、問題にならない。

- (50) あやまち・罪 (Causes) が赦しあるいは恩寵につながるという考え方は、グリーンヒシンのものでもある。グリーンは『日記』のなかで、「神は時として、私たちが若干の罪 (Causes) を犯すのを赦されることがある。それほど神は私たちを赦すことによるこびをいだかれるのだ」(『亡霊』、『日記』第五巻、一九四七年十一月十日、IV、九八七頁)と書いている。また彼は、「犯されたあやまちは恩寵に変わることがありうる」(『美しき今日』、『日記』第七巻、一九五六年六月十四日、V、三二二頁)とも述べている。
- (51) この点にかんして、アンドレ・ブランシェは『モイラ』について論じた文章のなかで、次のように考察している：「神に仕えていると信じる人は自分しか求めていない(…)、おそらく自分を大罪人とみなす者が神の友なのであろう」(André Blanchet: 《Môira ou le nouveau roman chrétien》, in *La Littérature et le spirituel II*, 《La Nuit de feu》, Aubier, 1960, p. 142)。
- (52) 「マタイによる福音書」第七章第一節には、イエスが語った次の言葉が書きしるされている：「人をさばくな。自分がさばかれないためである」。ジヨゼフはこの箇所をふまえたのだと思われる。また、「ローマ人への手紙」第二章第一節では、次の記述を見いだすことができる：「(…)すべて人をさばく者よ。あなたには弁解の余地がない。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めている」。
- (53) 『暗い扉の前で』、『日記』第三巻、一九四〇年七月二十四日、IV、五二〇頁。
- (54) 『亡霊』、『日記』第五巻、一九四六年一月二十四日、IV、八九八頁。
- (55) 『見えないものに向かって』、『日記』第八巻、一九六一年十月十日、V、二八二頁。
- (56) 『暗い扉の前で』、『日記』第三巻、一九四〇年十二月三十日、IV、五四九頁。なお、訳文は遠藤氏によるものである。
- (57) 遠藤周作・前掲評論「キリスト教は肉欲を否定するか―「モイラ」をめぐる―」、主婦の友社版『モイラ』への解説、一五頁。
- (58) このことに関連して、アンドレ・ブランシェは、「罪人が挫折した聖者であることも、時にはそれでも聖者であることさえ、起りうるのである」(強調はブランシェ。前掲論文《Môira ou le nouveau roman chrétien》, p. 134)と述べている。この見解は私の解釈の正当性を保証している。
- (59) 『見えないものに向かって』、『日記』第八巻、一九六五年二月四日、V、三六一頁。
- (60) 『内なる鏡』、『日記』第六巻、一九五一年六月二十六日、IV、一二二五頁。

- (61) ちなみに、ロジェ・カイヨフは、「聖なる」(saint, sacré)に相当するギリシア語の *agios* が古代では同時に、「汚れた・汚された」(*souillé*)という意味をもっていたことを指摘している (cf. Roger Caillols: *L'homme et le sacré*, coll. Idées, Galimard, 1950, p.40)。
- (62) デーヴィドは、「シェークスピアを読んだことのない人間は、教養のない人間だ」と断定し、そして「人間のところがどんなものか知るためには、シェークスピアの本を読むことが必要だと言って、ジョゼフに本を贈るのである(一四六頁)。
- (63) ここで、作品の時代背景が正確に示されたことになる。
- (64) ただし、聖書協会 (Les sociétés bibliques) 版の聖書では、この箇所は、(…) *si notre cœur nous condamne, Dieu est plus grand que notre cœur* (…)である。つまり「あなたの心があなたを責める」ではなく、「われらの心がわれらを責める」となっている。La Bible de Jérusalem (CERF, 1973)でも、*voire* が *notre* に、*vous* が *nous* になっている。この人称の相違はおそらくジョゼフあるいは作者グリーンの思いちがいによるものである。しかし人称が二人称であることで、ジョゼフの有罪感と救いへの希求はいっそう浮き彫りにされ、ジョゼフが見えざる神と対峙する度合いはそれだけ深まっているように思われる。
- (65) この部分では、問題の一節は、「たとえわれらの心がわれらを責めるとしても (*Si notre cœur nous condamne...*)」(一四九頁)となっている。つまり「あなた」が「われら」に変わっている。けれども、第二部第十八章の、ジョゼフがこの一節を黙読するところでは、一五一頁からの次の引用文を読めばわかるように、「われら」は「あなた」にもどっている。
- (66) 本章第二節で、マック・アリストアーへの暴力を検討したときにふれた。
- (67) 「マタイによる福音書」の第四章第一節から第十一節にかけて、イエスが荒野で四十日間、悪魔から試みをうけたことが語られているが、このでの「飢え」は、もちろん、断食による空腹を指し示している。
- (68) 原田武氏は、グリーンにおける「肉体の飢え」を問題にし、こう説明している：「かれ〔グリーン〕にあっては、*faim chanelle*なるものは、一面、神へのあこがれであるとも解せられるのである」(前掲論文「ジュリアン・グリーンにおける *sensualité* について」(三四頁)。
- (69) 『亡霊』、『日記』第五卷、一九四八年七月二十二日、IV、一〇二五頁。
- (70) 同右、一九四九年一月二日、IV、一〇五八頁。

(71) Jacques Petit: *Julien Green, « l'homme qui venait d'ailleurs »*, p. 238.

(72) 『暗い扉の前で』、『日記』第三卷、一九四一年一月三十日、IV、五五六頁。

第三章 『モイラ』の中の秘められた物語

前章では、小説『モイラ』における宿命性のあらわれを、ジョゼフのへ内側へから把握することをこころみた。ジョゼフの《violence》の分析を中心にし、ジョゼフの内面のドラマを読解することによって、ジョゼフの変貌過程が内的な必然性をもつこと、ジョゼフの悲劇的な結末が彼の《violence》によって宿命的に招来されていることを明らかにした。主人公ジョゼフの物語が、へ外側へからだけでなく、へ内側へからも宿命の物語としてとらえることができることを検証した。

しかしながら、『モイラ』は本筋として主人公ジョゼフの生の歩みをたどりながらも、同時に、副次的人物たちのドラマを見え隠れに書きこんでいる点にその大きな特徴が見いだされる。換言すれば、中心人物ジョゼフのドラマと並行しつつ、または交錯しつつ、周辺的人物たちのドラマが目立たないとはいえ展開している。このことは、『モイラ』において、主人公ジョゼフの肉体的魅力にひかれる人物たちが一人ならずいるという事実によってうかがうことができる。デア夫人はジョゼフの赤毛に反撥と嫌悪を覚えるにもかかわらず、自室の真上に寝るジョゼフの肉体を想像しているし、ジョゼフに並々ならぬ関心をよせるキリグルーは、ジョゼフの肉体的魅力を認め、称賛している³⁾。ジョゼフの親友であり、敬虔な信仰をもつデーヴィドでさえ、ジョゼフの美貌に敏感になり、わずかではあるが心を惑わされている⁴⁾。ジョゼフに魅せられるこれらの人物たちの存在は、ジョゼフが人びとの内心に情熱をひきおこすことを想定させ、『モイラ』のなかに他のドラマが秘められていることを示唆している。したがって、グリーンの言葉をかりれば、「秘められた物語」(histoire secrète)⁵⁾を作品から抽出し、これに光をあてることが是非とも必要な課題になってくる。

管見によれば、『モイラ』において、三つのへ秘められた物語へがかくされていると思われる。サイモン、モイラ、プレローの物語がそれである。これらの周辺的人物たちは等しくジョゼフにたいして愛の情熱をいだき、おのおのの結末をむかえている。この第三章

においては、この三人の人物たちの秘められた物語を検討したい。そのうえで、中心人物ジョゼフの物語とのつながりを明確にしたい。この目的のために、まず、作品の前半を占める、サイモンの物語を分析し、それから作品の後半で語られる、モイラの物語をしらべ、さいごに、作品全体にわたって繰りひろげられる、プレローの物語を見ていくことにしよう。結論を先どりして言えば、これらの人物たちのたどる変遷過程が必然的・不可避的なものであるがゆえに、この二つの秘められた物語は、ジョゼフの物語と同様に、〈宿命〉の物語として読むことができるのではないだろうか。さらにまた、『モイラ』の中の物語はことごとく〈孤独〉の物語としてもとらえることができるのではないだろうか。結局、サイモン、モイラ、プレローといった副人物たちが主人公ジョゼフとともに、〈宿命〉と〈孤独〉の物語を提示しているという点にこそ、小説『モイラ』の有する深さと広がり、ひいては統一性が存すると思われる。

一 サイモンの物語

サイモンはデア夫人の下宿に到着したジョゼフをむかえるというかたちをとって、第一部第二章において登場する。ジョゼフと同じ下宿の住人であり、一足まえに下宿に着いたサイモンは、ジョゼフの部屋のドアがあいているので、ジョゼフのところに行ってきて自己紹介をするのだ。

——はじめまして、ジョー、とサイモン・デマスはジョゼフ・デイの大きな手の中に、丸く湿った手を置きながら言った。

(…)

君は、ぼくがしゃべりすぎると思っているんだろう。(…)でもどうしようもないんだ。ほんとうに気に入った人に会ったときにはね。

(…)

ぼくたちは友だちになれるよね、きっと(八頁)。

ジョゼフとの初めての出会いの場面で、サイモンがジョゼフにたいして即座に親しみ・好感をおぼえていることは重要であろう。このことは、サイモンがジョゼフをジョー(○)という愛称で呼びながら、握手しているところからうかがえるし、ジョゼフがサイモンにとつて「ほんとうに気に入った人」であることや、「ぼくたちは友だちになれるよね」とサイモンが言っているところからわかる。サイモンがジョゼフにいだく友情は、その後の展開を考えあわせると、同性愛的な感情に近いものだと思われる。つまりサイモンはジ

ジョゼフとの最初の対面によって、どうしようもなくジョゼフに心をひかれ、ジョゼフへの情熱に不可避的に支配される。ジャン・セモリュエは、グリーン作品における愛の特徴に言いおよんで、「愛は雷の一撃 (coup de foudre) が落ちるように作中人物に襲いかかる」と述べているが、この評言はサイモンの場合にもあてはまる。グリーンの中の作中人物たちと同様、サイモンにおいてもまた、愛(出会い)は選択不可能な、宿命的な様相を帯びている。

第一部第二章の二人の出会いの際の、ジョゼフの反応を見ておくことにしよう。サイモンにたいするジョゼフの感情は、作中、「彼(ジョゼフ)はサイモンのことを滑稽なやつだと思った。そしてこの対面は彼を不快にした。あまりにも動きすぎて、時として不意に甲高い声を出すこの小柄な男を恥ずかしく思った」(I・2、九頁)と書かれている。ここから、ジョゼフがサイモンに好意ないし友情をいささかもいっていないことが容易に察知できる。かくして、サイモンにとって、出会い(愛)はまったく一方的なものになり、悲劇的なかたちをとることが予想される。

こののち、サイモンはジョゼフの友情をもとめて、執拗にジョゼフのそばに寄り添おうとする。第一部第三章、二人がデア夫人の下宿に到着した同じ日の夕食の折には、サイモンはジョゼフの傍らに席をとっているし、授業開始の日のことが語られる第一部第七章では、サイモンはジョゼフといっしょに大学に行くことを願ひ、ジョゼフと同じ授業をうけることによって、ジョゼフへの接近をはかっている。ジョゼフが、ギリシア語の授業がおこなわれる教室に向かっているとき、サイモンはジョゼフのほうに駆け寄り、「非難にみちた声」で、「ぼくはデア夫人の下宿で君を待ったんだ。なのに君はぼくを置いてきぼりにして出かけたんだ」と言い、教室ではジョゼフの横に腰かけて、「ぎりぎりのところで授業を変えたんだ。ドイツ語のかわりにギリシア語をとることにしたんだ。そうすれば二人いっしょにいられるからね」とささやく(三三頁)。サイモンのこうした言動から、ジョゼフにたいする彼の愛着の感情が読みとれる。サイモンの愛はこのあとの彫像の挿話によってもたしかめることができる。ギリシア語の授業がおわったあと、サイモンは、気分が悪くなって途中で教室を退出したジョゼフを探しだし、建物の正面をかざるギリシアの神々の彫像にジョゼフの注意を向けながら、「すばらしいな、あのヘルメス像は。ごらんよ、あの髪の毛、それから首、首のラインを。あの首はちょっと君の首に似ているよ

……」(I・7、三八頁)と言う。ここでサイモンはギリシア神の首をジョゼフのそれになぞらえている。ギリシアの神々の像は人間の肉体の美しさを表現したものである。それゆえ、ジョゼフのからだだがサイモンにとって賛美あるいは崇拜の対象であるとともに、ジョゼフがエロスの愛の対象になっていることがわかる。

このように、ジョゼフにたいするサイモンの愛がしだいに露わになるにつれて、同時に、その愛の不毛性もまた、鮮明になってくる。第一部第三章の、デア夫人の下宿での夕食の際には、ジョゼフは、出現したプレローに好意をいだくのと反対に、隣にいるサイモンをうとましく思い、「自分とサイモンとが親しい関係ではなく、サイモンのひそひそ話がそう思わせるような秘密は二人のあいだにはまったくなく、二人はほとんど知り合いでさえもないこと」をプレローに「わからせたい欲求」を感じている(一一頁)。第一部第七章ではジョゼフは、ひとりで大学にきたことをとがめたサイモンのことを、「なんて粗忽なんだろう」(三三頁)と考えている。サイモンがギリシアの神々の彫像をたたえたときには、ジョゼフはサイモンの言葉を無視し、それでもサイモンが彫像の美しさを言いはると、ジョゼフは「美しいだって？(…)真っ裸じゃないか」(三九頁)と吐きすてるように言って、サイモンを突きはなしている。この言葉はもちろん、ジョゼフの肉体敵視の姿勢、純粹志向をうかがわせる。しかしサイモンの側に立てば、愛の拒絶を意味するものともうけとれる。

サイモンの愛と、その愛の不毛性は、第一部第九章の白い木蓮の花の挿話によってさらにいっそう際立つことになる。サイモンは、ジョゼフがデーヴィドの下宿に出かけて留守にしているあいだ、ジョゼフの部屋の机の上に、白い木蓮の花を、「白きこと君にあたわらず(Moins blanche que toi)」(五一頁)と書いた紙片をそえて置く。サイモンの行為はまずもってジョゼフの純粹さをたたえることを目的としている。なぜなら「白くは言うまでもなく汚れない純潔さを象徴するからだ。だが同時に、この行為は愛の告白のこころみの意味をもつと思われる。サイモンは、ジョゼフにあこがれ、ジョゼフを崇拜する人間が身近にいることを知らせたいのであろう。もつとも、サイモンは、「白きこと君にあたわらず」という紙切れに自分の名を書いてはいない。それゆえ、この紙切れは、グリーンン⁸の作品に見いだされるへ署名されない手紙の変種であるとみなされ、サイモンは自分の気持ちを十分に伝達しているとは言いがたい。告白

はあくまで不完全なままである。とはいえ、この挿話からサイモンの愛の情熱がくつきりと浮かび上がってくる。

サイモンのこうした行為にたいして、ジョゼフはきわめて冷淡な態度をとる。第一部第十一章、デーヴィドと洋服屋に行つて下宿にもどると、ジョゼフは白室でサイモンが勝手にノートをめくっているところに出くわす。ジョゼフはサイモンにそのことを非難するとともに、木蓮の花を置いた行為にも言いおよんで、サイモンを責める。

——サイモン、と彼「ジョゼフ」は言った。昨日の晩、あのばかげた紙切れとともに、机の上にあの花を置いたのは君だろう。

——ばかげた、だって？

——そうさ、ばかげただ。ぼくはそんなことをすることを君に禁じる。わかったかい？

彼は怒りのために息を切らせた。

——当然、ぼくは君の紙切れをこまぎれに引き裂いたし、あの花も通りの、ほこりの中に投げ捨てたよ。ぼくはこうした冗談が大嫌いなんだ。

目を涙で輝かせて、サイモンは彼の前に突っ立ち、何か言おうとするかのように唇を動かした。それからドアのところに行き、ひとことも言葉を発することなく姿を消した（五八頁）。

この対話において、ジョゼフが「白きこと君にあたわず」と書いた紙切れを、「ばかげた」(ridiculous)と形容していることがまずもって注目される。ジョゼフの純粋性を称賛することでジョゼフへのかぎりない憧憬の念を伝えたいサイモンの気持ちは、この一語によって完全に踏みじられる。さらにジョゼフは、「ぼくはそんなことをすることを君に禁じる」と言っているように、木蓮の花を置くといったような行為を断固として拒否する。この拒否は、サイモンの愛の拒絶にもつながるだろう。このことは、「目を涙で輝かせて」と語られているように、サイモンが悲しみの涙を目にためていることから明白である。この涙は、まぎれもなく、己れの愛の感情が

うけ入れられず、報われないことを、サイモンが痛感したという点に起因している。したがって、この場面は、読者のみならず、サイモンじしんが彼の愛の可能性を確認するところだといえる。

愛の拒絶に直面して、サイモンはさいごの抵抗をこころみる。同じ第十一章で、サイモンはジョゼフの部屋にふたたび入り込み、ジョゼフをモデルにしてスケッチをかくことの承諾を得る。サイモンはジョゼフの似顔絵を描きながら、ジョゼフの関心を自分に向けるために、同郷の復習教師キリグルーのことを話題にする。だがジョゼフは、サイモンの存在にさえうんざりとしているので、サイモンの話にいら立つ。ジョゼフの冷ややかな態度をまえにして、サイモンはついに悲しみの感情をこらえることができず、「君はぼくを軽蔑しているんだ」(六四頁)と言ひ、「ぼくは苦しんだ。ぼくは今、苦しんでいるのだ」(六四頁)とうったえる。これにたいして、ジョゼフは「具合が悪いのなら坐れよ」(六四頁)と答えるにすぎない。自己の愛の苦悩がまったく理解されないサイモンはむせび泣きながら、「ぼくは君に話すべきだろう。でもそれができないんだ。君がこわいから」(六四頁)と語る。ここにおいて告白の不可能性が見てとれる。サイモンは自らの愛を告白すべきだと思いつつも、ジョゼフの対応をおそれて、愛を告白するには至らない。ジョゼフは「わずかに嫌悪の表情」を浮かべて、「サイモン、男というものは泣くもんじゃなないよ」(六五頁)とさとす。この答めはジョゼフの完全な無理解とともに、同情やあわれみを示さない彼の冷酷さを浮き彫りにしている。サイモンは、「君はわかってない、ジョゼフ、何もわかってない」、「君もまた、いつか苦しむことになるだろう。苦しむということが何であるか、わかるだろう」(六五頁)と言ひのこして、ジョゼフのもとを去る。かくして、サイモンは己れの愛の不毛性・不可能性を苦悩と絶望のなかで決定的に思い知らされる。

このあと、サイモンはジョゼフの視界から去る。第一部第十五章、サイモンが涙ながらにジョゼフの部屋を出ていったのと同じ日の夜の十時、ジョゼフはサイモンのことが気になってサイモンの部屋をノックする。しかしサイモンはいない。第一部最終章(第十七章)では翌日の夕食風景が描かれている。ここでもサイモンは姿をあらわさない。そしてジョゼフがサイモンと別れてから翌々日のことを語った第二部第三章の、黒い服を着た一組の夫婦とデア夫人とのやりとり、および第四章の、デア夫人とジョゼフとの対話をおして、サイモンの不幸が暗示される。次いで第二部第五章で、キリグルーがジョゼフを訪ねてきて、サイモンの死を告げる。

月曜日、彼〔サイモン〕⁽²⁾はここを抜けだして、汽車に乗り、家にもどったんです。銃器をいじくっているうちに、彼は自分を撃って死んだのです。(…)事故なのか、それとも別の理由によるものなのか知る方法はまったくありません(一〇三頁)。

キリグルーはサイモンの死因を明確にしていない。けれども、サイモンがジョゼフへの不可能な愛ゆえの絶望から実家にもどったことを思えば、サイモンが自殺したと解するのが妥当であろう。少なくとも、サイモンが死の誘惑にかられて銃器を手に取ったことは疑いを容れない。一方、ジョゼフはサイモンの死を知らされたあと、地上的なよろこびのほうに向かつていく^(B)。また、「サイモンのために祈るのはこれからは無駄なことだ。サイモンはもう裁かれているのだ」(Ⅱ・6、一〇四頁)と彼は考えている。ジョゼフは、サイモンの死の原因が自分にあることをわかっていないばかりか、世を去ったサイモンに一片の同情すらよせていない。ジョゼフのこうした対応から、サイモンの不可能な愛の悲劇性が際立ってくる。

以上、ジョゼフとの宿命的な出会いから、不可能な愛の苦悩を経て、絶望の果ての死に至るまでのサイモンの物語を見てきた。サイモンの愛が世間に受け入れたい同性愛であること、それから、サイモンにたいしてジョゼフが終始、冷淡なあるいは無慈悲な態度をとっていることを勘察するとき、サイモンの情熱の苦悩と絶望の果ての死は、不可避的なものであると思われる。サイモンの悲劇的な最期は、ジョゼフとの宿命的な出会いによって招来された必然的な結末であるとうけとれる。要するに、出会いから死に至るまでの変遷過程は、サイモンに課せられた宿命であると論定することができる。

二 モイラの物語

次に、モイラの物語を一瞥することにしよう。モイラがはじめて登場するのは、ジョゼフとの出会いを物語る第二部第十章にすぎないけれども、モイラの名はすでに作品冒頭から、デア夫人の口をとおして出てきている。ジョゼフが住むことになる部屋に彼を案内したデア夫人は、「まあ、モイラったら、シガレットケースを置き忘れてるわ」(I・I、六頁)と言っている。第二部第二章で、女中ジェマイマはジョゼフの部屋を掃除しにやっつけてきて、モイラのことを話題にしている。ジェマイマは、ジョゼフの使っている部屋が以前、モイラのもので、モイラがベッドを部屋の真ん中に斜めに置いて寝る習慣があったことを伝える。そしてジョゼフの欲望をそそのかのように、「モイラお嬢さまはきれいな方ですよ。ただお嬢さまにはお考えがおりなのです。それにほかのこともありますし……」(九七頁)とつぶやく。このほのめかしは、デア夫人が知らせた喫煙の習慣と重なりあって、モイラが放縦な娘であるという印象を与えている。

この印象は、第一部第六章のデア夫人の手紙からも生ずる。デア夫人は、金の無心をしてきた養女のモイラに返事の手紙を書く。この発送されない手紙の中で、デア夫人はモイラが黒人と白人との混血の子であり、一九〇二年の冬の夜、捨てられた赤ん坊のモイラを夫人がひきとって育ててきたことを明らかにするとともに、「おまえの悪い性向はこの十五年間、私の十字架でした」と述べ懐し、「アムストロングの息子さんとのふるまい」に言及している(二九頁)。こうした言葉によっても、モイラの放縦さ、あるいは不品行は示唆される。さらに、第二部第十三章の、キリグルーの発言は重要であろう。ジョゼフの新しい下宿を訪れたキリグルーはモイラのことに触れ、「あの女は、もしゴリラが言い寄ることがあるとすれば、ゴリラにだって身をまかせだるうさ。(……)あれはラテン人たちがルーバと呼んだもの、つまり牝狼だよ。絶えず飢えたけだものなんだ」(一三六頁)と断言している。キリグルーは、モイラが肉体的

人間、欲望の存在であることを教える。この時点で、ジョゼフとモイラの出会いはすでになされておき、ジョゼフはギリグールの批評を聞くことによって、モイラが放縦な、不品行な女であるという決定的な確信をもつに至る。

順番は前後するけれども、第二部第十章における二人の出会いの場面を検討したい。デーヴィドの居る、ファーガスン夫人の下宿にかわったジョゼフは、もとの下宿にセーターを忘れてきたことに気づき、デア夫人のところへセーターを取りに行く。その際に、すでに帰郷しているモイラと出会うわけである。この場面で、ジョゼフのほうはモイラの赤い服と赤い唇に注目している（一一二頁および一二二頁）。この赤い服と赤い唇は、第一章第五節で論じたように、モイラの肉体性・官能性を象徴するものとして、ジョゼフの脳裡に焼きつくことになる。また、ジョゼフがリラの香水の「おそろしく心地よくて人を酔わせるような匂い」（一一二頁）を嗅ぎとっていることや、ベッドの上に放り出された、「肌色の靴下とピンク色をしたネグリジェ」（一一二頁）を目にしていることも看過することはできない。リラの香水の匂いとこれらの下着類もまた、すでに指摘したように、モイラの肉体性・官能性をジョゼフに感じとらせている。こうしてジョゼフはモイラとの最初の出会いによって、モイラが放縦な女であるという印象を深める。

一方、モイラはこの邂逅の場面でいかなる反応を示しているだろうか。モイラはデア夫人からの手紙によって、自分の部屋を赤毛の学生が使っていたことを知っている。⁽¹⁵⁾そこでジョゼフを見て、「あなたなのね、赤毛の学生って。（…）でもあなたがこれほどまでに赤毛だとは思っていなかったわ。さあ、あたしの顔を正面から見てください。あなたさかいよ」（一二二頁）と言う。この言葉から察知できるように、モイラは、ジョゼフが赤毛であるということ、ジョゼフと彼の容貌に大きな関心をしめしている。このあと、モイラはセーターを床に投げつけ、ジョゼフに怒りの中でセーターをひろわせる。ジョゼフが部屋を立ち去ろうとする直前の、二人のやりとりを見ることがしよう。

——ちよつと待って、と彼女（モイラ）は言った。あたしがこわくなかったら、あたしのほうを見てごらんさかいよ。

心ならずも彼（ジョゼフ）は振り返り、怒りのために大きく見開いた目で彼女に視線をそそいだ。（…）

——あなたって……

彼女は二、三秒のあいだこの言葉を宙ぶらりんにし、それから半ばほほえみを浮かべて、言いおえた。

——……おかしな顔をしているわね（一二三頁）。

モイラはジョゼフの顔だちに依然として興味をもち、再度観察している。ここで、モイラが述べた、「あなたって、（……）おかしな顔をしているわね」（Vous en avez une drôle de figure）という感想は検討に値する。いったい、この感想はモイラの気持ちをありのままに伝えているのだろうか。この点にかんして、「あなたって」（Vous en avez）という言葉と「おかしな顔をしているわね」（une drôle de figure）という言葉のあいだに、二、三秒の間隔ないし沈黙があるということは注目すべきだと思われる。ここから、「おかしな顔をしているわね」という言葉は、本心から発せられたのではなく、むしろ体面をとりつくりうために言われたと考えられるのではないだろうか。言いかえれば、モイラは一瞬、ジョゼフの顔の魅力に多少とも眩惑され、このことを相手に悟られまいとするために、自分の感じたこととは正反対のことを口にしたとうけとれる。

このように、モイラはジョゼフとはじめての邂逅の際、ジョゼフに関心をもち、ジョゼフの肉体的魅力に眩惑される。とはいえ、モイラにとっての出会いには、サイモンにおけるジョゼフとの出会い、あるいはまた、ジョゼフにおいてのモイラとの出会いと比較すれば、それほど決定的なものではない。サイモンはジョゼフと対面することによって、たちどころに同性愛的な感情にとらえられるし、ジョゼフはモイラを見ることで、反撥しながらも執着の感情をどうしようもなくつのらせる。これにたいして、モイラは最初のめぐりあいの時点で愛の情熱を感じてはいない。しかしながら、モイラがジョゼフにこのほか関心をいだいていることは重要であろう。ジョゼフへの関心は、彼が宗教的人間であることを知るにおよんでいっそう増大することになるのであるが、ジョゼフの肉体的魅力と相俟って、この関心が学生たちの陰謀にモイラを加担させ、ジョゼフを誘惑するようにしむける要因となるからだ。したがって、ジョゼフとの出会いは、モイラがその肉体性・官能性によってジョゼフを欲望に従属させる一方で、第二部第二十一章の誘惑のおこないを不可避的に導いてるとみなしうるのではないだろうか。モイラにとっての出会いもまた、やはり運命的なものと思われる。

第二部第十章の出会いのあと、モイラがジョゼフをふたたび見るのは、第二部第十四章においてである。通りですれちがうというかたちをとって、二人は再会する。しかし第十四章では、モイラの内心の感情は何も語られていない。モイラの内面のドラマがうかがえるのは、第二部第二十一章の誘惑の場面をおしてである。そこでこの場面を分析することにした。

第二部第二十一章、ジョゼフの部屋にしのび込んだモイラは、ジョゼフが自室にもどってきたとき、部屋に鍵をかけ、鍵をドレスの胸の奥にかくし、ジョゼフと対峙することになる。まず注目されるのは、この章でもモイラが赤い唇とリラの香水の匂いによって、ジョゼフを肉なるものにいざなっているという点である。これらのものがモイラの肉体的性・官能性の象徴であることはすでに述べた。またジョゼフはモイラのふくらんだ胸をみて、故郷のまちの、⁽¹⁶⁾ゴールディと呼ばれる売春婦のことを思いうかべている(一七〇頁)。モイラはもっぱら自らの肉体的側面をジョゼフに意識させるのである。

しかしながら、ジョゼフと時をすごすうちに、モイラの内心は決定的な変貌をとげる。徹底的に自分を無視・黙殺しようとするジョゼフを前にして、モイラはいつも相手にする男たちとはちがったもの、すなわち、純粹さを見いだす。あるいはまた、飲み物がほしいと言ったとき、アルコールではなく水を差し出されたモイラは、驚きのなかでジョゼフの純粹さを確認する。そしてモイラはついにジョゼフを愛するに至る。時間つぶしのために友人セリナにあてて書いた手紙の終わりのほうで、モイラはこう打ち明けている。

あたしはあなたたちみんなが考えているような汚れた女の子じゃないのよ。楽しむための機械であることはもうたくさんだわ。

(…)

負けたわ、セリナ。あたしのほうこそ恋をしているのよ(一六九頁)。

このように、モイラは過去の自堕落な生活を反省するとともに、ジョゼフへの愛を自覚することになる。そのためモイラはジョゼフを誘惑するという計画を放棄し、部屋を立ち去ろうとする。だが、モイラは胸の奥にしまいこんでおいた鍵を床の上にすべり落としてしまう。ジョゼフがその鍵を拾う。その際、モイラはジョゼフの髪に触れる。このことがきっかけとなって、ジョゼフは欲望の人間に

変身する。それになりたいする、モイラの反応は次のように書かれている。

薄暗がりのなかで、彼女はジョゼフの目が、今までどの男にも認めなかったような輝きをはなつてきらきらと光るのを見た。突然、恐怖が彼女をとらえた（一七二頁）。

モイラは恐怖におそわれている。それはなぜか。その理由として、これまでにモイラが接してきたどの男よりも、ジョゼフが荒々しさ、獣性を示したという点がまず考えられる。しかしモイラは多くの男性体験をもつだから、ジョゼフがいかに凶暴であれ、暴力をふるうのではない以上、かならずしも恐れをいだく必要はないとも思われる。モイラの恐怖はむしろジョゼフを愛したことに原因するのではないだろうか。つまりそれは、単なる肉体的現実ではなく愛なるものを前にしたときの恐怖であると推察される。

このあと、モイラは、自分のほうにせまってくるジョゼフに、「いやよ」(Je ne veux pas)と二度つづけて言っている（一七三頁）。この《Je ne veux pas》ということばは、媚態を演じるための、また、ジョゼフの欲望を刺戟するための虚言としてではなく、文字どおりに、あるいは、本心から言われたものとうけとるべきであろう。モイラは今まで男たちと愛なしに肉体の交渉をもってきた。だがジョゼフの純粹さゆえに彼を愛したモイラは、自己の愛を肉体的欲望から浄化したのである。先に問題にした恐怖はこの気持ちとのかかわりでも理解することができる。けれどもこの願いとほうらはらに、モイラはジョゼフと格闘のあげく性の交わりをむすび、結局殺害されるのである。

第二部第十章の出会いの場面と第二部第二十一章の誘惑の場面とを分析してきた。ここで二つの事実を確認することができる。一つは、モイラが最終段階において、ジョゼフにたいして愛の情熱をいやくという点である。この内心の変貌は必然の成り行きだといえよう。というのも、モイラはジョゼフをはじめて見たとき、ジョゼフに少なからず関心をいだいているが、この関心は結局のところ、愛の感情につうじるものであるからだ。モイラの愛もまた、宿命的ないりどりを帯びている。さて、ここまでの検討によって指摘できる

二番目の事実は、モイラがその肉体性・官能性によって、つねにジョゼフを肉なるものにいざなっているという点である。このことによつて、モイラはジョゼフの二つのあやまちを不可避的にまねいてみるとみなすことができる。モイラは自己の肉体的側面のみをジョゼフに意識させることで、肉体的な交わりを避けられないものにしていくし、また、自己を肉の化身と認識させるがゆえに、自分が生じさせる反撥の力によつてジョゼフを犯罪にどうしようもなくおいやっている。したがつて、ジョゼフとの出会い以後、死に至るまでのモイラの生の歩みは宿命的なものであると結論することができる。ジョゼフを愛するにもかかわらず、性の交わりを経てジョゼフに殺されること、これがモイラに課せられた、避けがたい運命なのである。

三 プレローの物語

今度は、プレローの物語を概観することにしよう。プレローとジョゼフとの出会いの場面は、第一部第三章に置かれている。この場面をプレローの視点からながめることにしたい。デア夫人の下宿の食堂にプレローが登場するところは、こう語られている。

見知らぬ男〔プレロー〕は周りをぐるっと見渡し、ジョゼフの顔に視線を走らせてから、最後はうつむき、皿をじっとみつめた（一一頁）。

この文でプレローがジョゼフの存在に気づき、うつむいている点に注意をひく。このあとプレローは同じ体勢で食事をする。ジョゼフがプレローに友情をいだき、「あの青年が出ていくために席をたったとき、彼のところに行こう」（一一頁）と考えているあいだ、プレローはあたかもジョゼフの視線を避けるかのように、うつむいて食べるのだ。

明らかにその未知の男は、そっとしてもらおうことを望んでいた。彼は顔もあげずにせかせかと食べていた。見たところ、食事をすませ、この部屋を出ていくことを急いでいるようであった。事実、彼はデザートを呑み込むか呑み込まないうちにも立ち上がり、サイモンとジョゼフとに等しく送られたかのような、あるかないかのほほえみを浮かべて出て行った。足音が控え室で、次いでヴェランダで響いた。そしてヴェランダの鉄格子の戸が彼の背後で、銃器のような鈍い音を立てて閉まった（一一頁）。

プレローが食事をすませることを急ぎ、一刻も早く食堂を立ち去ろうとしていることは一目瞭然である。それはなぜか。この点にかんして、プレローが帰っていく間際、隣りあって席についているサイモンとジョゼフとにわずかな微笑を投げかけていることは無視できない。プレローは食堂に入ってきたときと同様、食堂を出ていくときにも、ジョゼフに注目しているのである。とすれば、プレローは食事中、ジョゼフのことをずっと意識していたことになるのではないだろうか。ここから、プレローはジョゼフを避け、ジョゼフからのがれるためにそそくさと夕食を終え、立ち去るのだとみなすことができる。このことは、プレローがジョゼフの到着の日まではデア夫人の下宿人ではないにもかかわらず、夕食の際の常連であったのに、その日かぎりデア夫人のところにはやってこなくなることから明白であるし、また、第一部第五章で、決闘のあとプレローがジョゼフに、「君は、ぼくがデア夫人のところでもう食事をしていないことに気づいたはずだ。(…)それは君のせいなんだ」(二六頁)と言っていることからまたしかめることができる。そして先に引用した一節のさいごの文に述べられているように、ヴェランダの「鉄格子の戸」が閉まるときの「銃器のような鈍い音」は、ジョゼフにたいする訣別の意志表示がこめられたものとうけとることができる。

このように、プレローはジョゼフとはじめての出会いの折、ジョゼフを忌避する。いったい、それはいかなる理由にもとづくのか。プレローの忌避の姿勢は、当然のことながら、ジョゼフへの反撥の感情に根ざしている。しかしながら、物語のその後の展開を考えあわせるとき、この反撥の感情は執着の裏返しであらわれにほかならない。デア夫人の下宿からの、プレローの早急な出発は、愛からの逃亡を意味するであろう。ジョゼフとの邂逅によって不可避免的に芽ばえた情熱をこのち空しく、報われることなく、また理解されることもなく生きなければならぬこと、要するに、不可能な愛ゆえの苦悩を瞬時のうちに直観したがゆえに、プレローはジョゼフを避けて立ち去るのだと思われる。サイモンのジョゼフにたいする愛がそうであるように、同性への愛が理解しがたいものであり、大抵の場合、不可能な私たちをとるのはことわるまでもない。そうであるならば、己れの不毛な愛を自覚したとき、その愛から、そしてその愛の対象からできるだけ早く遠ざかることが、かぎりない苦悩と絶望の深淵におちいらぬようにするための唯一の手だてなのだ。プレローの出発はこのように理解することができる。とはいえ、プレローにとって、ジョゼフとの出会いは、サイモンの場合と同じく、自己を、愛する人間にどうしようもなく変貌させたという点で、宿命的なものであると認定することができる。

次に、第一部第四章の、プレローの挑戦を分析することにしよう。ジョゼフとの出会いの日から数日後、大学構内でジョゼフが赤毛のせいで、学生たちから押搦されているとき、すなわち、「諸君、君たちの中で誰か、この界隈にいる消防夫たちの住所を知っているだろうか。彼らに知らせておくのが賢明な用心だと思うが」（一四頁）といった冗談を浴びせられたとき、学生たちの中に混じっていたプレローはジョゼフに攻撃的な態度をとる。「今のことばを言ったのは君か？」（一四頁）とジョゼフに問いかけられて、プレローはこう対応している。

プレローはまず相手の顔を、それから肩を、さいごに足もとをしげしげとながめた。そしてこの検査がおわると、冷ややかな口調で言い直った。

——ぼくじゃない。でも責任はとるよ。気にいったから（一四頁）。

プレローが自分が口にしたのでもない冗談の責任をとり、「気にいった」と言って、ジョゼフにいどみかかっている。プレローの攻撃的姿勢は、ジョゼフを見くだすような態度、口調の冷淡さからも読みとれる。プレローはジョゼフに挑戦状をたたきつけるかのよう

に自分の住所を知らせ、ジョゼフを決闘にいざなう。

ぼくに会いたいと思っ

ている方々へ知らせておこう。ぼくは東アーケード街四十四番地に住んでいるんだ（一五頁）。

プレローのこうした挙動はどのように解するべきであろうか。まずプレローの攻撃的な言動は、自己のうちに生じたむなしい、理解されない愛の情熱からの、あるいはこの情熱の苦悩からの、絶望的な脱出のくわだてだとみなされよう。ちょうどサイモンの、死に至る行為がそうであったように。だが同時に、プレローの挑戦は愛の対象への接近のこころみの価値をも有しているように思われる。というのも、自分の愛が同性への愛であるがために、相手の理解を越えた不毛なものであると確信するとき、愛のまともな告白は不可能

であるし、無意味である。このような場合、愛する相手に接近する道はせいぜいのところ、愛する相手を挑発し、怒りをかきたてることによつて、自己の存在をアピールすることだけであるからだ。この点、プレローのふるまいは、同性愛の禁じられた性格を浮き彫りにしつづ、小説『モイラ』のあとに書かれた劇作『南部』（一九五三）の中のイアンの行為を彷彿とさせる。『南部』において、ポランド生まれの陸軍中尉イアンは、アメリカ南部出身のエリックと宿命的な出会いを体験する。この出会いによつて、イアンは自分が一生涯、秘密と沈黙のなかで不毛な情熱をいだいて生きなければならぬことを悟る。イアンはエリックにたいする不可能な愛の苦悩からのがれるために、エリックをわざと侮辱し、決闘にかりたて、そして決闘に際してはなんの抵抗もこころみることなく、相手の剣に胸をつらぬかれて果てる。『モイラ』におけるプレローの挑戦が、『南部』のイアンのこうした絶望的な行動と類似していることはまちがいない。グリーンはイアンの挑戦を「偽装された告白」と解釈している。プレローの敵対的行為もまた、同様の意味をもつであろう。つまりそれは、屈折した、一種の告白のくわだてなのだ。また、プレローはさいごに自分の住所をジョゼフに知らせている。この行為は理解されなはいえ、愛のまねき、愛へのいざないという意図をふくんでいると思われる。

プレローの挑戦によつて、プレローとジョゼフは決闘することになる。その決闘の場面が置かれている第一部第五章を検討することにしよう。ジョゼフはプレローの住まいを訪ねる。あいにくプレローは留守で、プレローの帰宅を待つ。プレローがもどってくる。プレローはジョゼフを部屋のなかに招き入れ、服を着かえながら、「君が来るかどうか考えていた（…）。ぼくは来ないと思つていたよ」（二二頁）と話す。この言葉から、第一部第四章の挑戦以後、ジョゼフのことがプレローの脳裡をしめていたこと、ジョゼフがプレローの意識を支配してきた存在であることが察知される。ところがジョゼフは、プレローの落ち着きはらった態度を自分にたいする侮蔑とうけとつて逆上し、やにわに、プレローの締めているネクタイをつかみ、プレローに襲いかかろうとする。そこでプレローは、「ここで殴りあうわけにはいかない」（二二頁）と言つてジョゼフをいなし、決闘の場所におもむくために、部屋の外にジョゼフを連れ出し、部屋に鍵をかける。この件りは次のように叙述されている。

しばらくたつて、（…）二人が部屋を出て、プレローがドアを自分のほうにひき寄せて二重鍵をかけてドアを閉めようとしたと

きに、ジョゼフは彼があまりにも不器用に鍵を用いて手探りしているのを目にしたので、もっとそばから観察しようと思つた。するとそのとき、驚いたことに、プレローの手がかなりひどくふるえているのに気がついた。それで本能的な遠慮の気持ちから彼はあとずさりした。まるで見てはならないものを見てしまったかのように(二三頁)。

この一節で、プレローの手がふるえている点には注意を払うべきである。プレローの手の震えは、何よりもまず、ジョゼフの凶暴さ(violence)におしつけつたことに起因していると思われる。けれども、プレローの恐怖が単なる臆病さ、勇気の欠如を意味するのではないことはたしかである。プレローにとって、ジョゼフとは愛の対象なのだ。プレローの恐れは、愛を前にしておののきともみなすことができるのではないだろうか。ジョゼフを誘惑するためにやってきたモイラが、さいごの局面で愛の恐怖をいなくように、プレローは挑戦によってジョゼフを愛にまねきながらも、ジョゼフすなわち愛の思いがけない出現のために戦慄をおぼえたのだと解釈することができる。

このあと、二人は池のほとりで決闘する。第一章第一節で見たように、ジョゼフはプレローに突然飛びかかり、性的・肉体的なよろこびを一定程度味わう。二人の格闘の場面は、作者グリーンが解釈するように、「ラヴシーン」(love scene)である。たたかいのち、二人は別れることになるのであるが、その間にプレローはジョゼフのもとめた握手をこぼんで、こう言いのこしている。

ともかくぼくはもう君と会いたくない。そしてもう話しあわないことにしよう。もし万一ぼくらが顔を合わせることがあるとしてもだ(二六頁)。

プレローはジョゼフに絶交あるいは訣別の意志表示をしている。それはなにゆえであろうか。「君は人殺しだ」「君のなかには人殺しがひそんでいるんだ」(二六頁)とプレローがジョゼフに言いはなっているように、ジョゼフを殺人者にしてしまいかねない彼の

《Violence》への恐怖から、プレローはジョゼフに会うまいとするのであろうか。そうではないように思われる。ジャック・プチは、プレローのこの態度を「愛を前にしての逃亡」(une fuite devant l'amour)と解釈している。⁽⁹⁾この解釈は妥当であろう。プレローは自らの不可能な・理解されない愛の情熱からのがれたい、己れのむなし執着の感情を断ち切りたいという願いをこめて、絶交・訣別を宣言するのだ。はじめての出会いの際の早急な出発がそうであったように、この宣言は絶望的な愛からの、そして愛の苦悩からの脱却のころみとうけとれる。

とはいえ、第一部第五章の決闘の場面のもと、プレローはジョゼフの視界から、作品から、完全に姿を消しざるわけではない。プレローはこののちもしばしば作品に登場し、ジョゼフとかかわりをもつことになる。第一部第八章において、ジョゼフが大学の図書室で『ロメオとジュリエット』の本を読んでいるとき、プレローがジョゼフの存在に気づき、背後からジョゼフを観察するところがある。

四時ごろ、誰かがジョゼフの読書している小閲覧室の前を通りすぎたが、ふと立ちどまる様子を見せると、一瞬ためらい、また歩きつづけた。それから引き返して、身じろぎもしない学生の少しうしろに立ちどまったまま、注意深いまなざしで学生を観察しはじめた。それはプレローだった。数分のあいだ、彼は身動きもせずじっとしていた。そしてジョゼフがほんのちよつとでも動いたらすぐさま退散するような恰好でいた。(…)誰にも見られていないことをたしかめるために、まず周囲に一瞥を投げてから、彼は少し頭を前にかたむけ、ジョゼフがかくも一心不乱に読みふけている書物の表題を、肩ごしに読もうとした。ほとんど見えないか見えないくらいの微笑がプレローの口もとから目まで浮かんだ。しかし彼はすぐさま真剣な様子にもどると、異常な好奇心と怒りを抑えたような表情とが同時にうかがわれるまなざしで、本を読んでいる青年を凝視した。待ち伏せしている獣のように、息をとめ首をのばしているそうした彼の姿を見ると、まるで相手をなぐるのに都合のよい時期をうかがっているかのようであった。しかし頁をめくろうとしてジョゼフが身ぶりをしたはずみに、この隠れた観察者の両肩に身ぶるいが走り、彼は姿勢をただして消えうせた(四〇・四一頁)。

この件りで、プレローはまずジョゼフの姿を認めて、立ち去るべきかどうかためらっている。結局、プレローは踵を返してジョゼフに近寄ることになるけれども、このためらいは、プレローのジョゼフにたいする、断ちがたい執着の感情をかいま見せているように思われる。それから、プレローはジョゼフが読みふけている本に並々ならぬ関心をよせている。この関心は、書物の表題をジョゼフの肩越しに読もうとする仕草や、「異常な好奇心」(une curiosité extraordinaire)がまなごしにかんんでいるところから瞭然である。そしてその関心はジョゼフその人にたいするものにほかならず、とどのつまりジョゼフへの彼の愛をうかがわせる。また、プレローの視線に、「怒りを抑えたような表情」(une sorte de fureur contenue)が見られること、さらに、プレローが「待ち伏せしている獣」になぞらえられ、ジョゼフを観察する彼の様子が、「まるで相手をなぐるのに都合のよい時期をうかがっているかのようなふうであった」という表現でとらえられている点は看過することができない。プレローはこのとき、ジョゼフへの暴力の欲求にかりたてられ、獲物をねらう怒っただけだものごとき存在と化している。プレローのこうした変貌は、ジョゼフへの愛の渴望を露呈しているのではないだろうか。というのも、怒りと暴力の欲求は、ジョゼフの場合がそうであったように、肉体的な欲望あるいは情熱の屈折したあらわれであると解せるし、プレローが獣的な存在に変身するのも、欲望の対象に直面したからだとみなすことができるからである。かくして、この図書室の挿話においてもまた、プレローのジョゼフにたいする情熱をしかと見てとることができる。

プレローは第二部第十一章においても登場する。ジョゼフは近代英語の授業、シェークスピアにかんする講義のかわりに、中世英語、チヨースターの講義をとる。そして二度目の授業に出た際、プレローの存在に気づかされる。ジョゼフが教室にはいつて席につくところを引用することにしよう。

ジョゼフが授業を変えてからこの教室へはいるのは、これで二度目だった。が、前に坐った自分の席が見つからなかった。やや行きあたりばったりには彼は一人の学生の横に腰かけた。しかし取り乱していたので、その学生が誰だかわからなかった。だが学生はすぐに立ち上がり、教室の奥のほうに行ってしまった。しばらくがやがやと騒ぐ音がきこえた。そのあと、ジョゼフの横の空い

た席には、ずんぐりとした、陽気な若者がすわり、隣にいるジョゼフを肘でつついた。

「君はぼくの席をとってしまった、と彼は言った。そんなことどうでもいいことだけれど、でも今、ぼくのいるところはプレローの席なんだ（一二四頁）。

若者のこの言葉から、ジョゼフが席についたとき、すぐさま立ち上がり、ジョゼフから離れた学生がプレローであることがわかる。前章（第十章）において、ジョゼフはモイラと出会っており、この時点でジョゼフの脳裡を支配するのは、プレローではなく、モイラである。したがって、「プレローがいよいよといまいと、そんなことがなんの意味をもつのだろう」（一二五頁）と考えているように、プレローの存在はジョゼフにとって重要性をもたない。しかしながら、プレローにおいては、事情はことなる。プレローにとっては、ジョゼフは近づいてならぬ存在なのだ。なぜならプレローは相変わらずジョゼフを愛していると推測されるから。つまり自らの愛の不毛性・不可能性を痛感し、また、愛の苦悩のむなしさ・報われなさを知りつくしているがゆえに、プレローはジョゼフを避けるのだと思われる。この点において、第二部第十一章のプレローのこの反応は、第一部第三章の、ジョゼフとの出会いの際の、彼の忌避の姿勢に通底するといえよう。

プレローは第二部第十四章においても出現する。この章は、ジョゼフがデーヴィドと通りを歩いているとき、偶然モイラと出くわす事件を語っている。だが同時に、ジョゼフがプレローを目撃する挿話もふくませている。ジョゼフがデーヴィドとともに授業をうけるため、教室に行こうとしたとき、プレローと不意にすれちがうのである。

二人（ジョゼフとデーヴィド）は柱廊に通じる階段をだまって上がった。そしてジョゼフが扉を押そうとしたとき、それは内側からひらき、中から出てきたプレローとあやうくぶつかりそうになった。日焼けした顔の頬のところ、血がのぼり、そのため黒い瞳のきらきらした輝きはますます強烈になるばかりに見えた。空気は冷たかったのに、わざとらしいぞんざいさで襟を開いたままにしているワイシャツから首筋をのぞかせていた。体をかわすように肩をゆすり、首をうしろにそらすその態度には、わずかなが

らも挑戦の姿勢が見られた。けれどもジョゼフを見たとき、彼は後ずさりしようとした。が、すぐに毅然とした態度をとりもどし、長い芝生の向こう端にある図書館の大時計をじっと見すえながら、彼の前を通り過ぎていった。ジョゼフは彼の行くほうに顔をむけ、しばらく彼のあとを目で追わないではいられなかった（一四〇頁）。

この場面において、プレローが頬に血をのぼらせていること、プレローの態度にわずかとはいえ挑戦の姿勢が認められること、ジョゼフを見たプレローが後ずさりしようとしていること、また、そのあとプレローがジョゼフを黙殺して彼のまえを通り過ぎることが刮目に値する。ジョゼフに遭遇しての、プレローのこうした反応から、彼のジョゼフへの強烈な意識が読みとれる。この意識は、ジョゼフへの執着の感情と表裏をなすものである。プレローはここでもジョゼフを愛するがゆえに、ジョゼフを無視することで、彼を避けようとする。この忌避が不可能な愛の苦悩からの逃亡のころみとしてあることは、もはや繰り返すまでもない。

このようにプレローは決闘以後、ジョゼフを忌避しつつ生きる。だが、小説の終わり近くになって、プレローはジョゼフの身をまもるべく出現することになる。新調の服を手に入れるに際してデーヴィドにたてかえてもらった金を返すために、簡易食堂で働いているとき、ジョゼフは学生たちの何者かによっていたずらをされる。その折、プレローが介入してくる。

彼（ジョゼフ）がかなり危なっかしく傾いたお盆を手にして、調理場のほうに向かおうとしたとき、誰かが前掛けの紐をひっぱるような気がし、紐はほどけてしまった。彼は自分の肩越しに不安そうな視線を投げかけたが、あまりにたくさんの人たちがそばを歩き来していたので犯人を見定めることができなかった。そのうちに、高飛車な声がかきこえてきた。

——放つといてやれよ、と声は命じた。

ほとんど同時に、紐をつかんだ手が力強くそれを結びなおした。そしてジョゼフは、人ごみのなかをプレローが遠ざかるのを見た。たった今耳にした声は、自分の敵が口にしたものなのだ。その誇らしげな顔は、他のすべての連中を圧倒しているように思われた。心ならずもジョゼフはしばらくのあいだ彼のあとを目で追うのだった（Ⅱ・19、一五五頁）。

強調した箇所からわかるように、プレローは学生のいたずらをはばみ、窮地におちいりそうになったジョゼフを助け出している。もっとも、プレローはジョゼフを救ったあと、ジョゼフとなんの言葉もかわすことなく立ち去っている。プレローが依然としてジョゼフを避けていることはまぎれもない。しかし、ここでプレローが学生のいたずら、同じことであるが、災いからジョゼフをまもろうとしていることは大事であろう。決闘ののち、ジョゼフはプレローにたいして怒りの感情しかいだかない。これにたいしてプレローは、絶交・訣別の意思表示をしながらも、ジョゼフに一貫して愛情をよせ、ついには、デーヴィドがはたせなかつたへ守護天使の役割をになおうとさへするに至る。⁽²⁾

プレローがジョゼフのへ守護天使としての機能をはたそうとするという点については、学生たちの陰謀の実行をとどめようとするという事実からも明らかである。学生たちは、すでに述べたように、宗教に生きるジョゼフを物笑いの種にするため、モイラをジョゼフのところに行って、ジョゼフを誘惑させることをくわだてる。不吉なことが起こることを予感したプレローはこの企てを阻止しようところろみる。プレローは、のちに、ジョゼフがあやまちを犯したあと、ジョゼフにこう言っている。

モイラのことだ。(…)だめだ、動いてはいけない。君は話を聞かなくてはいけない。あの女が君のところいきつて行くだろう
ことをぼくは知っていた。あいにく、誰もみながそのことを知っていたんだ。(…)

ぼくはあんなばかげた計画をやめさせようとしたんだ。ぼくは君の敵じゃないんだよ、ジョゼフ。だがモイラは君のところへ行く
くという凝り固まった考えを捨ててね。そんなことをしたら悪い結果をまねくことはわかっていたんだが(Ⅱ・24、一八六頁)。

プレローの話のなかで、「ぼくはあんなばかげた計画をやめさせようとしたんだ」、あるいは、「ぼくは君の敵じゃないんだよ」という言葉が目につく。ここから、プレローがジョゼフの味方となって、学生たちの陰謀を流産させるべく行動していたことがわかる。

このようにプレローはジョゼフを災いからまもるへ守護天使へたらんとする。ジョゼフの犯罪ののちは、プレローは、ジョゼフにはつきりわかるかたちでジョゼフに援助の手をさしのべる。第二部第二十四章、ジョゼフを国外に逃亡させるために、ジョゼフの前にあられる。プレローは逃亡の段取りを説明したあと、ジョゼフに援助の申し出を受け入れるかどうかの決断をせまる。このときの二人のやりとりを見てみることにしよう。

プレローは彼をじろじろと見た。

——ぼくは君の返事を待っている、と彼は言った。

(…)

——わかったよ、と彼「ジョゼフ」はようやく言った。

プレローは目に見えてほっとした様子で彼に近よってきた。

——ぼくは大学にもどる、と彼は前よりもやさしい声でいった。(…)みんなの言うとおりにすれば、君は助かるんだ。ぼくは確信するよ、ジョゼフ。さあ握手してくれないか。今度は、ぼくが君に頼む番だ(一八八頁)。

プレローがジョゼフの逃亡同意に安堵の表情をうかべていることから、彼が自己の実存をかけてジョゼフの国外逃亡を画策していたことが推察される。ではどうしてプレローは、ジョゼフのへ守護天使へたらんと欲して、ジョゼフを外国へ逃がそうとするのであろうか。言うまでもなく、プレローがジョゼフを愛しており、ジョゼフに自由の身でいてもらいたいと願っているからである。プレローは己れの愛の証しとして、ジョゼフに接近し、逃亡の援助を申し出ると思われる。プレローがジョゼフの受諾を切実に望むのは、ジョゼフの逃亡受け入れが、プレローにおいて、自らの愛をジョゼフが受け入れることに等しいと認識されているからではないだろうか。このことは、ジョゼフの承諾のあと、プレローが、決闘直後にはこぼんだ握手を、今度は自分からもとめるという事実から看取することができる。それゆえ、逃亡援助の申し出は、愛の「偽装された告白」としての価値を有している。けれどもこの告白はあくまで「偽

装された」ものにすぎず、全面的・正真正銘のものではない点にくれぐれも着目する必要があるだろう。プレローは、「どうして君はぼくを助けようとするのかい」と問うジョゼフに、「それは君には関係ないよ(Cela ne regarde que moi.)」と答えている(一八七頁)。プレローは自分の真意をただすジョゼフを突きはなし、ジョゼフにたいする思いをかくしとおす。またジョゼフは、プレローと握手しているとき、決闘の日のことを思い出し、「君は、いつか君がぼくともう話したくない訳がたぶんわかるだろうと言ったね」(一八八頁)と語っているように、決闘直後のプレローの発言を問題にする。第一部第五章におけるプレローの絶交・訣別の宣言は、彼じしんの愛とかかわりを持ち、この愛の苦悩からの脱出のくわだてであると解釈することができた。ところが、プレローは絶交を宣言した理由を明らかにしない。

——今となつてはもう遅すぎるよ。ぼくらの歩む道はもう交わることはないだろうからね。

——ぼくは知りたいんだ。

——その訳を言うことはぜったいにできないよ(II・24、一八八—一八九頁)。

このようにプレローは、ジョゼフの重大な問いかけにたいして沈黙をまもる。己れの愛を告白しうる絶好の機会であるにもかかわらず、内心の感情を打ち明けない。自己の愛を秘密にしたまま、ジョゼフと別れるのである。したがって、第二部第二十四章は、プレローがジョゼフに国外逃亡の援助を申し出る点で、愛の告白のころみの場面であるといえるが、同時に、自己の内面にかかわることからについて徹頭徹尾口をとざすという意味において、告白の不可能性を、ということはずすなわち、愛の不可能性を決定的・最終的なかたちで浮き彫りにしているともみなしうる。

以上、ジョゼフとの運命的な出会いから、挑戦と決闘、観察と忌避、へ守護天使としての登場、および告白のころみと断念を経、別れに至るまでの、プレローの内面のドラマをたどってきた。プレローの内面のドラマは、すでに検討したサイモンのそれと類似

性をもつ。二人はどちらもジョゼフを愛し、世間の常識・理解の範囲を越えた同性への愛を生きているのだから。だがプレローの物語はサイモンの物語とことなつた展開を見せる。その理由は、プレローが己れの愛になんら期待をいだいていないこと、自らの愛の情熱の不毛性・不可能性を知悉しているという点に存する。サイモンが自己の愛にむなしい希望をもつたために悲劇的な最期をまねくのになつて、プレローは自らの愛の不毛性・不可能性を十二分に諒解している。それゆえ、プレローの物語はサイモンの物語ほどに劇的な結末をむかえない。とはいえ、プレローは己れの愛の不毛性・不可能性を知りつつも、愛を生きななければならない。この愛、あるいはこの愛の苦悩が、ジョゼフへの挑戦、そして、ジョゼフを忌避しつつも彼に関心をよせ、ジョゼフを助けようとする一連の行為をもたらす。けれども、プレローはジョゼフに内心の思いをなんら伝えることなく別れる。出会いから別れに至るまで自己の愛を完全な沈黙のなかで、恥ずべき秘密のように生きる。サイモンと同様、告白の不可能性を身をもって生きているのである。プレローのこのような在り方は、サイモンの場合と同じく、ジョゼフとの運命的な出会いがひきおこした必然的・不可避的なものであり、要するに、出会い以後の、プレローの生の歩みは宿命的なものであると結論することができる。

四 まとめ

『モイラ』の中の秘められた物語、すなわち、サイモン、モイラ、プレローの物語を検討してきた。そしてこの検討の過程で、この三人の副人物たちの生の歩みがことごとく宿命的なものであることを指摘してきた。ジョゼフとの運命的な出会い以降、死に追いこまれるまでの、サイモンとモイラの変遷過程は避けられないものであったし、ジョゼフへの愛をうちにかかえながらジョゼフとの別れをむかえるプレローの生の軌跡もまた、必然的なものであった。つまりこれら周辺の人物たちの物語は、中心人物ジョゼフの物語と同様、等しく「宿命」の物語として読むことができる。そして『モイラ』の中の秘められた物語が「宿命」の物語として、主人公ジョゼフの物語と重なりあうという点に、この小説の奥行きと広がり、さらには統一性が見いだされる。

ところで、作中、サイモン、モイラ、プレローがジョゼフにたいして愛の情熱をいなくにもかかわらず、結局、ジョゼフに自らの愛を告白しないという事実は、この作品のもうひとつの特徴を考えるうえで重要であろう。サイモンは木蓮の花を贈ることで、あるいは、さいごに自分の苦しみを打ち明けることで、ジョゼフに愛を告白しようとする。プレローは、モイラを殺害したジョゼフに、国外脱出の援助を申し出ることによって「偽装された告白」をこころみる。しかし二人はどちらも内心の思いをジョゼフに伝達し、理解させてはいない。とくにプレローにおいて、告白の可能性が目立っている⁽²²⁾。事情はモイラにおいても変わらない。ジョゼフを誘惑するため、彼の部屋に闖入したモイラは、ついにジョゼフへの愛を自覚する。しかしモイラは、ジョゼフに自己の感情をまったく知られることのないままに殺害されてしまう。このことに関連して、モイラが死に先立って友だちのセリナにあてて書いた手紙の行方について言及しておこう。ジョゼフへの愛を確認したこの手紙は、モイラの死後、ジョゼフが保有し、セリナの手には渡らない。ジョゼフが警察に自首しに行くところを物語った、作品のさいごの頁において、次の文章を読むことができる。

(…)突然、彼(ジョゼフ)はモイラの手紙のことを思い出した。彼は外套をひらき、片方の手袋をぬいだ。手紙は依然として上着のポケットの中にあつた。もしその気になれば、手紙をひき裂くことも、近くのポストに放りこむこともできるのだ。立ちどまって考え、彼は手紙を、それがある処にそのままにしておくことに決めた。彼の知らない、しかし彼の運命の一部をかたちづくる伝言ヒソカの書かれた手紙を(Ⅱ・25、一九三頁)。

一読して明らかのように、モイラの手紙は投函されない。ましてや開封されることもない。ジョゼフがポケットの奥にしまうことで、この手紙は、少なくとも作品の中では、いわば闇に葬り去られる。こうしてモイラの愛は、ジョゼフにも、セリナにも、他の人びとも知られず、さいごまで秘密のままにとどまる。投函されなかつたこの手紙は、モイラの孤独性を浮き彫りにしている。サイモン、プレローの愛と同じく、モイラの愛もまた孤独な愛である⁽²³⁾。しかもモイラの場合、愛する当の相手に殺されるだけに、孤独な愛の悲劇性はいっそう強まっているといえよう。

このように、サイモン、プレロー、モイラは他者との断絶のなかで己れの愛を生きる。『モイラ』の中の秘められた物語とは、秘められた愛の物語でもある。これら三人の副人物たちにとって、愛することは徹頭徹尾、孤独ないとなみである。ここから、彼らはへ宿命の物語のみならず、へ孤独の物語をも提示しているとみなすことができる。

同じことは、主人公ジョゼフについてもいえるのではないだろうか。この点にかんして、ジャック・アチは『モイラ』の物語内容を要約しつつ、次のように書いている。

プロテスタントの或る若者があまりにも厳格だが、欲望にとりつかれて、一人の女に屈服し、それから女を殺す。殺人を犯したあと、彼は逃亡しようとする。次いで自分の運命を受け入れ、警察に自首する。しかし同じ事実を別の言葉によって言いあらわすこともできる。ジョゼフ・デイは、内心のはげしさを否認するか、もしくは抑圧する孤独な人間である。ひとつの出会いが自分自身にそのはげしさを啓示する。解き放たれた欲望と悔恨が彼を殺人に導く。そしてその殺人の向こうに、彼はもう一つの、より深

い・孤・独・を・見・い・だ・す。(24)

ジャック・プチは、ジョゼフの生の歩みを孤独の深化の過程としてとらえている。たしかに孤立の中でのモイラとの出会い、そして肉体の苦悩と犯罪を経て、ジョゼフがいつそう深い孤独におちいるとする解釈は可能であろう。というのも、モイラはジョゼフにとって、欲望の対象であるばかりでなく、孤独の解放者となるべき愛の対象としての存在であり、それにもかかわらず、ジョゼフはモイラを殺害するのだから。モイラ殺害は愛の挫折をも意味する。この挫折のあとに深い孤独が待ちうけていることは、贅言を要しない。ジョゼフの物語もまた、へ孤独への物語として読むことができる。したがって、サイモン、モイラ、プレローの物語は、へ孤独への物語であるという点においても、ジョゼフの物語と重なりあう。結局、これら三人の副人物たちが、主人公ジョゼフとまったく同じように、へ宿命への孤独への物語を提示しているという点に、小説『モイラ』の深さと広がり、そして統一性が認められるのである。

(1) もっとも、この特徴は『モイラ』固有のものではない。『悪人』『悪所』(一九七七)等のように、語りの視点が幾人もの副次的人物に拡散していく作品はもちろんのこと、『アドリエンヌ・ムジュラ』『人みな夜にあつて』『他者』に代表されるように、一人ないし二人の中心人物に収斂するかたちで物語が展開する、グリーンの大半の小説についても、同じことが言えるだろう。

(2) 第一部第六章で、ジョゼフがブレローとの決闘を終えてもどってきた夜、デア夫人は、ジョゼフのベッドが自分のベッドのちょうど上にあることに気づき、「もし目が闇と物体の厚みを透かして見ることができたら、眠っている者(ジョゼフ)のからだを、乳のように白いその大きなからだを見ることが出来るだろうに」と考えている(三一頁)。

(3) 第二部第十三章において、ジョゼフを訪問したキリグルーは、「人の氣にいるものを君は何でも持っている」(一三五頁)と言っている。

(4) ジョゼフと親しくなったばかりのころ、デーヴィドは当惑しながらジョゼフの顔の美しさを指摘しようとしている。「君の顔は……(はじめ彼「デーヴィド」は適当な言葉を探しながらためらい、そつと手を当てる咳払いした)……人の氣にいる顔だ」(I・10、五三頁)。また、デーヴィドはジョゼフを連れて洋服屋に行ったとき、新調の服を着たジョゼフの姿を見て、ジョゼフの美しさに感嘆している。「不意の衝動から、デーヴィドは、彼「ジョゼフ」がどんなに美しく見えるかさまに言いかけたが、危ういところで唇をかみしめた」(I・11、五七頁)。さらにデーヴィドは第一部第十四章、ジョゼフが自分の下宿を訪ねてきたときにも、ジョゼフの美貌に心を動かされている。「彼「ジョゼフ」の顔つきには何かしらとても胸を打つ、氣高い様子があらわれていたので、デーヴィドは突然、大声をあげてしまった。／＼何と君は……。／＼しかし唇にのぼってきた形容詞を、彼はすぐさま、洋服屋の店でそうしたのとまったく同じように、抑えつけてしまった」(七四―七五頁)。

なお、デーヴィドがジョゼフの美しさに敏感である点には、ジャック・プナも注目している(Jacques Petit Julien Green, 『l'homme qui venait d'ailleurs』, Desclée de Brouwer, 1969, p. 233ff. 及び Pléiade 版 *Moira* の『Notes』, III, p. 1579a 参照)。

(5) 一九五〇年七月二十一日付の『日記』の中で、グリーンは次のように書いている。「一九三〇年以降、私のほとんどすべての小説は、見るすべを心得ている人の目には透けてみえるような秘められた物語を言外にほめかしながら含んでいる。『漂流物』にはフィリップの物語が、『真夜中』にはセルジュの物語が、『モイラ』にはブレローの物語がある。そしてまさしくこの秘められた要素こそが残りの部分に影響を及ぼし、私が書物を書き、完成することを可能にしているのだ」(『内なる鏡』、『日記』第六卷、IV、一一六八頁)。ここで言われている「秘められた物語」とは、作者グリーンの同性愛の性向、あるいはこの性向にまつわる肉体的な体験を反映したものであると思われる。グリーンは自らの同性愛の性向を後年、自伝のなかで赤裸々に告白するのであるが、自伝執筆以前においては、「秘められた物語」をとおして間接的に表現するだけに、それも匂わせるだけにとどめたのである。しかしながら、ここでは、この「秘められた物語」という言葉を、同性愛的なものに限定することなく、もっと広い意味で用いたい。作品の本筋からそれているがゆえに、隠れて目立たないドラマを「秘められた物語」と呼びたい。

(6) Jean Sémoulié: *Julien Green ou l'obsession du mal*, Editions du Centurion, 1964, p.100. なお、*coup de foudre* は言ひまでもなく「一目惚れ」の意味もある。

(7) グリーンの作品において愛(出会い)が選択不可能な、宿命的な様相を呈することについては、序章でも論じたが、たとえば、『アドリエヌ・ムジュラ』において、医師モルクルへの不可能な愛に呻吟するアドリエヌは発狂の間際、はじめての出会いを振り返りながら、「私はあなたを選びませんでした。(…)でも私はこんなふうに無駄に苦しむことはできません。そんなことはできません。愛してくださいさなければいけません。私のことをあわれんでくださらなければなりません。さもなければ気が狂ってしまいます。そう、気が狂ってしまうでしょう。私があなたを愛するのが間違っているとしても、どうにもならないのです。仕方がないのです」(I、四九六頁)と訴えかけている。アドリエヌの愛の宿命性は、「私はあなたを選びませんでした」という初めの言い方からはっきりとたしかめることができる。なお、グリーン作品における愛が選択不可能な、宿命的ないりどりを帯びることについては、アントワヌ・フォンガロも指摘するところである(Antoine Fongaro :

L'Existence dans les romans de Julien Green, Angelo Signorelli, Roma, 1954, p.36)。

(8) へ署名されない手紙へは、『アドリエヌ・ムジュラ』のなかの、モルクル医師を愛するアドリエヌが作成している(I、四三三・四三四頁)。へ署名されない手紙へは、グリーン作品のなかでひんばんに見いだされるへ発送(投函)されない手紙へとともに、告白の不可能性とかかわり得とらえることができる。

(9) ジョゼフは、サイモンが白い木蓮の花を置いたのは「昨日の晩」だと言っているけれども、これはジョゼフの興奮による記憶ちがいだと思われる。というのも、白い木蓮の花の挿話がある第一部第九章のあとにつづく第一部第十章の書き出しは、次のような文ではじまるからである。「続く日々は単調な勉強の中で流れ去った」(五二頁)。この文から、第九章の時点と第十章の時点とのあいだには、複数の日々へのあたりがあることがわかる。第十一章は第十章と同じ日のことを描いているのであるから、第十一章の時点にたてば、サイモンが白い木蓮の花を置いたのは「昨日の晩」ではなく、明らかに「数日前」のことである。ジョゼフが「昨日の晩」と言ったのは、ジョゼフの記憶ちがいというよりも、作品の語り手である作者グリーンの思い違いに原因するのかもしれない。

(10) このやりとりの中で、デア夫人は、「ほんとうにお悔やみ申し上げます、大変お悔やみ申し上げます (Je regrette, vraiment, je regrette beaucoup.) (九九頁)と言っている。

(11) デア夫人はジョゼフにこう話している。「サイモン・デマスさんのご両親がさきほど見えました。あの方は大学をやめられました。(…)もどってはこられません」(一〇〇頁)。

(12) サイモンがデア夫人の下宿をとび出し、実家にもどったのが「月曜日」であるというのは、問題があるように思われる。というのは、第二部第二章から第七章までは日曜日のこと、第一部第十六章から第二部第一章まではその前日、つまり土曜日のこと、第一部第十章から第十五章まではさらにその前日、すなわち金曜日のことを語っていると推定されるからである。その証拠を示そう。まず、第二部第二章から第七章までは、同じ日のことが物語られているのであるが、第三章でジョゼフは大学からではなく教会からもどっており、それゆえ、第二部第二章から第七章までの時点は当然のことながら日曜日だと考えられる。次に第一部第十六章から第二部第一章までの語りの時点にかんしてであるが、第二部第二章が、「翌日、彼(ジョゼフ)は朝早く起きた」(九三頁)という文ではじまっているから、同じ日の出来事を述べた第一部第十六章から第二部第一章までの時点が、第二部第二章から第七章までの時点の前日、すなわち土曜日であることは、一点の疑いもさしはさむ余地はない。では、第一部第十章から第十五章までの語りの時点はどうだろうか。第一部第十章から第十五章までには、あいにく時を示す言葉はないし、第十五章につづく第十六章も、第二部第二章のように「翌日」という語ではじまっていない。しかしながら、第十六章は、デーヴィッドがジョゼフの部屋に新調の服をもってくるところからはじまり、暴力をふるったマック・アリストアーにジョゼフがゆるしを乞いに行く場面をふくませている。

また、第十六章と同じ土曜日のことを語った第十七章では、ジョゼフは夕食の際にサイモンの不在に気づいている。ところで、ジョゼフは第一部第十一章で新調の服を手に入れるために洋服屋に行っており、また、第一部第十五章で、ジョゼフはサイモンの不在をたしかめたあと、マック・アリストアの挑戦によって、彼をベルトで鞭打っている。そしてジョゼフがサイモンをさいごに見たのは、第一部第十一章である。そうすると、同じ日のことを物語った第一部第十章から第十五章までの時点は、第一部第十六章から第一部第一章までの時点の前日、つまり金曜日だと考えざるを得ないのである。なぜなら、食事の折にサイモンの不在にジョゼフが気づくのは、さいごに会った日の翌日であるとみなすのが妥当であるし、マック・アリストアへの謝罪も、やはり暴力をふるった日のあくる日のことだと考えるのが自然であるからだ。新調の服のことについても、ジョゼフがデーヴィドと洋服屋に行った日の翌日に服を手に入れることができるのとみるのが適当であるように思われる。とすれば、ジョゼフがサイモンをさいごに見たのは金曜日のことになるから、サイモンが郷里にもどったのが「月曜日」というのはまちがいである。やはり、「君もまた、いつか苦しむことになるだろう。苦しむということが何であるか、わかるだろう」と言いのこしてジョゼフのもとを去ったのと同じ日に、つまり金曜日に、サイモンは実家に帰って死んだのだと考えられるのである。そしてこの箇所もまた、作中人物の勘違いというより、語り手である作者グリーンンの錯誤・混乱によるものと思われ、作品の欠陥部分として指摘することができる。

(13) このことについては、第一章第二節で論じた。

(14) この「十五年前」という数字には注意を払うべきである。デア夫人は赤ん坊のモイラをひきとって育てたのであるから、モイラの年齢は自動的に十五歳だということになる。しかしモイラのこの年齢は、ジョゼフを誘惑するという事実と照らしあわせると、少し若すぎるように思われる。さらに、モイラがひきとられた一九〇二年という年代に、この「十五年間」という歳月を加えると、一九一七年という年代が得られるが、作品が展開する年代は、第二部第十三章でキリグルーが明らかにするように、そして第二部第十七章で、デーヴィドがジョゼフにシェークスピアの本を贈るとき明示されるように、一九二〇年である(一三四頁および一四六頁参照)。それゆえ、この「十五年間」という数字もまた、あやまりであるといえる。

(15) デア夫人はモイラあての手紙のなかで、追伸として、「おまえの部屋には赤毛の学生さんがはいていますから、クリスマスの休暇まえには帰らないこと」(I・6、三〇頁)と書いている。

(16) 「彼(ジョゼフ)はあまりにも赤すぎる口を認め、こっそりとみつめた」(一六二頁)と書かれているように、ジョゼフはモイラの赤い唇に心をうばわれている。そしてジョゼフはリラの香水の匂いをかぎわけて、「快楽と、この快楽によってひき起こされるいら立ちとの入りまじった感情」(一六五頁)を覚えている。この「快楽」と「いら立ち」との交錯した感情は肉なるものを前にしての二重の反応とうけとれよう。つまりジョゼフは香水の匂いをおして、肉なるものに反撥しつつも、これに魅せられているのである。

(17) 『内なる鏡』、『日記』第六巻、一九五二年二月二十四日、IV、一二六六頁。

(18) 同右、一九五〇年九月二十三日、IV、一一七六頁。

(19) ジャック・プチはプレイアード版テキストの「註」のなかで、プレローのこの態度を問題にし、次のように述べている。「プレローのこの態度を説明するためには、小説の続きの部分で、彼が稀れではあるが介入してくることに関連づけて考えなければならぬ。ジョゼフが憎しみとみなしているものは明らかに愛を前にしての逃亡なのである」(Jacques Petit: 《Notes》 pour *Marta*, III, p. 1575. 強調は引用者)。

(20) この若者は、テレンス・マック・ファドンという名の学生である。ちなみに、この学生はカトリックの信者であり、のちにジョゼフは、彼をプロテスタントに改宗させたい願いをデーヴィドに打ち明けている(一三九頁)。

(21) デーヴィドがジョゼフのへ守護天使たるべき存在でありながらも、実際はこの役割をはたしていないことにかんしては、第一章第三節で論じた。

(22) グリーンは『日記』のなかで『モイラ』を評して、「ジョゼフとプレローの物語。それがこの本の真の主題だ」(『亡霊』、『日記』第五巻、一九五〇年三月二十四日、IV、一一四二頁)と言っている。グリーンがこのように解釈するのは、ひとつには、ジョゼフによるモイラ殺害行為が、ジョゼフの《violence》を発現させているという意味で、プレローとの格闘の場面の繰りかえし・蒸しかえしにすぎないからだと思われる。だが、もう一つには、グリーンがジョゼフとプレローとあいだの同性愛的な感情、告白不可能な愛の感情を視野に入れていからであろう。つまりプレローの秘められた物語、不可能な愛の物語は、ジョゼフが己れの感情を自覚しないために発展しなかった、彼のプレローにたいする愛の物語とともに、作品の中心主題をなすと、グリーンは考えているのである。

(23) ただしサイモンの愛だけは、モイラ、プレローのそれとはちがって、周囲の者たちに知られている。サイモンの愛はいわば公然の秘密である。

しかしジョゼフだけがサイモンの気持ちを理解しようとしなかったために、孤独な愛になるのである。

(24) Jacques Petit : *Julien Green, « l'homme qui venait d'ailleurs »*, Desclée de Brouwer, 1969, p. 225. 邦訳は引用者。

グリーンの文学をへ宿命の文学とみなし、宿命性の表現という観点から、小説『モイラ』の読解をすすめてきた。まず第一章では、主人公ジョゼフを取りまく人物たちと様々な事物とが、外部のあらがいがたい力として、ジョゼフの悲劇的な運命を不可避的に導いていることを論証した。次に第二章において、主としてジョゼフの『violence』を宗教とのかかわりで分析しつつ、ジョゼフの人生の歩みが内的な必然性を有すること、それゆえに、『モイラ』におけるへ宿命の物語が、ジョゼフの内側からも把握できることを明らかにした。さらに第三章では、サイモン、モイラ、プレローといった副次的人物たちの生もまた、内的必然性、不可避性をもち、彼らに秘められた物語もまた、主人公ジョゼフの物語と同様に、へ宿命の物語として読めることを指摘した。こうして『モイラ』は宿命の世界を完璧な、徹底したかたちで提示していると断定しうる。

『モイラ』に代表されるグリーンの小説は、へ宿命の世界を提示しているという点で、伝統的なフランス小説の系譜につらなるであろう。バルザックによって確立されたフランスの伝統小説は、因果関係の連鎖によって構成され、その結末は必然的・不可避的なものであるとみなしうる。『ゴリオ爺さん』のなかのゴリオの死は、父性愛という情熱が招来した、ごく当然の結果であり、ゴリオの父性愛の悲劇をとおして、へ宿命の物語を看取することもできる。しかしながら、ゴリオ爺さんは父性愛を、自らを生かしめる唯一の情熱として選びとっている。ゴリオの悲劇が、高山鉄男氏の言うように、「観念にまで高められた情念の自己崩壊の劇」であることはたしかだとしても、ゴリオは自らの情熱に積極的・能動的に身をゆだねる姿勢を有し、彼において、自由と運命とは矛盾・対立していない。破滅に至るゴリオの運命は、彼の自由意志が選択したものとうけとれる。これにたいして、『モイラ』のジョゼフは、モイラへの情熱を自由意志によって選びとってはいない。それを断じて望んではいない。自らの情熱にたいする受動的姿勢は、多かれ少なかれ、

副次的人物たちにも共通する。モイラ殺害に至るまでの、ジョゼフの生の歩みは、運命もしくは宿命によって支配・翻弄されていく過程を示している。ジョゼフにおいて、自由と運命とは敵対する。この二つは両立しえない。「モイラ」とは、自由が運命によってうばわれ、滅ぼされていく過程を語った物語である。この点、「モイラ」はラシーヌの悲劇につうじらるであろう。「フェードル」を筆頭とするラシーヌの悲劇もまた、自由意志にもとづかない、選択不可能な情熱によって、言いかえれば、宿命によって、主人公が滅ぼされていく有りさまを描いているのだから。

「ルーゴン・マッカール叢書」を著したエミール・ゾラも、バルザックとともに、作品を因果律のつながりによって構成しようとした作家のひとりである。テーヌと同様、「悪徳も美德も、硫酸塩や砂糖と同じく生成物である」とみなすゾラの場合、その方法は厳密をきわめ、遺伝とか、それ以上に、環境とかによって、作中人物が影響をこうむる過程を、科学者のように冷徹な眼で見とけようとする。このため、ゾラは実験的手法を採用する。クロード・ベルナールの『実験医学研究序説』に触発されて作成した『実験小説論』のなかで、ゾラは次のように書いている。

小説家とは観察者と実験家とからなる。小説家のうちに存在する観察者は、事実を、自分が観察したままに提示し、出発点を定め、人物たちが歩み出し、現象が展開するであろう、しっかりとした場を設定する。次に実験家があらわれ、実験をはじめ。すなわち、事実の連続が、研究する現象の決定論の要求するがままになることを示すために、人物たちをある特殊な歴史の中で動かすのである。

ゾラの小説のなかで継起する事実Ⅱ行為 (faits) は、換言すれば、筋Ⅱ事件は、「現象の決定論」(le déterminisme des phénomènes) によって導かれている。ゾラの小説世界もまた、首尾一貫性、必然性を帯びた世界であり、宿命の世界である。しかも遺伝と環境の影響力が信じられているがゆえに、ゾラの作中人物たちは、グリーン⁽⁴⁾の人物たちがそうであるように、「自由意志のない」、そして大抵

の場合、「人生の行為のいずれもが肉の宿命にひきずられる」人間たちである。だが、ゾラとグリーンとは、創作方法が決定的にことなる。ゾラの作品では、「観察者」と「実験家」の役割をになわされた語り手が、人物たちの外側に身を置くことが起こりうる。そのとき、ある環境に投げ入れられた人物たちは、実験のための、いわば材料となり、作者の操り人形になりかねない。ところが、グリーン(4)の小説では、人物たちの外側に「観察者」や「実験家」は存在しない。序論でもふれたように、作者は語り手は作中人物と一体化しており、人物たちとともにドラマを生きている。作品の宿命性は、小説家の手による実験の結晶としてではなく、小説家が人物たちの内なるドラマの共犯者になった結果、生じたものである。たしかに、グリーン(4)の作中人物たちは運命に従属し、自由意志を欠いている。しかし彼らは小説家に操られてはいない。小説家からの自由の立場をつねに保持しているのである。

ところで、ジャン・ポール・サルトルは、原因と結果の連鎖によって物語を構築していく、いわゆる伝統的な小説作法を批判している。サルトルは小説『嘔吐』のなかで、主人公兼語り手であるロカンタンに、次のように語らせている。

人は真実の物語という言葉をおくにする。あたかも真実の物語がありうるかのように。事件は一つの方向にむかって起こるのであるが、われわれは逆の方向に物語る。人は発端から語りだすように見える。(……)ところが実際は、結末から始めたのである。結末はそこに目には見えないが、現存しているのだ。(5)

ここでは、人は物語を発端から始めているように見えて、その実、結末を考慮に入れたうえで、発端から語りだし、辻褄を合わせて結末に辿り着かせているということが言われている。これは、伝統的な小説の語り方への批判とうけとれる。因果律のつらなりによって筋を組み立て、必然性・首尾一貫性をもった物語を提示する伝統的な小説は、結局のところ、結末を視野に入れた、あるいは、結末を前提とした欺瞞的な語り方をしているにすぎないのではないか、という点が指摘されていると思う。へ宿命の文学と規定しうるグリーン(4)の小説は、『モイラ』のように、不可避性・必然性をはらんだものとして、物語が結末へと導かれているがゆえに、「結末から始め」という語りの方を採用しているように見える。しかし序論で述べたように、グリーン(4)はプランを立てて制作するのではなく、

作中人物たちを自由に行動させることによって、小説を書いていく。したがって、グリーンの場合、結末は発端において決定されては
ない。作者が結末を想定することがあったとしても、『アドリエヌ・ムジュラ』がそうであるように、主人公は作者の予想に反し
た結末を往々にして迎える。作中人物と同一化して、そのドラマを生きたこと——これは実人生がそうであるように、結末が不透明な、
予測不可能な偶然の連続に身をゆだねることである。『モイラ』をはじめとするグリーンが作品が、必然性・不可避性を帯びた人生の
歩みを描出しているとしても、それは結果的・付帯的なことにすぎない。書くという営みは、因果律の糸によって物語という織物を紡
ぎ出すことではなく、まずもって、作中人物たちとともに、彼らの運命を盲目的に生きることである。グリーンが、『ヴァルーナ』の
語り手ジャンヌに、「小説を書くということは、なんという冒険であろう！」（Ⅱ、八二七頁）と言わせているのは、このような意味
においてであろう。小説を書くことの「冒険」(aventure)とは、作者の意図・予期しない出来事を体験することにはかならない。

『モイラ』を筆頭とするグリーンが小説の問題にするのは、人間が個人の意志や努力によって自らの進路を切り開くのではなく、個
人を越えたあらがいがたい力に服従して、つまり宿命に支配されて生きなければならないという点であろう。あらがいがたい力とは、
『モイラ』においては、ジョゼフの悲劇的な運命を誘導する外部の力としての、周囲の人物たちと様々な事物とであり、主人公ジョゼ
フ、および副次的人物たちの運命を、不可避的・必然的なものにする、内側の力としての情熱である。この外部と内部の力に翻弄され
て、作中人物たちは自らの生を盲目的に生きている。『ヴァルーナ』の語り手ジャンヌは、「われわれは盲目であり、壘であって、わ
れわれの運命について何ら理解することなく、夜から来て夜にもどるのだ」（Ⅱ、七九八頁）と語っている。『モイラ』はこの言葉に
こめられた運命観を反映している。人間が自らに課せられた運命にたいして、徹頭徹尾無力であること——『モイラ』が語りかけるの
はこれであろう。グリーンは『日記』のなかで、「われわれは、作者の欲することをかならずしもよく理解しない、小説の中の人物な
のだ」と言っている。ここでの「小説」の「作者」が神を指すことは、疑いを容れない。『モイラ』はまた、こうした人間観によって
裏打ちされているにちがいない。作中、ジョゼフは、「自分の人生にまじり合う人間たちはすべて神から遣わされたのだ」（Ⅰ、3、
一〇頁）と考えている。この考え方は、作者グリーンも共有しうるであろう。それゆえ、ジョゼフの運命は、副次的人物たちの運命と

ともに、結局、神の意志のあらわれにほかならないという理解が、作品の根底に横たわっているように思われる。『モイラ』をはじめとするグリーンの小説が、宿命への文学であるという点で、伝統的な小説の枠組に入れられることはたしかだとしても、作品に表現される宿命性は、彼の場合、沈黙するかの愛の存在とのかかわりのもとに問われているのである。

註

- (1) 高山鉄男：「社会の総合的壁面としての小説ーバルザック」、『フランス文学講座』第二卷『小説Ⅱ』、大修館、一九七八、六〇頁。
- (2) C. Becker: 《Les Rougon-Macquart》, in *Manuel d'histoire littéraire de la France*, t. V., dirigé par P. Abraham et R. Desne, Les Editions sociales, 1977, p. 260. 引用。
- (3) E. Zola: *Le Roman Experimental*, Bibliothèque-Charpentier, Eugène Fasquelle, 1923, p. 7.
- (4) 『テレーズ・ラカン』第二版の「序文」。Zola: *Thérèse Raquin*, coll. Folio, Gallimard, 1979, p. 24.
- (5) Jean-Paul Sartre: *La Nausée*, in *Œuvres romanesques*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1981, p. 49.
- (6) グリーンは、『アドリエンヌ・ムジュラ』の「終わりから五、六頁目まで」ヒロインが自殺するだろう」と考えていた。しかし実際は、「落から身を投げる」のではなく「発狂する」。Frédéric Lefèvre: 《Une heure avec Julien Green romancier》(Julien Green, *Œuvres complètes*, t. I., Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, p. 1023)を参照。
- (7) 『亡霊』、『日記』第五卷、一九四九年八月十五日、IV、一〇九四頁。

結
論

ジュリアン・グリーン作品の世界を、へ幻想へとへ宿命への世界とみなし、本論第一部で『幻を追う人』を、主として幻想の文学という観点から読み、第二部では『モイラ』を、宿命性の表現という視点から分析した。本論で論じたことをまとめておこう。まず『幻を追う人』を読解する中で明らかになったことは、グリーンにおける幻想が二つの苦悩、純粹志向に起因する肉体的苦悩と、死ぬことを運命づけられた人間の苦悩とに立脚しており、この二つの苦悩を形象化したものが、幻想にほかならないという点である。次に『モイラ』の検討をつうじて明確になったことは、主人公ジョゼフの人生が彼を取りまく人物たちと事物とによって外側から誘導され、同時にジョゼフの『Violence』によって内側から決定されていて、この二つの要素からジョゼフの宿命の物語が成り立っていること、また、副次的人物のサイモン、モイラ、プレローの運命も不可避的であり、この三人の人物たちもまた、宿命の物語を提示しているという点である。

『幻を追う人』と『モイラ』に通底するものは、主人公の純粹志向である。この純粹志向がジュリアン・グリーンの文学を特徴づける最大の要素であり、第二期（中期）の小説には幻想的性格を付与し、第三期（後期）の小説においては、人間的な愛と信仰との葛藤のドラマを産出している。作中人物たちの純粹志向は当然のことながら、作者グリーンが共有するものである。グリーンは一九四三年の『日記』のなかで、「青春時代のあいだ、私はずっと、性的な次元の関心が存在しないような理想的な世界という觀念にとりつかれていた¹」とか、「肉欲のない生活をいつも夢見てきた。それも禁欲的な訓練の結果によってではなく、この理想的な生の様式の性質そのものによって²」とか述べて、「肉欲のない生活」へのあこがれを披瀝している。一九四九年の『日記』のなかでは、「（…）私は欲望を憎む。たくさんの賢い人たちをたくさんの愚か者の足もとに投げ放ち、彼らを淫乱な子どもたちのように錯乱させるその力を憎む。できることなら私はそんなふうではないことを願う³」と書いて、欲望への憎悪を鮮明に表明している。一九六三年に公表された自伝第一巻『夜明け前の出発』においては、「肉体、それは無秩序であり、人の顔を暗くする恐ろしいものであった。今日でもなお、人間を

その全能のきまぐれに隷属させずにはおかないこの冷酷な力を、私はなんと憎んでいることだろう」(V、七二〇頁)という記述が見いだされる。肉なるものへの反撥、同じことであるが、純粹志向は、長期にわたって、グリーンの内心を支配し、彼の作品に影響をおよぼしてきたのである。

この論文でこころみたことは、たった二つの小説の読解にすぎない。それゆえ、はじめに述べたように、この論文はグリーン研究の、ごくささやかな第一歩をしるすにすぎない。第二期(中期)・第三期(後期)のほかの作品、それに第一期(初期)・第四期(晩年)の小説の研究、『日記』および自伝の研究といったように、まだまだ多くの課題が残っている。しかし、この論文における研究によって、へ幻想とへ宿命の文学としてのグリーンの文学の特徴が把握され、グリーンの作品世界の一端がかいま見られたように思われる。したがって、この論文が今後の研究のための一段階として、それなりの意義と価値を有していることはたしかであろう。

註

(1) 『嵐の目』、『日記』第四卷、一九四三年一月十六日、IV、七〇四頁。

(2) 同右、一九四三年五月二日、IV、七二二頁。

(3) 『亡霊』、『日記』第五卷、一九四九年二月二十六日、IV、一〇六五頁。

主要な参考文献

ここに掲げる参考文献は、ジュリアン・グリーン関係の主要なものに限られる。この論文の執筆にあたり、それ以外の文献も参照したが、本文の注のなかで、出版社名、刊行年とともに指示したので、省略する。したがって、参考文献のリストは、(1)グリーンの作品、(2)グリーンにかんする研究書、(3)グリーンにかんする論考という構成になる。

(1) グリーンの作品

- Œuvres complètes, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 8 volumes, 1972-1998.*
L'arc-en-ciel(1981-1984), Journal XIII, Editions du Seuil, 1988.
L'Espartaco(1984-1990), Journal XIV, Editions du Seuil, 1990.
L'avenir n'est à personne(1990-1992), Journal XV, Fayard, 1993.
Pourquoi suis-je noir?(1993-1996), Journal XVI, Fayard, 1996.
Paris, Champ Vallon, 1983.
- 「ジュリアン・グリーン全集」全十四巻、福永武彦編集、人文書院、一九七九、一九八三。
『信仰の卑俗化に抗して—フランスのカトリック信者へのパンフレ—』、原田武訳、青山社、一九九三。
『ヴァルーナ』、原田武訳、青山社、一九七五。

『私があなたなら』原田武訳、青山社、一九七九。

『夜明け前の出発』、品田一良訳、講談社版「世界文学全集」第三十五卷所収、一九七〇。

『終末を前にしてーグリーンは語る』(マルセル・ジュリアンとの対談集)、原田武訳、人文書院、一九八一。

『アシジの聖フランチェスコ』、原田武訳、人文書院、一九八四。

『バリ』、田辺保訳、青山社、一九八六。

(2) グリーンにかんする研究書

Brodin (Pierre) : *Julien Green*, coll. « Classiques du XXe siècle », Presses universitaires, Paris, 1957.

Brudo (Annie) : *Rêve et fantastique chez Julien Green*, P. U. F., 1995.

Eigeldinger (Marc) : *Julien Green et la tentation de l'irréel*, Ed. Aux Portes de France, 1947.

Estang (Luc) : *Julien Green*, en collaboration avec Giovanni Lucera et Robert de Saint Jean, coll. « Écrivains de toujours », Éd. du Seuil, nouvelle édition, 1990.

Fitch (B. T.) : *Configuration critique de Julien Green*, Minard, Paris, 1966.

Floucat (Yves) : *Julien Green et Jacques Marjain : L'Amour du vrai et la Fidélité du cœur*, Téqui, Paris, 1997.

Fongaro (Antoine) : *L'Existence dans les romans de Julien Green*, Angelo Signorelli, Roma, 1954.

Gorkine (Michel) : *Julien Green*, Paris, Nouvelles Éditions Debrasse, 1956.

Joye (Jean-Claude) : *Julien Green et le monde de la folie*, Arnaud Druck, Berne, 1964.

Kostis (Nicolas) : *The Exorcism of Sex and Death in Julien Green's Novels*, Mouton, La Haye, 1973.

Matz (Wolfgang) : *Julien Green, Le siècle et son ombre*, Traduit de l'allemand par Jeanne Étoré et Bernard Lortholary, Gallimard, 1998.

Mor (Antonio) : *Julien Green, témoin de l'invisible*, Traduit de l'italien par Hélène Pasquier, Plon, 1973.

- Maff (Oswald) : *La dialectique du néant et du désir dans l'œuvre de Julien Green*, Keller, Zurich, 1967.
- Newbury (Anthony H.), *Julien Green : Religion and Sensuality*, Rodopi, Amsterdam, 1986.
- O'Dwyer (Michael) : *Julien Green, A Critical Study*, Four Courts Press, 1997.
- Paris (Louis-Henri) : *Julien Green, corps et âme*, Fayard, 1994.
- Petit (Jacques) : *Julien Green, « l'homme qui venait d'ailleurs »*, Desclée de Brouwer, Paris, 1969.
- *Julien Green*, coll. « Les Écrivains devant Dieu », Desclée de Brouwer, Paris, 1972.
- Pirou (Jean-Pierre), *Sexualité, religion et art chez Julien Green*, Nizet, 1976.
- Prévost (Jean-Laurent) : *Julien Green ou l'âme engagée*, Emmanuel Vite, 1960.
- Raclot (Michèle) : *Le sens du mystère dans l'œuvre romanesque de Julien Green*, 2 volumes, Aux Amateurs de livres, 1988.
- Rousseau (Guy Noël) : *Sur le chemin de Julien Green*, A la Baconnière, Boudry-Neuchâtel, 1965.
- Saint Jean (Robert de) : *Julien Green par lui-même*, coll. « Écrivains de toujours », Éd. du Seuil, édition de 1967.
- Sémoché (Jean) : *Julien Green ou l'obsession du mal*, Éditions du Centurion, 1964.
- Tarnuly (Annette) : *Julien Green à la recherche du réel*, University of Sherbrooke, Québec, 1976.
- Toulet (Suzanne) : *Le Tourment de Dieu dans l'œuvre autobiographique de Julien Green*, Naaman, Québec, 1982.
- Touzot (Jean) : *Julien Green*, coll. « Littératures contemporaines », Klincksieck, 1997.
- Ujifervaal (Johannes Petrus J.) : *Julien Green, personnalité et création romanesque*, Van Gorcum & Cie, Assen, Pays-Bas, 1968.
- Vernescu (Flavia) : *Clivage et intégration du moi chez Julien Green*, Summa Publications, Birmingham, 1994.
- Wildgen (Kathryn Eberte) : *Julien Green, The Great Themes*, Summa Publications, Birmingham, 1993.
- : *A Thematic Concordance of Julien Green's Journal*, Summa Publications, Birmingham, 1994.
- *** : *Julien Green*, Actes du colloque international 12 mai-14 mai 1988, CEDIC, Université Lyon III, 1989.

佐分純一『ジュリアン・グリーン—魂の遍歴—』、慶應義塾大学法学研究会、一九六四。

(3) グリーンにかんする諸考

Albérés (R.M.) : 《 Julien Green et la Dépossession 》, *Les Hommes tragiques*, Albin Michel, 1953.

Blanchet (André) : 《 *Mourir ou le nouveau roman chrétien* 》 et 《 Julien Green en proie à l'existence 》, *La littérature et le spirituel*, tome II, *La Nuit de feu*, Aubier, 1960. 『文学と魂なるもの—火の夜—』 田辺保・原田武訳、思潮社、一九七二。

Cluny (Claude-Michel) : 《 *Eros et Virginie* 》, *La Nouvelle Revue Française*, Juillet 1965.

Maritain (Jacques) : *Préface au Pamphlet contre les catholiques de France de Julien Green*, Plon, Paris, 1963.

Mauriac (Claude) : 《 *Le Journal de Julien Green* 》, *Hommes et idées d'aujourd'hui*, Albin Michel, 1953.

Moceller (Charles) : 《 *Julien Green, témoin de l'invisible* 》, *Littérature du XX^e siècle et christianisme*, tome I, *Silence de Dieu*, Castelman, 1954.

Poulet (Georges) : 《 *Julien Green* 》, *Mesure de l'instant, Etudes sur le temps humain*, tome IV, Plon, 1968.

遠藤周作「情慾の深淵」、『カトリック作家の問題・宗教と文学』、「遠藤周作文学全集」第十巻、新潮社、一九七五。

同 右「キリスト教は肉欲を否定するか—「モイラ」をめぐって—」、主婦の友社版「キリスト教文学の世界」第一巻『J・グリーン シッド』への「解説」、一九七七。

原田武『ジュリアン・グリーンにおける sensuality について』、大阪外国語大学フランス研究会発行 *études françaises* 第八号、一九六八。

